明治三十二年十二月廿五日
第三種郵便物認可

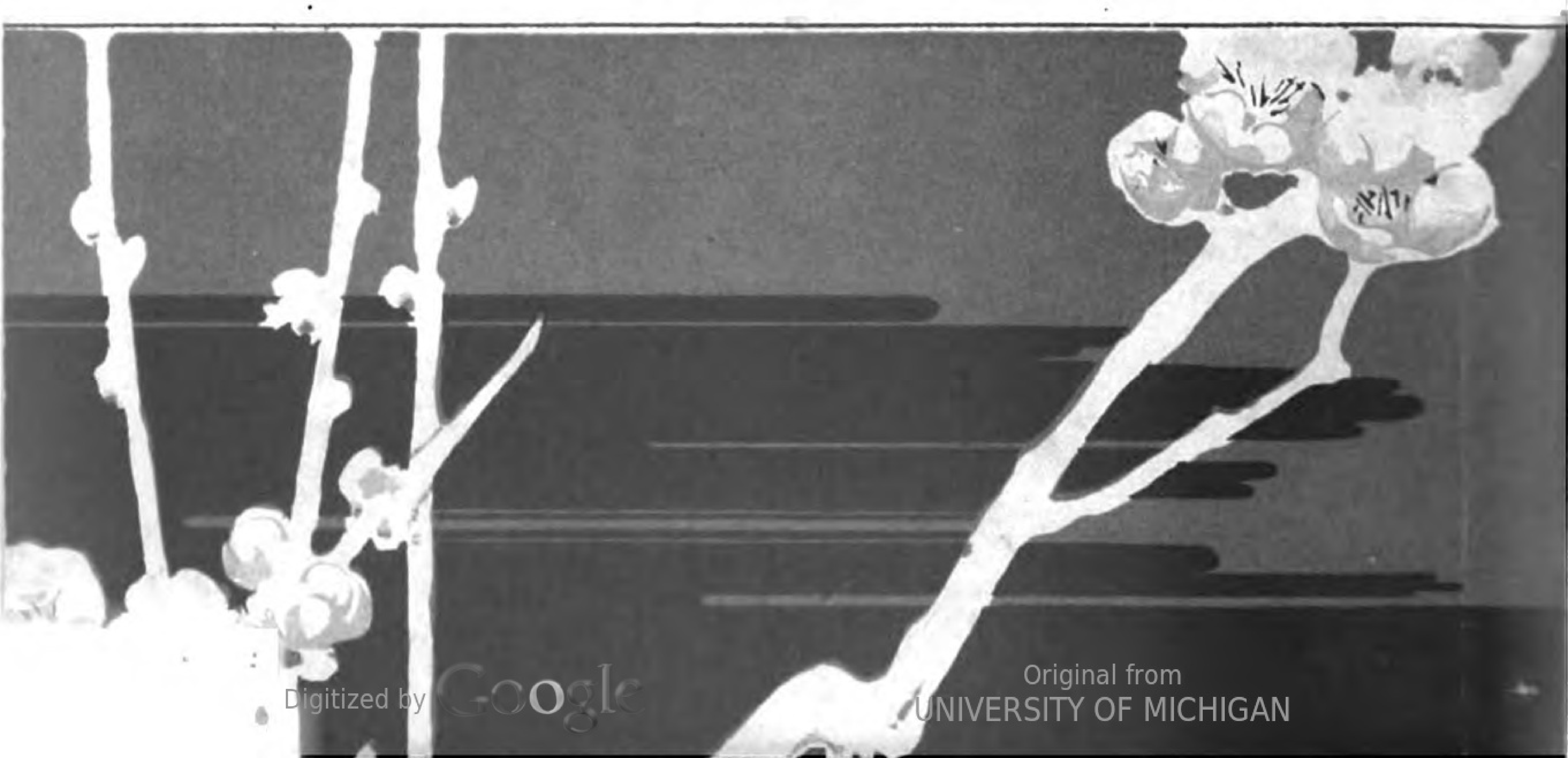
明治三十五年二月五日發行
毎月一回五日發行

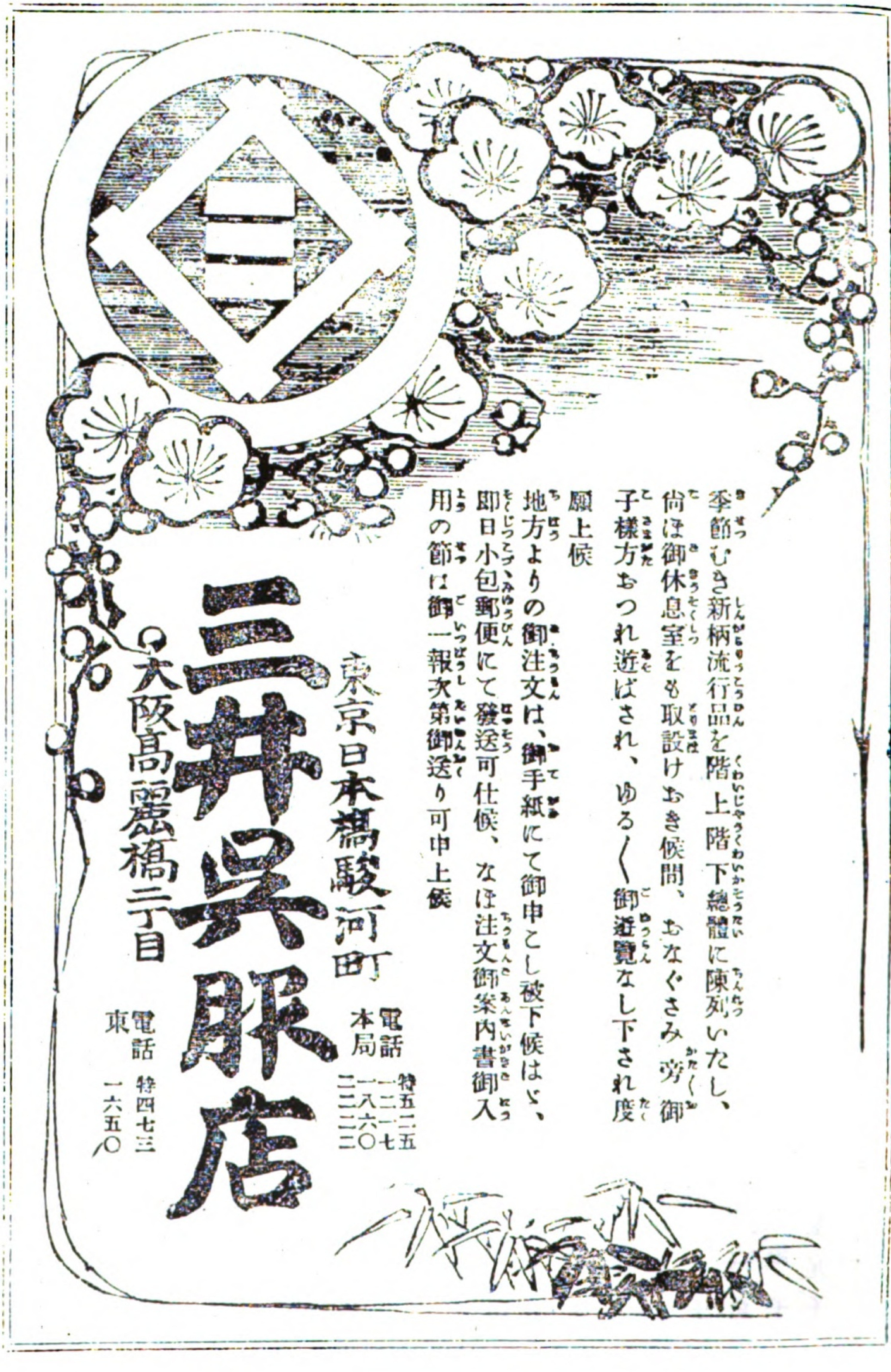
女學世界

第二巻第二號

口繪

雪中通學（桂舟畫伯）
逝く水（北上竹次氏）
日本三庭園
博物館塑像室
榛名の山水
名流小照四家
東京名所
春景山水（橋本秀峰氏）
梅花書屋（青琴女史）
春日の巫女
圖畫四葉（小蘋女史）
習字手本四葉




季節むき新柄流行品を階上階下總體に陳列いたし、
尚ほ御休息室をも取設けおき候間、おなぐさみ旁御
子様方おつれ遊ばされ、ゆる／＼御遊覽なし下され度
願上候
地方よりの御注文は、御手紙にて御申こし被下候はゞ、
即日小包郵便にて發送可仕候、なほ注文御案内書御入
用の節は御一報次第御送り可申上候
東京日本橋駿河町
電話 本局 特五二五 一二一七 一八六〇 二二二〇
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目
電話 東 特四七三 一六五〇

女學世界第貳號目次



鹿印煉齒磨

良質佳味ニシテ衛生上最効能アリ使用後精神ノ爽快ナルハ本品ノ特色ナリ



花王石鹸

品質ノ善良ト衛生ニ經濟ナ旨トシテ製練シタル佳品ナリ

● 賣捌所ハ到ル所ニアリ



發賣本舖

東京馬喰町二丁目　長瀬富郎　（電話特浪花九二二）

關西代理店　（大阪安土町一　電話東五）　大崎組商會

雪中通學　(風俗十二ヶ月の内)



(武内桂舟氏筆)

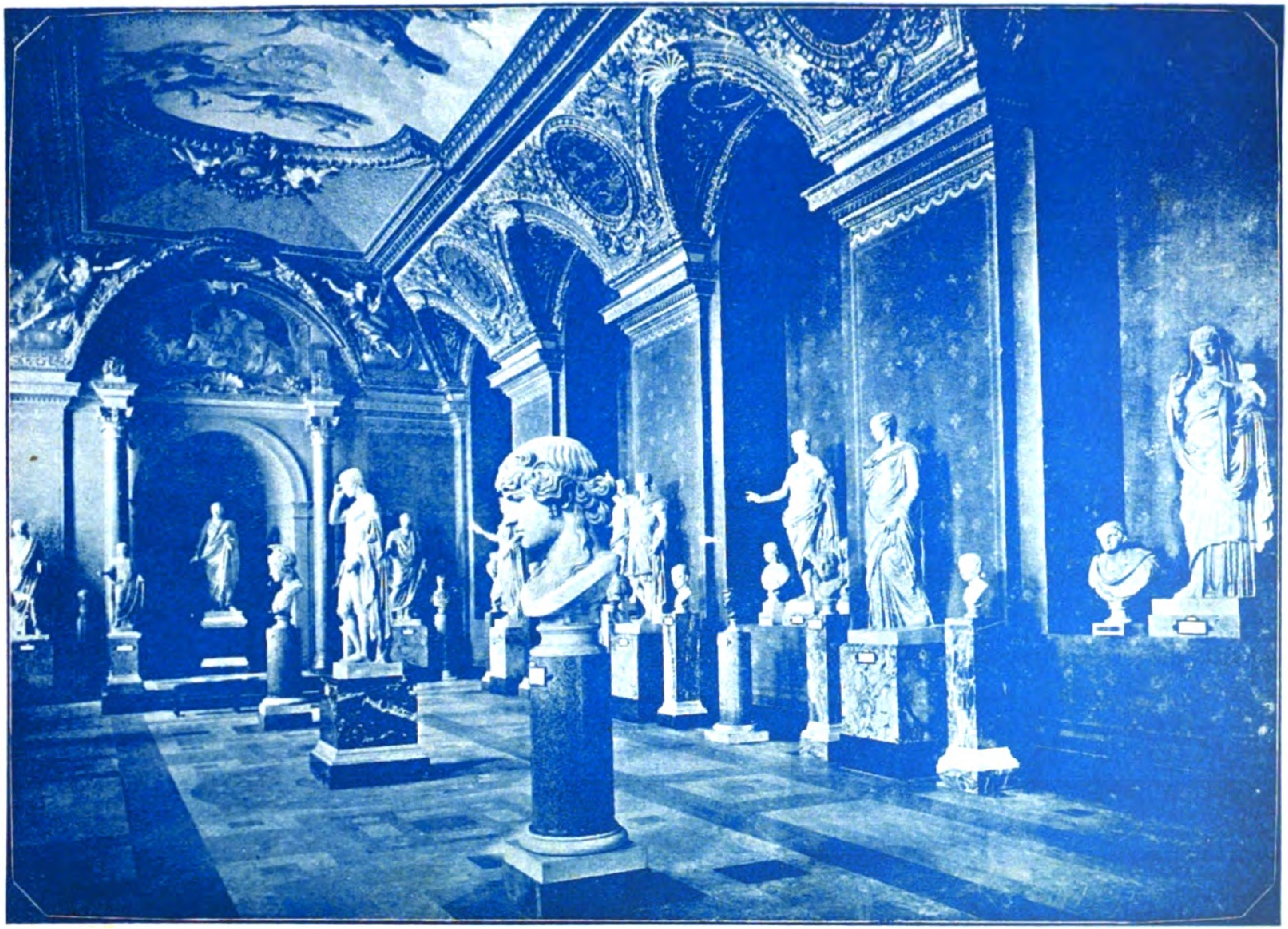
小川一眞製版印刷

逝水



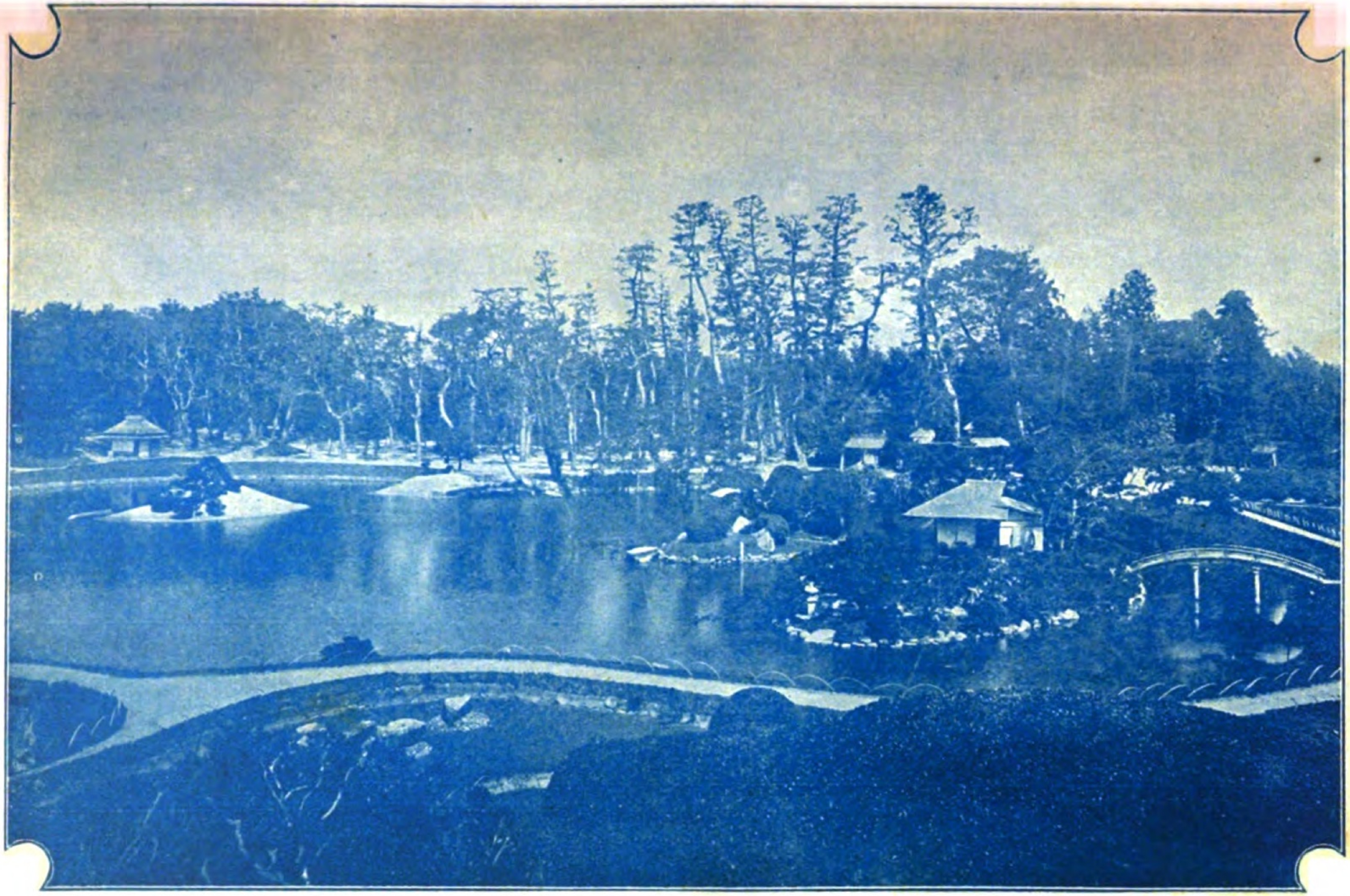
北上竹次氏筆

ルーブル博物館塑像室



（羅馬暦代帝王の塑像）

日本三庭園の二



(光村利藻君撮影)

岡山後樂園

蠶業叢書

全部拾貳冊毎月一回出版
洋裝美本總紙數三千頁

正價 一冊金三十錢六冊前金壹圓七十錢十二冊前金三圓二十錢郵稅一冊六錢ッヽ

富國强兵の策は他なし殖産を興し民力を休養するより急なるはなし、本邦は古來扶桑國と稱し蠶桑の業を以て名あり宜なり歷朝能く斯業の奬勵に勉め人民亦孜々之れが發達を企圖するや其現今に至り已に輸出物金額の大半を占むるの盛境に達したる眞に偶然にあらざるなり惟ふに我邦家の消長は蠶業の盛衰に關するや大にして國家は殆んど斯業によりて其運命を卜するに似たり、然りと雖も蠶絲は獨り本邦の特有物産にあらず淸國の多産伊佛の精良尙ほ我を凌いで餘裕あり、去れば本邦の蠶業は將來益々進んで之れが勃興を圖り之れが改善を講せざれば彼の列强に對峙すべくもあらず然るに本邦未だ斯業に關する學識經驗共に幼稚の域を脫せず是れ本館が當代斯業界に於て錚々の聞えある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を乞ひ蠶業叢書の名を以て逐次之を刊行し汎く當業の士に頒ち斯業改善の良友たらんを期す其全部の要目左如し

蠶業叢書全部拾貳冊目次

- 蠶業通論　東京蠶業講習所 三谷徹君　生絲檢查所技手 池田榮太郎君著
- 生絲檢查論　生絲檢查所技手 德田實也君著
- 栽桑新論　生絲檢查所技手 池田榮太郎君著
- 桑樹病害論　岩淵平介君著

(甲の四)

蠶體解剖論　城丹蠶業講習所講師　松下憲三郎君著

蠶體生理論　東京蠶業講習所技手　松尾重信君著

蠶病論　岩淵平介君著

養蠶新論　宮崎縣技手　望月關馬君著

製絲新論　宮城縣農學校敎諭　井上隆君著

殺蛹乾繭論　東京蠶業講習所　三谷徹君著

多化蠶飼育論　山田島次郎君　大森孫十郎君著

蠶業經濟論　生糸檢查所技手　德田實也君著

第四編

桑樹病害論

岩淵平介君著

全壹冊　正價三十錢　郵稅六錢

本書は專ら桑樹の病害に關して論述せられたるものにして菌類の寄生によりて發するもの生理的變狀より來るもの及桑樹の害虫により被れるもの等五十餘種の桑病に付評論し尙附論として野鼠の害及晩霜の害を切論せられたるものなり殊に害菌の寄生によりて發生する疾病の如きは評論精到を極め新事實の記載亦甚だ少なからず殊に本書は一々著者の實驗を網羅せるものなれば栽桑に從事せらるゝの士是非共精讀翫味せられたし

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の五)

華族女學校學監下田歌子女史編、坂正臣君書

女子用文習字帖

全貳册

菊判和裝製本堅牢印刷鮮明正價八十錢郵税十錢

巧みなる文草も筆蹟美しからねば人之を卑み筆蹟美しきも文章拙けれは人之を侮るに反して文章筆蹟兼ね全けれは其人を見ずして先づ其人を敬ふの念を生ず文章筆蹟の人の品格を上下せるや甚しといふべし此事女流の日用文に於て殊に然り實に日用文章と筆蹟との練習は婦人のために最も必要の務めなり此書は文と筆と天下の雙絕を集む女流の習字帖として從來之に勝るものなきなり

發兌元 東京本町 博文館

(甲の六)

女子習字書

● 成瀬大域君著 小學校女子習字帖 (全八册和裝 折手本) ▲正價三十二錢 郵税十六錢

● 大和田建樹君著 小野鵝堂君書 明治女子書翰文 (全一册和裝 大判二百頁) ▲正價四十錢 郵税四錢

● 河村吉之輔君著 初學手紙の文 (全二册和裝 大判二百頁) ▲正價三十五錢 郵税六錢

● 橘千蔭翁書 假名習字帖 新百人一首 (全一册和裝 大判五十一枚) ▲正價三十錢 郵税四錢

● 橘千蔭翁書 烏丸帖 (全一册和裝 大判二十四枚) ▲正價三十五錢 郵税六錢

發兌元 東京本町 博文館

通俗百科全書

全部二十四冊完成菊判洋装

百科の學自ら登高自卑の序なるべからず本書此目的を以て當代知名の文士に囑し百科の學に付き勉めて其文辭を簡易にし其の意義を通俗にし以て門に入り堂に昇るの楷梯ならんことを期せしが今や全部完成を告ぐ何人も座右必備の寶典とせられたし

定價 自第一編至第拾五編 一冊貳拾五錢 六冊壹圓四拾錢 拾二冊貳圓七拾錢 拾五冊三圓卅五錢 郵稅一冊八錢

- 第一編 通俗日本歷史 足立栗園君著 全一冊
- 第二編 通俗世界歷史 長谷川誠也君著 全一冊
- 第三編 通俗明治歷史 坪谷善四郎著 全一冊
- 第四編 通俗德川十五代史 岸上質軒君著 全一冊
- 第五編 通俗文學汎論 奥村信太郎君編 全一冊
- 第六編 通俗倫理學 足立栗園君編 全一冊
- 第七編 通俗法學汎論 桐生政次君編 全一冊
- 第八編 通俗商業汎論 高橋邦次郎君編 全一冊
- 第九編 通俗政治汎論 鳥谷部銑太郎君編 全一冊
- 第拾編 通俗英語案內 石川辰之助君編 全一冊
- 第拾壹編 通俗言語學 宮田修君編 全一冊
- 第拾貳編 通俗銀行簿記 籠川眞澄君編 全一冊
- 第拾三編 通俗經濟汎論 春山育次郎君編 全一冊
- 第拾四編 通俗會社簿記 高橋邦次郎君編 全一冊
- 第拾五編 通俗工業簿記 島崎次男君編 全一冊
- 第拾六編 通俗理化一斑 藤野修吉外二君著 全一冊
- 第拾七編 通俗日本地理 大和田建樹君著 全一冊
- 第拾八編 通俗文章學 宮川鐵次郎君著 全一冊
- 第拾九編 通俗世界地理 澁江保君著 全一冊
- 第貳拾編 通俗動物學 川村守義君著 全一冊
- 第廿一編 通俗教育學 永持德一君著 全一冊
- 第廿二編 通俗獨逸歷史 河上清君著 全一冊
- 第廿三編 通俗學校管理法 安田清思君著 全一冊
- 第廿四編 通俗昆蟲學 永島長五郎君著 全一冊

定價 自第拾六編至第廿四編 一冊三拾錢 六冊壹圓七拾錢 九冊貳圓五拾錢 全部五圓八拾錢 郵稅一冊八錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(甲の八)

名流小照（二）



子爵夫人松前藤子



佐藤夫人靜子

（雜報欄參照）

名流小照（二）

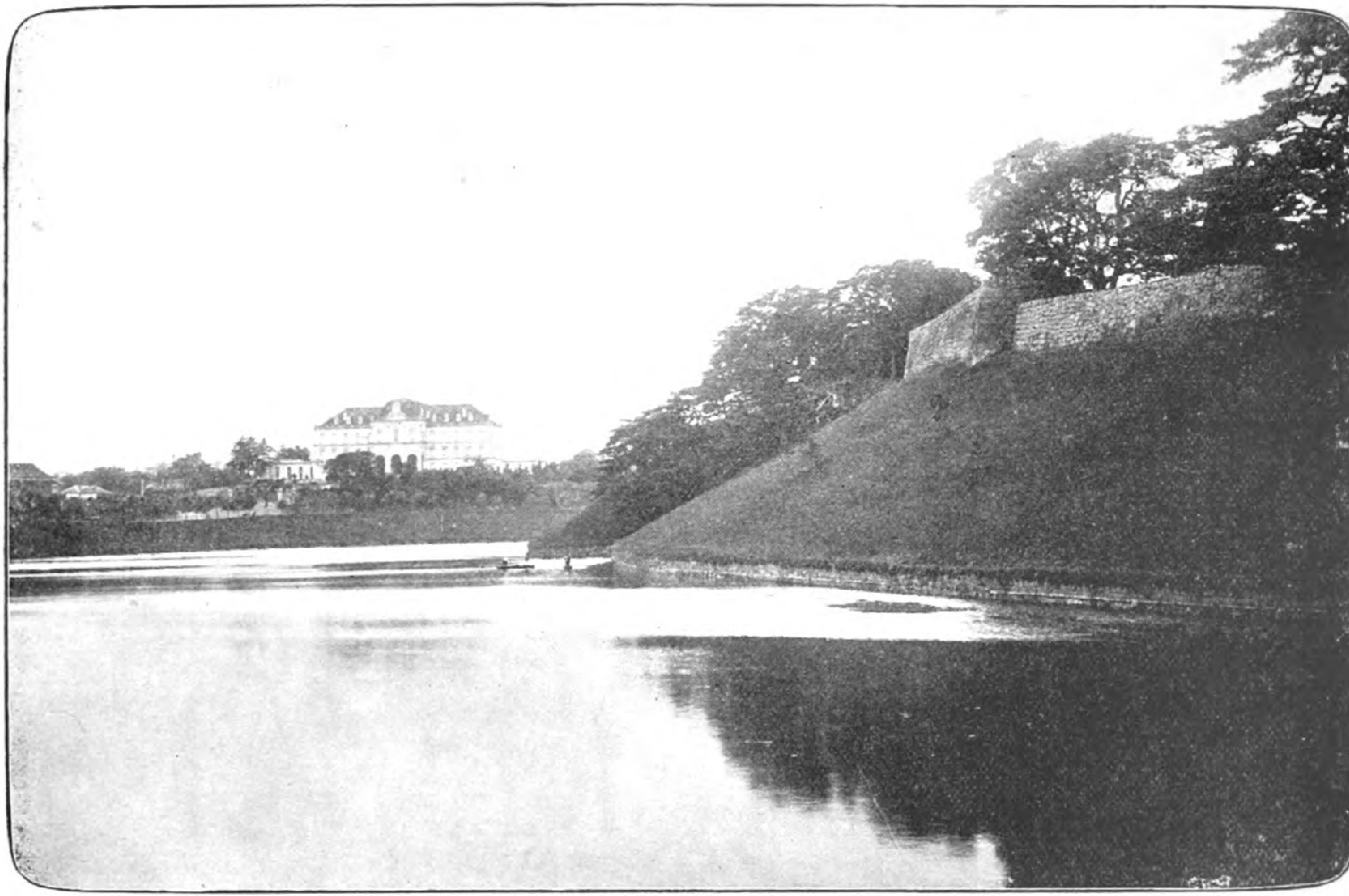


長谷川喜多子

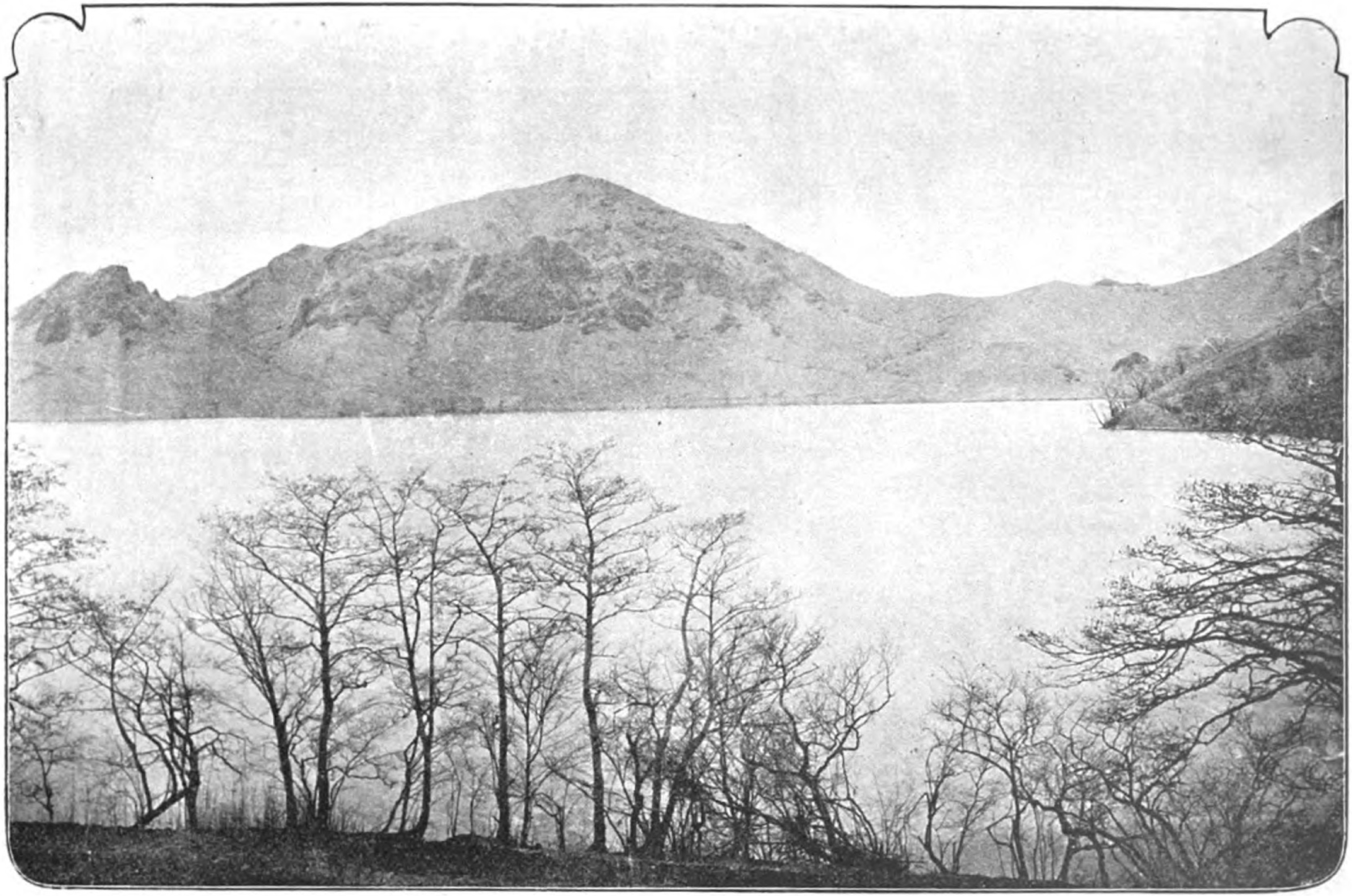


山脇夫人房子

（雜報欄參照）



東京名所（櫻田門外濠）



榛名山上の湖水

東京帝國大學文科大學長文學博士井上哲次郎先生著（近刊）

巽軒講話集

初編

全壹册洋裝菊判
紙數三百餘頁
二月上旬發行

本書記載要目

（一）教育の方針に就て（二）教育上の宗教道德問題（三）我邦德育の前途（四）武士道と將來の道德（五）道德主義としての自主獨立（六）淸國開發意見（七）十九世紀の哲學（八）歐洲碩學談（九）教育の過去及將來（十）女子教育談（十一）宗教の本躰に就て（十二）宗教及之に對する日本人の位置（十三）青年の宗教に對すべき態度（十四）青年の必要なる信念（十五）公法と私法（十六）道德及宗教に就て（十七）教育雜感（十八）佐々木弘綱翁の十年祭に際し所感を述ぶ（十九）現今の教育問題（二十）日本社會目下の痛弊（二十一）東西洋倫理思想の題目（二十二）教育上に於ける黨派心の弊害（二十三）言文一致に就て（二十四）裸躰畫論（二十五）法律と道德の關係（二十六）日本現今の新聞を評す

第九版

正三位子爵福羽美靜先生講述

人事百話

全壹册菊判
正價三拾錢
郵税六錢

通俗的に高遠なる學理を說き其間復た社會萬端の事柄を評論し以て俗見の誤を正し論理一遍の非眞理なるを打破す議論正確文字平易明治の今日に一異彩を放つものなり

第五版

文學博士男爵加藤弘之先生著

天則百話

全壹册菊判
正價三拾錢
郵税四錢

本書は人々處世の要道一百條を學德共に高き男爵が丁寧懇切に講述せられたるを筆記したるものにして何人を問はず必ず一本を坐右に供へざるべからず

（乙の一）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

華族女學校學監

少女文庫

全部六冊
和裝 毎月 一回 發兌

第壹編 お伽噺教草

全一册菊判和裝
正價金三十五錢
郵税金六錢

お伽噺は其昔若君姫君のお伽衆が其相手になせし噺なり由來此種の噺は日本にても外國にても實話あり寓話ありて何も幼稚なる兒女の腦裡に能く映して修身の助けとなり智を磨き躰を強くするの手引草となるの効著し下田女史の意を此著に注がるゝ周到にして敎育に資する高且大といふべし慈愛深き世の父兄諸彥は愛兒の爲めに一本を購はれたし、

第二編 庭訓お伽噺

全一册菊判和裝
正價金三十五錢
郵税金六錢

此書は本邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同種類中より現今に取りて可なりと思ふものゝみを撰み出せるなり總て此類の書中には甚た面白き趣向の者ありて往古の風俗を知るの栞とせんは此上もなきものあれど其兒女の敎育に適せざるものあれは述者深く此點に注意を加へて說明したれば年少女子も一讀其意を解し得て大に風敎の裨益となるべし

發兌元　東京日本橋區

(乙の二)

下田歌子女史著

第三編 内國少女鑑

全一冊菊判和装
正價金三十五錢
郵税金六錢

下田歌子女史が家庭教育に熱心なる又斯文に堪能なることと今新に喋々を要せず既に此文庫も第三編を發兌するに至れり此の一冊は我日本に於ける古代より近世迄の少女が傳記に就て大方少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる挿繪亦精妙なれば家庭の讀物として無上の寳册なるべし

第四編 外國少女鑑

全一冊菊判和装
正價金三十五錢
郵税金六錢

本編は我國の外、東西洋諸國に聞えたる早くより今に至るまでの少女が勝れたる事蹟を尋ね求めて綴りなしたるものなり、されば第三編と合せて讀みたらんには同じいみじき行ひも彼と我と風俗習慣の異なるが爲めに、又は古と今と世の遠く相隔たりたるが故に多少其趣のかわれることどもを見て深く考慮する所あらんには其實踐に裨益する所少なからざるべし

續刊

第五編 家庭の心得

二月中旬發行
正價金三十五錢
郵税六錢

第六編 學校の心得

三月上旬發行
正價金三十五錢
郵税六錢

本町三丁目 博文館

(乙の三)

◉文武堂出版廣告

(乙の四)

少年史譚

全部拾貳冊洋裝大判
美本　毎月一回發行◉毎編讀切◉密書數個挿入　定價一冊
金拾五錢◉六冊前金八十七錢◉拾二冊前金壹圓四拾錢◉郵稅壹冊四錢

偉人の傳紀は人生の嚮導者なり、慰籍者なり、譬へば雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して勇往せしめ、又人を慰籍して艱苦の中にも失望せさらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。言ふ勿れ古人の傳のみと、觀察の新を以てすれば、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。少年史譚の著者は、見識筆力共に當代の撰、而して平生私淑せる古人を撰び、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血あり、涙あり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳記中の好傳記也。

第貳編　鬼吉川

文學士 大町桂月君著
水野年方君畫

既刊
- 第壹號　平相國　文學士 高山樗牛君著　武內桂舟君畫
- 第三編　旭將軍　文學士 中內蝶二君著　筒井年峰君畫
- 第四編　鎭西八郎　國府犀東君著　武內桂舟君畫
- 第五編　俠僧文覺　文學士 高山樗牛君著　鈴木華村君畫
- 第六編　北條時宗　國府犀東君著　村田丹陵君畫
- 第七編　小楠公　文學士 大町桂月君著　梶田半古君畫

- 第八編　眞田幸村　文學士 中內蝶二君著　尾形月耕君畫
- 第九編　上杉謙信　國府犀東君著　武內桂舟君畫
- 第十編　俠商利兵衛　文學士 大町桂月君著　富岡永洗君畫
- 第十一編　北條早雲　文學士 中內蝶二君著　小林永興君畫
- 第十二編
  - 常盤御前　文學士 大町桂月君著
  - 靜御前　國府犀東君著
  - 奴小萬　文學士 中內蝶二君著　小林永興君畫

發兌元　東京日本橋本町三　博文館◉大賣捌　東京神田表神保町　東京堂

第貳卷

第貳號

二月十日發兌

學生筆戰機關

秀才文壇

口繪　毎號名家肖像與筆風景寫眞數葉挿入

㊀壹卷二號より紙數増加

毎號普通文、漢詩、新躰詩、和歌、俳句、を募集し當撰者の肖像或は筆蹟を次號に紹介又大家の名文數篇を掲載す、一讀有益なるもの多し、第貳卷より年四回大懸賞募る

㊁逐號材料益豐富見よ

定價　一冊拾錢　●六冊前金五拾七錢　●十二冊前金壹圓八錢　●外に郵送一冊壹錢　◉郵券代用壹割増　◉毎月一回發行

東京小石川區指ヶ谷町百卅三

文光堂發行

賣捌　●東京神田表神保町東京堂　●大阪東區備後町盛文館　外全國書店

文學士　寺内至誠君著　一條成美君畫　定價貳拾五錢　郵税四錢

社交の女王

新婦人觀

第壹　婦人の使命　三十四年十月發行

第貳　婦人美觀　同年十一月發行

第參　女學生　同年十二月發行

本書は新婦人會編纂の新婦人觀の第四編也。夫れ婦人の有する美なる容貌と、美なる資質とは、實に交際場裏の花也。家に在りては温顔微笑、よく良人を慰め勵して、家庭の幸福の基礎となり、出てゝは燈光晝よりも白うして朝野の貴紳洽ねき宴舞の場、輕羅を纏ふて立てば、春風之が爲めに堂に滿つ。婦人は總へてに於いて美也、されど交際場裏に在る婦人は最も美也、乞ふ吾人をして、こゝに社交の女王を謳歌せしめよ。

新婦人會編纂＝南風館藏版

發賣所　東京神田錦町二丁目六番地　新聲社

（乙の五）

于河岸櫻所君纂釋

女訓評釋

目次

女今川。女實語敎。女庭訓。女訓孝經
女大學。女中庸。女小學。女孝經
女誡。女論語。女訓。女範

此の書は古來女子の敎科書として襲用せる前記の十二部に纂めて註釋を加へ古訓を解するに新思想を加味したるものにて初じめは簡易にして次第に文意共に高尚に至るものなれば此の一册にして賤の女も學ぶべく高貴の御方にも適當に尋常一年生にも讀み得べく女子大學女學生にも研鑽に値すべき本邦唯一の女訓寶鑑なり請ふ御愛購あれ

全壹册和裝
菊判上製紙數
四百余頁
正價六拾錢
郵稅拾錢

發兌元 東京本町 博文館

(乙の八)

茶道唯一の寶典

各傳比較 點茶活法

心月庵松浦伯爵題辭
遮莫庵伊藤男爵序文
半月庵石黑男爵序文
谷神庵岡崎淵冲翁著

此書は緖論客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系譜を揭く首に斯道の總論を揭け各編皆諸流の傳を列記し其異同と理義の所在を知らしむ初學の人は此書に依て主客の作法を初め手前百變の基棚莊千化の起露地の繩張り茶室の構造迄容易に習得せらるゝ故に師範の人の參考書たるは素より何流何派に論なく必ず一本を供へさるべからさる古來稀有の茶道全書なり

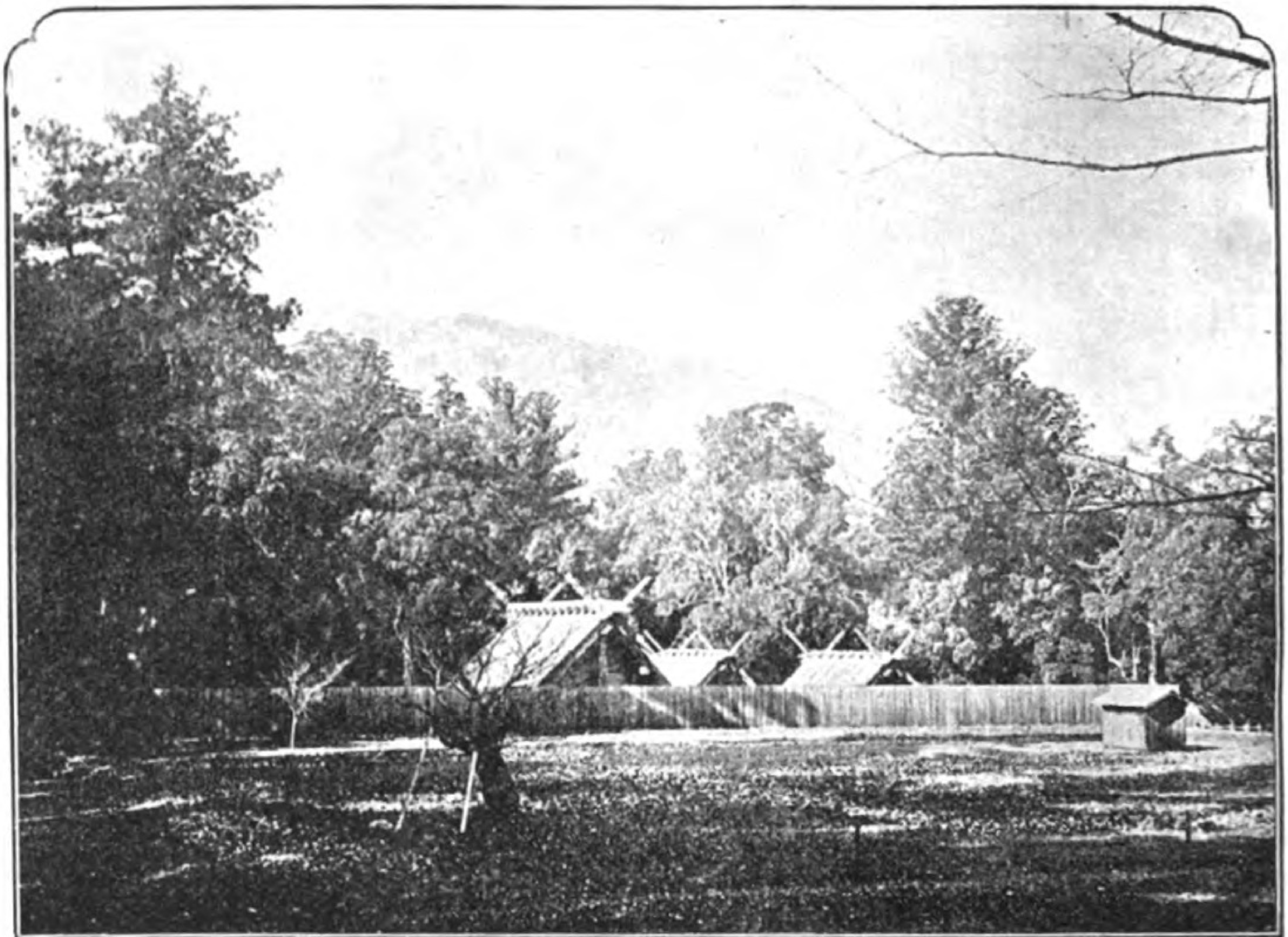
全四册十三卷大判和裝上製
正價金貳圓五拾錢小包目方八百匁

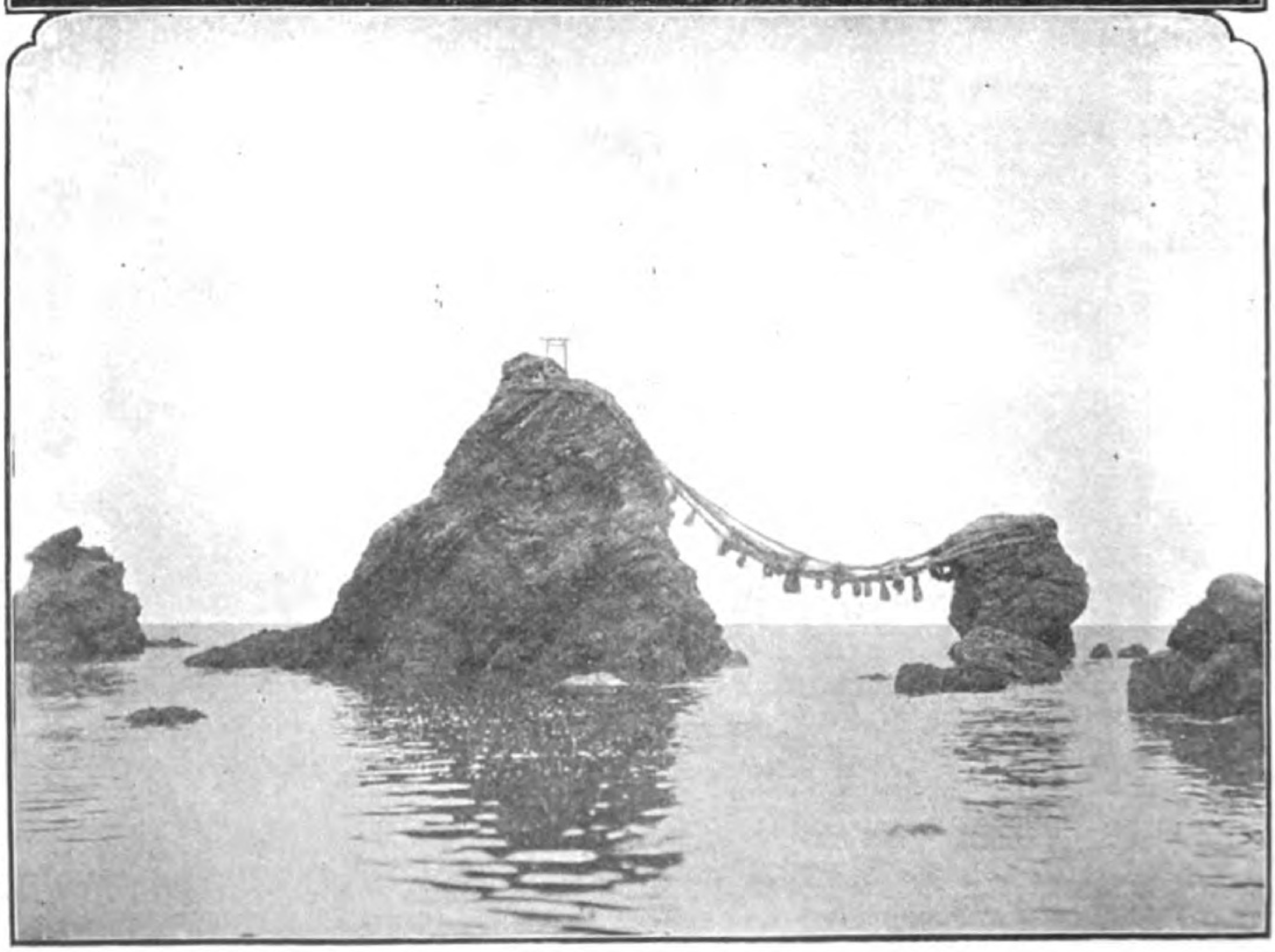
發兌元 東京本町 博文館

春日の巫女



伊勢の内宮





（學藝欄參照）

二見の浦

春景山水



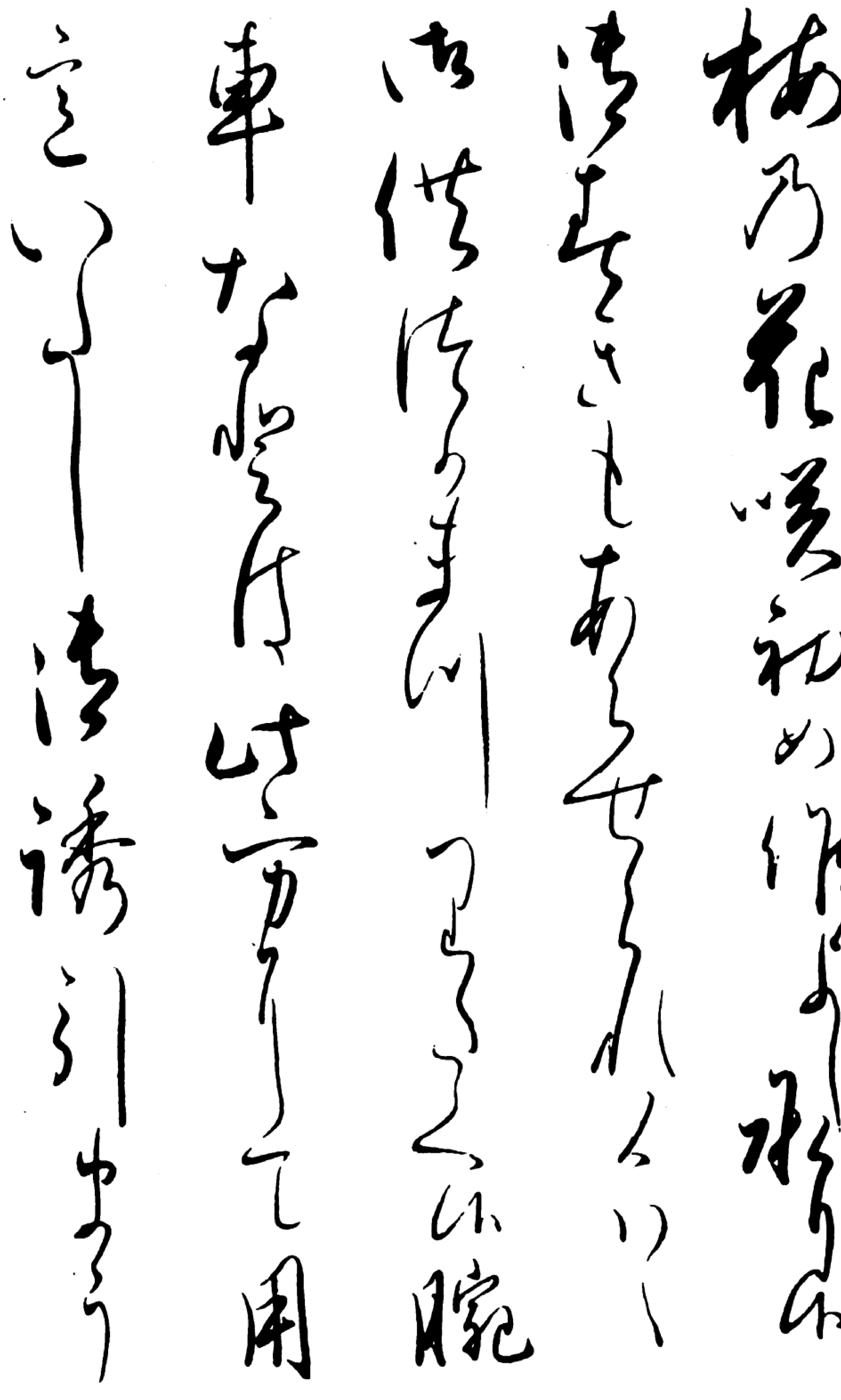
橋本秀邦君筆

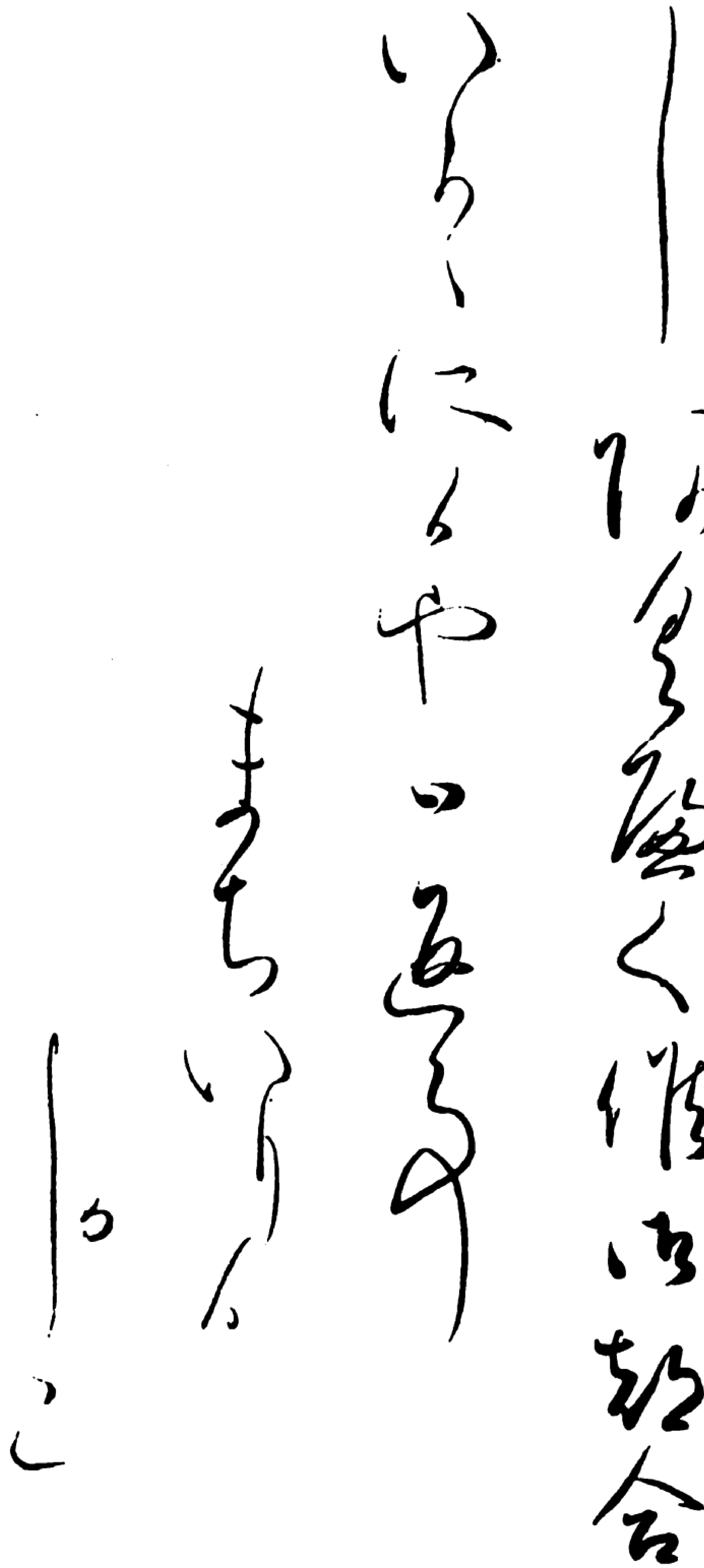
梅花書屋



馬杉青琴女史筆

多田默愛先生筆





坂正臣先生筆

梅の枝尓鳴きて
うつろふうくひす乃
羽根しろたへ尓
あわゆきそふる

坂正臣先生筆

百ち樹のたちきやへは
いろとりあまるや梅まての
さしそこうへとくる
わか世こそれこせんとおも
ひしろめのむそれと
もこそゝす一重のさかりてを

仿○小蘋女史筆



瓶裡不老長春

野口小蘋女史筆



梅花書屋

野口小蘋女史筆



江山雪霽

野口小蘋女史筆



籃中佛手柑

各宗本山名所圖會

（洋裝菊判石版畫表紙寫眞銅版石版木版及密畫入）

全部十二冊

近時我佛教は益々隆盛發達の勢あると共に是れが各宗本山の事蹟は日を逐ふて社會に顯揚紹介せられ將さに遺漏なからんとす敎界の爲め將た史學界の爲め大に慶賀すべきのことたり去れど惜らむくは是が指導者たり紹介者たる人の多くは或は文詞の末に馳せて事實を謬り或は現況を說きて過去の歷史を考證せざる或は歷史の考證を試み而も實地と齟齬せる等斯道の爲め誠に恨惜の事多し著者玆に見るあり此等の欠缺なからしめんが爲め各宗本山の事蹟を一々歷史と實地に考證探究して爾後毎月或は隔月に一部づゝ編述刊行し以て史家の參考に供し旅行臥遊の好侶伴たらしめんと欲す希くは愛讀の榮を賜へ

石倉翠葉君著

東本願寺 名所圖會

二月中旬發行

本書は發刊の主旨に基き吾眞宗本山中最も莊嚴偉觀ある堂宇を以て普く天下に知られたる京都東本願寺の事蹟を編述せるものにして先づ所在地の名義大谷地名考大谷廟所考眞宗の名義及沿革舊史に現れたる事本願寺法系門蹟考門蹟傳代々門蹟の雅懷蓮如上人の子守歌等を始めとし境内の沿革建築物及庭園の沿革寶物古文書本寺に附屬せる名勝舊蹟等其他本寺に關するもの一切を一々歷史と實地に考證探査し文は勉めて通俗に振假名を附し且つ精巧緻密なる寫眞石版木版三十數種を挿入したれば一は斯家の參考となり一は旅行臥遊の好侶伴たらん

續刊

第貳編 西本願寺名所圖會 二月中旬發行

第參編 佛光寺名所圖會 三月中旬發行

（丙の一）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

學生必讀之寶典

破竹居士著

健康ト遠足

（二月上旬發兌）
全一册洋裝
上製金字入
美本總紙數
二百六十頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

政治家の頭腦は鋼鐵的ならざるべからず、何を以て鋼鐵的たるを得べき、曰く健康の術のみ、外交家の胃の腑は大ならざるべからず、何を以て大なるを得べき、曰く健康、事業家の皮膚は厚堅ならざるべからず、何を以て厚堅に致すべき、曰く健康、殊にも未來に於て國家の柱石たるべき學生の腦髓は透明ならざるべからず、何を以て透明を致すべき、曰く健康、本書は健康の方針手段得て網羅せざるなし、破竹居士健康の術を講ずる二十年、實驗に寓するに學理を以てして一々實用に適す、二十世紀は競爭の世界なり、大に競爭せんとせば大に健康を養はざるべからず、曰くボート、曰く動物採集、曰く寫眞書、曰く夜行、曰く冒險、曰く天幕生活、曰く海水浴、曰く銃獵、曰く捕魚、曰く採薤、以て天然を歌ふ可く、以て智識を廣むべく、以て健康を增すべし、殊に行文の暢達にして流麗なる、讀者當さに寢食をも忘るべし、

內外遊戲全書

全部拾五册洋裝上裁袖珍●正價一册拾貳錢●六册六拾六錢●十五册壹圓五拾參錢●郵稅一册四錢

● 端艇競漕　遠山熙君著
● 新游泳術　稻田實君著
● ベースボール　クリーケット　津田素彥君著
● 射的術及弓術　津田素彥君著
● 銃獵案內　佐々木信三郎君著
● 庭球術　野田桂園君著
● 玉突術　三宅鐵骨君著
● 陸上競爭　志岐守二君著
● 鳥獸狩獵法　志岐守二君著
● 昆虫採集　安藤鎌吉君著
● 室內遊戲法　志岐守二君著
● 漁魚術　滿尾藤二郎君著
● 馬術　遠山熙君著
● 福引集　安藤鎌吉君著
● 蹴鞠と自轉車　三井末彥君著

（丙の二）

(丙の三)

商業の秘畧

高等商業學校卒業　濱田四郎君著

實用廣告法

(製本既成)

全壹冊洋装上製菊判
背皮金文字入美本
正價金貳拾五錢郵税六錢

商貨庫中に充ちて顧客の來るを待つとも廣告を利用して商品と商號とを江湖人士に熟知せしむるにあらずんば華客自ら到るの理あらんや本書は著者獨得の卓見と豐富なる資料とにより骨子を歐米の廣告法に採り之を本邦の事實に徴し學理實驗二十三章に詳説して其秘訣を明示し運用の術を論ず實に是れ商家の六韜三略なり

博文館發兌

男女生殖健全法

婦人科專門ドクトル　宮田守治君
中央看護婦會長　松本安子先生
著

全一冊　四六判
定價金一圓　郵税拾六錢

本書は男女生殖器の解剖生理學の原理より説き起し…[illegible]

發行所　東京市神田表神保町　修學堂書店

通俗衛生顧問

在獨逸日本醫學士丸山秀雄君
東京板橋病院長　田村守治先生
著

紙數三百頁　正價一圓　郵税十五錢

諸病の原因、症状、療法…[illegible]

衛生心得

婦人科專門ドクトル　宮田守治
中央看護婦會長　松本安子
著

全一冊　正價四十錢　郵税八錢

本書は…[illegible]

(五の四)

受驗問答叢書

世の學生諸子の各種學校の入學試驗に應せんとするに際し科目の夥多なる一に普通の編纂書によりて研究せんは到底其煩に堪へず暗記と早通には問答によるを以て最も捷徑とす本館今回是等學生諸氏の應試に便せん爲め受驗問答叢書を發行し最近諸官立學校入學試驗問題を標準として無數の新題を假設し之に附するに一々簡明適切なる答案を以てし一目の下あらゆる問題に付て直に解答を得せしめ科目は日本地理萬國地理日本歷史萬國歷史數學幾何和文英譯英文和譯國語漢文學を始め其他普通の試驗科目は悉く之を網羅し各科に付一冊つゝ合計凡廿四冊を以て完結せしめんとす諸子乞ふ之によりて無益の勞力と時間とを省き速に受驗の素養を作らんことを

中學世界記者上村左川君著　（製本既成）

新撰 日本地理問答

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百四十五頁
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

日本地理の書甚た多し然れとも普通の編纂は煩冗散漫に失して暗記と早通とに便せんには問答書の簡明適切に及はず此編は主として中學程度以上各學校入學試驗者の爲めにせるものにして官立諸學校最近の入學試驗問題を標準として無數の新題を假設して始めて冗を避け要を摘みて簡明なる解答を爲し地理總論（地文）より全國各道に區分し凡日本地理地文上の問題は網羅し盡して餘すなく且つ同種に屬する問題は悉く之を各一欄に類別したれは一見して夥多の題目に早通するを得へし學生諸氏は此書に付て研究せは普通の地理書によるよりは頗る僅少の時間を以て日本地理に精通し如何なる問題にても問答に苦しむなかるへし編末に參考として最近二三年の各學校入學地理問題を集錄せり

發兌元　東京市日本橋區

受驗問答叢書

本書各編目次

- 第一編 ◉新撰日本地理問答
- 第二編 ◉新撰世界歴史問答
- 第三編 ◉新撰世界地理問答
- 第四編 ◉新撰西洋歴史問答
- 第五編 ◉新撰東洋歴史問答
- 第六編 ◉新撰國文問答
- 第七編 ◉新撰漢文問答
- 第八編 ◉新撰算術問答
- 第九編 ◉新撰代數問答
- 第十編 ◉新撰幾何問答
- 第十一編 ◉新撰國語問答
- 第十二編 ◉新撰英語問答
- 第十三編 ◉新撰物理問答
- 第十四編 ◉新撰化學問答
- 第十五編 ◉新撰動物及植物問答
- 第十六編 ◉新撰地理及天文問答
- 第十七編 ◉新撰鑛物及地質問答
- 第十八編 ◉新撰生理及衛生問答
- 第十九編 ◉新撰倫理及教育問答
- 第二十編 ◉新撰心理及論理問答
- 第廿一編 ◉新撰法制及經濟問答
- 第廿二編 ◉新撰商業要項問答
- 第廿三編 ◉新撰農業要項問答
- 第廿四編 ◉新撰工業要項問答

定價 ◉一冊金二十錢 ◉六冊金壹圓十錢 ◉十二冊金二圓十錢 ◉二十四冊金四圓 ◉郵税壹冊金四錢 ◉一冊紙數二百四十頁

本町三丁目 博文館

(丙の七)

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士片山國嘉先生校閲
東京帝國大學醫科大學助手 門脇眞枝先生著

精神病看護學

（近刊）

全壹冊洋裝上製
總クロース背皮
金文字入美本紙
數二百五十餘頁
正價 郵税 未定

近時我國看護學書の出版さるゝもの多し獨り精神病看護學に至りては未だ曾て有らざる處なり其之れあるは本書を以て嚆矢とす本書は多年東京帝國醫科大學精神病學教室及東京府巣鴨病院に於て研究診療に從事し且つ醫科大學高等看護法講習科講師たりし門脇先生の手に成りしものにして彼の乾燥無味なる一班醫書とは大に趣きを異にし流暢なる國文を以て記されたれば讀み易く解し易く之を教科書としても參考書としても從來其比を見ず今や監護法新に實施され精神病院各處に起る本書の貢獻蓋し少からざるべし大方醫家衞生家看護人諸君は是非一本を購はれたし

醫學士石原弘君著 ●醫學新書 藥物學 正價金二圓 小包送八百匁

醫學士三島通良君著 ●學校衞生學 正價金七拾五錢 郵税金拾錢

藥學得業士金澤巖君著 ●通俗治療救急法 正價金三拾錢 郵税金四錢

醫學士高橋金一郎君著 ●通俗看病法 正價金拾五錢 郵税金四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（丙の八）

明治三十五年二月五日發行
第貳巻 第貳號
紀元二千五百六十二年 西暦一千九百〇二年（壬寅）

女學世界

論説

現今の女學生難

女子大學講師 三輪田眞佐子

むかし、詩人白樂天は婦人の身を以て、百年苦樂由他人と歌ひて憐みけり。そは未だ文化の進まざる時代、わきて、封建制度の時代に於ては、貴きものは權力と暴力なりけらし、從ひて、軟弱なる婦人はつねに男子より抑壓せられけん。然るに、詩人の眼には血あり亦涙あるを以て、婦人の斯る運命と境遇とを哀れと思ふも理にこそ。爾來、日に月に文化進みぬるも、今なほ、婦人を翫弄視するものあり、たとひ、さなくも、婦人を遂に男子より劣等の位地にあるものとして、完全なる人格を認めざるものあり。これに引きかへ、其の反動にや、男女同權を唱へ、男子に敵抗せんばかりの勢を懐くものあり。不婚論、獨立論の如きはその勢の極端に馳するものなり。あはれ、過ぎたるは、猶ほ及ばざるが如しと、卑屈に甘んずる女子の其の愚哀はれむべきが如く、高慢を誇る女子の其狂も亦哀はれまざるべからず。女子たるもの自ら眞の女道を發見して、これを踐むを欲せざるものあらん。されど、唯、恨むらくは、現今は舊思想と新思想と衝突の時代なりければ、共に我を聖なりとして、誰か烏の雌雄を知らんの語を假りて許すべき狀態にあり。なとか、眞の女道なるものを確立し

得るものあらんや。故に、その間に教育せらるべき天下の女學生は左せんと欲せば、これを非とするものあり、將に右せんと欲せば、これを是とせざるものありて、殆ど適從すべき所を失ひ、所謂五里霧中に迷ふものゝ如し。あはれ、現今の世に於て、女學生たることは難いかな。

凡そ、道德の重んずべきは、男子と女子との區別なかるべきも、殊に、その操行と品性の輕んずべからざるは、男子よりも女子に、於て嚴なるべきを信ぜり。故に、女子にして操行に缺點あり、將た品性に汚點を含まんか、たとひ、萬卷の書を讀み終らんも　おのれは未だ教育なき女子と言はまほし。從ひて、女學生たるものは如何なる學術技能に劣等なるを耻づるよりも、操行と品性の優等ならんことを期まざるべからず。否、社會が女子に對する制裁も、その操行如何、その品性如何を中心とすべきものならんかし。然るに、現今の世に於て、女學生輩を感ずる所以のものは、かゝる女道の根本より來る批評にあらずして、些々たる末技の優劣、若くは、外觀の異同等につきて、徒らに毀譽し、褒貶するにあり。實に現今も尙、女子は百年苦樂由二他人一との語をして、單に、その苦樂は良人に由りて決せらるゝのみならず、廣く天下の衆目に由りて定めらるゝとの、意に解するか、適當なるかの觀あり。必ずや、心あるものは罪なくして學窓の下にある女學生を、浪花津のよしあし繁き言の葉にかゝらしむるを欲せざるべし。希くは世の女子教育者、その偏見を去ると同時に、妄信を放て、天下の女學生をして。安んじて德性を養ひ。知能を學ぶに至らしめよ。濫に女學生を難ずるには非ざるなり、非ならずや。

古より大器晩成と言へり。これまた眞理なきにあらず。即ち、女子が一家を整理し.以て良人をして內顧の憂なからしむるのみならず、老者もこれがため安んじて餘年を送り、少者もこれに由りて立身の端を開き、なほ施いて、社會全般の福祉をも謀る如き婦人の出づるは、天才に歸するも妨げなしと雖、多くは素養の然らしむるものぞかし。故に深く修めし女子にあらざれば、

その妻として亦母としての任務を全うすること能はざるべし。而るに、世の女學生を難ずるものを見るに、曰く、其の作文の流暢なる、地理歴史及び理科等の諸學に通達するは、往々感ずべしとせんも、日常の生活法を知らざるため、反りて、終始家庭を出づることなくして、實際上の家務に熟通せしものに劣るならん、云々。固より、普通女子教育の目的は內助の任に堪能ならしむるが主ならんも、學ぶところを悉く直に實行するは難きのみならず、學校にて學びし課業は殆と理論のみにして、臨機應變の適用は更に修養を要すべし。蓋し、男子に於てすら文武の官に任せらるゝものは更なり、一切の業務を執るに當りて、多少の見習を要するにあらざるか。などか、女子のみ學校にて學びしことにつき、更に見習を要せざる理由あらんや。これを以て、女子教育を主るものは、成るべく理論と見習を同時に行はしむる法方を講ぜざるべからず。亦一方には、家庭と學校と相待ち、相助けて、完全なる女子を作らざるべからず。されど、現今の如く學校に於て、諸種の課業を授くる必要ある時代にありては、決して、昔日、裁縫割烹若くは遊藝のみに全力を盡しゝ單純なる課業を學びし時代と、同日に論ずべからず。思ふに、現今の教育を受けし女學生の長所は、學生の境遇を離れて主婦となりし當時にあらずして、漸次、年月を經るにつれて、嘗て修學せし實力の効驗を現はすに至る曉を以て知るべきなり。然るに、世人は學生の身分を有するものに、良妻賢母の實力を現はさんことを求めて批評するは、酷にあらずや。おのれ屢々女學生あがりの新婦に對して、同情の淚を濺くことあり。これ今日女學生難を說く所以なり。

斯くの如き酷なる批評のため、女學生の譽と望は殆と沒せられて、既に、女學生てふ名詞は、一種異樣の意味に用ひられ、以て、これを厭ひ且つ忌むものだにあり。口惜しき限にこそ。古人曰ふ、前車の覆るゝは後車の戒と、實に過去の女學生中には多少急進に失するものあり、將た、空想に流るゝものありけんため、女學生を批評するものゝ口實を得しならんも、今日時勢に必

要なる修養を以て目的とする女子教育を破壞し、昔日のいろは教育を復活せんとするものは、その可なる所以を知らず。さりとて、實踐を顧みざる虚飾の學術を修め、時流に媚ぶるものは、一層、不可なりと言はざるべからず。

今後、中等社會以上の婦人たるものは普通の學識を備へ、以て、これを家政に用ひ、亦交際に用ひざるべからず。若し、その嫁せし當時に於ては、女學生との批評を受くることあらんも、自ら省みて、内に疚しき所なくんば、毫も恐るゝに足らず。獨り良心の命ずる方針に從うて行ふべきなり。おのれの見聞する所に由れば、敎育ある女子の始めて家政を執るや、いと、迂遠なるを覺ゆるも、その悟り易きこと、且つ改むるに速なるとは、教育なき女子の夢想だに及ばざるべし。例之ば、敎育なき女子が、裁縫の裁方を計算するに當りては、單純なるときは暗算して、大に便益ならんも、稍、複雜なるときは、或は豆粒を用ひ、或は箸を用ひて、抱腹に堪へざることをなさんも、聊かにても、數學上の知識あらんには、計算流るゝが如く速なるべし。その他、家庭に趣味を與ふる如きも教育なき女子の望むべからざることなり。甚しきは、一家に波瀾を生ずる時に於ても、教育あるものは條理を辨ふること明ならんも、教育なきものは頑愚にして、導き難きは事實ならずや。亦女德を守る點に於ても、教育あるものは女道の如何を詳かにして、踐むべき所を自覺せんも、教育なきものは自覺する所なきがため、變節變心の憂なしとせず。況んや、一家一國萬一の秋に際しては、平素修養の厚き女子にあらざれば、恃むに足らざるべし。要するに、人は棺を掩ふて始めて事定まるものなり。されば今日學窓にある女生の眞價を評定するは、その生涯の行動を通じて見ざるべからず。唯、目前の利害のみを見て、其の成敗を言ふは、天下後進の女子を誤らしむるものなり。おのれ恒に女學生につきて痛論するとあるも將來に望を屬することも亦大なり。故に、女學生を難するものをも、反りて難せざるべからず。天下の女學生たるもの自愛して、將來の望を全うせざるべからず。決して、一

丁字をも知らざるものに劣るべけんや。

尙、現今女學生を難ずるものを見るに、眞に女學生に缺點あるを發見せしもの少く、その多くは、一種の感情に制せられて、徒に好惡するのみ。假之ば、體育の奬勵、衣帶の改良等を好まざる人は、活潑の女生、若くは、新裝の女生を以て、直に女學生の通弊となし、これに反して、柔和の養成、古風の固守等を惡む人は、一切の舊慣を打破して、忽ち、理想的女子敎育を加へんと議するもの丶如し。由りて、其の間に立つ女學生は、一方より賞贊せらるれば、同時に、他方より排斥せらる丶を免がれず。おのれの女學生難を述べて、現今の女學生に同情を表するは、其の進退維れ谷る、過渡の時代に處することの容易ならざるを以てなり。

果して、然らば、現今の女學生難を救ふ道は如何。他なし、女子に適從すべき道を示すと、同時に完全なる女子敎育制度を作り、學得せしことゝ、其の實踐とを並行せしむる方法を探るより、良きはなかるべし。而して、其の詳細なる說明は題目を改めて述べん。唯、おのれがこの文をものせし目的は、天下の女學生をして失望することなく、益々、勉勵し、以て、舊弊を墨守する愚を學ばず、亦、時弊を追慕する悔を得ざるやう、なれよかしと、祈るばかりにこそ。

（完）

女教邇言

女子英學塾長　津田梅子

女子敎育上の意見としては別段申しませんが、唯私が昨年の春英學の塾を開いてから以來、種々今日の女子即ち女學生に就て經驗した事がありますから、それを少し御話して大方の敎を乞はんと欲するのであります。

私の塾は御存の通り高等女學校卒業以上の程度の者を入學せしめるので、女子の普通敎育はまづ終つたものと見なければなりません。年齡も十六七以上一と通り學問をして其の學問を家政なり、何なり日常處世の務めに應用がして行ける筈でありますが、實際に就

て見ますると種々遺憾の點があるやうです、まづ何よりも原書の讀書力に乏しいのは意外でありました。それで授ける讀本は難かしいかといふのに、決してそうむづかしい書物ではありません。西洋では高等小學校の程度位でせう。そのやうな易い書物に向ッても意味が容易に取れない。尤も唯直譯して行く時はどうか解つてゐるらしいが。後て如何なる意味かと糺して見ると殆んと解ッてゐないやうである、これでは實に仕方がない、それ故私は生徒に向ッて常々斯う申して居ます。何事も自分で研究して、御覽なさい、研究して見て、自分で難問を解釋するやうに爲なさい。これは强がち讀書のみに限りません、何事も自分で勇氣を起こし、難い事でも分らない事でも何でも自分が主になッてする氣でなければ決して物は上達しません。どうも今日の女學生には兎角自主、獨立といふ念に乏しいやうであります。私の考では、今日學生に物を敎ゆるにしても、一度敎へて忘れた處があれば、再度敎へる、又忘れた處があればまた敎へるといふやうな緩漫な敎授法では中々其の成効が覺束ないと思ひます。まづ書物で言へば一度敎へた處は二度敎へない、能く熟讀させて見て、どうしても解らなかッたらば其の時は敎やう。又作文にしても間違つた處があれば唯印を附けて置くだけで決して間違の點を説明して聞かさない。再三再四、自分で研究を－熟考をして來た上でいよ／＼解らねば其の時始めて其の理由を說明して聞かす位にして置くのであります。斯樣にすれば幾分か自分の發明心を養成し、事物に向ッて注意力を熾んにするやうになりませう。即ち學生の自營心を養ひ獨立心を養ふ所以でありませう。

次に申したいのは責任を自から知るといふの點であります。英學塾の寄宿舍には唯今二十名足らずの生徒が居ます、これは家族的の組織でありまして其の主義は全く放任主義。併し放任主義と申しても決して氣儘放題にして置くといふのではありません。其の放任主義の裡には自營獨立の精神が籠つて居ります、成程私の塾には形式上の規則といふものはありません。規則と

言つても唯何時に寢る、起る、といふだけの事で、其外に、これを守れ、これを行へといふやうな命令的な事は更に申さないが、其の代り。何事も自營獨立の精神を籠めて遣つて貰ひたい。塾は家族的の組織であるから各人共同の物である、塾生は此所を自分の家と心得て何事も自分に責任を持て遣らねばなりません。一體多數の人が集つて一家を組織すれば自然の勢として多數人の便利。多數人の都合といふ事があります、其の便宜の宜しいやうにして行かなければならない。其の多數人に都合の宜しい樣にといふのが畢竟規則の精神目的でありませう。それを守ッて行くのは至極結構であるが、如何せん無味乾燥なる一片の規則では銘々の好都合といふ事が解らず唯他人から命令された事のやうに思はれて、往々其の規則を忽諸にするの風がある。それが第一自營獨立の念を薄弱にするの原因で。隨て日本婦人の大なる弱點であらうと思ひます、責任といふ事に重きを置かないのも是れが爲め、依賴心が多いといふのも是が爲め、又意志の强固でないといふのもそれが爲めであらうと思ひます。

それ故私の塾ではこの規則の精神、規則の根本へ立歸ッて、各個人の都合といふ所を十分に了解せしむるといふ方針を取つてゐるのであります、斯樣すれば惡い、何故に惡いかといふ點を自分の心に問はせて見て、自分で其の理由を發明し、成程これは善い、惡いといふ處を自分に合點せしめる。斯樣にして自分から遠慮をし、又自分から抑制をして共同生活の妨害にならぬやうにと注意をして來るのである。即ち放任主義の神髓とする處であります。

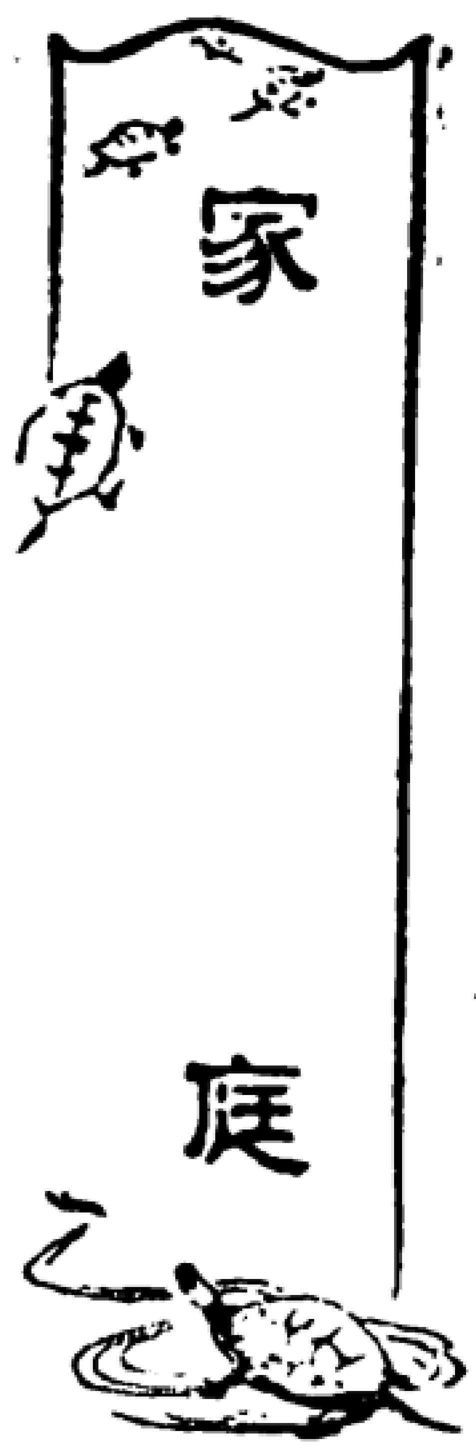
乍去日本人從來の習慣でありませうか、斯樣な事に極めて無頓着が多い、責任を重んずるの念に乏しい、獨立して物事を治めて行くといふ力が缺けてゐる。學問を實際に應用して行くといふ事が少しもない、依賴心が多くて、憤發心が少くて、秩序とか、整理とかいふ觀念が乏しくて、どうしてこの複雜な社會に立つて家を治めて行く事が出來やうかと思ふ位であります。

まづ責任を閑過する一例を申しませう。それは重に外

出などに就て起る事柄で。塾生の身は無論私が其の親から責任を持て預つてゐるのですから出入に就ては行先を明瞭にして置きます。或日一學生は横濱まで出向きましたが、晩になつても歸りませんから。心配して電報もて其の消息を問ひ合せました。返事がないから二度掛けましたがそれでも返事がないから、塾ではどうなつた事かと非常に心配して責任を持つたものは殆んど一夜睡られなかつた位するど翌日歸つて來て大層謝罪をされるから。何故返事をしなかつたと尋ねると返事は端書でして置きましたといふのです、此の方で心配をして電報まで懸けた事は十分解つて居る、それ故當人も責任は満更知らぬ譯ではないが、其の道を盡すの方法を得ないのです、歸つて來て謝まつても仕方はない其の時返電をして貰へば無益の心配は決してしません。一寸した事であるが日本の婦女子には往々斯樣な失策が多いのであります、これは決して責任を知らぬ譯ではない、又物事に無頓着な譯でもありません、唯習慣上の缺點であらうと思ひます。

斯樣な事柄を一々申せば限りのない事で、居家處世の上に種々間違が多く、さればと言つて、これを一々前以て命令するといふは實際に行はれ難い事であるから、萬事其人に任せて其人の獨立心に依頼せしめる樣な習慣をつけねばなりません、寢食の事は申すに及ばず、器物の取扱ひ、火の事、水の事、掃除の事、其外一切の仕事に關して皆銘々の獨立心に依つて行へば自然と責任を重んずるやうになる。一體この規則でさせる事は規則其物の存してゐる間即ち規則にはまつてゐる間はよろしいが、他日境遇が變ると。一方ならぬ差支を生ずる事がありませう。それ故規則でやつた事は何所へも通用するといふ譯には參りません。矢張本人の獨立心に任せなければなりません。本人に自營獨立の心さへ定つて居れば、どんな場所へ出ましても、又どんな境遇に際會しましても差支なく、變通自在でありませう。さればこの家塾で放任主義を行なうのは畢竟獨立心を養ふ爲であつて。この狹い小さな家塾で其の習慣をつけて置くのは他日大なる社會、廣き世界へ出て事の缺けない做度であります。取も直さず學問を實際の用に立てるの準備であります。記者筆記

（完）



家庭時言

文學士　大町桂月

細君の選擇

器量が好くて、賢にして、誠實にして、優しくして、さッぱりして居て、わけが分つて居て、學問が出來て、琴、生花、茶の湯など遊藝が出來て、裁縫も出來て、家政が上手にて、交際も上手にて、根がよくて、勉强がすきで、そして身体が壯健なれば、これに越したる細君はなけれど、かばかり揃ひに揃ひたる人は、容易に求むべくもあらず。知らず、如何なる點を先にしてか細君を擇ぶべき。

誤れる哉、今の人、妻を娶るに、容貌を問うて、敎育を問はず、敎育を問うて健否を問はず、誤れる哉。色の白きは、七難隱し、容貌の美は、一時伉儷甚だ好からしむるも、元來細君は床の間の飾物に非ず。且つ色は衰へ易きもの也。目についた細君、やがて鼻につくべし。女房は家のかためとかや。先づ第一が人柄なり。もとより上流社會、中流社會、下流社會と、階級の異なるにつれて、細君の選び方にも差異あるべけれども、いづれの階段に通じても、人物氣質が第一の要件也。一生苦樂を共にするものなれば、人となりが氣に入らずば、終生不平は絶えざるべし。

第二は、敎育藝能也。上流社會ほど、益々之を要す。中流社會にありても、ひと通りの普通學の知識ありて子供の一寸した質問に窮せぬだけの素養なかるべからず。良人が手紙の代筆が出來るだけの文筆ありたきもの也。琴は彈けずとも、せめてひと通りの裁縫は出來ざるべからず。

第三は、身体の健康也。細君の病身なるは、火鉢の火の消えかゝりたるが如し。家庭何となく寂しく、また不愉快也。概して美人は、身体虛弱也。首細く、耶こまかなるは、肺病患者の特質也。如何に美人なればとて、肺

てばかり居て、丸かみ顔のみして居ては、一家の主人をはじめ、一家中の心配絶ゆる時なかるべし而して虚弱なる体質、子に遺傳して、子も虚弱に、折角蝶よ花よと育てし愛兒も、動もすれば風前の露と散る。細君が体質の虚弱、一家の不幸を來たすこと此の如し、女子たるもの、体育を重んぜざるべからず。殊に注意すべきは、親の肺病は、必ずしも子に遺傳せざれども、恐るべきは癩病也。或は細君其人は遺傳の影響を被らざるとあるべけれど、子か孫かに遺傳す。掌上の珠とめづる愛娘、惡しき病の遺傳をうけて、折角の美形をくづす。親たるものゝ悲歎は、如何ばかりぞや。

第四は容貌也。容貌はさまで美なるを要せず。唯十人なみにして、品格あらば、十分なるべし。中流以上の妻としては、容貌の美なるよりも、氣高きを尚ぶ。顔美にして下品なるは、見劣りのせらるゝもの也。如何に美服をつけて、勿体ぶるとも、品格なければ、直ちにお里が知れて、人の前に耻かくとあるべし。良人たる者、好色家にあらずして、顔よりも心に懸れたるものならば、無鹽の如き顔色にても、情好は密なるべきも、妻君自から其醜を耻ぢて、人前に出づるをいやがるやうにては家婦として交際上不都合多かるべし。

終りに臨みて、余は特に中流程度の人士に告げむとす。中流程度にありては、さまで財産あるに非ず、細君がよくしまつて居る事が肝腎也。而して富家に贅澤にそだちたるものは、恐らくはしまると能はざるべし。士族などのしつけある家にそだち、水仕事までした事のある女子が、中流程度の細君には必要也。富家の一人娘などは、ちと考へ物也。

日本女子の服裝

改良の聲は、到る處に波及しぬ。改良もとより不可ならず。されど、角を矯めて牛を殺すは非也。在來の短所を改めむとして、折角の長所を沒却し去るは、豈に眞の改良ならむや。

日本女子の服裝、改良の一問題たると久し。近時殊に其歩を進めたるが如し。啻に口に之を説くのみならず、

幾種の改良服既に作り出されたり。今其改良の意見を伺ふに、在來の女服を以て、衛生上、運動上、また經濟上、即ち換言すれば、實用上不便なる者とせるもの丶如し。されど、衣服は單に實用の點のみを以て改良せらるべきものに非ず。

在來の女服は、長き袖あり、又大なる帶あり、これ實用上より見れば、無用の長物なるべし。されど、帶は躰の前後を飾り、其美趣言はむ方なし。日本人は坐わるが常也。而して坐わりたる時に、日本の女帶は、前から見ても、また後から見ても、一種の美趣あり。これ洋服には求むべからず。殊に洋服は後より見て、極めて無趣味なるものなるが、日本の女帶は背部を飾るに適せるものにて、服裝の美を得ること、注意到れりと云ふべし。試に日本をして帶なくして坐らしめよ前面に美趣なく、背面の不躰裁殊に言はむ方なかるべし。袖の美趣あると、帶に讓らず。少女が友禪の振袖は更にも言はず、すべて袖は、歩行の際にも、坐われる際にも、嬌笑を掩ふ際にも、容姿の格好を助けて、其美言ふべからず。勞働の際には、



たすきがけすればさまで不便なるものに非ず。殊に日本女子は脊短ければ、筒袖にては、益小さく、且つみすぼらしく見ゆるものなるが、袖ありて、よく此缺點を補へり。女服の袖は、日本女子の躰格に相應する點に於て、用意到れるものと云ふべし。袖や、帶や、美の點に於て、また間然する所なし。殊に胸のあたり、股のあたり、肉躰の形をくづさぬまでに、しまりて掩へる處、ふは〳〵したる洋服に比ぶれば、其美遙にまされり。

之を要するに、日本の女服は、美の點に於ては、殆んど其極に達せり。決して改良するを要せざる也。

されど、美をはなれて、他の方面より見れば、缺點も亦少なしとせず。歩くに不便也、勞働に不便也、又儀式には、少しなまめき過ぎたり。されど、儀式服としては、古の官女の服裝の如きものを參考して、一種の服をつくりて可也。女學生が學校に通ふには、筒袖に海老茶袴の方が、歩行上にも、また經濟上にも、頗る便利也。長袖緩帶を要せざる也。

日本女子の頭髪

衛生上より見れば、日本女子の髪の結ひ方は、弊害あるべし。されど月に二三度も髪を洗へば、さまで衛生上の害あるものに非ず。束髪は餘りに沒趣味也。脊の低き日本女子には、やはり在來の結髪がよく似合へり。日本の結髪は、實に髪のお化粧の美を極はめたるもの也。元來束髪は、帽子を被ぶるより制限せられたる一種の髪の形也。帽子を用ゐざる日本女子が束髪にするは、鵜の眞似する烏の類也。島田の可憐なる、丸髷の氣高き、日本女子の形に美を添ふると如何ばかりぞや。殊に丸髷が夫ある者に用ゐらるゝも、一種のよき習慣也。要するに、日本の髪の結ひ方は、日本の衣服と躰格とに相應して發達せるもの也。妄りに廢すべきものに非ず。

さは云へ、筒袖、海老茶袴を女學生に勸めたる如く束髪をも女學生に勸めむとす。束髪は美をはなれては衛生上、經濟上、また便利上、益する所多ければ也。

お化粧

士は己れを知れる者の爲めに死し、女は己れを愛する者の爲めに粧ふ。女子の修學時代には、お化粧は不必要也。されど、嫁して後は、少くとも夫の爲めに身だしなみせざるべからず。朝は夫より先に起きて髪を理し、白粉を施し、午後夫の歸宅する前にお化粧して夫を迎ふ、これ決しておしやれに非ず、細君が夫に對するおつとめ也。然るに、人によりては夫の爲めにお化粧せずして、家にある時は容貌をくづし、いざ外出する時となれば、餘計な時間を費して、こて〳〵とお化粧するもの少なからず。かゝる人は、夫の心を喜ばせむとはせずし

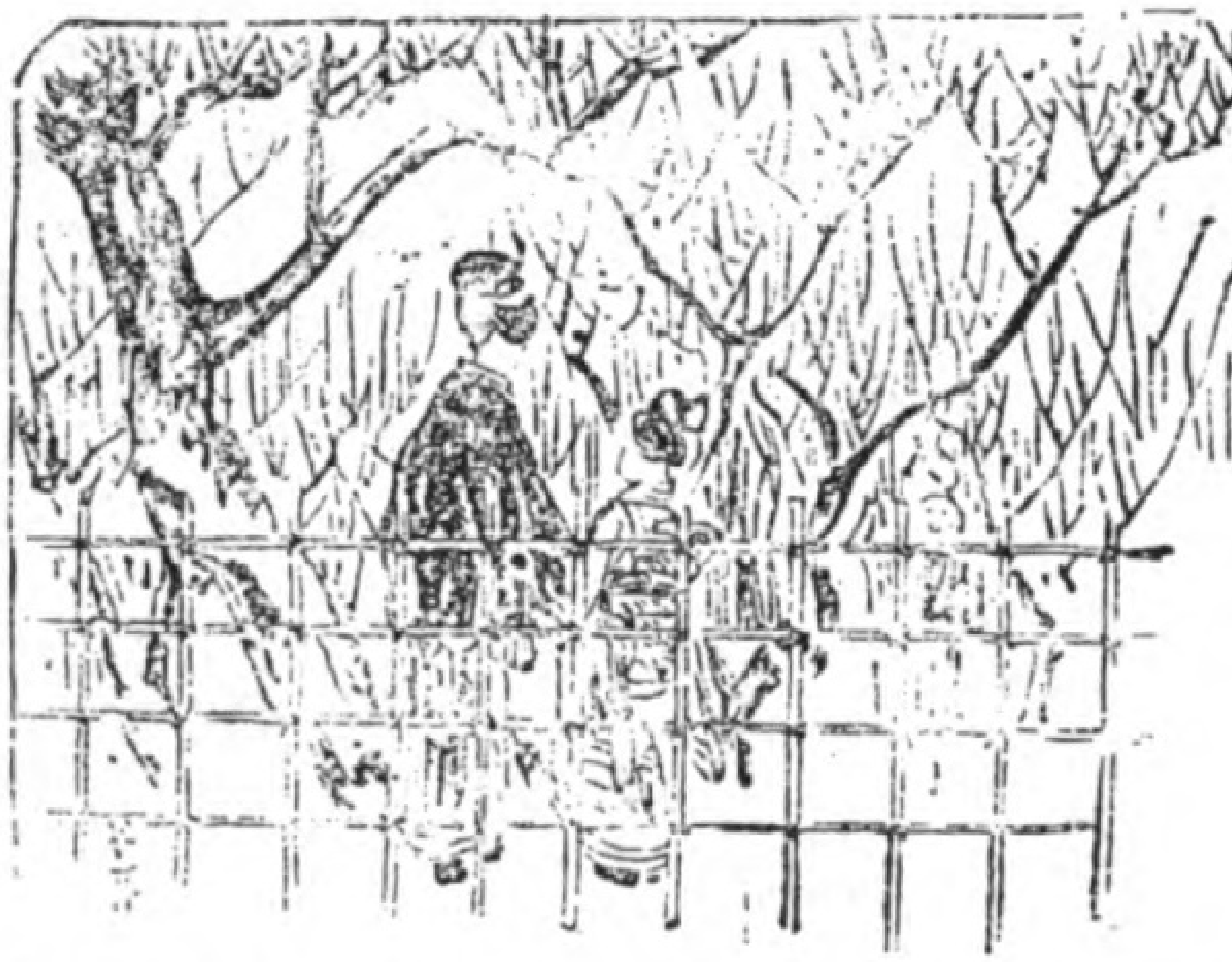
て、路上の行人の目送を贏ち得むとす。不心得も亦甚しといふべし。

質素

衣食住あらゆるものに於て贅澤にはなり易きものにて、一旦贅澤に慣るれば、容易に質素には移り難きもの也。衣服も輕くして肌ざはりのよき絹物を着慣るれば、木綿物きるがいやになるべし。人は成るべく少年の時より質素を守る耳習慣を養はざるべからず。

とりわけて、女子は外形の美を氣にするもの也。衣服をはじめ櫛下駄に至るまで、つとめて流行におくれざらむとす。それも家婦となりて後、財産の許す限りは、其人の勝手なれども、幼少の時は、父母成べく注意して贅澤の味を覺えしめざるやうにせざるべからず。世には愛に溺れ、また人に誇らむとて、身分不相應に我娘をかざり立てゝ、よそにつれゆくもの多し。これ眞に子を愛するにあらずして、子を害ふもの也。

女學生の如きは、最も嚴に質素を守らざるべからず。絹物を用ゐざる方が、却て高尚に見ゆるもの也。然るに、學校に行く時だけ質素なる風をなすも、家にかへれば、思ふ存分贅澤をつくすもの少なからず、何ぞ思はざるの甚しきや。



夫婦の愛

元來愛情と兄弟分なる嫉妬を、七去の一條件に數へられたりし東洋の婦人こそは憐れなれ。夫婦を結びつくるものは愛也。夫は婦を愛せざるべからず、然るに其愛情こまかなれば、人之を鼻たらしと譏るは何事ぞや。婦は夫を愛せざるべからず、而して夫を愛すれば愛する程、やき餅の念も高まらざるを得ず。之を以て離縁せらるとは、壓制も亦甚しからずや。

夫が内をよそに放蕩するは細君を愛せざる證據也。然るに日本の婦人は、平氣な顔して、めかけ、手かけをこしらへるは男の働なりとて、毫も之を咎めざるもの少なからず。かゝれば男益々増長して、勝手次第に不品行をなして憚からず、社會の風俗益々頽廢す。畢竟するにこれ日本婦人がおとなし過ぎて、餅焼やかざるに由る也。

女子は元來おとなしきを尙べども、愛には熱せざるべからず。焼餅やくは、愛に熱する自然の結果也。わが滿身の愛をさゝげて、夫に盡すに、夫たるもの、我をよそにすれば、角を出して可也。これ決して女子の不德に非ず。

夫婦の不和

家庭に於ける第一の幸福は、夫婦相和すると也。之に反して、夫婦相和せざるは、家庭の不幸の最も甚しきもの也。夫婦喧嘩は犬も喰はずと云へり。而して夫婦喧嘩は餘り抑れ過ぎて起るもの多し。所謂痴話ぐるひのこうじたるもの也。夫婦の間、如何に相愛するも互に敬意を失ふべからず、婚禮の時の心持ちを失ふ莫れとは、古人の既に戒しめたる所也。

されど、概して夫婦の不和は、貧乏に基づく。家計不如意にして困苦するの餘、あゝ我夫にも少し働あらばと思ふ心、胸にきざせば、亭主はもはや難有からず隣家の細君とても、同じ人也、われに優れる器量あるに非ず、然るに家にありて婢女にかしづかれ、出づるには抱へ車あり、芝居のかはり目毎には、必ず見物し、衣服の流行にはいつもおくれず。何ぞ仕合せなるやと、他を羨むにつれて、我身の果敢なきを慨き、我身の果敢なきを慨くにつれて、夫の働なきを恨み、夫を夫のやうに敬まはざれば、夫も心持よろしからず、かくて夫婦の愛情冷却し、やゝもすれば、犬も喰はぬ喧嘩を演出す。げに貧は家庭の不幸の根本也。

女子は、概して他を羨むもの也。然れども、上を見れば限りなく、下を見ればまた限りなし。こゝはひとつ悟りを開きて、清貧に甘んずるだけの覺悟なかるべから

ず。貧故に夫に愛想つかすは、畢竟するに、細君の素養なきを證す。夫榮ゆれば、之を愛し、夫貧なれば、之を疎んず。一生の苦樂を共にすべき細君としてはたのもしからぬ人哉。

女子食料の改良（下）

醫學博士　三宅秀

何故に女工の食料に改良を致したいかと云へは吾邦の人は男女共手先の技に巧みにして特に女子の手技は遙かに歐米人の及ばぬ程巧妙であるから西洋にて、汽力を原動力と爲す處を人力にて精巧な細工をする其原動力たる男女の食量は男子の扶持が米五合で女子は三合扶持と云ふことに昔から定まつてありまする現今陸軍の兵士の食は一日精米六合と云ふことになつて居る、既に男子の方の食は一合殖えて居るのに女子の方の食量と云ふものは殖えて居ると云ふことを別に耳にして居りませぬ、そこで昔の定めて見ると云ふと、女子の食量は男子の食の五分の三であるからして男子の食量より五分の二を減じたものになつて居る、此男女の食量の差と云ふものは實に道理に適はないものであると思ひまする、其道理に叶はぬと云ふのは先づどう云ふことかと云へば、男と女の身體の大小を根據として見ても女子の體重の男子の五分の一を減じたもので即ち男の體重の五分の四が女子の身體の平均の目方である、然らば男子の食が五合ならば女子の食は四合と極めたならば幾許か道理に近いやうに思はれるが、男子が五合で女子が三合と云ふのは餘り其削り方が激しい不條理な極め方であると考へる、そこで女子の食量をどう定めたら一番道理に適つて居るかと云へば男子の食量の五分の四では未だ充分でない、總て小兒でも女子でも成人の男子より食物を比較的に餘計與へなければならぬ筈のものであつて子供は成長する爲に食物を餘計やらなくてはならぬし、女子は身體を温める爲に餘計に食物を與へなければならぬ道理のものである、から其道理に依り男子の食量を五合に据置くと假定すれば

女子には四合二勺扶持にして四合と云ふ外に尚二勺を増加したものが一番適當なる學理上に適つた所の食量だと思はれまする、此食量の標準は總ての女子に當嵌て是非四合二勺宛食はしめやうと云ふ意味ではありませぬが多人數の女子が起臥飲食を共にして居る時例へば寄宿舎の生活などをして居る者は學校の生徒にもせよ、又勞働工女などにもせよ之を養ふ所の食量に標準を立るに方つて舊來の仕來りの如く女三合の割合で扶持米を計算するやうなことがあつては今日女子の身體を強健に仕立てゝ行かうと云ふには甚だ不適當に思ふ、故に米穀の扶持割をして行くならば前に述べたる女子四合二勺と云ふ計算をして行くが宜しい若し其中の食物を米三合を食ふとすれば後の一合二勺だけの價は之を菜代の方へ廻して行つてさうして肉なり何なり菜の方へ用ひて滋養物を又取ると云ふことが出來る話で、今日の如く男五合女三合の割合で行けば年中精進物ばかり食て居らねばならぬと云ふやうな傾きになるから、之を改良するのには先づ其標準たる所の米の方を殖して其不用の部分だけを菜代の方へ廻して行くと云ふことにしたならば必ず良結果を收めることが出來やうと思ふ、丁度陸軍の方の兵などに於ても精米六合は喰はぬければ其米代の一部を以て菜代の方へ廻して滋養物を取つて行くと云ふやふな譯であるから、相當に肉食も與へ主なる食物は米として米の量を増すと云ふことを考付いたのであります、

さて女子の地位階級の高下を分たず前に述た所の道理に基いて穀食と肉食とを程よく混ぜ食して、靜座して居る人は成べく運動を勸めて靜座の時間を減少するやうにし勞働に從事して居る工女の如きは又勞働の過度を防いで今の食量を用ゐて居つたならば、體格の増長を見ること必ず十數年の中には著しく其効驗が見えるだらうと思ひます、尚此外にも勞働者其他貧困者に對して極く經濟的に滋養のある食物を極めて廉價を以て調理して勞働者等に供給すると云ふ事柄は外國の方では貴婦人達の仕事になつて貴婦人が慈善事業として自ら手を下して働いて、さうして貧困者勞働者に對して

廉價な滋養食品を頒ち與へると云ふことをして居る、其事業は一方に貴婦人達の靜座して居る時間を減少して身體を動かさする一の利益となり又一方には貧困者勞働者の如き者の廉價にて美食を得ることが出來ない者に對して大なる慈善になつて、さうして上下一般に女子の身體が丈夫になり工業は益々進むで行くと云ふ樣になつて大に國の富を增す基になるから貴賤共に力を併して食料の改良を企つる方法手段を謀らなければならぬ、と思ふ而も之れは女の職務になつて居ますから、これだけのことを女學世界のやうなものに出して見やうと思つて一言附け加へました、(完)



中等社會の家事經濟

△　△　△

●家計の獨立

福澤翁は言はれたり。一家の臺所を完全に取賄ないて行く人あらば一國の政權を任せても差支はなしと。一口に臺所、一口に世帶といへど是れを完全に取賄ふて行くは中々容易の事にあらざるなり。大小の差こそあれ一家の經濟は一國の經濟と同樣にして世帶の操り廻しは大藏省の出納と同じく入るを計つて出づるを制し、無益の出費を省きて生活上に餘裕を作るなれば唯一見して容易なるが如くにして其實は又これ程むづかしきものはあらず。日本全國を總計して八百萬の戶數ありとせば世帶の數も又八百萬ある譯なり。而して此の八百萬の世帶が相集まつて日

本といふ一國を組織するものなれば、個々の世帶が完全に取捌かれて行けば日本全國は期せずして富裕の域に至るべし。一家の經濟にして一日に十錢宛の冗費を省く事を得たらんには全國總計して一ケ年に三億萬圓の蓄積を成し得べく、政府の經常歲出二ケ年分を剩し得るの勘定とはなるなり、而して此の十錢は舶來卷煙草二箱の代に過ぎざるものと思へば家事經濟の遣り方を考ふると考へざるとに依つて生ずる一家一國の利害盛衰これを日々に試み、一と月と積り一ケ年に通算せば驚くべきの相違とならん。一家の世帶を持つの考へこそ實に愼重を要すべき事にして主婦たる者の責任も又大なりといふべし。偖て然らばこの臺所の持ちやう即ち一家の經濟は如何にして取賄ふべきや。まづ中等社會の經濟向より言はん。

一と口に中等社會といへど其區域は中々に廣し、官吏、會社員、自作農家、中等の工商人、各種の技藝家等を始めとして中通りの資產ある家々はすべて此の中等社會を組織する處ろの階級にして上は一ケ年に數千圓の所得ある高等官吏より下は月給二十圓の小吏に至り。所得稅の百圓近くも納むべき富人より僅かなる資本に衣食する小商人に至るまで總て中等社會の範圍に入るべきものなれば、所得の多少に隨ひ、家族の多寡により、其の家の經濟事情は千種萬樣の差あるべし、されど一國の生命となり土臺となりて國家の命脈の繫かる處ろなれば。譬へ其の所得に少なるものありとて決して侮るべからず。月給二十圓の小官吏なればとて一家を組織して獨立の生計を營む上に於ては年俸幾千圓の國會議員、乃至政府の國務大臣と比較して其の間に寸分の差あるにあらず要は唯其人の家計の獨立如何に存ずるのみ。

洗濯屋の主人も、巡査も、國務大臣も大統領も同じくミストルなりとは米國の諺なるが、日本とても又其の通りなり。今日十圓內外の月給に衣食する者とても一家の經濟獨立せば國家の爲には喜ぶべく賴むべきものなり、之に反して數千圓の所得ある大紳士なりとて家事經濟不行屆にして月々の生計に不足を生じ借財の爲め

に苦しめらる丶ものありとせば、残念ながら其人は國家の經濟上頼もしからぬものと言はざるべからず。されば國家の生命として中等社會に尊むべきは主として其人の家事經濟の獨立に在りと知るべし。

●現今の中等社會

世の進むに伴れて中等社會の生活は日増に困難となれり。生活の困難は都會も地方も一般抑なべての事なれども殊更に都會は地方に比して一段と困難の狀態あり。まづ官吏の上に就て見るに今より十四五年前、即ち明治二十年頃月俸五十圓も取りたる人の生活は中々裕かなりしものにて月に三十圓もあれは今日六七十圓以上の活計を成したるが如く、勿論當時の生計は今日の如く衣食住の外なる雜費に費やす所ろ少かりしならんが、變動の



重なるものは家屋の値上げと衣服の贅澤になりしと食物の價の一般に騰貴せしと之れに伴ふて食料の贅澤に進みたるが重なるものにて其他は有形無形の社交上に費やす處ろ。交通、見聞、並に交際、及び躰面の修飾、衛生思想の進歩等より來れる種々雜多の費用は必竟社會の進歩に伴なふ税金ともいふべきものにして今日百圓の收入ある紳士の生計は多く困難を極めつ丶あるに拘らず却て從前五十圓の所得ありし人の有福に暮らしたるがごとし、而して今日月に五十圓の收入ある人は、官吏としては普通の高級者たるべく又商人にては純粋に一ヶ年六百圓の利益あるは一と廉の財源なるべしされば都會に於て中等社會といへばまづ此の邊を標準として家事經濟の實況如何を見るべし。勿論一と口に家事經

濟といへども其家の方針の取方如何にも依ることにて、諸事積極主義を取るあり、萬事消極を主とするあり、世間躰を張るあり、內端にするあり、又家族の多き家庭あり、少きあり、老人の奉養に重きを置かざるべからざるあり、小兒敎育に專らなるあり。其の趣は種々なりと雖も要するに一家の經濟は其の取賄ひ方の如何によりて立派にも成り又困難ともなるなり。今家族の比較的多き家庭に就て經費の實例を見れば大凡左の如し。

▲家族七人、(主人、主婦、老人、小兒三人、十歲、七歲、三歲、下婢一人)

◉經常費

八圓	米代
三圓五十錢	魚鳥獸肉及鷄卵牛乳代
三圓五十錢	蔬菜乾物代
三圓五十錢	味噌醬油薪炭其他
十圓	家屋料
八拾錢	新聞雜誌代
二圓	下婢給料
二圓五十錢	兒童二人敎育費及小遣
二圓五十錢	車馬交通費郵便其他
三圓	主人交際費及家常小遣

〆三拾九圓三拾錢

◉臨時費

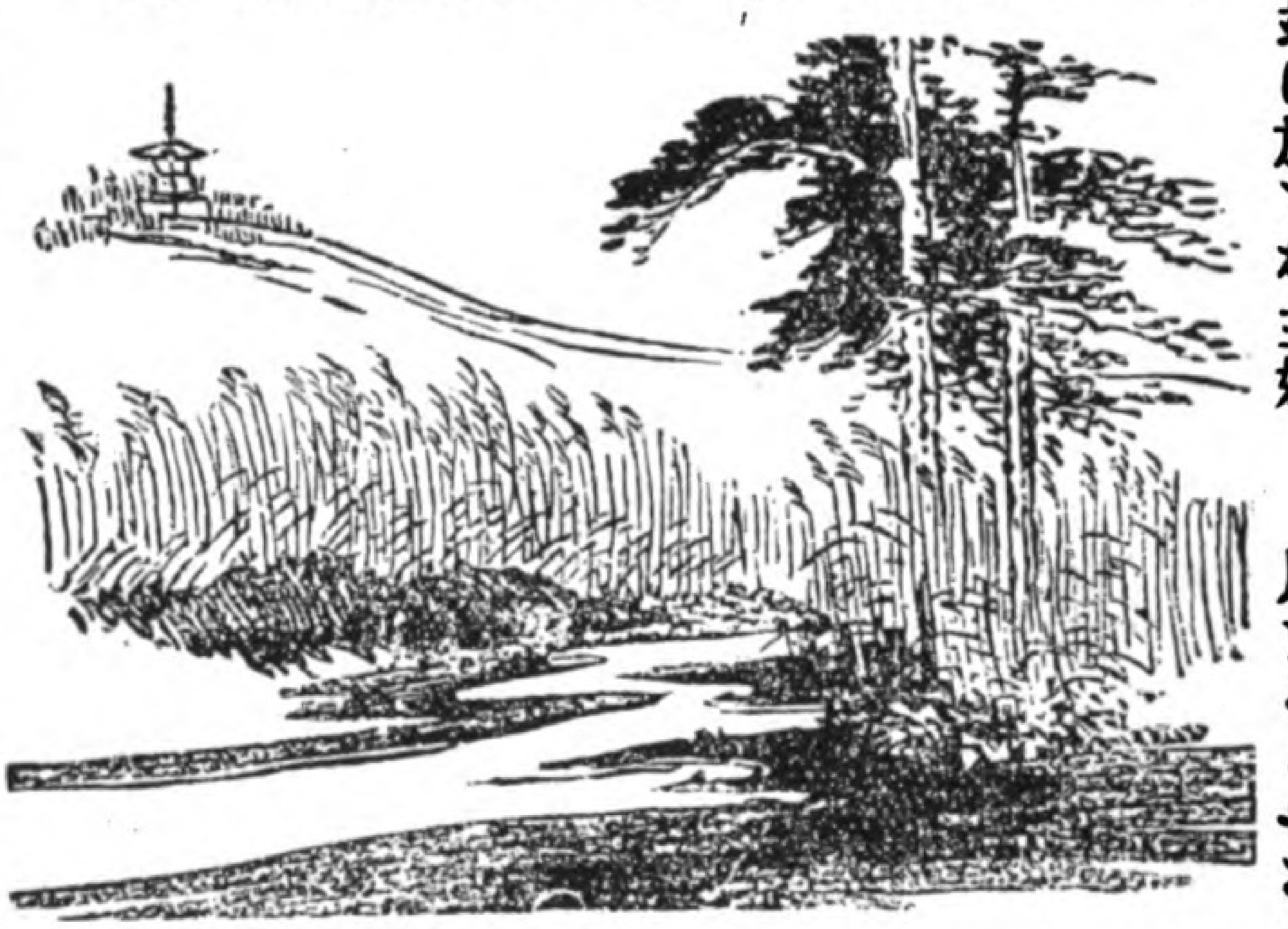
五圓	衣服新調及修繕費用の月割
二圓	履物、傘、手廻、家具等の新調及び缺損補充修繕
二圓	醫藥、遊覽、旅行、慈善、寄附其他臨時費用の月割

〆九圓

合計四拾八圓三拾錢

右の計算は十分といふにあらざるも、身分相應の體面を保持し行くに差支なきやうの活計方にて餘義なき費用の外は成べく切り詰めたる主義を取り冗費を省きたる上の計算なるが。この內にて主婦が經濟上の手腕を顯はす處ろは臨時費にあり。それ一年四季に亙る衣服の新調(譬へ二季にても)は家事經濟上の一大項目にし

て若し誤つて猥りに時の流行に、かぶれるが如き事あらんか主人公が一揃の衣裳新調費の爲めに一ヶ月の收入を擧げて消費し盡す事なしとせず。玆に於てか主婦なるものは成るべく保守的思想を以て衣服の撰擇をなし、季節の移り變りに向つて無益の失費を爲さゞるやう注意せざるべからず、一人一領の衣裳に平均二圓を要すると假定するも五名の家族には十圓を要す之れを上下二枚づゝとし、更らに裏地、内綿に要する處ろあり其他帶あり、羽織あり、尙帽子、履物の如きも又季節の移り變りに多少の用意なかるべからず。衣服身の廻りに就て經濟の考を置かざるとは家計上に於て容易ならざる影響あるべし、是に於てか心ある主婦は努めて儉約の主義を取り、なるべく新調を扣へ洗ひ張りにて濟ませるものはそれにて濟し。一年用ひて廢物に歸せしむるものを二年も三年も活かし用ゆるを世帶持のよき主婦とはいふなり盖し衣服の調製は家政學上の一大要目として是れを活用するとせざるとは世帶の上に大なる損德ありと知るべし。



以上は臨時費に就ての經濟上の一端を述べたるものなるが、臨時費の經濟は困難なるやうなれども其の實は左程むづかしきものにあらず家婦が年來の心掛を經濟的に働らかせば經驗上次第に巧者になるものなり、然れども經常費の上に就て萬遍なく經濟して行くといふ事は易きに似て實はむづかし。若し主婦の技倆に對し臨時費の經濟に一等賞を與ふべきものとすれば、經常費の經濟に就ては銀牌若しくは金牌を與ふべきものならん。それ每月消費し行く米代、魚菜、薪炭、鹽噌其外の小遣は日常の生活上に必須ものなれば是れを節儉し行くは困難なると共に又非常に有益の事な

り家賃の如きは家族の健康上より慰樂上より且又世間の體裁上より多少價高きを撰まざるべからざるの必要ありとするもそこに經濟上の考へを以て撰むと撰まざるとは中々に少なからざる損得にして主婦が一段の注意を要すべき所ならん。世には一隨に儉約儉約と稱して衞生にも體裁にも拘らず陋屋に蟄居して附合せず交際せず粗衣粗食に甘んずるものあれども此の如きは決して家事經濟の目的にあらず。衞生、安慰、體裁、の三者は即ち身體の健康と精神の快樂、社會上の地位とを兼ね備へたるものにして人生の希望を達するの要素、即ち人生進歩の階段なれば之れを度外に置くが如きは野蠻流義にして決して文明の家庭にはあらず。家事經濟の要は如何にせば美はしくして健全なる家庭の組織さるゝかを目的とするものなれば。何事も右の三者を標準として設計せざるべからず、其の食料は價の廉にして實質の善良なるを撰び。其の家居はなるべく贅澤を避けて衞生に叶ひ、日々の小費はなるべく無益の物を省きて有益且つ必要の事に遣ひ拂ひ、知人の交際、親類の附合等も又なるべく虚飾をさけて眞實を旨とし、日新の書籍を購求して家族の知見を開き兒童の教育を勵ます等諸事萬遍なく行渡らざるべからず、されば其の必要欠ぐべからざる費目の片々に就て月々何程かの經濟をなし行くといふは尋常普通の注意にては行ひ難き處ろなり。若し勤めて之れを爲し得たらんには其婦人は實に政府の大臣にも劣らざる器量人にして單に家の爲めに勳功あるのみならず國家社會の爲めにも功勞ありし人といふべし。

素人看護法

淑德女學校
講師醫學士　佐藤恒久

舊臘より引つゞき素人看護法の講述を致します前回には皮膜即ち皮膚と粘膜のお話を致しましたが、今回は分泌腺と云ふものに就いて、少しくお話を致さうと考へます。

分泌腺の話

人の身體の中には、分泌腺と云ふ機關がありますが、此の機關は、什麽云ふ役をするかと云ふと、是は身體中を循環して居る血液を、或る一種の物質に變化さするのである。即ち物質とは、或は水の樣なもの、即ち液體となることもあり、又脂肪の樣な少しく固つて居るものとなることもあります。然うして其變化して出來た所の物質は、各種類に依つて役目があるのであります。是等の物質を腺の中で製造し、之を誘導管に通じて、所々の必要なる場所に注ぎ、或は之を體外へ押し出したりする關機が種々ありますが、其を總稱して分泌腺と云ふのであります。分泌腺の最も大なるものは肝臓で之は腹内に在り食物中の脂肪を消化さするに必要なる、膽汁と云ふ液躰を製造する所であります。上圖の如く此の膽汁は肝臓から誘導腺を通つて、一旦膽嚢と云ふ嚢の中に溜り、然うして入用の時に腸に輸送せらるゝのであります。肝臓の次に太なる分泌腺で必要なるものは、膵臓であります。是も矢張腹内で胃の後の方にありまして、是は蛋白質を消化さする爲に必要なる膵液を製造する所であります。其外消化の爲に必要なる分泌腺は、唾腺即ち唾液を製造する所であります。之は口の近邊にありまして、即ち左右の耳の前の所に大なのが一つあり、咽喉の所に二つ。舌の下の左右に一つと、其數が總計六ヶ所あります。之は什麽な役目を持つて居るかと言ふに、啻口中を潤す爲のみではなくして食物中の澱粉質を消化さするに、必要なものであります。（御承知でもありませうが、脂肪とか蛋白質の樣なものは、主に動物性の食物の中に含むで居り、澱粉質は、主に植物性の食物中に含有して居ります。）故に米を嚙むで居りますと、甘味が出てまゐります。是は澱粉が唾液に混じて糖に成るのであります。凡て食物は其儘では役に立たぬものでありまして例へば澱粉質でも之に唾液を混じて糖に爲て置きますと、其糖分は血液の中に入つて、身體の營養を助くる樣に



なるのでありますからして、假令葛の粉でも充分咀嚼して、唾液と混ずると云ふことは、大切なる事であります。

以上述べました所のものは、分泌腺の大なるものでありますが、尚ほ其他に乳腺は即ち婦人の乳房から出る所の所謂乳汁と言ふ液體の製造場であります。是は血液を乳汁と成し、乳房から輸出すると言ふ機關を備へて居ります。又腎臟も分泌腺の一つでありますが、是は尿を製造する所でありまして、別段身體營養の物質を製造するのではありませぬ、けれども、是は體內に永く停滯して居てはならぬ所の穢物即ち尿を製造し、且つ其の排泄作用を司るのでありますからして、爲す仕事は前述べた分泌腺と同樣であります。又汗腺と申して汗を製造する所があります。是は皮膚の中にありまして、腎臟と同じく、體內の穢物を汗に爲て體外へ排泄する作用をも司つて居るのであります。其外皮膚には皮脂腺と言ふて、皮の脂、即ち皮膚の表面に着いて居る、脂肪を製造する機關が皮膚の中に備つて居りまして、絶えず分泌作用を司つて居ります。それですから、今石鹼で手を洗つて、脂肪を除つたと思つても、一二時間經つと又脂肪が出て來ます。而して是は何の爲であるかと云ふに其分泌した脂肪で、皮膚を軟くし、且つ滑にすると言ふ役目があります。それからまた粘膜腺と言ふものがあります。是は口中とか、鼻の孔とか言ふ樣な、凡て粘膜で被はれて居る部分にありまして、粘液を製造して、是も絶えず分泌して居ります。是は口中を潤したり、眼の結膜を潤して置く抔の役目があります。又其外に涙の製造場がありまして、其を涙腺と稱へます。斯樣に種々の液體なり、固形體なりを製造し、且つ分泌して居るものをすべて分泌腺と申します。次は運動機の事に就いて、其概略をお話致しませう。

運動機。……是は身躰が動くに就いて必要なる種々の機關を總稱し最もでありまして、決して一種類のものではありません。然らば什麽言ふ物質から運動機は成立つて居るかと言ふに、

第一、骨及び關節。

第二、筋及び腱。
第三、運動神經。

先づ此等のものでありまして、此の三種の物質が協力して働きますると、手足が曲つたり、動いたりするのであります。先づ右の順序で説明すると、

骨及び關節であります。………骨は躰内に二百五十個ありまして、其の形狀は大小種々あり、又其質は軟いのもあり、或は强く固つて居るものもありまして、多少堅さが異つて居ります。而して之は如何なる役を爲すかと言ふに、

第一、骨が無かつたならば只身躰が軟いばかりて、グニヤ〳〵した不都合なものてありますが、骨がありますと、其爲に躰が堅くなつてシヤンとして居る事が出來るのてあつて、つまり、骨は身躰の形を作るに必要なものであります。彼の蚯蚓や、蛭の樣な動物は、人の身躰程に堅固でありませんからして、其を踏み潰せば、扁たくなつて仕舞ひますが、人間の躰は人が踏むだ位では、なか〳〵扁たくなりません………是即ち骨の第一の役目であります。第二の役目は、筋の附着點です。(筋とは肉を言ふのであります。)即ち筋が骨の或る部分に附着して居て始めて活動を爲すのであります。第三の役目は、人間の生活に必要なる諸機關を包圍する事であります。即ち腦髓は實に大切なるものでありますが、之を被包して其の安全を保つて居るものは骨であります。又心臟や肺臟なども、人間の生活上最も必要なものてありますからして、是等は背胸の骨を以て包圍して居る斯樣に骨は大切なるものであります、けれども、骨と言ふ堅いものが只一個のものてありましたならば、恰も木彫の人形の樣なもので、動く事が出來ない理屈でありますが、それでは不都合であるからと言ふので、二百五十個の大小の骨を集めて、自由に折り屈みの出來る樣に爲て拵へてある、然し只其二百五十個の骨がペラ〳〵になつて居たり、又纏つて居ても、其結合點が動かないては、矢張無効でありますが、之には關節(即ち俗に節)と言ふ續き合せ方があつて、之は所に因つて、其形は種々異つて居りますが、先づ二個なり三個なり

の骨の上下繼ぎ合した所が、圖の如く一方が圓く玉の様になつて居り、一方は窪むだ形になつて居ります。斯う言ふ關節でありますといふと、容易に外れる事は無いけれども、併し惡くすると是でも外れないとは言へません。而して此の關節の接觸面が動く度毎に、骨がしたり、又擦り合つたりせぬ様に、他の部分よりも、一層滑かに構造て居り、且つ此の部分には、卵の蛋白質の様な極く滑なる液躰が分泌して居りまして、假令骨と骨とが擦れ合つても、少しもコツ〳〵しないやうな仕組に成つて居ります。其外部を靱帶といふ強い皮で堅固と相方を繋ぎ合して容易に外れないやうに爲てあります。是れ即ち骨が關節に依つて一の骨格と云ふものが成されて居るのであります。

言語の練習

山田霞筑

淑女とか佳人とか言はるゝ人ても、其話す言語が野鄙て聞き惜い時には忽、美の特性を損する。流暢て理窟に合ふた言語を使ふ人は假令其容貌は醜くいとも其心の中は如何にも涼しく高尚な人であるといふことが想像されるものである。して見ると女德の一として言語ほど大切なものは無からうと思はれる。

一躰是迄、日本語が立派にならなくッて、又今でも立派にならぬ原因といふものは家庭の練習が行はれなかつたからである。昔の武士が比較的立派な言語を使ッたといふことは、彼等は嚴格なる主從の關係を有ッて、そして儀式張つた場所に出るし、其一言一句は非常なる關係を有ッてをッたから、自然と其言語も正しくなッたのである。從ッて其家庭も平民に比べると矢張幾分か高尚て立派な言語を使ッたといふことは、今日其子孫たる士族といふ階級を見ても分る。然し只比較的立派であッたといふのみであッて、今日專門家が理想とする言語などは到底及びもつかなかつたのである。是も一應の道理あることとで、昔は婦人には學問をさせなかッたので、たとひ武士の家庭でも其妻女は多くは學問のない人てあッたから、夫唱へて婦和するといふ

ことは出來なかッた。そこで表向に使ふ言語と家庭内に使ふ言葉とは多少區別があッたに相違ない。從ッて妻にも子供にも下部にも誰れにも彼れにも能く分るやうな言葉を使ッたに相違ない。誰れにも分る語を使うとすれば、勢、標準を低くしなければならぬから自然と立派な言葉が用いられぬ譯になる。

今の文明の時代でも官吏や學者の家庭では只の平民や商人の家庭に比べると多少學術的の言葉が行はれてをる。然し言語の練習などに注意して家族團欒して話しをするなどいふことは露ほども無からう、夫故に高等女學校の生徒や、中學校の生徒などが學校で立派な言葉を覺えても家に歸れは何の効もなく敎育されぬ人の言語と少しも違はない。全體今日の父兄たる人に言語の必用などゝいふ觀念のないのは當り前であつて、致方がないから、未來の賢母たるべき今日の淑女諸君には充分此邊に注意して兒童の時から言語を練習させることを充分にやッて貰はねばならぬ。さうせなければ日本語の發達進歩は到底覺束ない



社會の上から見れば直接間接に言語の改良に功を與へたものは交通機關であらう。如何なる僻遠の人でも多少文明流の言語を覺えるし、又多少異ッた人の言語に接するから大に自分の言葉を顧ることになッて言語といふことに知らず／＼注意することになる。然しこのやうな迂遠なる不規則の改良を頼ではをられぬ是非とも家庭の中で學理的に立派な言語を敎へて呉れるも良妻賢母の助けを借らねばならぬ。

近頃言文一致論が大部盛になッて來たが、文章としてはどうか分らぬが言語にとりては實に適切で大有望で

ある。言語を改良するには是より良方法は恐くはあるまい。殊に婦人社會にとりては書くにも言ふにも是より善い武器はあるまい。昔平安時代に男文字女文字といふ區別が有つたやうに今日の婦人は言文一致を楯にして男子の文と競爭する位の勢を有たねばならぬ時勢である。徒に侍り參らせさふらふ體の文が女子の占有としては增々時勢に遲れて仕方がない。假令學校では習ふとしても實際の手紙などは是非言文一致にせなければならぬ。

又言文一致の文例なども續々出てるやうになつたから、何れ會話篇の如きものも出來るだらう。會話の必要は家庭と共に小學校には缺くべからざるものである。小供にむづかしい支那の古事めいた事を敎へるのは愚の極で、小供が話す言葉を其まゝうつしとッても文になるやうに仕向けねば、折角の言文一致の花も咲くまい。青年以上の方言や漢語に凝り固まッた口を直さうとするのは殆と出來ぬ、即小兒より仕立てる外仕方がない。

一二の例を擧げて見やうなら、倒語とても名を付けやうか、茶釜をチャマガと言ッたり、晦月をツモゴリといふことなどは學問さへ出來る人なれば直に其不理窟なることが分かる。從ッて之を直すことも出來るが、習慣の力で立派に分ッて居る人も話してをる。つまり其理窟を知ッて家庭でやかましく言ふ人のないからである。大和地方では大抵の人が體をカダラと言ひ釣瓶をツゴレと言ッてをる。甚しい誤りの言葉ではあるまいか。又三丹地方では過去のことを現在の言葉で話してをる。即ありましたらうといふのをアリマショウといふのである。今後は是非ともこういふ言葉を根切りさせねばならぬ。

又地方の言葉に理窟に合ッて善い言葉もある。それを只聞き馴れぬからと言ッて笑ふ人があればそれは學問のないしるしである殊に婦人社會などには此弊が多い。假令へば關西地方で味噌のことをオムシ(御蒸)と言ッてをる。是は動詞の第二轉(名詞法)を其まゝ名詞としたので正しい言葉である。しかも純粹の日本語で、

味噌といふ語の韓語か何だか分らない言葉と比べて見ると遂に立派の言葉なのである。こういふ風に聞き馴れぬ言葉だからと言ッて一概に笑ふべきものではない。

徳川時代から漢文が流行して後も漢語交りの普通文が盛になッた爲通例の談話の上にも漢語は中々多數を占めてをる。殊に日本の語法を知らない人は徒に多くの漢語を使いたがる癖があるもので日本語で通ずる語でもむやみに漢語を使うのである假令へば町を通ると言いて充分なるに通行すると言つたり作ると言つて足りるのを製作すると言はねばならぬやうに思ふことてある。是は日本に立派に語尾變化を有ッてをる語があるのに無理に漢語にするのである。そして是が日本語の發達を妨けた有力の邪魔物である。これ餘弊で中學生徒などが作文とするときに書を讀むといふべき所を書を讀するなど、書くことが間々ある。言文一致にすると此弊が大に減じて面白いのである。



國力を盛にするといふことは大抵の人が分ッてをるやうであるが語力を盛にするなどいふことは少しも頭に浮ばない。日本も列強の仲間入りをしたのであるから英佛獨の如く其言葉をも廣く弘めて盛にするといふことを謀らねばならぬ。此點に就いては日本語法を知らぬ外國語一點張りの人は話しにも何にもならぬ。實に濟度しがたい動物と見る外はない。つまり語力を盛にするは個人の言語を立派にし地方々々統一ある語を話すやうになり、從ッて日本國語といふ立派なものを打立てなければならぬのである。悲しいことには今のまゝでは、とても覺束ない。夫故に未來の良妻賢母となるべき今

の淑女諸君の手を借りて大に家庭の言語練習を盛にして貰いたいと思ふのです。

日用輕便料理

春江女史

▲鹽鮭の麹漬　身のよき所ろを細引につくり、麹を酒にてとき、切身にしたる鮭を漬置く事一日間ばかり、後出して麹のまゝ燒きて食膳に供するなり

▲同粕漬　これも鮭の料理中の珍味なり、酒粕の中へ鹽鮭の切身を漬け置き出して燒きて食す二三日頃を尤もよしとす。

▲同から漬　これは一種の平民的料理法にて鹽鮭を適宜に切り、豆腐カラの中へ漬け置く時はよき按排に鹽氣は抜けよき味となるなり。

▲鯛飯　甘鯛を三枚に卸し皮を去り肉を賽の日に切り鹽湯にてさつと煮て水を切り置き米を炊きて右の魚を煮たる湯を能く澄して水加減を爲して炊き出來上りて飯を室に移す時仕上げ置たる魚を半分程飯に交ぜ置き更に飯を盛りて出す時に他の半分を其上に加ふるなり。

▲鮪の獨活ぬた　鮪の肉を刺身よりは稍や厚く短かく切り置き別に獨活の皮を剝ぎ薄く短冊形に切りて若布と一緒に水に浸し若布が軟かになりし時味噌漉などに移して能く水を切り更にわけぎ(ひともじとも云ふ)を短かに切り沸へ湯を懸け味噌を摺りて立てたる芥子を摺まぜ酢にて薄め砂糖少許を加へて右のくさ〴〵を入れ攪きまぜるなり之は鮪に限らず鰯鯔鮹貝のむき身にても可なり貝を用ゐるときは湯煮るべし

▲豚の切肉の煮方　豚肉の脂肪を去り此を細かく切り四五分位に刻みたる球葱に適宜の牛酪を加へて肉と共に鍋に入れ葱の稍や焦色となるまで煎り付け饂飩粉胡椒食鹽等を和して器にて溶き能く攪きまぜ少許の湯にて薄め之を鍋に投じ文火にて四十分間ばかり煮なり。

▲鯖の燒方(西洋料理)　魚類は成るべく新鮮なるものを撰ぶべし鯖を燒くには其大小により一二尾を背より割りて腸を去り其頭と尾とを斷ち切り能く洗ひ水を

切り細かに刻みたる洋芹の若芽に適宜に砕きたるかたパン粉胡椒末及食鹽を混和して魚の腹に詰め二所位糸にて縛り鐵網に載せ肉の毀れぬやう注意して度々反して焼き縛したる糸の焦げ落ちたる頃牛酪、柚子酢を交はるく魚の脊より注し尚四五分焼きて後更に取り小匙一杯の牛酪を添へて侑むるなり。

▲酢章魚　章魚を湯煮て赤くなりし時引揚げ之を薄く削ぎ生姜酢に浸して手にて能くもみ卸し生姜を懸けて出すなり又酢に胡椒を切みて漬け其汁にて前の如く章魚を浸すも可なり。

▲鰈の葛煮　鰈を三枚に卸し両身を小角に切り酒と醤油とを程よく和して之を煮一沸にして肉を取り出し其汁に溶かしたる葛を入れて一寸煮ればトロ〳〵したる餡となるなり之を前の肉に懸け青海苔を火とりて粉にしたるものを懸けて出すべし。



▲蛸の軟ら煎　蛸の足一本に餅米二十粒程入れて湯にて煮るなり又茶を煎して小柄杓一杯を入れて煮るも可なり斯して軟かになりし時更に醤油味淋(若くは砂糖)にて鹽梅するなり。

▲茶碗むし　先づ鰹のだしを拵へその沸立ちたる中へあく抜鹽と淡く醤油を加へて冷し、之に生玉子をよく掻廻して交ぜ(玉子は茶碗三ッに雞卵二ッの割合なり)又たよく掻廻して之を種物の上より懸け茶碗の八分目迄入れ茶碗には蓋をせず蒸すなり但し蒸道具は茶碗数少ければ釜の中にざるをしきその上に茶碗を載せ若し数多きときは蒸籠を用ひて蒸すなり。種ものは生にてよき物は生のまゝにて、又味付くべきもの、湯てるべき物、湯がくべきもの、浸すべき物、焼くべき物は皆下拵をなして茶碗の中に入るべし、其例は(一)鰻の蒲焼、松茸、焼栗、三ッ葉(二)鶏のたゝき、め

じろ、蘿菌、茗荷(三)伊勢蝦、平蝦、松茸、栗、つまみ菜等にて松茸、蘿菌類は煮汁に鹽を薄く加へてザッと煮、鶉はたゝきにて錢の形ほどに丸め一碗に三粒づゝ入れ、めじろは照焼にして入る、魚類は鹽燒素燒にてもよろしく香味は柚子を用ふべし

●味噌汁の部　(季節は春)

▲鯉こく　先づ鯉の膓えら、等を去り、(鯉を料理するには能く注意して苦膽を潰さぬやうに、そつと、取り除くべし。苦膽つぶるれば、肉のすべてが、苦くなりて、食ちふこと能はざるに至るものなり)鱗はひかずして、そのまゝ、三分ほどづゝ、骨ながら、筒切にし、白味噌八分、岡崎味噌二分(常の田舍みそにても)の割合にて、擂り交ぜ、かつをふしの煮出し汁にて、宜き程にとき、能く〳〵煮込むべし。

つまには、蕗のたう、又は、山椒の若芽等を入れて可なり。又、洗ひ味噌汁にするも、淡白としてよきものなり。

洗ひ味噌汁は、岡崎味噌を擂らずして、篩のうらごしにしたるものを云ふなり。

▲若菜と、まんじよとの味噌汁　早春の頃、鶯菜を細かくきざみ、しんじよを、まろく、小さく作りて、赤味噌汁の中に入るべし。

▲白魚と蕗との味噌汁　白魚を一寸炙きて、蕗の出たての、ごく細き莖を摘み、岡崎味噌、または、田舍味噌汁の中に入るべし。

▲蛤蜊味噌汁　蛤蜊を殼ながら、大凡、二時間ばかり水に漬け置きて、能く砂を吹かせさて、後、赤味噌汁、又は洗ひ味噌汁にて、貝のまゝ煮るなり。

碗に盛りて後、生姜の絞り汁を、大抵十滴ほどづゝおとすをよしとす。

▲たひらぎと若菜との白味噌汁　たひらぎは、幅五六分、厚さ一分ほどの、小口切にして、白味噌汁にて煮るべし。さて、椀に盛る前に、若菜を、ごく細かく刻み置きて、ふりかくべし。若菜とは、たんぽゝ、よめ菜、芹、みつ菜等、何にても、香氣あり。又は、一寸苦味あるものをよしとす。

▲蒲鉾と、松露との味噌吸物　蒲鉾は、大抵、幅一分長さ七八分ほどの短冊に切り、これを一椀に十枚ばかり、又、松露のゆでたるを、三粒四粒ほどづゝ入れて、兼ねて、したて置きたる、洗ひ味噌汁を濺ぎ入るべし。

◉清し汁の部

▲結び針嘴魚と、朧ろ昆布との、清し汁　清し汁は、進精料理の時を除くの外は、かつをぶしの煮出し汁に、醤油うすくさしたるものと心得べし。さて、針嘴魚は、先づ、三枚におろし、骨を去り、皮のかたを、表に出だし、結びて、暫時、鹽をふりかけ置きゆがきて、これを、椀の中へ入れ、朧ろ昆布、宜き程に、つまみ込みて、其上より、かねて、加減し置きたる、清し汁を濺ぎかくべし。

つまには、木の芽、少しを入るべし。



▲あいなめと、蓴菜との清し汁　先づ、鱗を、よく〳〵去りて、片肉づゝにおろし、よきほどに切りて、一寸鹽をしてゆであげ、蓴菜は、なまのまゝにて。醤油加減よくしたる、清し汁の中へ入るべし。

▲寄せあいなめと、獨活との清し汁　あいなめを、三枚におろし、毛ぬきにて、小骨までを、能く抜きとり、皮つきの肉を、細く切り、これを、鹽水に、十分ばかりつけ置き、さて溶きたる葛に、鶏卵の蛋白を入れて、よくかき廻はし、其中へ、切身を入れて一つ〳〵に固め、竹皮の上に載せ蒸しあげたるを加減したる清し汁の中へ入れ、獨活を、短冊に切りあしらひて出だすべし。

▲寄せ烏賊の清し汁　寄せ烏賊も、亦、寄せあひなめのごとくして、製して可なり。

▲たゝき烏賊と、穂蕨との清し汁　烏賊の皮を去り、能

く洗ひて、二挺の庖丁にて、能く〳〵たゝき、繋ぎのためには、他の魚の身を入れ、擂鉢にてすり、これを、小さく平たくまろめて、ころも無しに、油にて揚げ、椀の中へ、二つほどづゝ入るべし、蕨は、桶の中へ入れ、其上へ灰をかけ、又其上より、熱湯をそゝぎ、蕨の浮きあがらぬやうに、板などにて壓し、一時間ばかり置きて、取り出だし、水にてさらし、穂ばかりを摘みて、よきほど加ふべし。

▲蛤のむき肉と、葱との清し汁　これは、製し方に別段むづかしき事無し、たゞしむきみは、餘り、長く煮るべからず。長く煮過ぐれば、かたくなりて惡し。

▲むき蜆と、淺草海苔との清し汁　むき蜆も、むき蛤と、格別かはる事なし。但し、淺草海苔は、汁を椀に盛りて後、あぶりたるを、揉みかくべし。

▲むき蛤と蜆との清し汁　これは、鰹魚節の煮出しを、能くこしらへて、燒鹽にて加減し、土筆の頭ばかりを摘み入るべし。淡泊として、酒肴などには、至極よきものなり。

▲菜と半片との清し汁　これも、大抵ざつとしたる惣菜につかふものなればしたてかた、少しもむづかしき事無し。たゞし、半片の白き所に、汁のしみて、色よごれぬやうにするには、先づ、清し汁を、能くしたて置き、半片は、別に、熱湯に、一寸、燒鹽入れたるにて煖め、其れを引き出だして、能く處をきり、椀の中へ入れ、其上より、汁を濺ぐべし、菜もゆで置きて、盛る前に入るべし。

▲雞肉と菠薐草との清し汁　雞肉を、能く〳〵たゝきて、汁の中にはなし、ゆでゝる菠薐をよきほどに切りて、入るべし。惣菜などには、別に、かつをぶしの出し汁を用ひず、雞肉のみにて可なり。

▲白魚と、獨活と、淺草海苔との清し汁　白魚は、なまのまゝ、又は、一寸火どりてもよし、獨活は、皮をよく剝ぎ、短冊に切りて入るべし。淺草海苔は、炙りてもみかくべし。

▲貝の柱と、三つ葉との清し汁　貝の柱は、煮過ぐる時は、かたくなりて惡し。清し汁、よくしたて置きて、沸

えたちたる所へ入れ、一たぎりせば、直に、椀に盛るべし。三つ葉は、ゆでたるを、能く絞り、大抵、一寸ほどの長さに切り。これも、一寸煮て可なり。
又、ごく淡泊としたつる時は、かつをぶし出しに、焼鹽を加へたる、潮汁にすべし。さて、浅草海苔の類ひを加ふべし。酒肴などには、極めて妙なり。

◉煮しめ類

▲ごまめの照煮 先づ、ごまめの腹のところより、頭へつけて、切り落し、これを、炮烙にて、ざつと炒り、さて後に、酒と、醤油と、砂糖とにて、煎りながら煮るなり。なほ其れに、粉山椒、又は胡椒などをふるべし。



▲鱈と、おぼろ昆布との煮しめ 棒鱈は、一週間以上、鹽鱈は、二日ほど、水に漬け置きて、時々、水をかへ、よき程に切り(餘り、大切れにすべからず)おぼろ昆布は、細かに刻みて、酒と醤油と、砂糖とを加へ、薄鹽にて、そろ〳〵と煮込むべし。これにも、粉山椒などをふりて可なり。

▲鱈と胡蘿蔔との煮しめ 之れは、右と同じく、水に浸け置きたるをなるべく、細かに刻み、やはり、酒醤油、砂糖にて、胡蘿蔔、やはらかくなる迄、煮込むべし。

▲泥鰌と、新牛蒡と、相良麩との旨煮 泥鰌は、骨を拔き、湯がきて、これを一寸ほどづゝに切り、新牛蒡も、また、ゆでゝ、一寸ほどに切り、相良麩に、そのまゝ、よきほどの大きさに切り、かけて、味淋酒と、醤油とを、とろ〳〵になる程に煮つめ置きたる中に入れ、二た煮えたちばかりしたるを見て、鍋を下ろすべし。

▲烏賊と獨活との煮しめ 烏賊は、肉を、奇麗にしたてゝ、ざつとゆがき、よきほどに切り、獨活は、皮を剝ぎ、一寸ばかりに、はすかひに切り、酒と醤油と砂糖とにて

煮あげ、器に盛りたる後、山椒の若芽を添ふべし。

▲蒲鉾と莢豌豆との旨煮　先づ、蒲鉾、銀杏葉がたに切り、莢豌豆の若きうちにとりて、筋を去り、酒と、醬油と、砂糖とにて、煮あぐべし。又、この豌豆を、極めて、青き色に煮るには、鍋の中へ、胡麻の油少しを入れ、食鹽と、砂糖、少しとを和して、蓋をせずして、煮るべし。まことに、麗しき色になるものなり。

▲鰡と燒豆腐との煮しめ　鰡の鱗を去り、筒切にして、味淋と醬油と、又は、醬油と、酒と、砂糖とにて煮一たん、魚を引きあげて、其あとへ、燒豆腐を入れ煮あがりたる後に、更に、魚の肉を入れ、煖めて、皿に盛るべし、始めより、魚と、前の品と、一所に煮る時は、味、みな、他の物へうつりて、魚は、甚だまづくなるものなり。

▲鰡と春蔔（大根の一種なり）との煮しめ　これも、燒豆腐と、別にかはる事なし、但し、大根の類は餘程能く煮込まざれば、かたくして、味はひよろしからず。

家庭の衛生

肺の强壯法

胸部をひろげて肺臟を强くするといふ事は必らずしも困難なる事にあらず、日常少しの注意を要すれば足れり、今其の簡單なる方法に就て少しく記さんに、平素肩の狹きもの頸の細きもの、咽喉の弱きもの胸の小なるもの適當に酸素を肺に吸收する方法を顧みずして居たらんか、如何にして其の薄弱なる身軆を强壯にする時あらん。又平常强壯なる身軆のものにても、肺に十分の酸素を供給する事は尤も必要なる事にして血液中の不潔分（重に炭酸より成立つもの）を除去する唯一の方法は肺を通じて血液に酸素を通ずるの一事なり、而して血液に酸素を通じ之を淸淨にするは深呼吸（即ち深く十分に空氣を吸い込むをいふ）によるものにして深呼吸は即ち肺を强壯ならしむる唯一の方法なり。▲心得（深呼吸は鼻孔より空氣を吸込みて口より出すなり）深呼吸を爲す時は必らず胸廓の擴大せらるゝを見、且

つ感ずるなるべし。この深き呼吸は凡ての內臟に生命と健康とを與へ、赤血球をして酸素を躰內に分布せしむるものなり。

深呼吸の實行は必らず胸部を擴大にするの効あり而して其の方法はまづなるべく帶をゆるくし、直立して胸を前へ突出し、兩腕を垂れて口を鼻より長く且つ深く息を吸込むなり充分に吸込みて胸一杯に膨らし、靜かに一二三四と數へるまで息を溜め置き、それより輕く口より息を吹出すなり、尤その息を吹出す時は咽喉にてヴー‥‥と音聲を出すをよしとす、これ聲帶を丈夫になし喉を健全にするの効あるものなり。この法は一日二回づゝにて一回二十遍づゝ行ふべし、即ち朝起して窓外の新鮮なる空氣に對して之を行ひ、夜に入りて又之れを行ふ。

又郊外に出でゝ之れを行へば其の効力一層大なり、もし輕度の肺病ならば此の方法をよく實行するに由りて治する事あり、此れは肺を健全にする確實の方法なれば血色の惡しきものなどは實行して著るしく、血色を美にするものなり、蓋し空氣中の酸素は此の深呼吸によりて始めて十分に攝取さるゝものなれば、酸素を攝取する事盛なれば自然活力も盛んになり隨つて肺のみならず身體各部の壯健を致す事勿論なりと知るべし。



最後に注意すべきは呼吸をするに決して口よりするはよろしからず、若し口より呼吸するの習慣あるものならば斷然之れを改めるの必要あり、口より吸呼するは不潔分を直接に肺に吸收するのみならず、咽喉を害する事又夥しく隨つて寒冒の媒介となるものなり、古よりの言ひ傳へに健全なる人は鼻より呼吸すと。

産兒一週間內家族の心得

▲産兒の身軆には多少胎脂の附着し居る事故リスリン或はオレーフ油を塗り、柔かにフランネルの小切にて拭ひ去るべし。

▲産兒に湯を遣はせんとならば六十度位の微温湯をよしとす、浴せしむるにはまづ臍の緒の結帶部を掩ため、而して後ち耳の項窩、腋窩、關節部股間などをよく洗ふべし、少々は石鹼を用ひて妨げなし。

▲出産後二十四時間中は常に右側を下にして臥せしむべし。

▲産出後二十四時間内に大小便なき時はフランネルを少し熱き湯にてしぼり腎臓の部を暖むべし。

▲産兒の身軆にたゞれを生ずる事あらば、天花粉を撒布するか、或は油藥を柔らかき布に展ばして貼くべし。

▲俗にマクリと稱する毒下しは用ゆるに及ばず、直ちに母の乳をつけてよし。

▲授乳せし後は硼酸水にて産兒の口内を洗ひ乳草の生ずるを豫防すべし。

▲産兒の目は日光又は火光に當てしむべからず、若し目に目脂などの生ずる事ある時は日に數回硼酸水を以て洗ふべし。眼中に何か發生物を生せしを發見せば直ちに醫師の診察を乞ふべし。

▲母親は左右の乳を交々含ましむる心得ありたり、左なくては一方の乳のみとなるの恐あり。

▲乳房腫れて疼痛を覺へ、且乳汁分泌せさる時は十五分より三十分間までフランネルの布片に熱湯を灑きたるものをよく絞りて其の局部に當てゝ蒸すべし。

▲産兒は毎日入浴せしむべし。臍帶は入浴毎に包み替ゆべし。左なくては腐敗しこれより種々の病を生ずる事あるべし。

▲母親に乳の出ざる事あれば、乳母を雇ふべし、年齢は二十歳より三十二三歳まで健全なる躰格を有し、肺病又は遺傳病なく十分に望まば産兒と乳母の兒と同年齢位を欲すれば二ヶ月位は妨げなし。

▲乳母を雇ふ便宜なき家にては牛乳にて育つべし、一週間内は湯を三倍加へ、それより段々牛乳を濃くすべ

し。

▲産兒は未だ胃嚢小なる故一度に多く飲む事能はず、去れば日中は二時間毎夜中は三時間毎に乳を授くべし。

▲流行感冒の注意

病原と流行　一種の細菌にして鼻腔氣管支等の分泌液中に於て發見す、傳染の性は頗る著明なり多くは患者との直觸より來る空氣よりする傳染は唯短小の距離に於て行はるゝものにして數百里の遠きを隔てゝ傳染する事なし但し介立者、無生活物躰は傳染の媒介となるものなり而して吸氣に因て躰中に侵入するものゝ如し流行は春秋二期に多し流行期の長短は數週より數月に至るに及ぶ事あり、本病に罹り易き素因は何人と雖も之を有す又一回之に罹るも再度の感染を免かれ難し或人躰は傳染の機會に遭ふ毎に之に罹るものあり



症候と併發病　時としては全身倦怠、胸内苦悶等の前兆を呈する事あれ共多くは俄然惡寒或は戰慄を以て始まり次て卅九度或は其以上の發熱を來す而して全身狀態は甚しく障害せられ非常に疲勞を覺え烈しき頭痛、背痛、腰痛を起す今本病を其症候の偏勝に從て呼吸器性、消化器性、神經性の三種に分つ然れども此の如き單純の症は混合症よりも遙に稀なり呼吸器性の症は壙嚔頻發咳嗽喀痰胸痛等を來たし消化器性の症は食慾缺乏、嘔吐、下痢、腹痛等を起す又神經性の症は倦怠、頭痛、眩暈、背痛等を來たすものなり併發症中最も屢々發生し且つ危險なるものは肺炎とす素因あるものは又肺結核を續發する事往々之あり其他咽耳等も侵さるゝ事あり熱度最初は多く高度を呈すれど爾後の經過

け頗る不定なりと知るべし。

▲衛生片々

●火傷の療法

寒き時には湯の取扱ひ繁く、隨て火傷などは誠に有勝の事なるが、玆に簡便なる即治方あり其一二を擧げんに、今若し右の食指を熱湯或は火にて燒傷したりとすれば左の掌に鹽一握りを取り此中に右の燒傷の指をつきこみ確と握りしめ凡そ十分間位立てば鹽は次第に暖まりて燒傷の烈しく痛むを覺ゆ、かくして數分經たぬ間に全く痛みは失せて痕なきに至るべし、痛の失せるまでは其まゝ動かさゞるをよしとす、此の外苦鹽汁、鐵漿(オハグロ)も妙藥の一つなり、又極々手輕きは金槌の如き冷へたる鐵の面に押し當つるも可なり、若し重傷なればオリーブ油等をひき綿にてつゝみて繃帶し靜かに保てば宜しきも醫師の手をかる方よし

●耳内の痛み

四季をり〳〵の移りきはなどに耳内の烈しく痛みて氣分までも損ひ、誠に手のつけやうもなきことあり、これにはオリーブ油を耳内に注げば大概は治するども、素人の手にて流動物を耳内に入るゝなどはごく〳〵危險なれば、まづ大丈夫の方法即ち辛子三分の一饂飩粉三分の二の割合に混じ水にてねり紙にのべて耳の上を掩ひ張るべし、皮赤くなる頃は癒へて取去るに至るべし又一法は手拭を熱湯に浸しファフヨウチンキ(藥店に在り)をつけて耳を掩ひ温むる時は速やかに痛み去るものなり。

●ひゞ霜やけ

寒時にはひゞ、しもやけ等皮膚の甚だしくあれて見かけは固より痛みて下婢などは自然何事をなすにも怠慢勝ちとなり、疎略となるものなり、最もリスリン旃檀の實汁、蜜柑の皮油、帆立貝の殼の黑燒、など色々の藥あれども始めよりかゝる憂なきにしかず、人の皮膚に清淨にするが第一なれども、さりとてあまり熱き湯にて度々洗ふは却て皮膚をあらすものなり、されど臺所の洗物にてもなるべく水か微温湯にてなすべし。寒さの時には得てあつき湯にて洗濯などするものなるが其際

直ちに冷き風に觸るゝ時は立所に顔手足をあらす故に此の理を思ひて少し位つめたきは辛抱すべし、又湯・水に拘らず濡らしたる手は乾きたる布にてよく其度毎に拭き取るべし、ヒゞの藥は韮の根を山葵おろしにて卸し之れに酒少量を加へて數時間火の上に載せ、時々かきまわしチバく固まるを待ちて火より卸し茶碗なりコツプなりに入れ置き入浴後之れを局所に塗抹すべし

▲小兒の衛生

●小兒に乳を與へる時間　乳を與へる時間は嬰兒には凡て二時間置きと云ふのですが夫れも母親の乳なれば少しは早くつけても遲れても大した恐れはないのですが牛乳は消化難いので時間を嚴重にしませんと嬰兒の胃を惡くします。

●正しい習慣夜は十一時頃から四時頃迄は乳をやらぬやうに七夜の中から正しい習慣をおつけになる事は母親の安眠健康のためにも種々の利益があります。



●乳を煮る器械　乳を煮るのに寒い時は通例の鍋などでも先づ差支ないですが、暑に向つて來ると夫れが大邊に危險です、夫れで是頃其方面の人々の工夫に成つた乳を煮る道具が諸方の商店に賣つてあるが器の構造は鐵葉の鑵に入れて火にかける樣に出來て居て針金で以て牛乳を入れた小瓶を幾つか吊り下げる樣になつて居るので小瓶には護謨のキッチリして蓋が出來て居ります、乳は恰度小瓶の肩の所まで入れて置くので鑵の水が煮へ立つて乳も充分に煮へて來ると量が増して口元まで一杯になります、それを取出して冷して置くとまた元の通り肩の邊まで下つて來る、すると護謨の蓋も一所に瓶の口の中に吸ひ込まれて乳に少しの空氣をも觸れさせ

ぬ樣に密着するので此瓶に入れて置きますと、夏でも永ひ間安全に取置きが出來るのです。

●食物を與へる順序　嬰兒が生後七八ヶ月になりますと、乳の外に食慾を生じまして、母親の食膳に邪魔をすると云ふ樣になる其頃に何を一番先きに與へるかと申ますなら、肉類のソップです、それにホンの少し御飯を混入れて、始めはやるのですが、段々嬰兒の食慾の度につれて御飯を多くして、後には雜炊の樣に致しますそれも母親の目の前で食べさせ樣と致しますと、嬰兒は親の懷に逃れ樣としますから可成母親の居らぬ部屋で別の人にその役目を云ひつけるのです、

●生乳のこと　牛乳と云へばコーヒーに入れるんでも嬰兒に與へるのでも同じ樣に思つて居る方があるかも知れませぬが、大違ひです コーヒー等に入れて大人が通例用ゐる乳は、普通の飼養法の牛で差支ないですが、乳兒の爲めには靑草を食つた牛の乳は危險ださうです。

●コンデンスミルク　生牛乳は兎角に腐敗しやすい憂がありますから夏分などは牛乳よりもコンデンスミルクを用ゐる方が安心です、然れどもまたコンデンスミルクにも種類が澤山ある、其中どれが一番よろしいかと言へば亞米利加製の鷲印が一番好いです、次には彩色のある人形の印です、和製で廉價なのは大抵バタを取つた跡で製するのでありますから、殆んど脂肪分がないのです。

●乳歯の事　歯が生へる迄は決して赤兒に澱粉質の物を食べさしてはいけません、歯が生へる時に始めて睡液が働きをなすので、それ迄は乳以外のものは少しも消化する力がないのです菓子などを嚙んで與へたり飴などを甜らしたりするのはよくありません。

●小兒の抱き方　小兒を抱くのにいつ迄も長く同じ位置に抱へて居るのはよくありません、右に抱いたり左に抱へたりするがよいです、寢せる時でも母親が注意して同じ方ばツかりが下にならぬやうにせねばいけません、兎に角赤兒の骨は極く柔かなものですから不自然の形にだいたり負ぶたりすると骨を曲げて仕舞ふ事

があります。

●呼吸の習慣　小兒には何時でも鼻から呼吸する習慣を守らせねばいけません、鼻から呼吸せぬと種々の病氣の原因となります、赤兒などが寢て口を明いてるなら母親が始終注意して口をふさいでやるやうにすればよい。大抵は塞いてねる樣になります、それでもなをらぬものは醫師の手術を受けねばなりません。

●皮膚の養生　やゝもすれば皮膚が爛れたり刺戟し易い赤兒は決して硬水の湯をつかわせないやうにせねばなりません硬水とは井戸水の如き又安石鹸を用ひてはいけません、なるべく上製の石鹸を用ひ尚ほ牛乳の湯を使はせれば最もいゝです、牛乳の湯と云つて水一斗へ牛乳二三合の割りて混ぜればよいのです、併しこれは隨分贅澤な事ですけれども皮膚を柔らげるには尤も妙です。

●靴の事　小兒に靴を穿かせる時には靴足袋を注意しなければいけません、小さ過ぎると小兒の足はごく薄弱なものですから足の形を損ずると云ふ結果になり、大き過ぎるとまた靴の中にたくまりが出來て豆などが生ずる原因となります。

●窒息した時の救治法で最も簡便なのは當人の左の腕を以て出來る丈け高くあげるのです、之れは肩を握り拳で打つよりは遙かに早く効を奏するものです。

改良女服の形式

野中千代子（黄粱女史）

女服改良の必要は最早世間でも大抵是認されて、今は其形式の研究時代に在ると云て宜しかろふと存じますが其形式を定むるには、

第一衞生上
第二經濟上
第三美術上

先づ斯三點を土臺として、又經重の點も矢張此順序を逐て立つべきは勿論であらふと存じます、尤も社會の或一部の經濟上や衞生上などに一切お搆ひなき方々は勿論取除と致して、下賤の者までも即ち世間一般に普

及を圖ることが斯改良の主要の目的てあるとすれば、猶更經濟上の點に重きを置ねばなりませぬが、併し如何に金はかゝらないで出來るといつても、衛生上から申せば矢張運動も活發に出來ぬやうなものであつて、從來と餘り異りのない物を作つたところが夫ては改良の効は御座ませぬ、故に衛生を第一に置くが至當てあらうと存じます、衛生上のことは美術上の事とは違ひ金のかゝることは更に無いと云て好い位ですから。
夫から普及の點から云へば右の三點に止まらず、次の事柄が又極めて必要だらふと思ひます。

第四無論仕立屋の手を假らずして各自仕立得らるゝこと

第五必ずしもミシン——を要せずして仕立得らるゝ事

第六裁ち方及び縫方等は可成從來の服と異ならざるやうすること

第七特別に面倒なる裁ち方縫方等を避け力めて簡便にすること

第八着方は子供といへども人手を假らずして簡便に着け得らるゝやう仕立ること

第九生長するに從ひてあげをおろせば袖丈け等を伸し得らるゝやうに仕立ること

第十自家にて輕便に洗濯し得らるゝやう仕立る事

箇樣の考を以て先づ參考とすべき朝鮮や支那や歐米の女服及び此節世間にチラ〳〵見ゆる所謂改良服なるものを觀察しまするに、

（一）朝鮮服

朝鮮服は大躰に於て右に列擧した諸點に付て一番欠點が少なくて、一々取立てゝ批難すべき程のことなくして、我國風に移し易からふかと思はれます、併しあのやうに袴を高くつけて胸部を緊縮するのは衛生上如何て御在ませふかと存じます、處があの袴は高くつけなければ似合ませぬから、據ろなく彼國でも古來經驗の結果自然とあのやうに高くつけることになつたので御在ませふ。又今一の欠點は肩と袖口の餘り淡泊過ぎて飾りの無いことです。夫に今一は袖付と袖口の丈けが同じですから無格好に見ゆること

とです。是等は即ち美術上の疵であつて此三つが欠點で御在ませふか、其外の仕立方や着け方等は極めて簡便でありますから別に取立て難ずべき程のことはなからふと思ひます。

（二）支那服

支那服は西洋で婦人の服として第一等であるとの投票を得たことがあるそうですが、如何にもそうで御在ませふ、袖の丈けが和服の如く長からず、朝鮮服の如く短からず、寛濶にして、裳にしても蹴出しもよく衛生上又其他の點にも先づ欠點は少い方で御在ませふ、併し矢張肩の邊が何となく淋しくして、後姿などは別て不格好で御在ます、又袖の格好にしてもどうもまだ物足らぬ心地が致します、殊に裳の邊などは我々の眼から見れば如何にも無器用であつて所謂美術上の欠點たることを免れますまい。

（三）歐米服

歐米の女服は色々ですから一樣に評するわけにはゆきませんが、第一これは着方が餘程むつかしう御在まして、私共の眼には餘程上手に着て居る人を見ても、西洋婦人に比ぶれば全然淺草奥山の見世物の前に列んでいる囃方としか思はれませぬ。第一お腹がひけてはならず、又躰に肉がなくてはならぬ、ところが我國の人は生憎お腹はひけ勝てあつて、又西洋人とちがひて年よれば大抵痩る方ですからお化のやうで、禮服をつけた時などは態々晴れの場所に其醜躰を披露せねばならぬやうな始末であつて、女子にとりては將來隨分難義だらふと存します、のみならず此怪しい姿勢を西洋人から見たならば、全然沐猴に冠を被せたやうで嘸おかしく思ふことで御在ませふと存じますから、眞似をして笑はるゝよりも寧ろ我國は我國の國服を制定して國威を損せぬやう致した方が宜しからふかと存じます。西洋ても或具眼者は服裝上注意してる人もあるやうですが、普通見受る服は襟が狹いから咽喉を緊縮し、袖が小さいから咽喉を緊縮し、又格好が悪いからコーセットを用ゆれば夫こそ支那婦人の靴よりも大なる害を與へま

す、又裳が長いから起居動作が割合に不便であつて、歩けば砂塵を蹴立るのみならず、穢れる切れる、眞に降雨など彼方の婦人も内心は餘程困つてゐるやうてす。斯樣に目に見えた弊害があるものを求めて學ぶには及ばぬと思ひます、先づ洋服は美術の點にいくらか取得があればあると云ふやうなもの丶、衞生上經濟上共に欠點が多く、又仕立が大抵ミシンを用ゐねば手際の旨くゆかない仕立方ですから、其點からも改良服の普及上採用は出來かぬるかと思ひます。

(四)　近來の所謂改良服

世間にまゝ見受る八百屋肴屋のひよう／＼みたやうな筒袖は論外といたして、近來筒袖の袖口を絞つたのを見受けますが至極面白き思付だと思ひます、があれでは引絞りですから襞積の筋目が立たず、從て袖が何だかだぶ／＼し過ぎて餘り無造作で、女子には少し殺風景なやうに見えはしないかと思ひます。又肩が前からも後ろからも淋敷みえて物足らぬ心地が致します、眞に玉に疵で惜い事だと存じます。

序に看病婦の制服は元來作事服ですから美術がゝつた裝飾のあらふ筈は御在ませんが、仕事着としては襷はいらず活潑に歩けて至極よく出來て居ると思ひます、併し胴も袴も續いて一つ物になつてゐるのが少し欠點ではないかと思ひます、一つ物ですから勢ひ胸を鈕がけにせねばなりますまいし、又着るに頭から被らねばなりませぬ、尤も看病婦は帽を被りますから髮が少々痛むでも差支はなし、第一仕事着のことですから其位のことは當前とせねばなりませぬが、世間一般の服としては胸は鈕がけでは些しまづいのみならず、澤山の鈕穴等仕立に隨分面倒だらふと思ひます、又上下一つ物では袴の一部が穢れても胴の一部がしみになりても、胴と袴と解放さぬ限りは全部洗濯せねばなりませぬ、夫では不便で又不經濟ては御在ますまいか。

右の通り參考服は孰れも長し短してすから、其の長を採り短をすてゝ、工風して見たいものです。

Here is a lamp.	此所にランプが一ツあります。
I shall clear and light it.	私が今から之を掃除して火を點けます。
First of all, I take the shade off.	先づ私が此笠を取り外づします。
I have taken it off.	私が之を取り外づしました。
I wipe the chimney.	私がこのホヤを拭きます。
I have wiped it.	私がこれを拭きました。
Then I cut the wick.	それから私がこの心をきります。
But then, I can not find the scissors.	だが鋏が見へません。
Yes, thats it.	ハイそれでございます。
Where have you found it?	どこにございましたか。
So? thank you.	さうでしたか有りがたう。
The sciesors donot cut well.	この鋏はよく切ませね。
None but I con use the scissors.	私でなければこの鋏は使ません。
I have used them for a long time.	私は長く之を使ひます。
There! I hove cut the wick finely.	それ！私が心を立派に切ました。
Then I pour oil into the	それから私がこの油入へも油を注ぎます。
I have filled it with oil.	私が一杯油を注ぎました。
I strike a match.	私がマッチを一ツ摺ります。
O, dear! plcose shnt the door. I've* struck a matih to no pnrpore	オヤオヤ！其戸を締て下さい私は一本マッチを無駄に摺りました。
Have you shut the door.?	戸を締めましたか。
I've lighted the lamp this time	今度はランプに火を點けました。
Then I put the chimney O and the shade on.	それから私がこのホヤと笠をかけます。
I'v put the chimney and also the shodo on.	私がホヤもさし笠もかけました。
Now I hove done every thing.	是で私は何も皆濟みました。

Dinner	午飯宴會
Flour	麵粉
Tea	茶
Wine	葡萄酒
Waten molon	西瓜
Table Salt	食鹽
Scy	醬油
Spirits	精酒
Sugar	砂糖
Supper	夕飯
Pepper	胡椒
Silk	絹
Silh stuff.	絹地
Cotton.	木綿
Cotton cloth.	綿布
Crape.	縮緬
Broids.	織物
Brocade	綿
Threod	絲
Lining	裏

Outer part	表
Sweet orange	蜜柑
Peanut.	落花生
Meal.	肉類食事
Roost meal,	炙肉
Stewed meal	蒸肉
Tea	茶
Tongue	牛の舌
Turnip	蕪菁
Vegetable	青物
Venegar	酢
Walnut	胡桃
Girdle	帶
Dresse	衣服
Ribbon	紐
Belt	紐帶
Button	鈕子
Calico	きやらこ
Canvas	粗布. 布木綿
Capo	帽子

Banquet	饗應
Beans	蠶豆
Beans curd	豆腐
Bamboo sprout	筍
Breakfast	朝飯
Buck wheat	蕎麥
Cabbage	白菜
Carrots	胡蘿蔔
Chestnut	栗
Congee	粥
Indian corn	玉蜀黍
Clath	羅紗
Raincout	雨衣
Bed-clothes	夜具
Bonnet	婦人帽子
Ring	指環
Shaul	肩掛
Socks	靴足袋
Stuff	反物

ジェーン、グレー姫

文學士　中内蝶二

（下）

婚姻は人生の大事なり。わけても女はこれによりて、生涯の苦樂定まるものと聞きけるに　姫は己が理想にかなふべき良夫を選ぶ間もあらで、生來孝心深き御身の、父君の命令いさゝかも背くことを好まねば、たゞ何事も其御心のまゝに任せて、ギルドフヲード、ダツドレーの許に嫁ぎたまひしか、神ならねば、いかでか舅君の野心の犧牲とならむとは知るべき。

國王エドワードは、病愈よあつしくなりて、最早臨終の期近づきぬることを知りたまひしかば、首相ノーサムベルランドを召して、勅を下したまひけるは「朕死すとも、天主敎の跋扈を許すこと勿れ、英國をして永く新敎國たらしめよ」と。首相は豫てより、斯くあらむと期したることなれば、日頃の大望いよ／＼成りぬと、心ひそかに打ち喜び、「畏き敕諚、いかでか、おろそかに存じ侍るべき。臣かくて國家の重任を辱うするからには、よしや如何なる難事の起り候とも、誓つて新敎の鞏固を謀り申すべければ、幸に叡慮を安めさせたまへ。それに就きては、熱心に新敎を尊信したまふグレー姫に王位を授け奉るこそ、いと安全なる策ならめと存じ侍る」と奏しければ、王も快くその議に從ひ、直ちに詔を下して姫を儲君と定めたまひ、間もなく崩御まし／＼ける。

首相ノーサムベルランドは、七月九日百官を率ひて、姫の宮殿サイオン、ハウスに到り、女皇の尊號を奉りぬ。あはれ浮世の富貴につゆ望みなく、ひたすら靜閑の地に風月の樂みをほしいまゝにせむとねがひし姫が頭に、今この貴き金冠は加へられむとす、姫が驚きは如何ばかりぞ　あまりのことに氣を失ひて、百官の前に倒れ

しが、やう〳〵にして我れに復り、首相に向ひて『メリー姫こそ、正しき繼嗣ならめ、妾はさる貴き御位にのぼらるべき身にあらず、殊に齡さへなほ幼く、萬の道を辨へざれば、國家の統御など思ひもよらず、この儀ばかりは平に免させたまへかし』と切に乞ひけれども、首相は固より姫によりて權勢を張らむと希ふものなれば、姫が懇願を聽き入るべくもあらず、飽くまで即位あらむことを勸め、なほ否まむとする風あるを見ては、舅の權力を奮うてまでも、強いて其言葉に隨はしめむとするにぞ、姫は孝道にそむくに忍びず、心すゝまねど、是非なく即位の事を許し、諸卿に供奉せられて宮城に入りぬ。かくて首相が大望は、更に一歩を成就の地に進め憐れなる姫が運命は、また更に一歩を苦患の淵に投じたるなりけり。

姫は既に宮城に入りぬ。首相ノーサムベルランドが大望は、遂に成就すべきか。見ずや、高木は風の爲めに仇せらるゝことを。權勢の裏には必ず嫉妬あり、在廷の百官庶僚、常に首相が權威を恣まゝにするを見て、快からざりしさへあるに、こたび遺詔と稱して、我子の妻にあたれるグレー姫を玉座に薦めむとするは、これ其心に深き陰謀のなくてかなはずやはと、新敎信仰の人々まで、首相を疑ふに至りしかば、まして反對の地位に立てる舊敎信仰の人々は、この機に乘じて勢力を張らむものをと、ひそかに相謀り、首相を倒してメリー姫を王位に即かしめむとせり。

累卵もたゞならぬ、かゝる危うき地位に立ちたる首相は、不幸にして、己を倒さむと謀れる反對派に、事を擧ぐべき動機を與へたるぞ是非なき。

さても其動機とは如何なることぞ。初め國王エドワードの生命旦夕に迫りしとき、首相は勅命なりと僞はりて、書をメリー姫とエリザベス姫とに飛ばし『今生の中に、姉君に見みえて、この世の暇を告げたし』と言ひやりつ、その來るを待つて監禁せばやと計りたりしに、事期する所とたがひて、二人の姫たち未だ到着に及ばざるほど、王はみまかりたまひぬ。されど、首相はなほ之を誘きよせむと欲せしかば、喪を祕して發せざるこ

と二日、はやく姫たちの上京せよかしと待ちかけ居たり。メリー姫は斯くとも知らず、道を急ぎて都にのぼり、京城を距ること僅に二三里の處まで來たまいしとき、ほのかに國王崩御のことを聞き、又首相が陰謀の趣をも、ひそかに告げこすものありしかば、驚きたまふこと大方ならず、遽にサッフヲルク州に引返して、ノーサムベルランド討伐の兵を募りぬ。首相に反對せる人々は、時こそ來たれと打ち喜び、相率ひて募に應ずるもの、一萬二千餘人とぞ聞こえし。

首相ノーサムベルランド、わが陰謀の破れたることを聞きて、後悔の臍を嚙めども最早およばず、ふためきながら諸州を奔走し、しきりに防禦の兵を徵せしかども、人皆首相を憎める折柄なれば、來り集まるもの敵軍の半にも充たず、五千餘の兵を率いて京城にかへれば、思ひきや、首相が暫し在らざる間に、亂民鋒起して遙かに敵軍に應じ、宮城に攻め入りしかば、一支へも支ふること能はずして、女王ジレー姫は、守護職サッフヲークと共に城を出で丶、再びサイオンの宮殿へ退きたまひし後なりけり。

姫が王位に即きたまひてより、こゝに至るまで僅かに十日ばかり、口善惡なき京童は、これを嘲って『十二日女王』と申し奉れど、姫はもとより萬乘の玉座に望みあるものにあらず、舅君が强請によりて、やむなく即位のことを承け引きたまひしほどなれば、王冠を棄つるも、毫も嘆かるゝことなく、宮城を出でゝサイオン宮に退きたまふや否や、直ちに御髮をおろして尼寺に入りたまひぬ。

まだ二八ばかりの春淺き蕾の花、綠の黑髮惜しげもなう剃りこぼちて、はやくも世捨人となしまつりしは、思へば悼ましき限りにはあれど、初めより浮世のことにかゝづらふことを好みたまはず、風月を友として靜閑なる生涯を送らばやと願ひたまへる姫がためには、斯かる世外の人となるこそ、なかなかに嬉しとこそ覺しけめ。されど、あゝ、されど、一たび惡魔の手に捕へられたまひし姫が御身は、この靜閑の地にも安らかにおはすること能はざりしこそ、かへすがへすも恨みなりけ

れ。

首相ノーサムベルランドは、僅かばかりの軍を率ひて、一時メリー姫の大軍を拒ぎしかども、衆寡もとより敵すべくもあらねば、間もなく打ち敗られて、敵の軍門に降りぬ。メリー姫は、やがて數多の人々に推されて英國女王の御位にのぼりたまひ、首相は叛逆の罪に問はれて、首刎ねられしぞ笑止なる。

女王メリーは、姫及びその一族を捕へて、これを宮城の内に幽閉したりしものから、さすが血統の近き間といひ、年なほ弱き姫が命を、奪はむとまでは思はざりしに、あぞましや、姫が生の父君サッフォーク公は、一たび放免の身と爲りたるを機として、新女王に仇せむとする一揆の徒黨に加はり、再び姫を擁し立てばやと謀りしかば、女王メリーは震怒のあまりに、前後を顧みるの遑もなく、肉身の愛も打ち忘れて、其年十一月三日、グレー姫夫婦を叛逆の罪に問ひ、翌くる千五百五十四年二月八日を以て、死刑の勅命を下したまひぬ。

やがて姫が處刑の日と定められし二月十二日は來りぬ。姫の良人ギルフォード、ダッドレーは、せめて存生の中に一目姫に對面せむと申し出でられしに、姫も木石ならぬ身の、可愛しき良人に逢ひたき心はかはらねど、なまなか顔を見て、若し女々しき振舞などせば、人の見る目もいと恥かしく、死しての後まで汚名をのこさむも心苦しと、わざと心を鬼にして、堅く良人の言葉を謝絶したまひぬ。其時の御胸の裡、腸もちぎるゝやうにおはしけむを、今より推しはかり奉るだに涙のたねなり。

姫は數多の兵士に警固せられて、刑場の門を入らむとするとき、はからずも鮮血したゝる良人の死屍の横はれるを見て、恩愛の涙一度に迸りて胸せまり、哀痛のあまりに其場に倒れむとせしが、やうやうに、氣を取りなほし、打ちしをれて設けの座に着きたまひぬ。ウエストミンスター寺院の住職フエックアンは、姫にむかひて天主教の利益を説き、しきりに改宗のことを勸めけれども、姫は熱心なる新教の信者なれば、頑として動かず、あつく住職が好意を謝して、其言葉に從ひがたき

旨を答へぬ。
無情なる時は一刻〳〵と進みぬ。劊手は劒を執つて姫が後に立てり。姫は白刄の下に座して、少しもわるびれたる氣色もなく、靜かに天に向ひて最後の祈禱を捧げ、筆を乞うて父君に『妾が罪なき血は、上帝の御前に叫び得む、惠ませたまへ、罪なきものをと』と認めたる遺書を送り、『妾は甞て不正を行ひたる覺えなく、また女王に對して聊も不敬に渉りし覺えもなし、さりながら、只天命にまかすのみ』と唱へて、悠然として刑場の露と消えぬ。
あはれ、傷ましといはむか、哀しといはむか、心淸きこと雪の如く、行潔きこと玉の如き絶代の孝女、罪なくして無慙の最期を遂ぐ。天の無情を怨まざらむとするも、豈得べけむや。（をはり）



歴史上に散見せる日本女子（二）

豐井ふく子

赤染衛門の事――橘逸勢が女の事――熊野御前の事――瓊子内親王の御事――伏見屋嫁の事――佐藤嗣信兄弟妻の事――紀有常が女の事

かくばかり戀ひつゝあらずは高山の
　岩根しまきて死なましものを

これは、仁德天皇の皇后の御歌にて、こんなに戀ひつゝあらうよりは、高ひ山の岩をば枕として、死なんものをと云ふ御歌にて、日本の婦人は至情を以てこれり、至情を以て親を戀ひ、夫を戀ふ、子を戀ふ、死ぬばかりに思ひ、死ぬばかりに戀ふ。至情こりて巖となれるためしもあり、至誠鬼神を泣かしめし數も少なからず。赤染衛門かつて、其の子擧周重き病にかゝり、久しう癒えざりしとき、住吉の社に己が身を以て、子供が命に代らん事を祈り、幣に和歌を附して奉る

　かはらんと祈る命はをしからで

わかると思はんほどぞかなしき

身を捨てゝ子を思ひ、子を思ひて、己が命ををしむ、をしむも子のため、捨つるも子のため、如何にかなしき親の情ぞ。その夜白髪の老翁出で來りて、其の幣を社内に納むと夢みけるが、のち、其の子の病癒えたりと云ふ。

小式部内侍、病あつく、今やことぎれんとするとき、其の母の泉和式部、傍に看病するを見、其のなげきをかなしみ、ふたぎく目をあはれに見ひらきて、

如何にせん行くべき方も思ほえず
　親に先きだつ道をしらねば

とよみしに、天井に鬼のあくびさしたる聲して、あなあはれやと云ひけるが、やがて元にかへりたりと云ふ。鬼神をもかばかり感ぜしむ、まして人をや。橘速勢の女、其の身は未だいはけなく、ふり分けの髪もまだ上げぬ身ながら、其の父一朝無實の咎を蒙ぶりて伊豆の國に流さるゝや、いたく悲しみ、配所の月もろともにながめんものとて、小さき身に旅衣思ひまとひ、父があとをしたひつゝ、父がやどりし宿々を追ひ尋ね、晝は人目にふれてとがめらるゝまゝ、よる〳〵したひありき、はる〳〵と遠江の國まで影の如くしたひゆきしが、其の國板築の驛につきける程に、速勢病にかゝりて枕もえ上がらぬに、女はいたく悲しみ、心の限り介抱したれども、あはれむべし、速勢遂に道芝のつゆと消え失せければ、孝女が悲しみは一方ならず、父なき憂き世に何をかまたんやとて、遂に花のつぼみの身をもをしまず、みどりのくろかみそりおとして、尼となり、父が墓の傍らにさゝやかなる小屋を結び、十年の春秋、たゞ父が後世をとぶらひて他念もなかりけるに、往きかふ人々あはれに思ひ、みな草葉ならぬ孝女がふかき心の露に袖をぬらさぬものとてはなかりけり。此の事やがて都に聞え、天皇もいみじうあはれにおぼされ、遂に　詔せられて速勢が罪をゆるし、正五位を贈り、古郷に葬ぶる事を許されければ、孝女はいたく悦びて、すぐさま父が骸骨を負ひて都に上り、あつく葬りて、朝夕怠らず行ひすましたりと云ふ。父を思ひかなしむ赤心に、己が身の花をも實をも結ぶ事を思はず、たゞ父のぬれぎぬをはして、橘の

香りを千歳に清む、つぼみながらの小女にして此の赤心、敷島の大和をおきてまた何處の國の女にか見ん。古來女子のをしむものは容姿、欲するものは衣服笄簪とす、しかれども花のかんばせ日にくろむを知らず、みどりの黒髪亂るゝを思はず、たゞ父母の齢をいとをしみ、欲するものはたゞ親の歡心を以てよろこぶ。殊に父の仇敵、共に天を戴かじと十年たゞ一劒をみがき、遺恨はらさせし後は、姉妹ともに自刄せんとし、人々にとゞめられ、春なほ深きみどりの黒髪をきりて尼となれるお宮お信の如きあり。未だ二葉のみどり、顔をも見知らぬほどに、無實の罪に流されし父を都にかへさんとし、身を白拍子にまでなして、あけくれ神佛に祈り、遂に時の執權頼時に願ひ出てしかど、あはれむべし、孝女が心づくしも空しく、父はもろくも配所の露と消え失せたりと聞くや、孝女は涙の玉ぬぎあへず 己れも消え入らんばかりになげきけるが、宿願も絶えはてたる世に何とて住まんやとて、之もまだ二六の少女、花のかざりをはやくも下ろして尼となり 父と母との菩提をとぶらひし微妙の如き孝女なり。また

ふる里のかりの玉章まきかへり
つばさもがなと音をや泣きけん

これは、税所敦子刀自が熊野御前を歌へるにて、熊野はもと池田の長者の女なり、平の宗盛の妾となり、寵愛世にすぐれたり、母なる人年老いて病にかゝり、いかで一目あはんとかりの玉章もたび〳〵なりけれど、宗盛寵愛のあまりいとまをとらせず、願ひ再三に及ぶも叶ふまじき由申して、折しもやよひ、東山に花見の宴に伴ひ、熊野に舞はしめけるに 熊野は親のいたつきたゞ心もとなく、身は玆に君に從へど、魂魄は空をかけりて、心も心ならず、

如何にせん都の春もをしけれど
なれし古郷の花や散るらん

と唱ひて、はら〳〵とあつき涙を舞ひの袂にふり注ぎしに さしも未れんの宗盛もあはれを察して、いとまたまはりたりとぞ。孝女が赤心富貴も奪ふべからず。また、敵にとらはれし父を救ひ出さんために、酌婦に身を

やつして、敵陣に忍ひ入り、二人の手弱女の手一つに、醜の醜夫のあみめをくゞりて、遂にしゆびよく父を救ひ出せし千代能姫の如きあり。また後醍醐天皇の皇女瓊子内親王は、元弘の昔、父帝の隱岐に流され玉ひしにいたく、悲しみ玉ひて、都にとゞまり玉ふ事能はせ玉はず死なば共に孤島の鬼と御父をしたひ玉ひ、かしこくも侍女の姿に變じて隨ひ行き玉ひしに、伯耆にて警固の武士の見現はして、なさけなくも道をさへぎりて隨はせぬに、皇女はいたく悲しみ玉ひ、遂に世の中ものうくおぼされ、また都に還り玉はず、花の盛りの御身をすみぞめにやつし玉ひ、やがて一つの庵りを結びて、行ひすまし、再び父の帝都とならん事を祈り玉ひしゑるしありてや、めでたくも、天皇隱岐より還幸し玉ひ、其の御寺によらせ玉ひし際、寺僧栗の實をむして奉りしに、皇運再び開らくるに至らば、此の栗も成長せよとて地に埋め玉ひけるが、かしこくも皇運の再び開らくと共に不思議にその栗成長し、其の枝葉に歯痕あれば、歯形の栗と名けられ、信者は競ひて其の葉を寺僧に乞ひ得て、開運の守りとすとかや。

其の他、綠窓に骨身をくだきて、父母を養ひたる孝女いと多くて、實に枚擧にいとまあらず、而して、我が日本はかり舅姑を大切にする國はなかるべし。我れかつて人の語るを聞きけるに、西洋は男女の愛を尊しとして、父母舅姑をかへりみるふしいと少し、もし、にはかに失火して、母と嫁と何れも燒死なんとす、何れをか救はんと、曰く、そは嫁の方を救ふべし、老いたるものは先きもみぢかければ、なほ先きの長きものを救はんと、さるはまこと西洋の情なり、一理ある事に似たれど、日本にては、若きものは身體自由なり、つねより働くものとす、老いたるものは手足も不自由なれば、若きものはいたはるを當然とす、而して我が國臣民は報恩を尊ぶ、白がねも黃金も玉も何せんに子にまさる寶はあらじとばかりに育くまれたる父母を、よしや子を思ふ親心にはまさらずとも如何で反哺の孝はかりの心や保たざらん、何ぞ老いたる母を見殺ろしに、若き方を救ひて、恬然として何ぞまた世に住まんや、日本はさやうのもの

を人てなしと稱す、思ふに西洋人は我意つよう、私欲を先きにして、後に他を思ふ、故に夫妻の愛を先きにして、親子の情を後にす、己れ戀ふ人あれば、親にもつげずして結婚し、何事も自由を元とす、親子代々つばめに似たるの感あり。支那は之れにたがひて、おもて禮義をよそほひて、内多欲なり。舅姑に仕ふるもたゞ禮を先きにして、情を後にす、ひとり我が國の婦人は舅姑にも至情を以てしたり。柳澤里恭、かつて有馬に湯あみせしに、日くれて湯桁の上に耳目鼻のなき痩法師の、ひとりほと／＼と入りたるを見、大におどろき、物かげより窺ふうち、さう／＼湯あみして出で行く姿、骸骨の絵にたがふ所なし、狐狸どものたぶらかさんとするにやとおそろしくて、其の夜は湯にも入らでうち臥し、夜あけて此の事を家あるじに語りけるに、それこそ折りふし來り給ふ人なれ。彼の女尼は、大坂の唐物あき人、伏見屋てふ家の嫁にて、しかも美人の聞えありけれども、姑の病みておはせしとき、隣りより失火ありて、火のはやく病床にせまりしかど、助け出ださん人もなければ、かの尼とび入りて抱へ出しまゐらせし人なり。その時やけたゞれたる疵にて、目は豆つぶばかりにあきて物見え、口は五分ほどあれど食ふに事たり、年も七十路を越えけると雲萍雜誌に見えたり。姑を殺ろして我身生きざるこれ日本女子の本性ならずや。

また奥州白石の城下より一里半ばかり南に、才川と云ふ驛あり、此の才川の町末に高福寺と云ふ寺あり、其の寺の中に一つの小堂ありて、俗に甲冑堂とて、女の甲冑して長力を持ちたる木像二つを安置しあるよし、これ佐藤嗣次忠信二人の妻なりと云ふ。

その昔、義經鎌倉殿の義兵をあげ玉ふを聞き、秀衡に暇乞して鎌倉へ赴き玉ふとき、佐藤庄司、我が子の嗣信忠信を御供に出せり、其の後、平家を追ひおとし、一の谷八島などにて、さばかりの大功をたて玉ひて、再び奥州へ來り玉ひし時、はじめに附き從ひて出でたりし龜井片岡など、みな無事にて歸國せしに、嗣信は八島にて、能登守殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて、義のために命をおとし、兄弟二人とも他國の土となりて形見のみ

歸りしを、母なる人悲みなげきて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此の人々の如く歸りなばなど泣き沈みぬるを、兄弟の妻女、其の心根を推量し、我が夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出でたち、只今兄弟凱陣せしと其姿を學び、老母に見せ、其の心をなぐさめしとぞ。其の頃の人も二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、其の姿を木像に刻みて、殘しおきたるなりとぞ。至情ならずして如何で此の行ひを見ん「兄弟は忠に死し、二人の寡婦は世にも稀代の孝女、老母も如何ばかり滿足したるらん。而しておどろのもとに、つゝれを着し、舅姑を養ふを主の如く、君の如く、かしづきたるものは、あげて數ふべからず、

そも〳〵西洋はいたく戀愛を尊び、ともすれば愛を云ふ、然れども西洋の愛は動物的なり、一時の情慾にかけりて人を戀ふ事多し、されば多情うつろひ安くして、二夫にまみゆる事を耻ぢず、いとはず、支那は天眞らんまんの性を失ひて、たゞ外貌をかざり、陰險の心をたくましくす、故に國をくつがへし、家をくつがへす多く婦人のためなり。ひとり日本は終始至情を以て一人を戀ひ、一人を思ひ、終始かはらざるなり。

むかし男ありけり、男の未だ幼なかりし折り隣りなりける家に女の童ありけり。隣りづからにや、隔てぬ友垣にて、いとむつまじう、つねに手携はりて遊びてける。さるほどに、男も女もいつしか大人しくなり、なま心づくまゝに何となう互みに物はづかしく覺えて、つゆ井のもとにも出でずなりけるが男も女も互みに心はいよ〳〵床かしう思ひまされり、さるほどに、男

　つゝ井筒井筒にかけしまろがたけ
　　おひにけらしな見ざるまに

とひそかに云ひやりければ、女

　くらべこうふり分け髮も肩すぎぬ
　　君ならずして誰かあるべき

とかへしちぎりて、さて親々もゆるして、本意の如く夫婦となりけり。かくて、年ふるほどに、女の親なくなりて、便りなくなりければ、いつまでも徒らにながめくらしてのみあらむは云ふかひなしとて、二人云ひかはし

て親の渡世をつぎ、田舍わたりなどに行き通ひけるに、いつしか、男、河内の國高安の郡に、床かしき所の出で來て、夜毎に通ふやうになりぬ。されど、そのもとの女、つゆ恨むけしきもあらず出しやりぬるに、男あやしく思ひ、かように心よく、恨むけしきもなきはいつしかあだなる方に心うつりて、我があらぬを中々によろこぶにやあらんと思ひ、河内へ行きぬる貌にて、庭の前栽の間にひそみ居りて、あだ人や來ると窺ひ居りけるに、女、いとよく假粧して、ひとりつく〲とうちながめつゝ、

風吹けば沖津しらなみたつた山
夜半にや君がひとり越ゆらん

とよみつゝ思はしげに空うちながめたるさまいとらうたり。男は案に相違し、かつ其の志のあまりのやさしさに、己があやまちを悔ゐ、河内へも絶えて通はずなりにけりとなり。これなん紀の有常の女にて、男は業平なる。夫の道ならぬ道に通ふを恨みもせず、中々に立田山に盜賊の住む事などを思ひ氣遣ひて、歌にもらしたるめでたくもまたあはれなる事ならずや、敷嶋のやまとをおきて、またかゝるためしは聞かざるべし。

本朝名媛佳話

熊田千巵

（一）童女諫逆　總子辨奸

和珥童女君と云へるは春日和珥臣深目の女にして雄略天皇の妃なりけり、天皇崩御在しましけるとき、星川皇子の御母吉備稚媛竊かに皇子を勸めて不軌を圖らんとしければ童女君之れを悟りて由なき業なりと思ひ、二人に向ひて懇ろに諫めけるやう、正なき業を企て給へばとて、爭かで其事の成就致し候へき、此事人は未だ知り候はじ、御二人にして口に出だし給はゞ、妾も人に告げざれば誰れとて其實を知り申すべきぞ、今の内にふつと思し召し止まり候へかしと、憚かる色なく述べ立てける、皇子之れを聞きて大に怒り給ひ、佩刀を拔きて童女君を斬り殺さんとし給ひけるに、童女君少しも

驚かず、徐かに手を束ねて、妾の生命を召され候とて少しも惜む所に候はず、唯妾は君の御爲め、國の御爲めに忠義を思ふの外何の餘念も候はじ、切に思ひ止まり給へと面を犯して諫めけれども、皇子尙ほ聽き給はず、終に大藏宮に據りて兵を擧げ給ひければ、大連大伴室屋及び東漢掬兵を率ゐて宮を圍み、火を放ちて皇子母子を燒き殺しけるが、吉備稚媛は蠢女君の申せしは是れなりと始めて思ひ當り、泣き悔みつゝ失せ給ひにける。

阿墨總子姫と云ふは阿曇連大濱宿禰の女なり、資性穎悟にして幼少のときより才智萬人に優ぐれける、應神天皇の御宇九年四月と申すに、大臣武內宿禰を築紫へ遣はして時情を按察せしめ給ひけるに、其弟に甘美內宿禰と云ふものあり、天皇に讒言を聞え上げけるやう、武內の大臣常に王位に心を掛け候ひけるが、這たび築紫に下れるを幸ひ、新羅、高麗、百濟の三國をかたらひて、君を圖り奉つらんと企て候ひぬ、速かに兵を遣はして誅伐し給へかしとぞ申しける、天皇之れを信じ給ひ、左らばとて兵を遣はさんとし給ひけるに、總子姫諫め奉つりけるは、甘美內が言誠しからずこそ覺え候へ、武內若し天下を望むの心候はゞ、君のまだ幼けなう在はしましけるとき、兎も角も致し申すべけれ、去るに君御代を知ろし召し給ひてより、眞心を盡くして政を助け奉つり、假りにも私の心とては候はず、特には畏きに筑紫に行き向はんとて、御暇申して退り出でんとするとき、御階の下に跪づきて伏し拜がみ、涙を流しつゝ立ち出で候を目のあたりに見候ひき、是れぞ忠節の誠ある確かの證なる、御思し返へさせ給ふへしと申しければとも、天皇聞こし召し給はず、遂に兵を遣はして武內を討たしめ給ひぬ、武內大に打嘆き、我れ君に對して二心なし、今罪なくして身を失はんとす、心うき事の極みなりとぞ申しける、其時壹岐直祖眞似子と云ふものあり、其容貌武內大臣に違はず相似たりき、其人大臣に申して云はく、かまへて遁れて都へ登り、罪なき由を君に奏したまへ、我れ大臣に代り奉つらんとて、進み出でゝ自から死しける、武內密に都に還りて事の無實なるを奏

しけるに、左らは眞僞を神明に質さんとて、武内兄弟を召し給ひ、礒城河の上に於て湯を探らせ給ひけるに、甘美内の詐り現はれけれは、武内の罪をは容るし給ひける、是に至りて總子姫の申しけるを當れりとて天皇深く感し給ひけりとなん。

（三）弟媛勸姉　橘媛代主

弟媛と申すは崇神天皇の御孫にして八坂入彥命の第二の御女なり、景行天皇四年の春美濃に行幸し給ひけるとき、弟媛の容姿衆に優ぐれたるを聞し召し妃に据え給はんとて御心を明かし給ひけるに、弟媛答へ奉つりけるやう、叡慮最と畏くこそ候へ、去れと妾は容貌醜るしく候へは永く宮つかへ奉つらんとも覺え候はす、妾の姉八坂入媛と申すは貌も美くしく心ざしも優さしく候へは、君願くは之れを召して宮人の數に加へさせ給へと申しけれは、天皇乃ち姉を召して妃となし給ひ、後ち皇后播磨稻日太郞姫の崩し給ふに及ひ、立てゝ皇后となし給ひ、其御腹に皇子多く擧けさせ給ひぬ、成務天皇の如き其御一人にそ在しましける。



弟橘媛と申すは日本武尊の妃にて在はします、景行天皇の御宇四十年と申すに東夷叛きけれは、天皇尊に命して之れを征たしめ給ひぬ、尊先つ伊勢に赴き、大廟に謁して戰捷を祈り給ひ、大倭媛命の貸し與へ給へる寶劍と燧嚢とを携へて、進みて駿河に至り給ひしに、賊佯り降りて尊を遊獵に誘ひ、火を野に放ちて燒き殺し奉つらんとせしかは、尊寶劍をもて草を薙ぎ、燧を鑽りて向火を放ち給ひしに、賊兵却りて焚け死しける、尊進みて相摸に抵り、海を渡りて上總に至らんとし給ひしに、會ゝ風波大に起りて船搖蕩せしかば、弟橘媛は是れぞ海神の祟りなると思し給ひ、尊に代りて身を海中に投し給ひけれは、忽ち風收まり波靜まりける、後ち尊碓

井坂に上り給へる時、媛を追悼して吾嬬嗚呼とぞ嘆かせ給ひける。

(四)狹穗殉兄　市乾殺父

垂仁天皇の皇后を狹穗媛と申しける、其兄の狹穗彥と云ふもの、皇位を簒はんと思ひ、或時皇后に向つて兄と夫と誰れをか心深く思ひ給ふぞと思ひ試みけるに、皇后何とも思さで、兄をこそ思ひまし奉つれとぞ答へ給ひにける、狹穗彥は實にも夫は我か色衰へず盛んなる程なり、我れ位に即きなば、此世に在はせん程は世の中を御心に任せ參らすべし、折りを見て天皇を失ひ奉つり給へとて、劍を取りて皇后に參らせける、皇后淺ましく怖ろしく思しけれとも、斯く言ひ掛けられては拒み給はん由も在はさず、常に御袖の中に劍を隱くして、隙やあると窺ひ居給ひけるに、翌くる年の十月、天皇皇后の御膝を枕にして假寢し給ひけれは、皇后今こそと思しけれとも、流石に御名殘惜しく思し給ひ、覺えず御涙はら〳〵と下りて天皇の御顏にと濺きかゝりぬ、天皇駭き覺め給ひ、朕夢に錦の色の小蛇我か頸を纒ふと見つ、又大なる雨の狹穗の方より降り來て我が顏に濺くと見つ、如何なる事にかと仰せられけれは、皇后顫ひ戰きて淚に咽ひ給ひ、有りの儘の事を申し給ひけるに、天皇聞こし召して此事皇后の咎にはあらすと仰せ給ひ、上毛野八綱田に命して狹穗彥を討たしめ給ひぬ、狹穗彥稻城を造りて拒きけれは、八綱田火を放ちて之れを焚かんと企たてける、皇后兄の死を哀しみ給ひ、其產み給へる皇子を抱きて城の中に入り給ひ、兄の命を赦し給へと嘆き乞ひ給ひけれとも、天皇狹穗彥の罪を惡み給ひて赦させ給はす　八綱田に命して其城を焚かしめ給ひけれは、皇后も今は是非なしと思して、皇子をは還へし奉つり、兄と共に焚け死に給ひけり。

景行天皇の御宇筑紫の熊襲暴威を振ひける、天皇親づから征たんと思し給ひ、周芳より豐の國に渡り給ひ、神夏磯媛并に鼻垂、耳垂、麻剝等の賊酋を平け給ひ、碩田の國に於ては靑打猿、白打猿、八田國摩侶等を誅し給ひて、日向の高屋行宮に幸し給ひ、密かに賊の狀勢を探り、衆兵を損めすして賊魁を誅せんとを計り給ひぬ、時

に一人の侍臣奏しけるやうは、賊魁に二人の女あり、姉なるを市乾鹿文と呼び、妹なるを市鹿文と申しぬ、此二人を納れて陽はに寵し給ひなば、賊狀を知ると必らす容易く候はんと、天皇實にもと思して其言に從ひ給ひけるに、姉なる市乾鹿文は深く天皇の恩寵に感激し奉つり、いかで宸襟を安んじ奉つらはやと思ひ立ち、天皇に請ひ奉つりて二兵を從へて國に歸り、父に酒を侑め、其醉ひ臥せるを窺ひて之れを刺し殺しぬ、左れは襲熊は平定せしかども、天皇子として父を殺すは不孝之れより大なるはあらしとて、市乾鹿文の罪を惡みて之れを誅し給ひ、妹なる市鹿文をもて火の國(肥前肥後)の國造に賜ひける。(父を殺すの一項名媛佳話としては少しく不倫なれども强いて對を求めしに依れば讀者其心して看玉ふべし)

(五)　正后育孤　廣蟲憐幼

淳和天皇の皇后は御名を正子と申し、嵯峨天皇第二の皇女に在はしましぬ、貞婉にして禮度あり、最も仁慈の御心に富ませ給ふ、天長九年の夏諸國大に旱りし、種々に祈禱しけれとも何の驗もあらず　民皆深く嘆き悲しみければ、皇后此由を聞し召して大に憐れませ給ひ、天皇に勸め奉つりて作役を罷め、囚徒を赦し給ひける、斯かる世の有樣なりければ生計に苦みて幼兒を棄つるもの多かりけるにぞ、皇后最と不憫に思し給ひ、棄兒あらば之れを收め、乳母を附けて養ひ育てさせ給ひ、御手元の費を節して之れに充て給ひぬ、又大覺寺の傍らに濟治院と申す一舍を建てしめ、僧尼の病あるものは之れを收めて療せしめ給ひける、斯かる御眞心の自づから天に通じけん、大雨降り荐りて天下を潤しければ民皆狂せんばかりに喜び勇みけりとなん。

和氣廣蟲と云ふは淸麿の姉にして葛木戸主と云へるものゝ妻なりける、弟淸麿と共に孝謙天皇に仕へ奉つりけるが、天平寶字年間惠美押勝の亂ありてより後ち、饑饉疫病など打續きければ民皆大に疲弊し、兒を育つると能はすして之れを棄つるもの往々ありしかば廣蟲聞きて深く之れを憐れみ、之を遣はして盡く拾ひ取らせ、乳母を置きて養はせけるもの八十三人の多きに及ひけ

れは天皇此由を聞し召して廣蟲の志を嘉みし給ひ、其子に葛木首と申す姓を賜ひける、後ち天皇淳和天皇を廢して重祚し給ひ、稱德天皇となり給ひけるが、御髮をおろし給ふに及び、廣蟲も亦た薙髮して名を法均と改めける、時に弓削道鏡天皇の寵遇を蒙りければ、私かに大望を起して皇位を簒はんと欲し、大宰の主神中臣習宜阿曾麿をして位を道鏡に傳へなば天下太平ならんと奏せしめける、天皇大に此言に惑ひ給ひ清麿を宇佐八幡に遣はして神託を請はしめ給ひぬ、清麿還り奏して申さく、我國古より君臣の分旣に定まる　道鏡人臣の身を以て敢て天位を覬覦すると大逆無道なり、速かに誅して禍根を斷つへし、神託正さしく此の如しと、憚かる色なく聞え上けゝる、道鏡色を變し齒を咬みて大に憤り、直に淸麿の官位を褫ひ、其名を穢麿と改め尙ほ廣蟲をも狹蟲と改めて共に遠島に謫しける、後ち光仁天皇の御時に至り、兩人とも召還されて夫れ〳〵に官位を授けられぬ。

○文苑

◉新竹　　下田歌子

わか竹は一むら雨の露の間に
千尋のかげとなりにけるかな

◉湊川懷古

みなと川水はかれても天地に
あふるゝものは誠なりけり

◉虎二十首　　佐々木信綱

風勁く草枯れ臥せる麓原
虎の足跡あり此處に彼處に

肉の翼うごかし尾を撃ちて
山の大君山川わたる

雪の夜を旗亭の酒にゑひしれて
張三李四の虎物語

恐ろしき虎狼も母のため

薪うる子は避くといふものゝ

虎をだに拂つへきそのこわれも
今日の今宵の別悲しき

虎おほき郡の民か虎よりも
おそれおのゝく田租の使

片破月天にかゝりて八峯八谷
喰ひ裂くへき虎の一聲

吼ゆる聲雷なせる虎すらも
ほゝゑむ乳兒はよそに見なす哉

虎の背に乗るや狐のわれゆかて
千里ゆかまく欲りする世人

山莊に吟する我詩聞めでて
今宵も虎の我門たゝく

一人かいふ市に虎あり又いはく
市に虎あり恐ろしの世や

霜くもり月くもる夜を若き虎の
吾妹にあふと八重山こゆる

虎にあはゝ虎をうつへく銃とりて

古き城訪ふ象の上の旅

そゝろく落たきつ瀧の岩角に
水のみあきて老し虎眠る

雲を敷きて結ふ道士の家の庭
虎の兄弟門衛りをり

五百重山千里をひ緊る竹村の
奥にそいます山の大君

つるしたる張子の虎の腹はなくて
猶虎鬚をさかたてをるも

梅ちりて買ふ人稀に店さきの
虎の子さひし春の夕風

人見れば人喰ふ虎もうるはしき
文のよそひを身にまとひけり

眠りよりさめたる虎の一聲に
風なりとよむ唐土が原

◉鶯十首　小池道子

のどかなる心の果やなかるらん
くれわたるまで鶯のなく

春雨に人けたえたる花園を
　こつたひくらす鶯のこゑ

鶯のなきて木つたふ聲はして
　雪しつかなる朝はらけかな

ゆくさきもかすみて見えぬ岡越の
　道の笹原うくひすのなく

燈火はまたあかけれとあけぬらん
　窓の戸ちかくうくひすのなく

隣より隣の花にうつりけん
　はるかになりぬ鶯のこゑ

雪をれの聞のみきゝし山里の
　竹のはやしにうくひすのなく

下草もみとりになりて櫻田の
　つゝみの松にうくひすのなく

花かけに友よふきけは鶯も
　ひとり遊ふはさひしかるらん

花かけに先ついざなはん鶯の
　聲をしるへに君かきませる

（竹柏園歌會兼題）

山

八十年へし老か心にかゝみやま
　たちよりて見んと思はさりけり　　久我建通

相模の海たひゐの宿に日かすへて
　朝夕あふく富士のかみやま　　東久世通禧

朝な夕なうこかぬ山をあふくかな
　みとりいろこき松のこすゑに　　津輕承昭

日に月にすゝみゆく世はいふせかる
　山さへひとのかよひけるかな　　水野忠敬

日の本のものとなりてそ世の中に
　いよ〳〵たかき新たかのやま　　諏訪忠元

高麗山のむら松こしにうらゝ〳〵
　雲井にはるゝ不二のしら雪　　末松謙澄

八十木種まきけん神もあるものを
　きりあらしつる山そおほかる　　千家尊福

折々の色はかへてもうこきなき
　山をこゝろにすめるひとつ家　　小杉榲邨

世の中に秀てし不二のたかねこそ　　松波遊山
のとけきみよの姿なりけれ

わけ入らん心はなしに朝ないふな　　三輪義方
見つゝたのしむ遠のやまのは

今はれし雨にうるほう青やまは　　小原頼之
あらひたること新らしく見ゆ

大和路のみつのみ山はわが國の　　根岸武香
みつの寶にそひてあふかん

月さむく水をてらして寂寞の　　上眞行
やまに一こゑ虎かあらぬか

天雲のむかふすきはみうしはきて　　塙忠雄
そゝりたゝせり不二の神やま

見えそめて舟のたよりとなるものは　　矢田香園
みなと〳〵の山にぞありける

年たてはまつふく風もしつかにて　　川島宗端
昨日にかはるのきのやまのは

人もかくあらまほしきを雲の上に　　又原保行
心けたかき不二のしはやま

あふき見る南の山のことふきを　　波多野英一
ことしの筆の始めにはせん

山の奥に尙もやまあり峯の上に　　山崎房吉
なほも峯あり雲のうちにして

由良のとをゆらきいつれは遙にも　　土田道一
ましろに見ゆる加賀のしら山

ふりさけて仰くにも猶あまりあり　　遠藤千波
これや我ともふしの大やま

ともしけき雪のみ山のふしのねを　　岡麓
うしはく神はひめみかみかも

鹿よけの垣をなほしてたかへして　　石榑千亦
けふもくらせり山畑のなか

市にすめと我心市のなかにすまて　　横山碩
わらはあつめて山やきつかむ

月讀の光さしたるまゆひきの　　森田義郎
横山あたりをしかなくなり

みる限みわたすかきり石かりの　　關屋祐之
山またやまはたゝゆきの山

天の下ひらけさるらし仙人の
　わけいりぬへき山なかるらん　井上公二

箱根山夜汽車の音のとゝろきに
　雲たちまよふ檜原かやはら　不破小士郎

よしの川霞みわたりて妹とせの
　山うつくしく若くさもえぬ　中澤弘光

山といふ山はあれともよろつよの
　國のたからはふしのたか山　大木俊九郎

仰き見れはいとも尊しかみ居ます
　御嶽のやまの峯のしらくも　金井宜卒

狼はよすから吼えて曉の
　月かけうすく山そあけゆく　高松春武

霞わけて前の小山にのほり見れは
　柳みたるゝさとのをちこち　大橋逍一

あきつ神大御車をとゝめまして
　國見ましつる越のよねやま　澤　弌

木枯はみねの梢をすさへとも
　うこかぬ山のこゝろをゝしも　栗田土雄

ふしのねにのほりて見れは高かりし
　こゝらの山の高くしもあらす　高見宏治

高き名は外國までもひゝくらむ
　我日の本のふしのおほやま　高木散二

ひと度は上らんと思ひし白雲の
　上なる山にけふのほりつる　龜山新一

人とはぬみ山のいほにすみなれて
　あけくれにきくさをしかの聲　池田宗鄰

谷水のおとはつき〳〵近つきて
　麓の小むら日はくれんとす　新井千源

むらやまに麓かさらせ雲ゐまて
　そひえたゝすも不二の神山　早川喜隆

巡禮のやまみちなれぬ二人つれの
　箱根八里に日はくれんとす　相馬御風

狼のうゑになく聲ものすこし
　月さえわたるあるたいの山　北條數馬

片岡のまつのなみ木に日は落ちて
　霞にきゆる小つくはのやま　鵜野了雲

掛茶屋のしふ茶すゝりて越ぬへき　　渡邊久國
峠のくもをあふき見るわれは

和田の原はるけき舟は雲かとも　　石川學造
みゆる山こそたよりなるらめ

とゝ松の木立さひしく月さえて　　吉數要
北のあらやま吹雪ふきしきる

水と空ふるゝあたりの雲の上ゆ　　石井正文
浮ひて見ゆるふしのしら峯

もゝかみの掟ひますらん中空に　　久米磐平
たかくたふとき不二の神山

あるふすの山のたかねに庵しめて　　酩樂坊乩郎
われもゆきゝの人を救はん

ふる雪にみやまの姿ゆたかにて　　大木永信
ゑによく似たり不二の神山

たなひきし雲の上にも白ゆきの　　森鵬路
つもると見しはふしの芝山

村山はすそわにありていや高く　　森和平
雲井にそひゆふしの雪やま

外國に十年くらしてけふこゝに　　佐藤芳保
なつかしふしの山あふき見る

山幾重谷またいくへ遠く〳〵　　笠原嘯多雄
たてるけふりや人のすめる里

戀しきはふるさとの山家にあらは　　松寺久雄
日ことあふかんふるさとの山

八重雲のとはりの中に鶴かひて　　高石武廣
ひとりすまはや山のいたゝき

山たかみ四方みさくれは心さへ　　大野燕
ひろくなりぬるを富士の白峯

白妙にふりつもりたるあさほらけ　　増山深雪子
をちの山々ゆきにみわたす

さしいつる朝日のかけにかゝみ山　　板倉止子
光かゝやくゆきのいろかな

のほらねと不二の高根にくらふれは　　諏訪晴子
あしから山は麓なるらむ

人ことにいひはやされて吉野山　　四升子
やまの心ものとけかるらん

うごきなき御代はきかほに見ゆる哉
　としたつけさの遠の山まゆ　板倉藤子

高砂のしま山とほく日のみはた
　かゝやく御代になりにける哉　中島歌子

ふたら山やま又やまにわけ入れは
　峯のうへにも嶺はありけり　水原未瑳子

外國にありもあらすも白雪の
　すかたよろしき山はふしのね　服部磯子

世中のたからの山やこれならむ
　白金こかねあまたいつるは　田中みの子

初ゆめのけしきをいさやゑかき見ん
　名もあたらしき山にならひて　小幡八重子

かはりかはる人のいく世をよそにして
　ふしの高ねはゑみつゝあるらし　大塚楠緒子

ましろなるふしのあなたに日はおちて
　墨繪に似たる冬木立かな　三宅良子

ゑをかゝぬ身さへ心にゑかく哉
　みるもけたかき葛城のやま　大竹伊勢子

山また山うちつゝきたる其かけよ
　わかふるさとの上つけの國　松浦島子

つらゝをり道たえなんとためらへは
　山のすかたも目には入らすて　金井紫子

初雪のふりかゝりたる築山を
　一日なかめてひとりくらしつ　堀孝子

よそよりは高からねともわか山の
　はるの光はかはらさりけり　加藤雛子

人の世のちりにまみれす梅か香の
　にほひにこもる山の上の庵　池田愛子

七とせを都にありてうちむかふ
　山めつらしきふるさとの家　淺井鐵子

とこしへにかけす崩れぬ山のこと
　高きをおのか心とはせん　坪野柳子

たきゝおひてくたる山路の夕けふり
　老ませる母のいへにまつらん　中村文子

立とまりこえこし方を見返れは
　いつしか山のなかはなりけり　久保花子

いはへ山そなたにめくる順禮の　　有賀晴子
旅路のはてよいつこなるらむ

けふりたつ淺間の山のふもと原　　市田と代子
しもとおしわけ一人ゆく哉

ふきおろす山風さむみ戸をさせは　　片山柳子
名もしらぬ鳥のなく聲のする

ふしの根の高根の雪をくもりなく　　花岡しん子
清くもてらす初日かけかな

靜けさに我聲さへもものすこし　　設樂御幸子
み山は神のすまひなるらん

白妙のゆきの玉きぬかさね〴〵　　清水銘子
くもゐにそめるふしの姫神

あけ渡る空ほの〴〵と打かすみ　　鈴木安子
山のみとりも春めきにけり

山かけにうつろひすみて既に六年　　佐々木響子
都のてふりかはりはてけん

眞砂路に歌おもひをれは海こしの　　印東昌綱
伊豆の遠山日はかたふきぬ

かや山のかやまりひらき子の爲に　　佐々木信綱
孫のためにと杉なへ植うる

竹

盥井福子

此の君よ、此の君よ、王子猷にはあらねど、世に竹ばかりめでたきものはあらじ、いみじきものは聞かじ、突然土を破つてめざしたるも、はやく他に拔き出てたれば、生れながらにふしをも保ちぬるよ。くろかみのみどりの色も、あつぱれめでたければ、培養せずしてのびゆくふしの、あはれいみじき。昨日土をもち上げしと見しに、今日ははやたけにとゞきぬるよ。內、しかも空虛、如何にさかるゝも。わらるゝも、つゆはづかしき色を見せず、眞すぐにさけ、ますぐに破る。而して世に破竹の勢ばかり、いさましきものはあらざるべし、世に破竹の聲ばかり、いさぎよき音はなかるべし。鶯も竹に生るれば、猛虎も竹に住む、四つめ垣のあらきも風情あり、枝垣のこみたるも風流なり、竹の折り戸、竹の椽、またをかし、まだ青竹の青きもこよ

なければ、古びたるも惜からず。切つて筆となる、大文豪も之れによつて金石の聲をはなち、能者も之を選びて玉腕をなす。林となつて、七のかしこき人をすまはせ、符となつて英雄が功を錄す。貧人をあはれみては、羅宇となつて、細きけぶりを立てしめ、枝となつては、老者を助く。世の憂きふしも、これに隔つれば聞えず、ちゞの思ひゝ之れにむかへばなぐさめらる。友として窓に植うれば、涼風ちりを拂つて、夏を覺えしめず、朝には朝日子の光りをきよめ、夕べには夕日のちりを拂ふ。春は花鳥の音を傳へ、秋は風の聲を知らず。霜さゆるもみどりの色をかへず、雪つもつて堪へざるも、己がすぐなるふし〳〵まげず、一聲高く千代の聲をはなつてくだく、わないさぎよや、天籟や天籟や、また何にか聞かん、浩然の氣、また何にか養はん、たゞ此の君に養はんのみ。此の君に聞かんのみ、强賊が保昌を伺ひ得ざりしも、此の君のふしのすみたればにて、敦盛があはれも青葉の笛にとゞまり、清少納言が英才も、あい此の君に聞ゆ。孟宗冬の林になきて、筍俄かに出でたるも、人の至誠の根に貫きしにや。あはれめでたき竹よ、くれ竹よ、あはれ此の君のはしになりとも身をなして、心のたけを貫かまほしや。

雪の深山路

宮澤すみれ

「雪支延着」と朱の文字にて手紙の上にかゝれたるを見ればまづ胸つぶるゝおもひあり、都よりきつる從妹の文、今一日おくれなば萬づ甲斐なかりしを、はた外なる新聞雜誌も、等しう大雪のため五日六日七日と一時に屆きて、いづれを先きにいづれを後にとまどふばかりなり、むべ新玉のとしたちてよりこゝ十日の中、旭のかげ拜がみ參らせたるは初夢むすびし明け方のみなりき、それより後は降りにふり、つもりにつもりて、風さへ加はり、天地の色を辨ぜず、門松もしめも皆埋り果てゝ、六日には屋上の雪を下ろしてけり、母屋納屋土藏の三棟、人みたりばかりかゝりて一日を要す、軒端をぐらうして、我が針もつ手許あやうくまして文字つゞる事は叶はじ、硯の水いたく凍りて、熱湯をそゝげど依然

たり、つめたき〳〵人の心にたとふべくや。吹雪といふものこそ恐ろしけれ、風の爲雪横ぶきに降りて道立ろに埋りぬ、萬づのうさつらさかく速かに葬らんにはとこの世の吹雪もやとおもふ、されどこは叶はぬ願なるらん。「ゆきづかへ」の朱の文字いと淺間し、去年なりけん、さる友の許より心をこめしおくりものありしが、小包も亦等しう延着の不幸に遇ふて、こなたよりの證狀一ヶ月ばかりの後におくれたり、かなたは暖かき國なり、雪の同情薄うしてうらみの文などたまはりぬ、雲や無情、友誼を害し親愛を傷く、うらやましきは京の雪なり、彼の御簾まきあげて御らんに入れし東山の雪よ、薄化粧の佳人にたとへんか、はたまた納言が勝を得たる雪山は殆ど兒戯に類するおもひあり、うらやまし、落陽の雪、うらやまし東都の雪、白雪を以て滿身の粧となす芙蓉の峯、御身はそれ形のすぐれたるが故に詩人の讃をうく、御身は幸運兒なり、自然は能く所を擇びたり、御身東海の濱に立てるが故にあらゆる讃美の聲をきくいたましきは我が山なり我が峯なり彼等もまた蒼天に聳へ且つ白皚々たり、唯ネーチユーアのそねみをうけて寒村に生れ寒谷にそばだつ、不運なる哉不幸なる哉、このものや唯一の希望唯一の快樂たる文のやりとりに猶雪づかへのつれなきありうらみなしとせんや、涙なしとせんや、我に罪なくして配所に等しき里住居、さはあれどしかはあれど、ホームの暖、能くこれに耐ふるに足る、皇天いまだ人間をして冷たき吹雪、つめたき深雪の爲、おもひなやまし給ふ薄きを謝す、こゝにも情あり、よろこびあり、歌あり詩あり、讃美あり、暫し雪支の苦痛を忍ばんか。

明石のおんかた

更科すみ子

京には佳人紫の上あり、多情多恨の宿世たりし夕顏の墓また東山の麓にあり　六條の御息所おぼろ月夜の内侍これ共に捨て難く忘れがたなの御契りや、藤つぼの上いふもかしこし、あれたる故宮に末摘花が身にあまりたる光榮蒙りしことよ、彼は終生世におくれ人にす

てらるべき女性なり、一代の光、一世のほまれたりし源氏に相見へしことのあやしさよ、名もなき草木のやむごとなき御手にふれておもはぬ幸をうくる世や。さても源氏罪を得て須磨にさすらひ明石の浦にあかしくらし給ふ程、頁清入道が娘に親しみ給はんとす、そもやこの入道といへるは嘗て顯官に上ぼりて、大内の雲近う侍りし事ありつれば、己は世を墨染の衣に念佛三昧の道者となるも、一女明石の上を佛門に入れかねて、猶且つ恣に天が下のほまれ、と富貴を得させんとす、妻亦等しう尼となるも、娘が光明の地位を得て、世にはゝゑまん日をぞまちにける、されば播磨の守何者ぞ五位六位何かあらん、不幸にして想ふが如き配遇者を得ずば海に投ずるも可なり、行きて龍宮の玉階にいたるべしなどおもふ、實にも源氏の漂流は彼によりて幸運の扉なりき、この門より明石の上必ず至大の幸福を得べしや、萬づに微妙なるは運命の神なりけり。二條院裡の佳人が悲歎、さすがに忘れ給ふ君に非らねど、旅ねの枕、おもはぬ罪を願ひ給ひてひたすら娘明石を見んとし給へり、「御心ちにもをかしと聞き給ひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりあはしたるも、さるべき契あるにや」と嘗て北山の物語を追想なし給ふはげに怪しき戀とやいはん。

時既に仲秋漫々たる青波を臨みて箏の御琴かきならし給ふ風情、御身これ悲觀のおもひにかられ給ふ折柄とて、優なるものゝ音、風松にかよひて岡部のひと、こよひ見ぬ面影にあこがれつらん、彼女もし夕顔如き唯優しくも節なき女なりせば直ちに君の御心に從ひ奉りて、おもふ儘なる愛をもうくべく、六條御息所の如き執着つよき人たらば、君をしてほとんど京の佳人を忘れしめ、明石濱邊のなさけに醉はしむべし、彼女は此の如き女性たらず、彼女は處女の如き嬌羞あり、彼女は預言者の如き先見あり、彼女は戀愛を解す而かも京の佳人をおもひて己れが才姿二つながらいと〳〵ひくう、終生この君の傍に侍りて以て限りなきの愛をうけんとは想ひ能はざるところ、彼女は早晩生別の悲しさを預想せり而かも彼女は「いと恥しげなる御文のさまに、さし

出でん手つきも恥かしうつゝましう、人の御ほど我身のほど、思ふにことよなくて」遂にうち臥したるこゝろにくさよ、君は再三再四御文をつかはし給ひて、切なる御心をほのめかし給へ共、頑として動かぬ、人のこゝろ高さ、高貴の婦人にもまさりて要意あり、節操あり、ねたましと迄おぼす。

前栽には虫の音高し、蕭條たる海上の月、江聲影に和して、三昧堂の鐘、折からもの淋しう、岡部の里の住居、なやましき迄君をおもはせ奉りしかな、かねての心くらべ、君負け給ふべくや、こよひむらさきの上が夢、いとみだれつらん、まことにあいなき御心のおになりけり。

さても源氏京に召し返へされて登り給ふ時の別れ路よ君、その途には美くしき佳人の嘗て一死を賭して猶別離のくるしみをいやさんとしたるがあり、これに見へ給ふ希望御こゝろに溢れつらんが、また暫しの御契りをわすれかね給ひて君あはれとおぼしめす、女はまして高き〳〵愛着の山より、海底千尋絶望の谷に墜下せし如く、紅涙滴々、彼女は殆ど狂ひの人たらんとす、而かも能く情を忍びて琴につたふる満心の哀、彼女はかねてこの涙を豫想せり、この苦痛をおもひたり、嗚呼愛情の果敢なき、よろこびあれば悲あり、なか〳〵におもひ惑らしゝ事のかなしさよ、げに昔はものをおもはざりけりとは明石の上をうたひしには非ざるか、彼女松風、江月を友とし立ちさはぐ浪とかたらひて獨り寂しき〳〵世を經んとす、あはれにも痛ましき哉この契りや、一扁の嬌羞なく、一條の覺悟なくば、彼女必ず狂の子となりて、海にや投ずべく、はた君が御袖にすがりて京のやかたに至るべし、彼女は能く位爵を解せり、彼女はよく運命を知る、彼女は二條院に於ける美姫の面影を豫想せり、何ぞおのれ賤しき濱邊のそだちを以て雲上の交りをせんやと彼女の心緒あはれむべく彼女の覺悟尊むべし、彼女は戀の不自然を願はず唯命運の導師をまてり、まことに氣高き女性、源氏物語中明石の上に並ぶ方なきを信ず、嗚呼三五二八の明月も亦かくるの世、人世の恨事すくなしとせんや、これ愛に於て最も説明多きを見る明石の上は即ち慘たる其一人なり。

さても源氏が御情とゞまりて、涙の人こゝに嬉しき呱々の聲をきくしかもうつくしき姫君なり、三月半ばこのよろこびぞある、明石の上が幸運つきせず、入道等が得意おもふべし。後迎へられて京の大井川のほとりにすみあけくれ姫君が養育に萬づのうさつらさ忘れつゝすごしけり、然れ共未だ二條院には引きうつらで源氏の君と交情益々切なり、君、紫の上をおもひ給ふ至情におとらぬはこゝなる桂の館にして、明石の上が要意あるなさけをしたひ、愛の姫君をいだかんとなし給ふこと切なり、この苦悶憂慮の中に兩者が相見へ相かたるのよろこび、蓋し二條の後宮にて翠帳紅閨の契、鴛鴦のふすまの夢結ぶといづれぞや、かれは相思の才子佳人が公に覩むべき宿世にして、こゝは悲觀の中に得し壯觀、冬がれ寒き川つらのあふせは温かき春のふすまに愛をかたらふよりたのしかるべし、明石はまことに水にゆかりある人、故山のホーム既に海濱、こゝまた假の京が宿りも大井川のほとりなり、山間の幽鬱なるに比して海のひろさよ、水のきよさよ、自然亦彼女に偉大なる感化を敎へて、運命てふものを傳へけむ、天然と性格兩者相まつ事多しときく、水によりて會得したる彼女が心、遂に妬心を容るゝ能はざりしなり。

未來の幸福をおもひて、姫君を紫の上にまかしゝ彼女が決心、勇とやいはん智とやいはん、彼女既に先見の明あり、己れを以てうつくしき紫の御上におとりたるものとなし、君が愛また御上に及ばざるものとなし、最愛の寶をさゝげたる義俠心、恐らく弱き女性として、かく迄私情私愛を忍び、萬づのアンビーシヨンを絶ちたる類すくなかるらむ、將してこの姫君花やかに養育され後、女御の位にのぼりて、一天萬乘の天子に近づき奉りぬ、明石の上は最後に勝利を得たり、入道地下に手の舞ひ足のふむ所を知らざるべし、才智にほこる世の娘よ、御身等靜かに明石の巻をよみ給へ、容姿にたかぶる世の姫よ、御身等靜かに明石の上をおもひ給へ、かくて、かくして最後に勝利を得給ふらむ。

山里の朝夕

柴生田鶴子

したしき家居ども、遠く離れたる、山住の朝ゆふは、如何にさう〳〵しくやおはすらんと、いてわふ人々の、まづぞいひ出つる言の葉ながら、春は、谷わひの細き道をたどりて、小草の花をつみ、さら〳〵と流るゝ流に、足ひたしてねぜりあらふ。夏は、ゆふけ早ものして、こゝの山、かしこの池と、ふくるまでぞさまよひありく。ゆふ風すゞしうわたりて、松のしらべもいとをかしう、さゞ波たつ池のおもわくだけて、ちる月の影もきよし。秋はた、あはれなり。花すゝきほにいでゝ、まねくゆふぐれより、まれ〳〵なりし人もとひきて、それよりは家のかきり立いでゝ、月きよきうしろの岡に、その影のかたぶくまで、虫のねをめではやす。となりの爺がもてこし、自慢のたなつもの、くりやにいそがしげなる、はしためが手にかゝるも、かゝる夜なりかし。人めも草もかれてゆく、冬のみはわびしきことのかぎりなれど、木枯の風に吹きしをらるゝ、木々の音をきゝながら、みぬ世の人を友として、すびつ近う、ひたやごもりに、春をまつもいひしらずかし。

すみなれてそのたのしみもおぼえけり何山里とうとみたりけん

いづくにも、ほど〳〵にと思ふまゝに、偏頗なき神のみ心もかしこうて。

おもかげ

去年より、いさゝかなやましげなりし、古郷の兄嫁とみに病あらたまれりとの、電報きたれるに、主人はいそぎいでたつ。さいつ日、もろともにかしまだちせしをりとは、やうかはりて、ふだんぎのまゝに二重まはし打はふり、小さきかばん只ひとつもちて、門にいでたつを、家主なるとなりのたれかれ、かけ来りて、留守の中どもは、我ら何事も心してと、例のまめやかにとふ。我は塀へがたうなりて、そかひになるほど、車は走りいでぬ。小雨すこししこぼれきて、大麻山の山おろしさと吹きつくるも、身にしみてわびし。旅居のたよりなきも一しほにて、古郷の近からましかはとのみ思ふ。暮れゆくまゝ

に、打そはるかぎりなき思を、せめてと打向ふ机の上には、波にゆらるゝ船のゆくへ、いまはの人の打かこみて、深き憂にしほたるゝ人々のさま、そゞろにみゆ。

思ひやる風あらき夜の波枕ともにあるよりくるしかりけり

なく孫をなぐさめかねる母君のやつれしおもはおもかげにみゆ

夢

水橋康子

あつき氷の下うちて
　かよふ流はあるものを
もゆる底をもとはすして
　たゝつめたしとなせしとや
花をさゝけてひさまつき
　涙もすそにぬくひつゝ
あつきくちひるほふにあて
　こゝろをとらぬゆへそとか
とつきゆかれし其夕へ
　いかにもたえしこの胸に
人もうらます身もせかず
　さためのすゑをにくむのみ
すみれもさきてこの春は、
　君のゆめぢはやすからん
なとてかこゝろさわがせて
　昔のはるをおもはすや

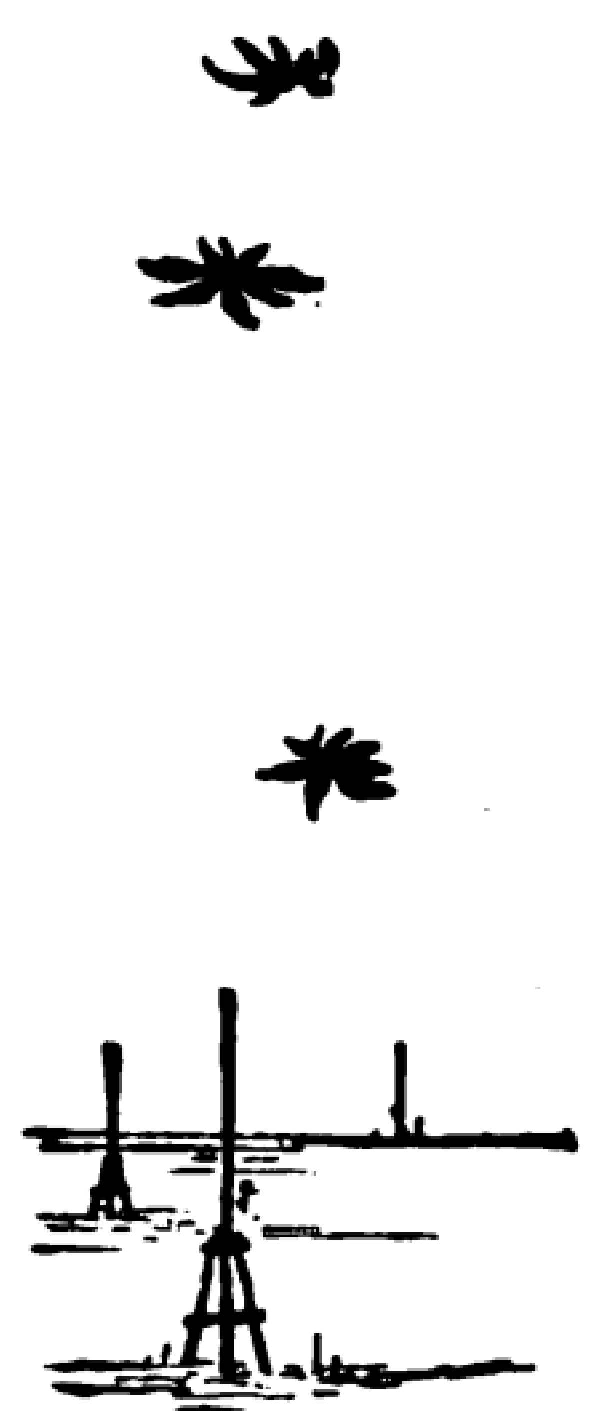
三保の松原（羽衣の曲）

さゝふね

治まる國の印とて、高く聳ゆる富士の巓、いつも變らぬ姿をば、田子の浦曲に宿しつゝ。砂は白く松青く、其名も三保の松原は、幾重ならびて末遠く、眺は清し清見潟。富士の高根を下し來て、浦曲をめぐる朝風に、歌ひる波の聲々は、琴のひゞきか鈴の音か。三保の松原松々枝の、上枝を渡る微風は、空に舞ふてふ天人の、うてる太鼓の音なるか。こゝら樂しき此の里に、古く傳へし羽

衣の、昔語りの一節を、歌に謡ひて聞かさばや。三保の松原松かげに、羽生の小舍のいぶせくも、暮らす一人の年若き、漁り男有りけるが。今日も手馴れし網をうち、やがて晝間になりしかば、根上り松に座を占めて、わりごの葢を取りにける。其時松の梢にて、いとも妙なる音樂の、響は高く又低く、耳を澄ますも心地よし。歌のひゞきと諸共に、降るは百千の花のみか、傳ふ薫は得も知らぬ、蓮か梅かさあらぬか、彼は怪しと顧みて、彼方此方を眺むれば、遙の松の一枝に、五色彩なす衣あり。歌のひゞきも此方よりぞ、花の香も此處よりぞ、彼は見るより喜びて、高く梢に上り行き、手にとり持ちて眺むれば、綾か錦かはた絹か。更に分かねど其脊には、鳥の翼の夫れならぬ、双の羽のありけるに、流石彼にも分りけん、話にきける天人の、羽衣こそは之ならめ。こは好き物よ之をしも、人手に賣らば我家に、黄金の花を開かせて、屋敷を廣むも手易しと。又喜びて羽衣を、抱きて家に歸りしが、其日は暮れて其宵に、誰とも知れず表より。戸をば叩きて訪ふに、今頃人の來るよしも、こゝの濱邊にすむ人も、絶えてなからん去り乍ら。開けて尋ねてやらばやと、見れば不思議や其人は、龍の都の乙姬か、天かけるてふ天人か。この眞夜中にたゞ一人、何處に行くべき御方にや、夜の小道は危ふしと、心づくして彼は問ふ。時に天女は鶯の、初音に似たる聲をして、妾は天の彼方より、先刻の羽衣を貰はんと、遙々遠く來にけるを、願ふは羽衣返してよ。かくと聞くより思ふ樣さては拾ひし羽衣を、今どり返しに來りしか、折角抱きし寶物。おめ〳〵返すも甲斐なしと、こゝに思案をめぐらして、素知らぬ顏に彼の男、知らずとばかり答ふれば、天女はいとゞ悲し氣に、知らずと君はのたまへど、三保の松原松ヶ枝に、かけし羽衣かくせしは 君より外にしる人も、又とり行きし人もなし、羽衣を賣りて金とせば、君はよけれど去り乍ら。我身は羽衣とられなば、今より下界の人となり、永く天には上られじ、願ふは羽衣返してよ。されども彼はかたくなに、返せと云へど羽衣は、いかで我家にある由も、隱せし事も有りはせじ。處違ひよ家違ひ 他にいゆきて問ひ給へ、我家でなしと言ひな

がら、戸をば閉ざして入りにけり。あはれなる哉天人は、衣のありか知りつゝも今は返らん術なさに、一人つく〳〵かなしみて。天には行けじ去り乍ら、下界に住むべき身に非ず、こゝは此身は清見潟、海に沈みて死せばやと。泣きて悲しむ其聲を、彼はきゝつゝ思案して、かくせし事を悔ひながら、いさ潔よく返さんと、一度閉ざせし門の戸を、急ぎ開きて砂原に、泣きて倒るゝ天人を靜によびて起しつゝ、命にかゝる大切の、天の羽衣隠しおき、知らずと斗り答えしは、あゝ悪しかりしゆるしてよ、彼の羽衣は今日の晝、三保の松原松ヶ枝に、かゝりし物を下し來て、明日は賣らんとたくみしも。みす〳〵茲に目の前に、かゝる難義を見し上は、などて何時迄かくすべき、羽衣はこゝに返さんと。奥の一間に秘めおきし、天の羽衣とり出だし、さも大切にさゝげつゝ、いざ召し玉へ天人よ。うれいに沈みし天人は、彼が言葉をうち聞きて、天にも上るうれしさに、幾度頭を地に付けつ。さても嬉しき芳志、この恩いかで忘るべき、君が羽衣賣るよりも、一層幸を参らせん。こゝに羽衣着かざりて、舞ふは嬉しき羽衣の曲、百千の花は降りしきり、歌のしらべは絶間なし。折から時はめぐり來て、夜はほの〳〵と明けの空、いつも代らぬうつくしき、旭日は浦曲の波間より。昇ると共に天人は、彼の羽衣をふりかざしいつしか雲間に入りにける、天花はいよ〳〵降りしきて。三保の松原松かげに、わびしく暮らす身のいつか、福はいよ〳〵巡り來て、三國一と名も高き、彼の富士が嶺と我富を、競ふも御代の徳なれや。



伊勢參宮（歷史地理）

文學士　喜田貞吉

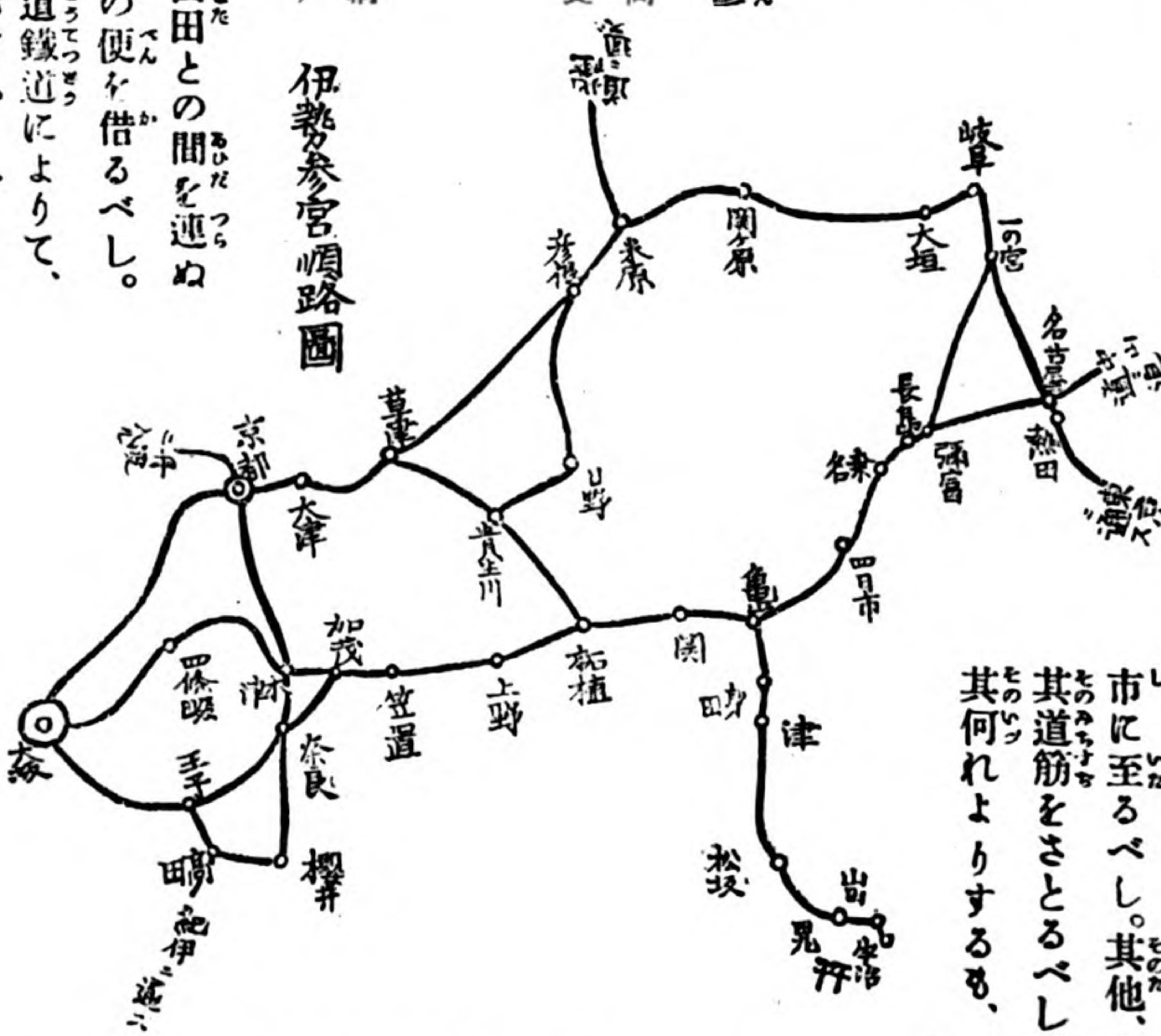
參宮街道には今は參宮鐵道ありて、參

一、名古屋―岐阜―米原―草津―京都―大阪間（東海道鐵道）
二、名古屋―四日市―龜山―柘植―加茂―奈良―王子―大阪間（關西鐵道本線）
三、一の宮―彌富間（尾西鐵道）
四、龜山―津間（關西鐵道支線）
五、津―山田間（參宮鐵道）
六、草津―柘植間（關西鐵道草津支線）
七、彥根―貴生川間（近江鐵道）
八、加茂―木津―四條畷―大阪間（關西鐵道網島線）
九、京都―奈良―櫻井間（奈良鐵道）他は略す

宮者の便に供す。參宮鐵道は、津市と山田との間を連ぬるものにて、津より手前は、關西鐵道の便を借るべし。

東京より參宮せんとするものは、東海道鐵道によりて、新橋より名古屋に至り、之より關西鐵道に乘り換へて

伊勢參宮順路圖



龜山驛に至り、更に其支線によりて津市に至るべし。其他、みな上圖によりて其道筋をさとるべし。其何れよりするも、一旦關西鐵道の龜山驛にいたり、それより支線に乘り換ふるものなれば、左にいさゝか、龜山以南の道案内を記し、以て神宮附近に及ばんとす。

龜山は、もと東海道の一驛にして、石川氏六萬石の城下なりしが、鐵道追分驛となりてより、

更に繁昌を增せり。

龜山の東北は、いにしへの能褒野の地なりといふ。むかし日本武尊、東夷征伐の歸路、近江にて病を得たまひ遂に此地にて薨じ給へり　鈴鹿郡川崎村田村の地に古墳あり、尊の陵所なりといふ。よりてこゝに能褒野神社を建てゝ尊の靈を奉祀せり。

龜山より下庄を經て、一身田驛あり。驛は眞宗高田派の本山專修寺の所在にして、寺は、もと宗祖見眞大師が、下野に創めし所なり。

一身田の東北の海岸、白砂連りて景勝の地なり、白子の濱といふ。もと伊勢平氏の本居の地にして、伊勢平氏に白兒黨といふは、此ほとりにありしものなり。かの宇治川合戰に、

しらこ黨、皆緋縅の鎧きて
宇治の網代にかゝりけるかな

と、一首の笑を殘せるは、此人となり。

一身田の次は即ち津市にして、藤堂氏三十萬石の城下の地城地の趣尙見るべし。此地もと安濃津と稱し、今は綟子、縞木綿の產あり。

津の東方の海濱は阿漕の浦にして、また景勝の地なり。古歌に、

逢ふ事もあこぎが島に引く網の
たび重なれば人もしらなん

とある所之なり。傳へいふ、此浦むかしは大神宮の御贄の魚を漁する爲に、禁漁の地なりしに、阿漕平次なるもの、夜に乘じて禁を犯し、遂に簀卷として海に投ぜられたりと。この事、淨瑠璃などにも作りて、周ねく人の知る所なれど、蓋し作り噺なるべし。

津より南の鐵道は、即ち參宮鐵道の線路にして、阿漕、松坂、田丸、宮川等の諸驛ありて、山田驛につく。

松坂は有名なる國學者、本居宣長の故郷の地にして、今は其靈を祀れる山室神社あり　松坂を去る一里半、山室村字高峯に、宣長の墓あり、門人平田篤胤の

なきからは何處の土となりぬとも
魂はおきなの許に行かなん

の歌を刻したる碑あり。松坂に有名なる松坂縞の產あ

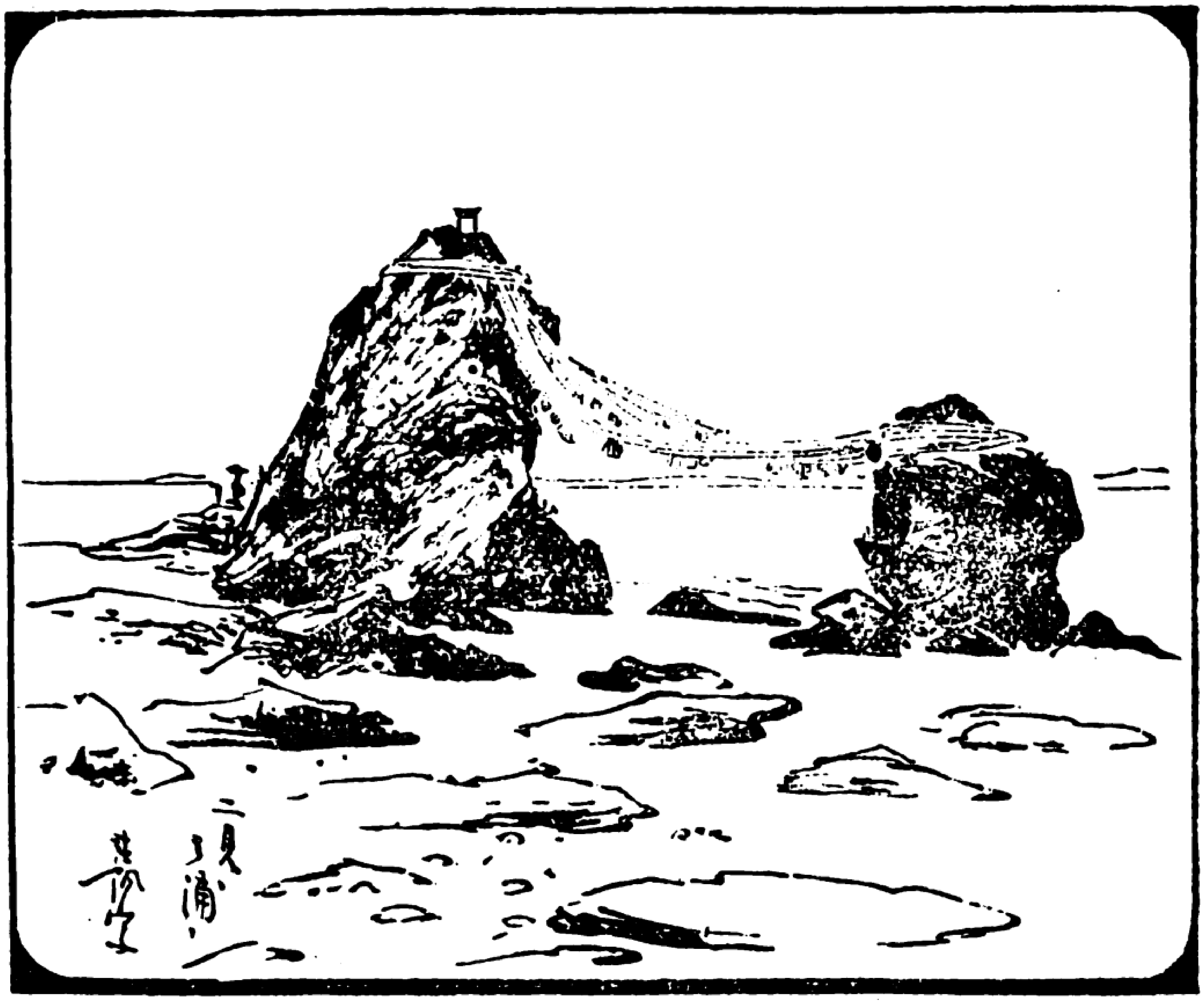
り。

田丸はいにしへ玉丸の御薗の地なりといふ。齋宮の舊址も遠からぬ所にあり。

宮川驛に至りて、宮川を越ゆ。此川源を大和境の大臺原山より發し、東流して海に入る、いにしへ齋主たる皇女、神宮に詣るの時、必ず此川に御禊して、御身の穢れを去り給ひしとなり。

宮川を渡ればやがて山田町なり。山田町は今は宇治町と合併して、宇治山田町といふ。

町に入れば先づ外宮に詣



づるを順路とす。外宮は山田町の南端にあり。外宮の參拜を終へて、內宮に到るべし。內外兩宮共に、殆ど全く同じ風の建築にて、正殿、東西の寶殿、四大殿、五大殿、外幣殿、其他攝社末社等、盡々く備はり、其建築たるや、所謂、底津岩根に宮柱太敷き立ち、高天原に千木高知るといふ、神代風のものにて、境內廣く老樹欝蒼として、境に入るものをして、知らず〳〵崇敬の心を起さしむるものあり。

彼の、西行法師の歌と世

に傳ふるものに、

何事のおはしますかは知らねども
　ありがたさにぞ淚こぼるゝ

といふもの、實に其眞を述べたりといふべし。外宮の宮域に接して高倉山あり。高さ僅かに二百尺にすぎざれども、樹木よく繁りて、神々し。山に、俗に天の岩戸といふあり。蓋し一大古墳の崩壞して、其石槨の口を露出せるものなり。もとこゝに小祠ありしも、撤去せりと云ふ。

外宮を出で、山田の町筋を東にすぐれば、相の山あり。宇治、山田兩町の境界なり。相の山には有名なるお杉お玉の小屋あり。こはむかしより有名なる錢貫ひにて、道に向つて三味を引くに、通行の人之に對して錢を投げつくるを、巧みに避けて身に當らしめず、錢を投ぐるものは、そを悔しがりて、遂に財布の底をはたくものもありしとぞ。今の世の人は、さる馬鹿げたる業を成すものも、少なくなりたればにや、お杉お玉も、いつしか變じて、三味線を引く一の遊藝人となり畢れり。

內宮のほとりには、神路山あり。五十鈴川其麓を流る。川は流れ小なれども、水極めて淸く、河底の細砂、尙數ふべし。川に宇治橋あり、橋を渡れば即ち神宮の境內なり。

よろづ代に君もすめとや五十鈴川
　したつ岩根のしき波の聲　家隆

內外兩宮の參拜終らば、健脚のものは、更に東一里、朝熊山に上るべし。山は志摩の境上あり、近く內海を見下ろし、遠く參尾の諸山に對し、眺望極めてよし。山上金剛證寺あり。山に有名なる朝熊萬金丹の本舖、野間國彥あり。此藥の好評なるよりか、近年同姓同名の人現はれて、町に此藥を鬻ぐあり。所行悄むべし。今聞く所によれば、この僞の方の店は、遂に繁昌せずして、近ごろ、他の伊勢土產品を賣る店と改まりたりといふ。神慮の程、さもあるべき事なり。

參宮の道者は、また必ず二見浦の風景を賞すべし。浦は山田を東に去る二里ばかり、東、伊勢の海の口にのぞみ、奇岩海濱に起伏して、眺め最も爽快なり。中に二ツ

の立岩あり、岩に木理狀をあらはし、極めて奇なり、其大なるものは高さ二十九尺、小なるものは十二尺、兩々相距る事僅に三間、注連繩を以て之を連結す。早朝之に向つて立てば、旭日兩岸の間に上る、大廟參拜者、歩をこゝにまげて、この日の出を拜するもの多し。

二見より小舟を雇はゞ、容易に志摩の鳥羽院に達すべし。鳥羽の日和山、眺望また最も佳なり。之より以南志摩の海濱、頗る奇景に富めども、參宮の道者の道序てに立ち寄るべきにもあらねば、すべて省略に附す。

參宮土產には、兩宮のお札は今更言ふ迄もなかるべし。神路山の榊の箸、朝熊山の萬金丹、紙莨入、各種の貝細工、春慶塗物、木綿眞田紐など、何れも參拜の道者の購ひ去る所なりとす。

蓬萊に聞かばや
　伊勢の初だより。

鮭のはなし（動物談）

林壽祐

お正月はもう濟みましたが、田舍ではまだ舊曆を守つて居られる所が多いから、東京のお方には少し御氣の毒でありますけれども茲に鮭の話をもつて參りました扨人世には、お芽出度い事が、數多あるが、先づ一月は、一年の始めであつて、四海の人民にとつては、最も樂しく、最も芽出度い時である。國旗はペラ〳〵と旭に輝き、松は綠りに、梅が香に、竹の操と、何れも皆芽出度いものばかりである。で此新玉の歳を祝はん爲め、色々な飾りものがある、先づ神樣の前には、大きな餅を供へられ、橙とユヅリハは、代々福德を讓り傳へる樣にと、龍蝦は、腰の曲るまで、丈夫て長壽をする樣にと、昆布は萬の事、喜ぶ樣にとの思意である。其他お正月田舍へ行くと、何れの家にも、大抵鮭が飾り供へられてある。鮭は實に、お正月に無かる可からざるが如くに、思はれてる程である。予はこれから、此鮭に就て、一通りのお談

を致し、諸孃の御參考に供へましやう。

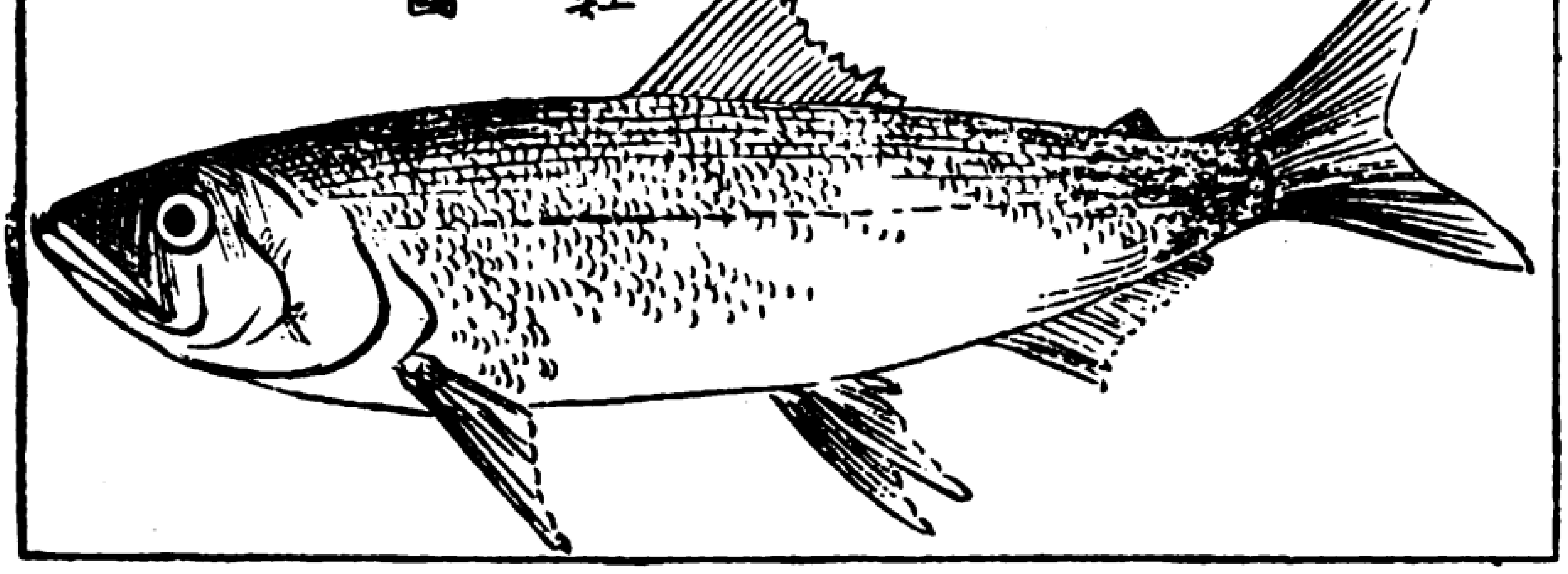
鮭は、身長く肉肥え胴少し圓く、往々三尺以上にもなる大きな魚で、形や〻鰹に似て居る、口には、細かい尖つた齒が、一面に生へ散らばり、鱗極めて細く、背は青黑色、腹は銀白色である、鰭は胴に合はして皆小いけれども、尾は巾廣い。此魚は、鹹淡兩水棲で、或時は河にあり、或時は海に居る。性寒水を好み、特に北半球北部の海洋に棲んで居る。我邦では、千島から北海道の全沿海、及び東山、北陸、山陰諸道の日本海方面に產し、仙臺以南には殆んど居らなかつたが、今は人工繁殖で、北上川、利根川から、ズツト內地の、日光、箱根等の湖水にまで棲息してる。けれども何處の鮭も、皆其品質が同じといふ事はない、所によつて悉く體形色澤が違つて居る。北海道西別川の產は、最も上品で、石狩川十勝川の產は其次である、形の大きいのは、宗谷海峽邊に來るものであるとのこと。北方根室灣は、鮭の夥しく群集するを以て、有名である。

總て魚類は、外形上雌雄の區別がつかない、生殖門は肛門と泌尿門との間にあるが、それでも容易に分らない、けれども如何なる魚類でも、雌と雄は必ずある、魚を料理する時に、シラコを有つてるものが即ち雄である。鮭は、他の魚類と違つて、顎骨、臀鰭、體色などによつて、雌雄が能く區別される、て雄の方が多いさうです。彼の鰻は、海で孵つて、河へ還り生長するが、鮭は反對に、河で生れて、海で生育するのである。產卵期は、九月から十一月の間で、此期節には、卵を產まん爲め、大群を成して、海から河の流れに遡り、途中で何んな障害物があらうとも、屈することなく、且つ餌を索むる方劃もなく、一心不亂と、意に叶ふまでは、遠く山間溪谷までも進むのである、若し瀑の如く急流な所があると、ピタリと尾を揮つて水を打ち、其反動力で、一丈以上も跳上るといふ勢である。で先へ先へと進むうち、適當だと思ふ所にいたると、其所に止まり、尾で砂を穿ち、卵を產み附ける、すると雄が後から廻つて、之に精液を注ぎかける、それでもう用は濟んだのである、直ぐまた大群をなして、海の方へ還つてしまう。餘り深く山奥に遡る

と、往々熊などに、漁さられるといふことです。卵は略ぼ大豆の大さで、一匹に凡そ二千粒許り、多いものには、四千粒からもある。兒は五十日位で生れ、始めの内は、躰が細くて、眼ばかし非常に大きく飛出てゝ、自分の卵を腹の所へくつけて游泳してるから、餘程可笑しい、それが日數を經るに隨ひ、ダン／＼躰内へ吸取されてしまつて、遂には全く跡形も無くなる。が幼いうちは、矢張り細長くて恰度メダカの樣である、て河の中で、一尺内外に生育すると、海にはいり、猶ズン／＼生長するのである。夏の間は、大抵海洋の深くて、冷たい處に居るさうです。

今は昔、北海道へ未だ内地人が行なかつた前は、非常に繁殖したもので、川によつては、數千萬の鮭が、吾先きにと溯り、爲に水の流れは沮められ、雨の降つた後の樣に大に水の容積を增し、若し川の眞中へ、棒を立てゝ置くと、鮭の衝當る爲め、多くは倒れてしまつたといふ程であつた、故に土人は、魚叉で突いたり、棒で撲ぐッたりして、容易に捕へたさうです、殊に甚しきは、手つかまへて捕へられた位。所が内地人が入り込んでから、精巧な網を張り、一時は驚くべき程の大漁をしたけれども、唯目前の我慾にかられ、期節も憚らず、幼魚も搆はず、張つて捕へられるだけ、捕へたから、渦まく程居つたものが、年々に少くなつてしまつた。これは獨り我邦ばかりでなく、西洋でも、慾張連の爲め、種の絶えるかと思はれるまでも減じたのである。今は何處の國でも、規則を發布し、捕漁期を定め或は川をしきりて、蕃殖場を設け、急流な所には土工を起し、水勢を弱けめ成るべく、鮭の群をして、溯り得るの便を與へなどして、大に之を保護してる。而のみならず、卵が唯川へ產附けられたまゝては、大水の爲め、流されてしま

鮭の圖



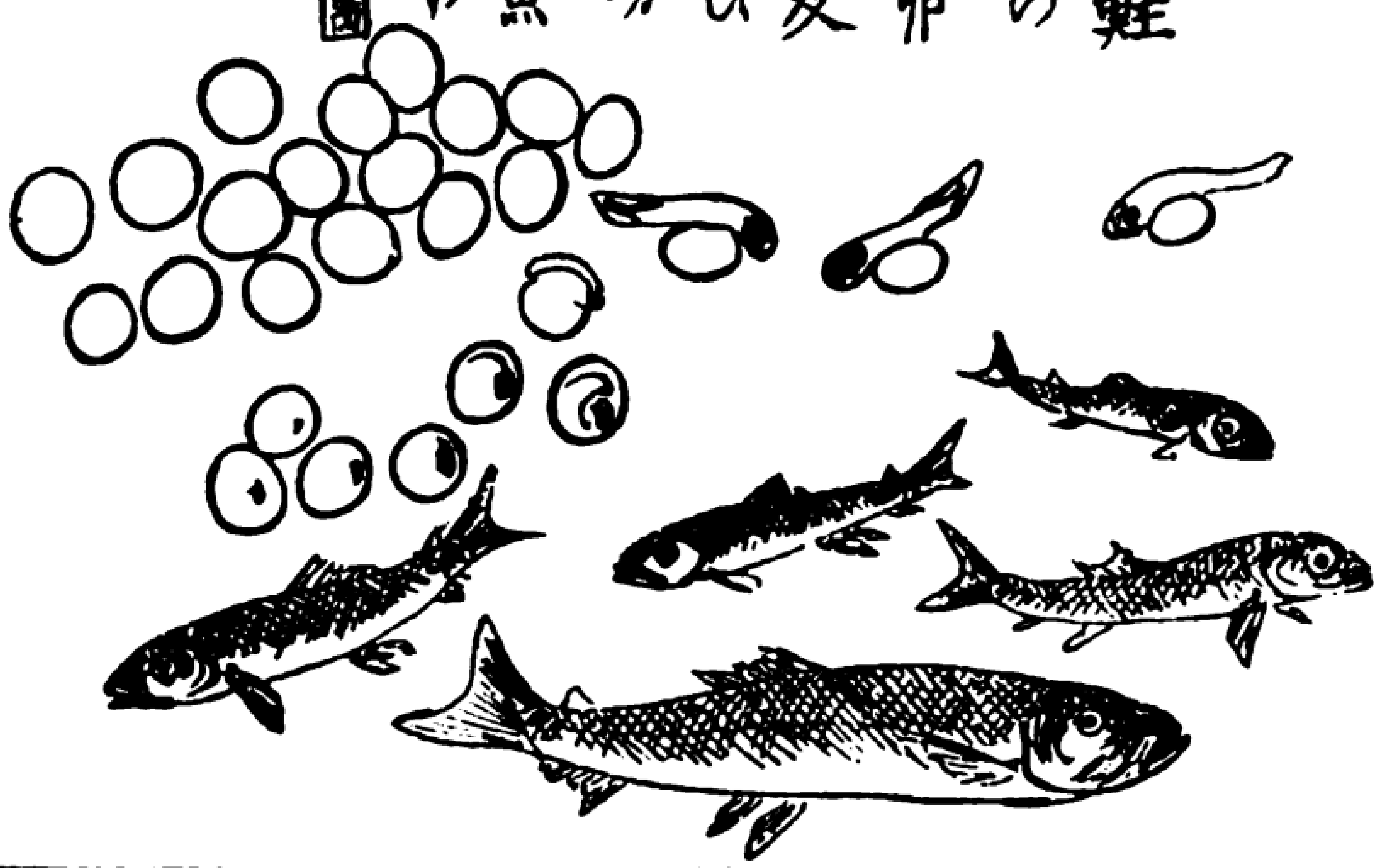
うか。他の魚類に喰はれるとかして、滿足に發育するものは、極めて少ない。故に人工受精法とて、雌の腹より、熟したる卵を出し置き、之に雄の腹から、しぼり取りたる精液を注ぎかけ、全く受精せしめたる後、孵化せしむべき器に入れ、絶へず淸水を流してやる、しかする時は、四十餘日で孵化する、之を懇に飼養し、四ヶ月位、略ぼ三寸許りの大さになると、もう矢鱈の他の魚類に害せられないから、蕃殖せしめんとする、河や湖に放ち、そうして其生育を保護するのである。我邦でも今より二十五六年前、始めて此受精蕃殖法を試みたが、ナカ〳〵結果がよくて、今では諸所の養魚場で行つてる樣になつた。鮭の卵は、箱に入れ、氷などて、冷やしさへすれば、數百里は愚か、數千里も遠い所へ、安全に移し行かれるのであるから、至極便利である。

鮭の肉は、赤くて脂肪多く、滋養分に富んで居る、鮭（今は鮭とも書けり）とは、肉が能く裂けるから、名づけられたといふ說である。生肉は味よくて、北海道や東山北陸道地方では、煮て食つたり、生で食つたりする。今は汽車の便があるから、生鮭も往々氷づめて、東京に來ることがある、而し生では、やす〳〵と、遠く暖國や、山國へ、持つて行かれないから、能くは鹽漬にする、冬の初め頃より、澤山東京邊へ來る所謂『鹽引』といふものである。これは鹽で二月餘りも漬けたもので、隨分鹽辛い、體は元來やゝ圓かつたが、非常に扁たくされてしまつたのである。『鹽引』は能く製すると、土用の熱い時分でも、ナカ〳〵腐らない。鮭はまた罐詰にして、遠く他國へ輸出し、大に珍らしがられる、其他酢漬、粕漬、味噌漬、或は乾鮭などにもせられる。我邦の鮭は、多く支那に向つて輸出する、現に鱈と共に、國産の一である。支那人はまた鮭の背や腸の漬けた物をも、好んで食ふさうです。冬になると、『數の子』といつて、粟粒の塊つた樣なものが來る、此ものも、子供が多く出來る樣にとの意味で、芽出度い時などのお膳に載せられるのである。世間には、之を鮭の卵だといつてゐるものがある樣ですが、決して鮭の卵でない、これは、同じく北海に夥しく産する、鯡の卵なのである。鮭の卵は、ズツト大くて、唐

玉蜀黍の實の如くにくつついてゝ、其色は恰度柘榴の實の熟したるより少しく淡黄色である而し一部分は甚だ赤くある、て煮ると大半は灰白色に變じてしまう、世に之を『甘子』とか『ハ、ラコ』とかいつて、味宜しい。『數の子』よりは、價も餘程高い、多くは酢て食ふが、煮てもよいのである。其鹽漬にしたるものを『筋子』といつてる。

鮭は、卵を産むと、肉に脂肪が減つてズット味がまづくなる、それゆへ卵を産む前、即ち一番脂肪ののつてる時、漁するので、大低九月下旬が最も盛てある。之を漁するには、昔北海道土人が、魚叉で突いた樣な、まだるいもので無い、多くは建網といふ大きた網で、鮭の産卵場を求めんとて、群を爲して通行する沿海を遮ぎり捕へるのである。其他

鮭の卵及び幼魚の圖



地曳網や、巾着網に似たるもので漁する。何れも捕へ方が速いから堪まらない、鮭は年々〳〵減るばかしてある、そこで之を保護蕃殖せしむるの必要が起るのです。歐洲などでは、鮪や鰹を釣る樣に、羽か角で造つた餌をつけて、湖水に居る鮭を釣るさうです、鮭を釣つてさへ嬉しいものが、二三尺もある大きな魚を釣つたら、それこそ面白いでせう。鮭は鯉の如く、往々パターリ〳〵と水面上へ跳反へることがあるさうです、早く東京の隅田川あたりへ蕃殖させて、釣りたいものですな、いや〳〵隅田川の樣な小汚ない水へは棲まれないのである。多摩川の樣な河で、水が澤山あれば上等である。日光の湖水では、既にはや、鮭釣をしてるさうです。

鮭に近い種類で、其形態習性から產地まで、能く似て居るものがある、即鱒で形は殆んど鮭の兒の樣である、けれども鱒の躰は、割合に幅廣くて、頭小さく、背に赤い斑あつて、腹は白い、肉は鮭より赤く、鱗は至つて細かて、直き剝がれてしまう。魚屋にあるものを見るに、剝がれて赤裸になつてるものが多い。卵を產むのは、四月から八月頃まてゝ、矢張り河上に溯つて產卵する、此魚は強性で、如何なる急流な所でも、勇を奮つて飛越へ、鮭よりも遙か上流まで進行する、春漁するを櫻鱒といひ、猶別に二三の種類がある。我邦では、千島から樺太の方へ多く產し、鮭と共に內地に輸出して、食用に供されてる。

鮭は、動物學上からいふと、魚類中の硬骨類、喉鰾族、鮭鱒科に屬するものである、鮭鱒科には、猶香魚、白魚等二三の種類が屬してる。喉鰾族とは、食道と通じてる、浮囊を有つてるものである。鯉、鯽、鰻、鯰、などは、別科の種類であるが、同じく喉鰾族である。鯛、鱸、鰤、笠子などは、鰾の中へ、堅くて銳い棘があるから、特に棘鰭族といはれ。鱈、鮟、比目魚、板魚、文鰩魚などは、鰾が柔かくて、中に硬い棘がないから、別に軟鰭族といはれて居る、けれども喉鰾族も、棘鰭族も、軟鰭族も、躰の中へある骨が、皆堅く丈夫であるから、骨硬類と總稱せられ、魚類界の大部分を占めて居る。鮫や鷂は、骨が軟かて、躰の構造が、是等硬骨類とは、大に異つゝ居る。で鮭鱒の如く、河の流れに遡るものを、一に遡河魚類といはれて居ります。

數多の魚類中、芽出度い時に出され、世人に尊重さるゝものは、海では鯛、河では鯉である。さうして海と河と兩方へ棲んでるもので、芽出度い時に出さうとするには、何んであらうか。鮭は、魚類中躰も大きく、形も優雅で、性質活潑、肉の味美しい、まア正月など芽出度い時、供へ飾るには、至極適當なもので有りましやう。

（了）

銅の話（科學）

淺野ふさ子

或日の夜の事でありますが、最早世間も靜まり所謂萬籟聲を收めたと思はるゝ頃、私が書見を致して居りますと、俄かに電話機の鈴が鳴りますから、受話機を耳に當てゝ聽きますと、細い聲で私を呼びますから誰ですかと問ひますと、私は電話線ですが、私の効用は世間の方々かよく御承知で御座いますが、私の出身の次第は御承知のない方が多い事と思ひますから、紹介して下さいと云ふのであります、

之は人の惡戲かと思ひましたが何にしても其話を聞く事と致しました

彼の電話線は辭を續けまして

私は決して眞鍮の樣な相の子では御座いませぬ、純粹な銅で術語でエレクトロ、コッパーと申すもので御座います、

私の生れたのは余程古の事で御座いまして、近來鑛毒事件で有名な足尾銅山の通銅と申します、坑内に生れました、私の朋友で脇に居りますのは、石英斑岩とか又石英と申まして至て堅い者で御座いますが、兄弟も大勢で私か一番の總領で黃銅鑛と申します、私の下には斑銅鑛、紅銅鑛、輝銅鑛、孔雀石等で御座いますが、私は從弟の黃鐵鑛と取分け仲善して御座います、

私と從弟も黃金色をして居りますので、口惡しき世間の人は馬鹿の金と云ふ異名を附けました、

從弟肖と云ひますか、實に私と黃鐵鑛とは能く肖て一寸見分けか附き兼ねます、唯私はアンモニアか大の嫌いで之にさわると青くなります、

通銅內に仕事して居ります、坑夫に見付けられまして、私は兄弟等と共に車に載せられ電氣車に別かれて初めて此世へ出たのであります、

山の中にては何分暗いので充分により分けか出來ぬので、撰鑛場で吾等兄弟のみを取り分けて冶金の方へ引渡します、此時には大なる塊りはなく大抵一寸角位になつて居ります、

塊鑛は初めに燒鑛爐へ入れて燒きます燒鑛爐の中では少量の燃料を媒として其硫黄氣を燒きます、ので御座います

燒鑛爐と申すものは煉化石(足尾ではカラミの煉化石を用ふ)て積み立てられた竈で、之が背合せに數十個列をなして居ります、先づ竈の下へ數層薪を積み其上へ大塊の鑛石を積み、上へ上へと段々少さな鑛石を累ねて下から火を附け、側面を閉鎖し、上のみ開け放して數週間より一ヶ月程燒きますと、鑛石は段々赤色に變し、私等は是か爲めに硫黄の大部分を失います、

此處で可笑いのは素人か時々此冶金工場を見にきますか、燒鑛爐から出る煙に咽びてクスン〳〵ト云ふて逃け出しますソコへ行くと職人はエライもので平氣で見回はります、

此死斯は即ち二酸化硫黄で御座います、此煙か一時世間て入ヶ間敷かつた者て、只今此死斯では脫硫搭へ導かれてこゝて石灰乳の爲めに中和されます、

坑内から出た粉鑛やら撰鑛場からの粉鑛は、燒鑛爐ては燒けませぬから反射爐の中で燒かれます、

以上の二爐から出たのは、赤色な塊と粉で再び之が車に乘せられて熔鑛爐に送られます、

熔鑛爐と云ふのは丈けの高い爐で、足尾で使ふて居るのは米國式で、爐の下部は水て冷やす裝置になつて居ります、かくしませぬと高き熱の爲めに爐が損しるからてあります、

此爐へ燒鑛と石灰石と石炭を互層に入れ下から點火して風を吹き込みます、此風を吹込む孔を羽口と云ひまして、足尾の爐には二十四の羽口か附いて居ります、又風は空氣壓搾機で壓縮した空氣を鐵管を通じて送るのてあります、

爐内にある燒鑛は高溫度に高められまして、其中の酸化鐵は石英石灰石と結合してカラミと云ふ一の化合物を作り、一方には私等銅は酸化鐵硫黄と團結して鈹となります、

假カラミと鈹とは比重は何れが多いかと申しますと、鈹の方が多いのでカラミと鈹とか爐底に液體て溜まる

と、丁度水銀と水とが一器に盛られた様に立派に分れます、即ち輕いカラミは上に鈹は下に沈みます、そこで高さの違ふ出口から二熔液を流し出します、

初めに上の口をあけてカラミを出し、之を直ちに水の管に流し入れ、水の流れる力で流し去りますと、カラミは拇指大の粒となつて遙か先の溜に集まります之は捨てしまいます、

序ですから申ますが此時に出來ますカラミは眞黑で、ガラスの様な光澤があつて誠に奇麗で御座います、十勝石によく似て居まして、若し是が大きな形でしたなら磨かれたら立派だらうと思はれます、鐵冶金の熔鑛爐から出るカラミにはなか〳〵奇麗なのがあります、

又鈹の方は上の口からカラミの出盡したのを見て、上の口を鎖ち下の口を開いて流し出します、此方は砂の型へ流し込みまして冷やします、色は黒褐色をして居ります、

此鈹の色合を見て銅の含有量を察し、含有量が少なくも五十パーセント以上になる迄熔鑛爐の內に入れて繰返されます、

此くして得られた鈹は、再び之をキユーポラと云ふ爐の中に入れて熔かされます

キユーポラと云ふ爐は鑄物場には何れもあるもので、足尾のは形が圓い筒で、此中へ鈹とコークとを互層に入れて點火し下から例の通り送風するのですが、溶けた鈹は爐の下の口から流し出します、此口は平生は內から流れ出ぬ樣に蓋がしてありますが、此蓋は唯粘土を其口の大さ丈けに丸めて竹の棒の先に附けて口へ差し込むで置くので、さて內から流し出す時に之を竹の棒で取り除けるのであります、

是に就いて面白い話は先達て若松の製鐵所の開所式の時に、此粘土が確かりと固まりついて、外から棒位でつついても取れませんでした、此事の爲めに素人の人達は大變な不手ぎわの樣に見て取り、新聞紙等にて八ヶ間敷出て居ましたが、實はつまらぬ事なので粘土が固まり着いたので當局者はとんだ災難を被つたと云はねばなりません、

キユーポラの中で鈹が十分に熔けると之をコンバーター(製銅爐)の中へ流しこみます、

コンバーターと云ふのは、鐵板を組立てゝ作りました爐で、前記の諸爐と趣を異にして水平の軸の回りに回轉する事が出來ます、即ち倒まに口を下に向ける事が出來ますのでコンバーターの名も之から出たのでありませう、

此爐はもとはベセマー銅を造る爐てありましたのを、佛蘭人のコンへと云ふ人が製銅に應用しましたので、形はよく相肖て居ります、勿論近來北米合衆國に出來たのは少し形が違ひますが一般に茄子の樣な形で其へタの處に口があり胴に水平な軸があつて、此軸が水力で必要の時に廻はります、足尾には蒸氣を用ひて廻はして居ります、專ら足尾のに就いて申け上ますと、直徑が四呎半許り容量が一噸半底から少し上の處にグルリと回りに風口がありまして、之から八封度の壓力の空氣が入り込みます、又爐の内部は足尾の山にある石英斑岩の分解したのを切り取つて之て裏をつけてあります、此石の厚さの略一尺ありませう之が緊要なものであります、

キユーポラから出て來る熔鈹は一寸其成分を申上けますと、

銅	百分中	五十五●
鐵		十七、六八
硫黄		廿三、二八
其他		

コンバーターの口とキユーポラの口との間へ金の鏈を渡してサユーポラの口をあけますと、熔鈹が流れ出してコンバーターの中へ入ります、此時は一條の火の川か出來るので奇麗な事は何とも云ひません、

適當の分量がはいつた處で、○をのけて下の風口から八封度の壓力の風を吹き込みますと、口から盛に白い烟と焰か吐出され又熔けた銅か雨の樣に吹き出されます、初めは鐵か焚へて酸化鐵となり碧色の炎を吐き、又白き烟は鈹の中にあつた亞鉛や砒素が焚へて揮發して行くのです、夫から漸々綠色の炎となり、再び碧色とな

つた時に、風を止めてコンバーターの口を少し下に向けて出來たカラミを流し出し、之を車のついた壺の中に流し込んで外へわけ、更にコンバーターへ固形の鈹を入れて口を擧げ再び風を吹き込みます、

今度は炎は初めは白烟と碧色の炎が出て薄赤に變じ次に褐色となり赤褐色となつた處で風を止めて熔銅を流し出します、

熔銅は此時は純粹にせられて居まして不純物の鐵や硫黄は皆カラミの方へ行つてしまいます、此純粹な銅を車の附いた大きな壺の内へ流し込んで鑄型の所へ曳いて行きます、

少し綠色がゝつた紺色の傍へも寄れぬ熔液が車の進行につれて四方へ溢れ出ては火の雨を散らす工合は一種の奇觀で御座います、

鑄型は鑄鐵で出來て居りまして、圓い臺の上に圓周に直角に並へてあるので、之へ一つ熔銅を注いでは回はし次へ注きかくしてよい加減にひえたのは、鐵の釣で型を跳返へすと銅は脫して水中に落込みます、

かくして出來た銅一個の重さは、二百七十五封度位あります、そして之はまた全く純粹の銅とは申せませぬ、銅器を造つたり又銅板にするのには充分ですか、電氣の導線とするのにはも少し人手にかゝります、

足尾の銅はかくして出來上り大部分は獨乙へ輸出されますが、一小部分は深川の溶銅所へ送られて此處て鑄直されて薄板の形となり、電氣分解にかけられて、中に含まれたる金銀其他の不純物とカソード銅(純銅)とに分れます、足尾の銅の中には少量の金銀が含まれて居りますのを外國へ輸出しますので向ふでは純銅より廉價に買ひ取りますし我國では徒らに金銀を無代價で輸出するのは誠につまらない事と考へます、何とか致して日本で電氣分銅を盛大に致したい事で御座います、

カソード銅は更に棒の形に鑄直して針金に引延ばされまして御覽の通りの私となるのであります、私の立身の次第もなか〱一朝一夕ではありませぬ銅の永話しを致しました左樣なら、と云ふ事で御座いました、右讀者諸君に御取次きを致します、

狐狗狸の話（理學叢話）

山梨師範講師　津田元德

身躰の衛生といふ事は、此頃世に行はれて、至極結構の事であるが、尙大切なる、心の修養といふ事は、何人もつとめないは、慨はしき事ではありませんか。身躰の衛生をなして、丈夫に幸福なる人となる如く、心の修養をなして、立身出世をなさなければなりませぬ。心の修養をなすには、先づ心を知らなければなりませぬ、必ず心の迷ひを去らねばなりませぬ、

庭前の林檎の實が、地上に墜ちたるを見て、はて何故であらうかと、疑ひはじめて、遂に此世界の物躰には、引力といふ、互ひ〳〵に引きあふ力があることを發見し、學術上に、非常の効益を殘した、世にも名高き彼の「ニユートン」先生が一日、

一生懸命で、勉强をして居た時に、どーか三分間此卵を煮て下さいと、其下婢より賴まれ、はいと承諾をして其卵を鍋中に投じたが、熱心に其研究に心を注ぎ居たりし際なりしかば、三分もすぎ、五分もたち、數十分も後に至りて、初めて卵が煮えすぎはせずやと思ひ出し、矢庭に鍋を下して、蓋を取りしが、あな不思議〳〵、卵が懷中時計に化けて、鍋の中に煮えもせず其儘にありました。

●

山の芋の變じて鰻となり、雀海中に入りて蛤となりし昔話はあれど、卵が懷中時計になりし事は、實に此度がはじめてにて、世界に珍らしい事であります故、如何に推理力の强き大先生も、はたと當惑もし、驚きもし、我ながら、茫然として居られしが、さて其傍に、何か白きもののあるを見出し、能く見れば、こはいかに、卵はちやんと行儀よく、其書物の横にありましたさうです。

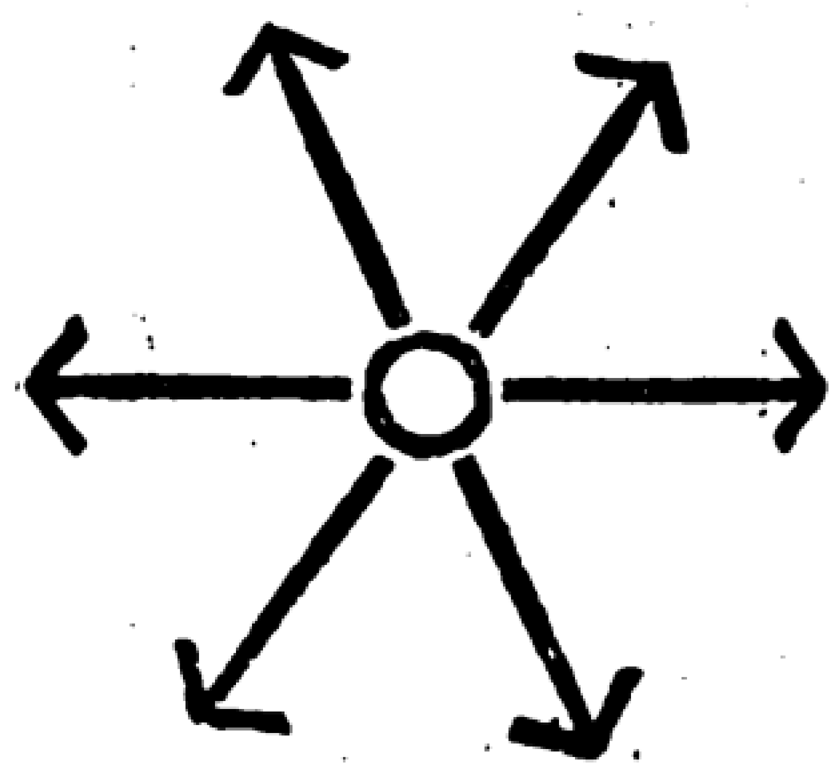
さて、何故に「ニユートン」先生は、卵と懷中時計とを間違へて鍋中に投げましたか、又之を入れる時に、何故に其形が見えなかつたでしようか、之れ全く、勉强に一生懸命となりて居た爲に、下婢の話しも、將た卵を煮ることも、總て、夢中でなされましたせいであります。

斯樣に、他の事は、耳にも入らず、目にも見えず、腹の

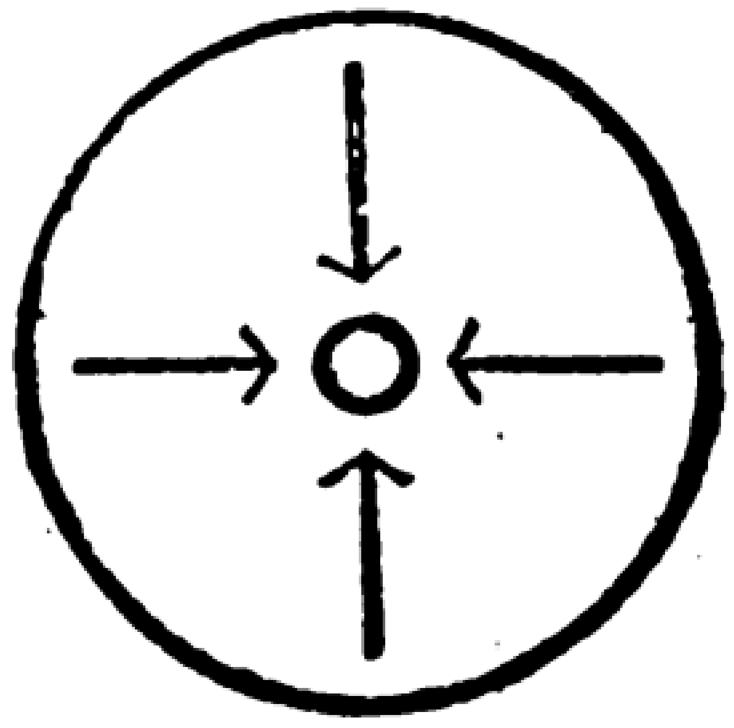
すきしも、風の寒さも知らぬ様になるまで、何事でも一生懸命に、其心を用ゐるを、名けて注意と云ひます。

圖に畫きて見れば、注意せぬ時は、心があちら、こちら、八方に散る事、丁度後光の様でありますが、注意の時は、心は一つの事に集りて、其事ばかりに、凝り固まつて居るのであります。

注意せぬ時の狀態



注意の狀態



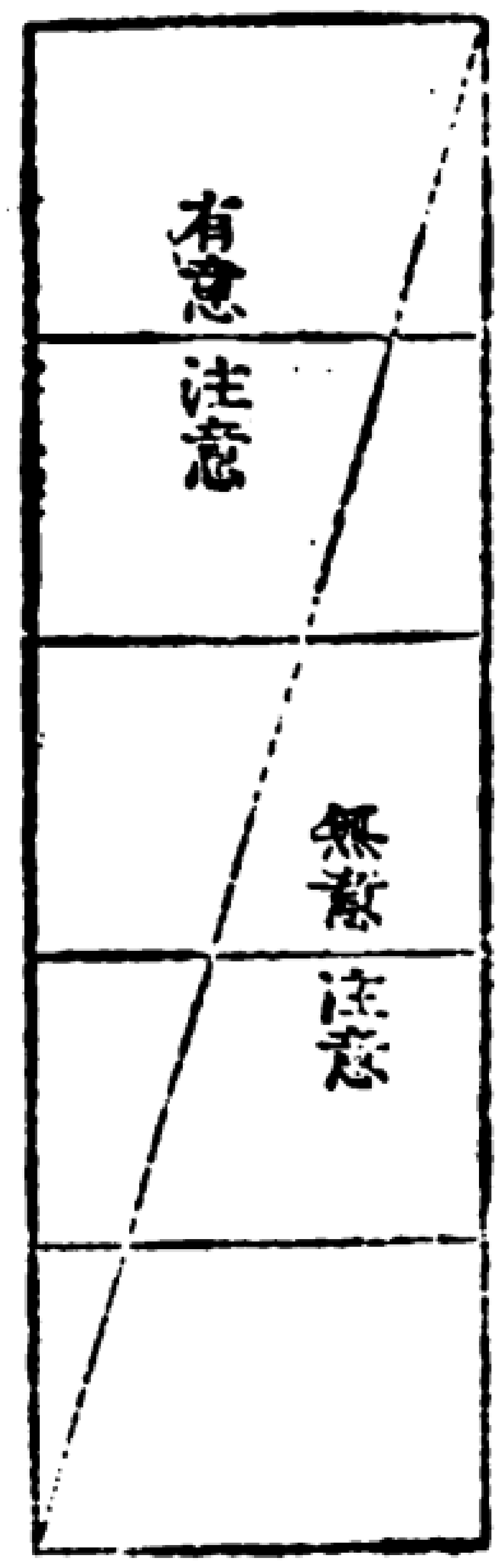
「ニユートン」先生は、下圖の様に、其注意力が、極々強いから、右の話しの如く、其考へた一方にばかり、心が行つて、其他の事は、わからなくなつたのであります が、弱い注意力は、平常幾らもあります、そら、表で大皷の音がすると、先生の話しは聞かずに、其方に心が行き敎場の外を人が通行すると、其方に目がうつるなども、其課業に注意する事が少ないからであります、算術の問題を考へて居ても、隣りの人の話しが耳につき、食事喇叭がなればよいがと思ふ様では、強い注意とは、申されませぬ。

かく、弱き注意力は外物次第であちらに向き、こちらにかはり、全く、外物の爲に左右せらるゝといふ有様故之を無意注意或は他動注意と云ひます、則ち、自分の心から出た、よき注意でなく、他の爲に動かされる注意と云ふ義であります。「ニユートン」先生の如きは、自分の心で強き注意をおこして、幾ら他のものが來ても、心を他の方にうつす事が出來ませぬ故、之を有意注意或は自動注意と申します。

小さき小供などが泣く時に、花車などやれば、すぐやめますが、又直に花車にも飽きて、おこります、何怒るかと思へば一寸した事で笑ひなど致しますは、心のまだ十分に發達しない故、此無意注意ばかりでありますからで、精神の作用の上等の人ほど、有意注意が強いのであります。之を圖にて示せば

賢…………………愚

大學・中學　高等小學・尋常小學・幼稚園



大人　青年…少年…兒童……幼稚

優…………………劣

此の通りで、賢愚優劣の別るゝ所以も、皆此注意の强い弱い多き少なきに基づきます。

獨逸の國の中で、一番つよく、且えらい學者達の非常に多き日耳曼國に、「ゴウス」といふ名高き算術家がありましたが、其奥方が、病氣であつた時に、勉强室で一心に考へ込んで居ました、すると、其奥方の病氣が、急にわしくなりましたと見え、下婢が急き來て、どうも、奥樣が御わるく居らせられます、と申しました、「うん」と答へ丈はせしも、先生は、彼の一心に算術の問題に注意する事とて、下婢が何を云ひしか、耳に入りませんから前の樣に勉强して居ました、すると又下婢が來て、どうか早く來て下さい、ひどく御わるく御座いますと、申しましたら、「今行くよ」と答へはしましたもの、の矢張り其答も以前と同じく、夢中でありますから、やはり平氣で、算術をのみ考へ込んで居ました、家內の方では、今旦那樣が入らつしやるか、今か／＼と待ちに待つても、どうも見えませぬから、一同大に怒りもし、又驚きもし、どうなすつたんだらうと、下婢などは足音も荒々しく、聲も驚く程大きく、「早く入らつしやらなければ、奥樣は死なれますよ」と申しましたに、先生は尙平氣で「行くまで待てと云へ」と答へられましたそうです。

如何に馬鹿でも、死ぬと云ふに、行くまで待てと言ふ人もありますまい、まして、大切な妻の死するといふ事を、眞に聞き眞に知りしならば、どんなに驚いて足も地につかぬ位にして見舞はれたでしようが、例の注意力か、算術の方にばかり、强く働いて、下婢の詞などは、一向耳に入らなかつた故に、かく平氣ですまし込んで居られたのであります。

家内の病氣に、かく平氣で居られては、よき事ではありませぬが、これは、最初下婢の言ひ樣が充分でなかつたせいでありまして、先生には、罪のない事でありますが、斯樣に、一心に意を注ぐもので なければ、右の圖の如く、とても、えらい人にはなれませぬ。

歐羅巴にて、近世の大學者の中でも、最も有名なる、獨逸の「カント」先生も、かく注意力をつゞくる事を、容易くする爲に、物を考へる時は、常に其眼を、近傍の寺の塔に付けて居たと申します。

かゝる大先生でさへ、此通りでありますから、學生などは、猶更の事、其何事を爲すにも、常に、此注意力を、強く永くする事を心掛けなければなりませぬ。

そうするには、此「カント」先生の如く、又前に話した「ニユートン」先生などの樣に、何事にも、一心不亂になりて、他より、如何なる事がさそひましても、心を向けぬ樣に、だん〳〵と子供の時からならす事が、第一であります。食事するにも、遊ぶにも、學ぶにも、其爲す事に一心不亂なる程、能き事はなしと、昔の賢き人も申されしました。

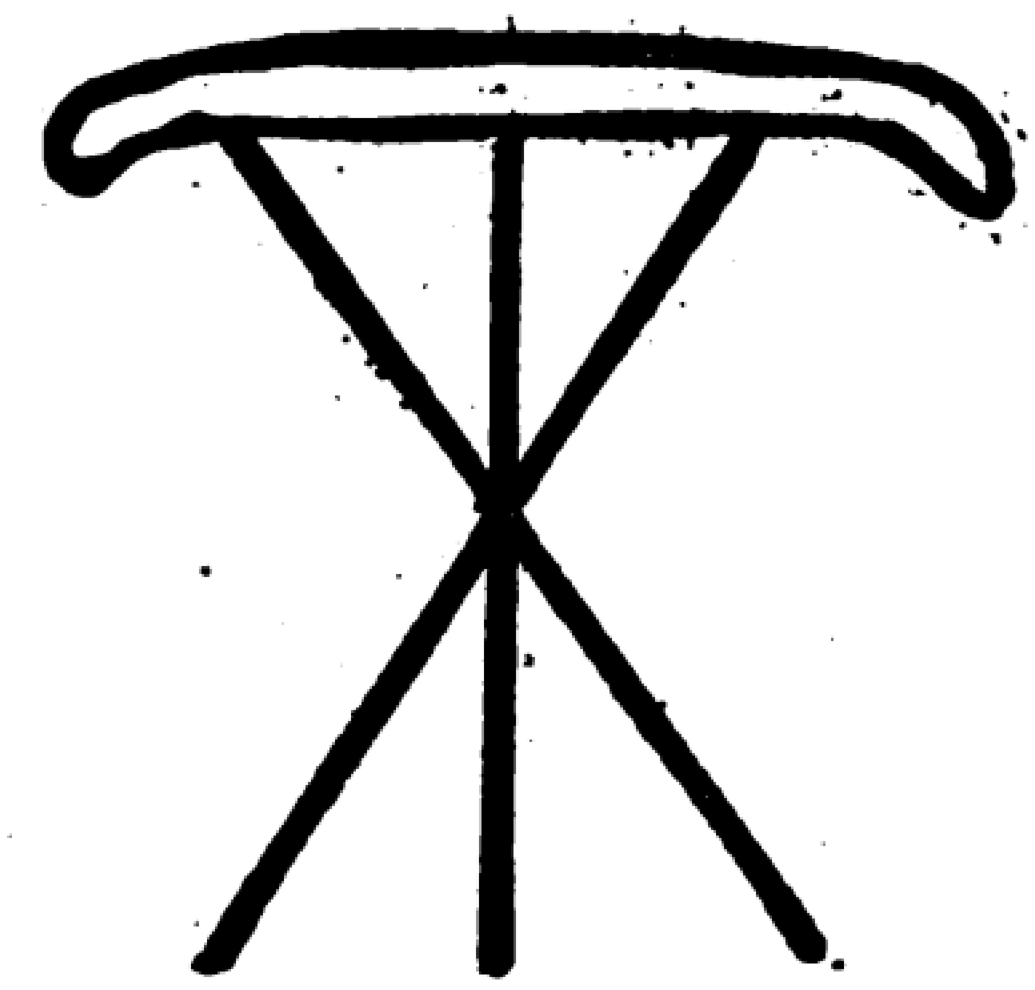
又子弟及學生を敎ふる、父兄、母姉、敎員等の方々も、子供の時は、此注意力が、永く強く續かぬもので、高々、五分か十分間でありますから、之を永く強く續かせる樣に、慣させるには、

初めから段々と、其敎へたり、話したり、見せたりする事に面白味を付ける事と、又其話し方、見せる物、敎へる道などを變化せしめて珍らしくし、時に休憩せしめて、其心の作用を、活潑にせしめ、又其他の方より妨げになるものは、一切之を除いて、其方にのみ、知らず識らず、自然に注意する樣爲ねばなりません。

此がよく行けば、商業上でも、工業上でも、又政治家でも、學者でも、何にても、えらい人になれます。

◉狐狗狸の事

世間に、狐狗狸さんと稱して、不思議なことがあります、一尺程の竹を三本つかねて、上圖の如く、其上に飯器の蓋などを置き、御飯などを供へ、さて、二三人の者が、其周圍に坐りて、兩手を其蓋の上に極々輕く置き、



「こつくり樣どーか早く來て下さい」と、一心に祈つて居る時は、二三十分間の後になりて、此三本足が自然と動き出して、座敷中をあるきます、「明日は天氣か否天氣ならば右の足、雨天ならば左の足を擧げて下さい」と云はゞ、どちらか其足をあげます、「何某の年齢は幾つか、其數ほど足を御擧げ下さい」と云はゞ、其通りに間違なく足を擧げます、實に不思議々々々、不思議とは、これらより外ありますまい、

　處が、此不思議も、前に申しあげた、强い注意の一種の作用であると云へば、諸君が、尚更不思議に思はるゝでありましようが、全くであります。

　西洋にも、此狐狗狸樣と同樣の事がありまして、「ファラブー」と申します學者が、別に器械まで作りて、注意力の一種だと證據だてました。

彼の憶病者が、こわい／＼幽靈が出るだらう、お化が出るだらうと、其事ばかりに、注意しますと、野原の草が幽靈に見え、郵便ばすとが、お化に見えます樣に、まだ、見もせず、出もせぬ者に、初めから氣を配り、强き注意をしますと、飛でもなき事を見ると同して、心の中で、是非々々、狐狗狸樣が、御出なさると、其事にばかり注意して手をさゝへて居る內に、手の神經は疲れて仕舞ますから、まるで、感じを無くします、處が其手をさゝへて居る本人たちは、こつくり樣が、來たらば、此が動くと云ふ考へが、强いものでありますから、其强い注意が感じを無くした手に、知らず識らず、うつり行きますから本人は知らぬのに、自然と、其手が、右の蓋を或は押し或は引き動かすのであります。

　丁度、「ニユートン」先生が、數學に注意したるに、其手は卵を入れた積りで、懐中時計を入れたと同して、こつくり樣に、注意が行きて居ますから、手が動かすのも知らずに、（勿論神經が疲れて居ます故、其手は動いても、これを腦髓に傳へずに）居るのであります。

か様なわけてありますから、此仲間になりて、狐狗狸様を、呼び出すには、神經質の人て、こつくり様の事を極々信仰しなければなりませぬ、狐狗狸様は、こう云ふ譯で、出來るのだと右の說明を聞た人達は、決して出來ませぬ。

これてありますから、學問は必要であります、お化もお化でなく、不思議も不思議でない様になります、學問の光りには、幽靈も何も正躰を現はします、從て又つまらなき注意はしなくなります。

「ニユートン」先生等の如き、能き注意は、幾らも永く強くせねばなりませぬが、無い事までも、こーだらうと心に待ち設けて强き注意をしますと、右のこつくり様の様に、驚いた事も出來ます、故に御互によき注意のみをなし、此心理の話しで、色々の不思議の事も正躰をあらはし、

幽靈の正躰見たり枯尾花

と申します句の通りにしなければなりませぬ。

まだ〳〵色々の面白く、爲になる話もありますが今不思議にして、世のお化と云ふもの、様な話を爲かけましたから、次の卷で、幽靈、狐つき、さては、犬神つきなどの正躰を枯尾花と見現はしましよう。

銀行の話（經濟談つゞき）

法學士　克堂主人

手形のこと

余は前回より銀行の話を始めて、既に其性質及び効用を略述したれば、之れよりは其業務、即ち營業とする所に付きて、述ぶべき順序なれど、其業務を說くの前に當りて、手形のことを一通り述べ置くの必要あり、ナゼなれば手形制度は今の經濟社會に必要缺くべからざるものにして、諸種の手形の割引は、銀行の營業中主要なる部分を占むるものなればなり、故に今此には手形のことを少しく述べ置かんとす。

手形とは何ぞや、之れを極簡明に申せば、即ち一定の金額が、相違なく支拂はるべき旨を明記し、指圖式、記名

式又は無記名式を以つて、發行する所の信用證劵なりといふべし、されば、手形は信用を以つて世上に流通せられ、以つて金融を助け、取引を簡便ならしむる等、其經濟上に便益を與ふるもの多きは勿論なり、今其効用の重なるものを述べんか、先きに銀行の効用を説くに當りて、略ぼ之れを述べ置きたるが如く、第一に現金受渡の煩を省くことを得、即ち隔地者間の取引に於て、送金の必要あるときは爲替手形を用ひ、又た凡ての支拂は、現金を手にすることなく、手形を利用するを得るが如きもの是れなり、第二に資本を增加することを得、即ち諸種の生産事業殊に外國貿易に於て、期限拂ひを以て商品を賣買せるときと雖、爲替手形を利用して、期限前に代金を手に入れ、以つて事業上の資本に供するを得るが如き是れ也、第三に資本の流通を便ならしむるを得、即ち爲替、約束の二手形共に、普通の借用證より勝りて、資金融通上に効益を與ふるが如き是れなり然れども之れ其重なるものにして、其他手形の使用の經濟社會に及ぼす所の効用、殆んど枚擧に遑あらざるべし、此の如く手形の使用法は、今の經濟界を裨益する多大なると共に、其の使用の巧拙は、亦た經濟及び事業上の發達に、少なからぬ影響を與ふるものあるを見るなり。

扨て手形の種類は、普通稱する所を以つてせば、爲替手形と約束手形の二種に限るが如くなれども、此の外に所謂振出手形及び荷爲替手形の如きも、また手形の一種と見做すことを得べきものなり、而していま我が商法(四三四)の規定により區別すれば、手形には、爲替手形、約束手形、及び小切手の三種ありとせり、手形のことは商法中手形の規定に支配せらるゝものなれば、余は左に商法を斟酌して以上三種の手形を最も簡明に說述せんとす。

◎爲替手形　とは、債權者が債務者に向ひ滿期日に於て一定の金額を第三者に支拂を委託する旨を記載せる流通證劵なり、たとへば、紫式部、清少納言、小野小町の三人の商業婦人あり、其間に取引を行ひたる結果、紫式部は淸少納言に對して十圓の物品を賣渡し未だ其

代金を受取らず、其代りに小野小町より又た十圓の物品を買入れて未だ其代金を拂渡さずと假定せよ、此の如き場合に於て、普通の手段を以てせば、紫式部は淸少納言より十圓を受取り、更らに之れを小野小町に渡すに非らざれば、其取引を完濟すること能はず、かくては其手數多くして不便に堪えず、然るに若し爲替手形を用ゐれば、淸少納言より紫式部へ送金する代りに小野小町に相渡して三者間の取引を皆濟することを得て、頗る便利なり、而して此爲替手形を使用するには、紫式部は淸少納言に宛てたる書付に此方へ御送金相成るべき十圓は小野小町に對して相渡されたく旨を認め、之れを小野小町に交付するものとす、此場合に於ては、紫は振出人にして、淸少は支拂人、小町は受取人なりといふべし、いま爲替手形の雛形を示さんか、

第壹號

一金拾圓

番號	第一號
支拂人	淸少納言
受取人	小野小町
日付	明治三十五年一月一日
期限	同三月五日限

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

印紙

爲替手形

一金拾圓也

y.10.000

右金額明治卅五年三月五日限り（若くは一覽後何日又は日付後何ヶ月等）小野小町殿又は同人指圖人へ大坂に於て此手形引換に御支拂可被成候也

明治三十五年一月一日

大坂市　紫式部

淸少納言殿

右に示せる如く、爲替手形を振出すに當りて、其の手形面に記載せざるべからざる要件（商法の規定）は左の如し、

（一）其爲換手形たることを示すへき文字、（二）一定の金額（三）支拂人の氏名又は商號（四）受取人の氏名又は商號（五）單純なる支拂の委托（六）振出の年月日（七）一定の滿期日（八）支拂地（九）振出人の署名

此の九要件を具備せざるものは、手形を成立するの効力なきものとす、

手形の仕拂の期日に四種あり、一覽拂、定期拂、日付後定期拂、一覽後定期拂これなり、一覽拂とは、何時にても手形を差出されたる時は直ちに仕拂はざるべからざ

るもの、定期拂とは、一定の期日を約して仕拂ふもの、日付後定期拂とは、振出日付後何日を期して仕拂ふもの、一覽後定期拂とは、先方に於て手形を一覽したる日より數へて、何日又は何月後に仕拂ふべきものなり、而して此四種の定めは劵面に記載するものなり、

又た手形を發行するには、指圖式と、記名式と、無記名式との別あり、指圖式とは「何某又は同人指圖人へ御支拂可被成候也」と記載するものを云ひ、記名式とは、何某へ御支拂可被成候也」と記載するもの、無記名式とは、特に受取人を指定せずして、只「此手形持參人へ御支拂可被成候也」と記載するものを云ふ、故に一を指圖式手形といひ、一を記名式手形といひ、又た一無記名式手形又は持參人拂手形と云ふなり、但し金額三十圓以下の手形は、之れを無記名式にて振出すことを得ざるの規定あり、

而して爲替手形を振出すには、一定の用紙（必ずしも政府所製のものを要せず）によりて、手形劵を作成し、之れを受取人に交付するものとす、之れを請取りたるものは、必ずしも此手形を名宛人へ差出して仕拂を受くるには及はす、此手形を以て更に他への仕拂を完濟するも、又た賣買讓渡するも自分の勝手なり、此時には其意思を表示すべき文句を裏書とすべし、裏書によりて轉々他へ廻はして仕拂をなすことを得るものなり、然るに此等の必要なり、支拂人より受取らんとするものは、其手形の裏面に表面の金額受取の旨を認めて、之れを支拂人に呈出し、引替へに支拂人より現金を受取るべきなり、（裏書々式は略す）

○約束手形　とは債務者が債權者に向ひ、一定の滿期日に於て、若干の金額を支拂ふべき旨を約束する流通證劵也、即ち爲替手形と、約束手形の區別は、爲替手形に在りては、第三者に對して支拂の委托を記載せる證劵なれども、此約束手形は自己が支拂の約束を記載せるものたり、是れ兩者の異なれる點なり、されば、爲替手形にては、振出人は支拂人にあらず、たゞ支拂人にて支拂を爲さゝる時は、其支拂の責任が振出人に歸することあるのみなれど、約束手形に在りては、振出人は

即ち支拂人にして、約束手形面上の責任は直接に振出人に在るものなり、たとへば、此に甲なる某女學校あり乙なる呉服商より、製作品の原料を仕入れたりとせよ、此の時即日に其代價として(金拾圓)を支拂はず、他日の仕拂を約して其證書を渡し置くなり、之れを稱して約束手形と云ふに外ならず、いま其雛形を示せば左の如し、

番號	第何號
受取人	呉服屋氏名
日附	明治三十五年一月一日
期限	同年三月五日

一金十圓也

第何號

印紙

約束手形

一金十圓也

¥.10.000

右金額明治三十五年三月五日限り貴殿又は貴殿の指圖人へ此手形引換に支拂可申候也

明治三十五年一月一日

某女學校

呉服屋殿

爲替手形に關する法律又は習慣は、多く約束手形にも適用せらるゝを以て、約束手形の説明は勉めて簡易にし、其爲替手形と著しき差異を述ぶる位に止めぬ

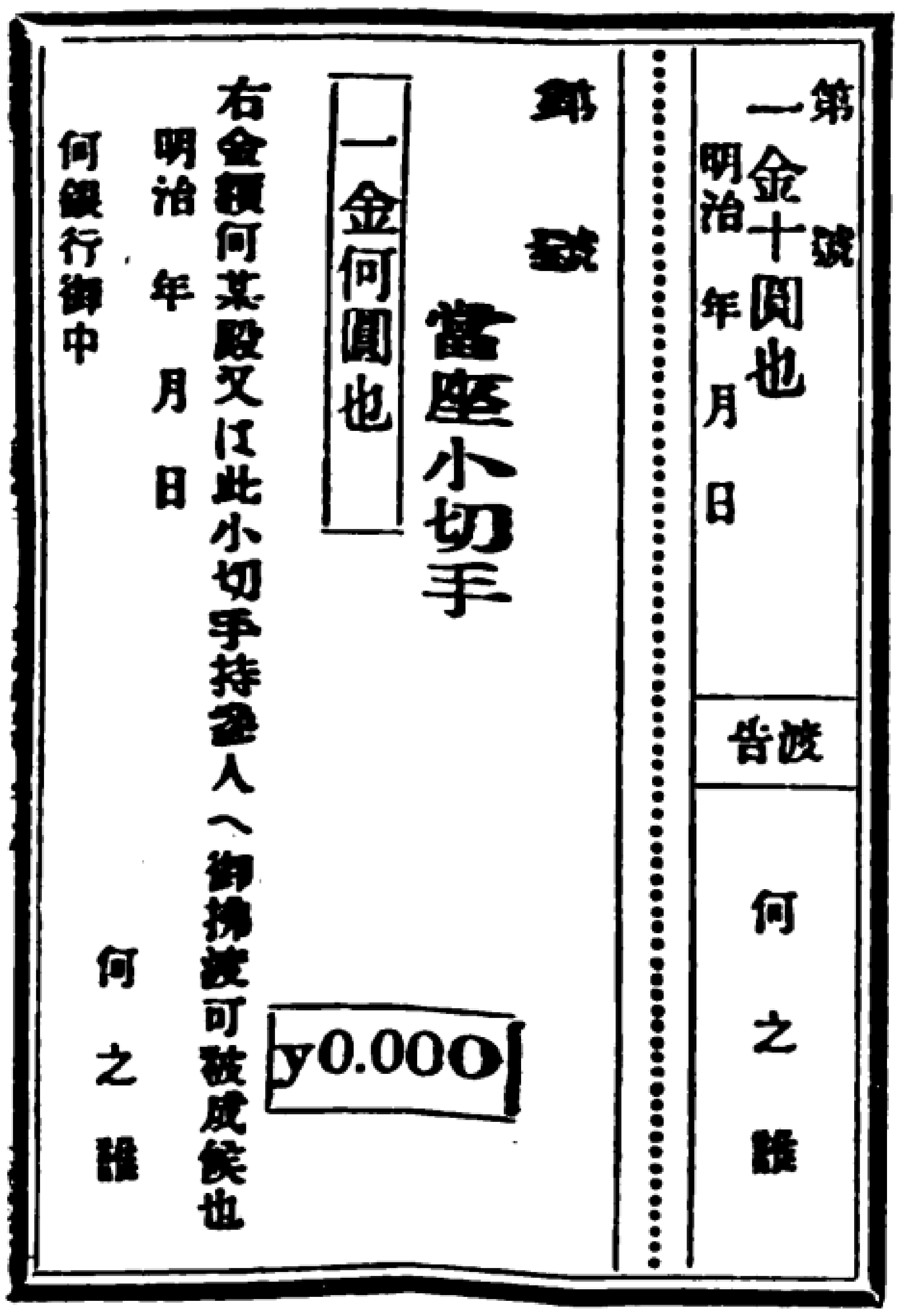
約束手形を振出すに當りて、其手形面に記載せざるべからざる要件は、左の如く商法に定めらる、

(一)其約束手形たることを示すべき文字(二)一定の金額(三)受取人の氏名又は商號(四)單純なる支拂の約束(五)振出の年月日(六)一定の滿期日(七)振出地(八)振出人の署名

而して約束手形を振出すにも、爲替手形と同じく、一定の用紙を以て作成し、法律上の要件(前記の八項)を具備せしめ、之れを債權者たる受取人に渡し、一定の期日に至りて支拂ふべきことを約束するなり、受取人は此約束手形を受取れば、其期限の來たるまで保存し置き、此の時に至りて振出人即ち支拂人に差出して、現金に引替ゆるを得べしと雖ども、若し受取人にして金融の都合によりては、此手形を以つて他の仕拂を完濟することを得べし、されば。滿期日に至るまでは、此手形も金錢の代用を爲すものにして、裏書によりて他に渡すことを得るは爲替手形と同じ、裏書によりて數次の移

轉（受取人の變更）を爲すも妨げなきなり、其裏書の書式などは、爲替手形の場合と略ぼ同一なれば此に之れを記すの要なし、其他大體にかいて約束手形と、爲替手形とは大差なきを見る也、

○小切手　とは請求次第一定の金額を記名の人又は其指圖人若くは持參人に支拂ふべき旨を當座預金主より銀行に宛て丶命令する所の證書なり、されば、自己の餘裕ある資金は、悉皆之れを銀行に當座預となし、凡ての支拂は、其必要に應じて盡く小切手を以て支辨することを得べく、小切手は最も輕便なる一種の手形なり、其雛形を左に示さむ


第　號
一金十圓也
明治　年　月　日
渡
告
何
之
誰

第　號
當座小切手
一金何圓也
右金額何某殿又は此小切手持參人へ御拂渡可被成候也
明治　年　月　日
何銀行御中
y0.000
何
之
誰

小切手の劵面に記載すべき要件は左の如し

（一）其の小切手たることを示すべき文字（二）一定の金額（三）支拂人の氏名又は商號（四）受取人の氏名若くは商號又は所持人に支拂ふべきこと（五）單純なる支拂の委託（六）振出の年月日（七）支拂地（八）振出人の署

小切手は前二手形と異なり、其支拂期日一定せざるを以て、其手形面に支拂期日を記載するを要件とせず、又た小切手も裏書によりて、之れを輾轉流通することを得、小切手に筋引小切手なるものあり、之れは劵面は二條の赤線を引きわりて、普通小切手よりも安全にして便利なる特質を有するものなり、

此の如く、小切手なるものは、最も便利なる一種の手形にして、之れを利用せば、最も輕便に、取引上の決算を完濟することを得べきものなり、されば、小切手は殆んど通貨に代用するが如き效用を有するものと言ふも不可なき也、（次號完了）

民法上の妻（附夫婦財産制）

法學士　永安晋次郎

婚姻には種々の條件が必要であるが、愈婚姻をして、女子が人の妻となつた時はどうかといふに、妻となれば、その妻といふ特別の身分に伴ふ法律の規則があるから未成年者であると、成年に達したるとを問はず、女子は又之に從て行かねばならぬ、

妻は前に一寸いふた通り、民法上無能力者の一であつて、假令滿二十年以上になつても、男子又は獨身者と違がつて、法律では無能力者として、或種類の法律行爲は自身の隨意に之を爲すことを許されない、必ず夫の許可を得なければならぬ、妻が未成年者であつて、夫が成年者であるときは、夫が後見人の職務を取るから（第七百九十一條）總ての法律行爲は、皆夫の同意を要するは元よりであるが、妻は假令成年に達しても、或種類の法律行爲は、夫の許可あることが必要である、之は甚だ不公平て、女權擴張或は男女同權などいふ論から見れば、如何にも聞へぬことのやうであるが、一家の和熟といふ點から考へると、斯樣にきめねはならぬのである、元來夫婦といふものは、互に相扶け相倚り和睦してゆかねばならぬ、最も親密なる關係があるものであるが、一國に二君なしといふと同じく、一家に主長が二人あつては、どうしても家が治つて行くものではない、夫れ故主權を握て居るものは、必ず一人と定めなければならぬ、然らばその主權者即ち主長たるべきものは、夫と定めるがよいか、又は妻とすべきであるか、純粹の理窟からいふたなら何方ともいへぬ、夫でも妻でも、家を治めて行く智能の十分備はつた者の方がよいは當然である然し之は各の家に就て、夫婦の何れが齊家の智能に長けて居るかといふ點を、一々比較せねばならぬ、然し斯樣なことは、到底實際上出來得るものではない、そこで多年の習慣に從て、夫を以て家の主長と極めたのである、夫を主長として權利を與へる以上は、妻は或種類の法律行爲をするには、自分の隨意には出來ぬ、夫の許可を要するといふは自然の結果である、即ち女子は女子

である、男子より智能が低いといふ譯で、能力に制限を加へるのではない、妻となれば妻といふ身分に伴ふ制限である、夫れ故女子も人の妻とならなければ、成年者は男子と同じく、法律は少しも能力に制限を加へるところはないのである、

然らば如何なることが、夫の許可を得ねばならぬか、先づ第一に說明を要する點である、之は民法第十四條に定められるところで、左の通りである、

（一）元本を領收し、又は之を利用すること、

元本とは、之を以て如何なる利益にても計り得るものである、動產不動產の如き有形のものは勿論のこと、形のなき權利でも、之を資本として利益を計ることの出來るものは、皆元本である、斯樣なものを他人より領收し、又は之を利用するは、一見損失は少しもないから、夫の許可を得なくとも、よささうであるが事重大に亘るところから、妻一箇の考に任せないのである、

（二）借財又は保證を爲すこと、

（三）不動產又は重要なる動產に關する權利の得喪を目的とする行爲を爲すこと、

土地家屋其の他重要なる動產の賣買、質入又は抵當など、すべて權利を得、又は喪ふやうなことを爲すには、夫の許可が必要である、この重要なる動產とは、如何なるものなるかといふことは、一々指示することは出來ない、其の家の貧富によりて同物でも、甲の家では重要なものとしても、乙の家では重きを置かないことがある、又其の物の履歷から、一方の家では由緒ある貴重品としても、他の家では何とも思はぬ物もある、その關係によりて定まるので、一般に重要不要の別は立てることは出來ぬ、各〻の場合によりて定める外はないのである、

（四）訴訟行爲を爲すこと、

（五）贈與、和解又は仲裁契約を爲すこと、

和解とは爭を起したる當事者が、互に讓步して、其の間に存する爭を止むる契約であつて（第六百九十五條）仲裁契約も之に類似して居るが、其の和解と異な

るところは、仲裁契約では、仲裁者は、往々一方のものに、全く理なしと斷定することもあるから、和解の如く雙方讓步することは、いつもあることでない點である、然しながら何れも贈與と同じく、權利を他人に讓るといふ點に於ては、同しことである、夫れ故夫の許可を必要としたのである、

(六)相續を承認し、又は之を拋棄すること、

相續を承認することとは、一見利あつて損なきが如くであるが、若し被相續者が、大なる債務を負擔して居るときは利益とはいへない、且つ相續のことは、その手續も非常に繁雜であるから、之れ又夫の許可を得べきことゝしたのである、

(七)贈與若くは遺贈を受諾し、又は之を拒絕すること、

他人から贈與を受け、又は遺物別を貰ふことなども、損害を受けることはないから、夫の許可を得るといふは、不必要のやうであるが、夫と贈與者との或關係上、夫が之を受けることを好まぬ場合にも、妻が之を受けるといふは、一家の和熟に關係を及ぼすからである、

(八)身體に羈絆を受くべき契約を爲すこと、

妻として夫の許可もなく、身體の自由を束縛せらるゝ如き、契約を爲し得ざるは、元よりである、

妻が法律上夫の許可を受くべきことは、以上列擧した八の場合である、若し之等のことを夫の許可なく爲せば、取消すことが出來る、(第十四條第二項)其の取消權は妻本人は勿論のこと、夫にもある、(第百二十條第二項)但し妻が夫のない獨身者の如く信せしむる詐術を用ゐて、相手方を欺たときは、取消權のないことは、前に未成年者に就て說明したと同しことである、然し妻と法律行爲を爲したる相手方が、夫の許可なくして爲したといふことを知たときは、何時取消さるゝや不安心であるから、一ケ月以上の期間內に、夫の許可を得て之を追認すべき旨を催告することが出來る、若し妻が其の期間內に、夫の許可を得たる通知を發しないときは、取消したものと看做さるゝのである、(第十九條第四項)

此の如く、妻は或行爲を爲すには、必ず夫の許可を必要とするが、營業を爲すことを許されたる妻は、未成年者の場合と同じく、其の營業上のことだけでは、完全なる能力を有するものと同一に、法律行爲を爲すことが出來る、民法第十五條に「一種又は數種の營業を許されたる妻は、其の營業に關しては、獨立人と同一の能力を有す」といふはこのことである、此の獨立人といふは、夫なき女子といふことではない、完全な能力を有する人といふ意味である、夫なき女子といふことにすると、未成年者、禁治產者、準禁治產者をも含むことゝなり不都合である、

然しながら夫は妻に、一旦營業を許しても、必要と認めた時は、何時でも其の許可を取消し、又は之に制限を加へることが出來る(第十六條)

右の通り、妻は夫の許可なければ、或法律行爲は出來ぬが、夫が未成年者であつたときは、夫も亦法律上無能力者であつて、總ての行爲を自分一己の考では出來ない、必ず法定代理人の同意を得る必要があるから、此の場合には、妻が夫の許可を得ても、その夫の許可は法定代理人の同意があつた上のものでなければ、又取消さるゝ虞がある、之は心得べきである。

魚類の成分（家政）

高木とし子

▲生魚

總じて魚類は甚だ腐敗し易きものなり隨て坊間往々不良品を販賣す故に十分注意せざるべからず凡て魚類を撰擇するに簡便にして且信據すべき徵候は第一に眼の玉の光輝ありて突出すること幷に腮の鮮紅を呈して强靭なるものは新鮮なるの徵候なり、身の强硬を失して淡藍、眞珠樣の觀を呈する者は食料に適せざるものと知るべし。但し扁魚は長魚に比すれば稍や久しきに堪ゆるものなり。扁魚とは鯛、比良目の如きを言ひ長魚とは鰯、海鰻の如きをいふなり、魚肉中に白色のものあり多少紅色を帶ふるもの、幷に脂油に富むるものあり、白

肉は紅肉に比すれば味一般に淡白にして消化し易し、且脂肪も少なし、脂肪少なきものは脂肪多きものに比すれば消化し易きと常とす、紅肉魚(例へば鮭の如き)は其外觀滋養共に獸肉に類似して、脂肪全身に存す、然れども鱈の如きは脂肪唯肝臟の一部に貯留するのみ(肝油と稱して坊間に鬻ぐものは鱈の肝臟より採りたる脂肪を製造したるものなり)扨又食用に適する魚の品位は產仔期に關係し、季節の異なるに從て著しき差等あり一般に產仔前は魚躰の最も完備せる時節にして脂肪に富み味美なり、俗にこれをシュンといふ、產仔期中は豫備の脂肪分を失ひ、衰脱して無味となり、甚だしきは食料に適せざる事あり、蓋し魚の味は大に餌食の性質に關係あり、水深くして潮流急激の所に捕へたる魚は、水淺く潮流緩慢なる遠淺に於て得たるものに較ぶれば槪ね味佳味なり、俗に荒海の魚の味美きといふは是なり、淡水魚即ち湖水河流に在ては水透明にて巖石地底をなす處に於て捕漁せる魚は淺水泥沼に於て得たるものに比すれば、香味遙かに優れり、左に白肉、紅肉、及び脂肪ある魚の成分を比較せば左のごとし。

	蛋白質	脂肪	灰	水
白魚	一八	二	一	七八
鮭	一六	五	一	七七
鰻	一〇	一三	一	七五
鯛 脂多き者	一七	三	一	七八
鯛 脂少き者	二〇	〇	一	七七
比目魚	一九	〇	一	七九
鰈	二一	〇	一	七六
竹麥魚	一八	三	一	七八
あゆ	一七	二	一	七九
さわら	一九	一	一	七八
鮪 脂多き者	一六	一〇	一	七一
鮪 脂少き物	一七	一四	一	七七
松魚	二五	一	一	七三
鯖	二一	五	一	七二
鰶	二〇	五	一	七三
わらさ	二〇	〇		七八
いわし	二一	六	一	七〇
鱛	二一	〇	一	七六

むつ	一八	六	一	七四
鮫	二五	〇	一	七三
鮒	一八	一	一	七九
鯉	一九	〇	一	七八
鯰	一八	一	一	七九
泥鰌	一八	二	一	七七
たなご	一八	一	一	七九
膾殘魚	一八	〇	一	七九

▲乾腊物

魚類の貯藏には乾燥法、鹽乾法、薫製法等種々の方法あれども、多少鮮魚の消化性を減殺し、時としては消化不良若くは快復期患者の食料に適せざるものあり、大和本草に曰く人により生肉は滯らず消化し易し、本邦凡て腥食を貴ぶと云へり、鯖、鮪、鰯等の鹽乾物に時として味ひ辛辣を帶び甚だしきは疹を發することあり、左に鹽乾製魚類の成分を示さん、

	蛋白質	脂肪	火	水
鰊	六八	一三	六	一一
鹽鮭	二六	三	九	六一
鹽鱈	一八	〇	三	七八
鶉毛脡	四九	二	三	四四
シコ目刺	二九	六	九	五四
鰹節	七五	五	五	一四

西洋諸國に調理用としてバタの需用さるゝが如く日本に於て鰹節は其需用極めて廣く都鄙到處之を用ひざるはなし、元來鰹節の用は直ちに之を食するにあらずして、專ら其煎汁を製し、之を諸般の調理に和用するに在り、故に煎汁中越幾斯分中の滋養分と味とを貴ぶものとす、今鰹節煎出汁の製法を聞くに、蕎麥店に於ては水一升に鰹節凡そ二十五匁の割合を以て煎出し、液の適宜に着色するを見て止むと云ふ今此法に倣ひ土佐節を粗き花鰹に削り、之に水を加へて凡そ十五分時間煎出し、其エキス分を量定せしに鰹節百目に付越幾斯十五匁の比例なりしと此越幾斯は褐色にして稍ゝ潮解性を有し水に透明に溶解す、香氣は鰹節固有のものに同じく味は甚だ爽快にして歐洲諸國に賞美さるゝ彼の牛肉

越幾斯に類似すといふ、

▲殻皮動物(介類)

蟹、蝦の如き殻皮動物、及貝類の如き軟体動物は共に魚類に比すれば滋養性少なしと雖、食物として又有要なるものなり、然れども両族共に消化悪しく、時としては人を毒することあり、其中毒症には吐瀉、疝痛、痙攣の如き、腸胃の刺戟症或は疼を發し、或は眩暈、痲痺、昏睡、搐搦の如き神経症をも見ることありといふ殻皮動物中主として食料に用ゆるものは蟹、蝦の種類にして其肉白色にして硬し、本邦貝の種類甚だ多し、随て食料に供するもの鮮からず、就中牡蠣を以て上品となし、鮑板屋貝、腹魚貝、瀬戸貝、乾蛤、乾蜊、ホタテガイ、煎海鼠の如き多くは清國に輸出する一大産物なり。

雲丹は晩春より初夏の頃迄に得たる殻を砕き、竹篦を以て肉中に雑りたる砂、介屑等を除き其肉一升に鹽三合を和し日光にて温め又は微火にて製煉す、或は所によりては肉に鹽を和するの前に、絹篩の裏面に上せ、杓子の類にて壓出し之に鹽を加へて製するあり、北海道室蘭にては盛夏後に殻を去り肉を取り、鹽を充分に和し簀上に排布して全く乾きたる後丁寧に摺砕き漉して食す、

殻皮動物及び貝類の成分は左の如し、

	蛋白質	脂肪	灰	水
章魚	七三	一	六	一八
スルメ	六九	三	六	二一
龍蝦	二一	〇	一	七六
青蝦	一九	一	一	七八
アハビ	二四	〇	二	七三
牡蠣	八	〇	〇	九
蛤	一三	〇	一	八四
アカヾヒ	一五	〇	一	八二
雲丹	二九	八	二〇	四一

▲食用藻類

本邦海藻を産すること多し食用に供し或は工業に用ふ又(専ら支那)へも輸出す支那人の海菜とは海草の食料となるべき種類を總稱するものなり

乾海苔（紫菜）は東京產を以て最上品となす、又淺草海苔の名あり芝金杉、本芝、芝田町等に於て毎年十一月の季節より翌年三月の頃の間を採取の季節とす、其製法は年々九月下旬に至り枹栩等を束ね退潮に臨み海底に挿み凡そ六七十日を經て附着したる藻を採り日に乾すに在り、昆布は北海道を以て名產となす。

粗布（黑布）は一月より十月迄海中巖礁に附着したるものを採り煮熟して鹽氣を去り食料となす、

羊栖菜（ひじき）は二三月の頃礁上に生ずるを採收し煮熟して後大陽に曝し乾して貯ふ、

裙帶菜（わかめ）は初冬より暮春の頃までを季節とし採收したるものを簀上に排列し日に乾し貯ふ、

石花菜（ところてんぐさ）は四月より六月まで岩礁に附着し或は波間に浮動するものを採り乾燥して貯藏す、紀州和歌浦のみにても一年の採收高二十萬貫に下らずと云へり、採りて凍瓊脂を製す、此物本邦特有の一產物にして、多く海外にも輸送す、石花菜の鹽氣を去り、水を和し、臼にて搗き、之を架上に散布して水氣の盡るを俟ち、再び臼に入れ、前の如くすること三回、後ち苞中に貯ふ、十一月頃寒天を候ひ、右石花菜に水を加へて煮沸し、糊汁の如くなし、漉して槽中に入れ、凝固せしめ、庖刀にて適宜の大さに切り、簀上に排列して寒氣に曝せば氷結す。

	蛋白質	脂肪	無窒素有機物	灰	水
淺草海苔	三三	一	四一	九	一三
青海苔	一九	一	四六	一九	一三
昆布	七	一	四七	二一	二三
黑菜	九	〇	五一	九	一八

（完）

家屋の話（下）（家政）

若溪女史

▲壁にも數種あり、即ち土壁、紙貼、板貼等なり紙貼は麗しけれども汚損し易く板貼は、外見宜しからず、故に土壁最も多し、土壁は白色の外は其汚染も遲く、

且つ堅固にしてよく久しく保ち、且つ火などの燃へ移ることも速かならねば火災を防ぐに利あり、扨て其塗方は先づ荒塗りをなし次に中塗り、次に上塗りをかけるなり、壁を塗るは宜しく其時候を考ふべし、寒氣強き時などは壁土氷りて破れ目を生じ易く、又入梅の頃は餘り濕氣多き故宜しからず、冬の初めの頃は壁土締りて最も堅固なるべし、又荒壁の乾かざるうちに上塗りを施すべからず、之れも亦壁に破れ目を生じ易ければなり、壁の色は鼠色、茶色、褐色、綠色、水色、黃色、其他種々あり座敷の赴きに關係あれば宜しく工夫すべし、但し白色は明るしと雖も最も汚れ易くして、且つ眼の爲宜しからず、日常の居室にはなるべく他の色を用ふべし、又壁を塗りたる時はよく乾きて後に住居すべし、しからざれば健康に害あり、竈に近き壁は一年置位に上塗りすべし、壁新らしければ燈を點じて光るし、壁に煤あれば時々掃ふべし火をおやまつことあるものなり。

▲天井　には板張り、貼天井、塗天井、等あり普通の家には板張を用ひ、宮殿などには格天井にして格天井は太き角の棧を縱横に組み立てゝ井形となし、上に板を張るものなり、木材は檜、杉、竹、桐、等いづれも好みにより見ぐるしからぬやう選ぶべし、又欅、楠等の一枚板を以て張りたるもあり。

貼天井は貼壁の室に多く用ゆ是等は宏壯なる建築に用ゆるときは莊麗にして適當なりと雖も、粗雜なる建築の家にして木材の良否も撰ばずして、之れを用ゆる時は却つて品格を損ずるものなり、

塗天井は板張に白堊を塗りたるものなり、多く西洋風の家に用ふるなり。

▲床の間　は一室内の主要なる處なれば最も其建築法及び木材に注意すべきなり、作り方にも正式略式とあり正式とは床脇に棚の付きたるものなり。其作り方にも亦種々あれども表座敷には定式のもの用ひ其他は書齋居室小座敷など各好みよりて適當なるを用ゆべし、床の大さは其室の大小によりて定まらざれと普通の家に用ゆるは二間內外なり、大床に至りて

は五間内外のものあり、

畧式とは床脇に棚を備へずして押入となし、巾も狹くして三尺は普通なれど一尺五寸位もあり、

木材は檜、杉、欅、松、等を用ゆ又上等なるは紫檀、黒檀、黒柿、百日紅等を用ゆるなり、

▲戸　は雨戸、すき戸其他種々あり木材も杉、松、檜を用ゆ通常の雨戸は杉にして風雨及び盜難を防ぐものなれば最も堅固を旨とすべし

杉戸大戸などは人の目にたつものなれば木材を擇ぶべし、

▲障子　にも硝子障子、葭障子、腰障子ありて木材は檜杉をあしとす、多く用ゆるは紙障子にして棧の組み方種々あれど、こまかなるは却つて暗し、通常なるがよし、紙は美濃紙を用ゆ又緣の黒く或は赤く塗りたるもの腰の少し高きものあれども普通なるは腰低き方宜しとす但し腰少しにても高ければ保存よし又腰高障子といふ、腰極めて高く臺所の水口などに用ゆ、但し製方精美なるものは他の場所にも用ゆることあり。

硝子障子は中央に紙を貼りたるもよし、座敷など見へ透かぬものなり、硝子障子は室内空氣の流通は宜しからざれとも之れを緣先などに立つる時は寒風雨天などの日にもよく光りを受る事を得るものなり、但し重くして破損し易きものなれば開閉のはげしき處には不利益なり。

▲襖障子　は唐紙とも云ひ骨組は障子と同じくして先つ簑張をなし次に袋張をなし次に淸張をなし、上張りをなすものなり、上張の紙は唐紙、壁紙、更紗紙、奉書の類或は織物をも用ゆ模樣色合はさまざまあり、室内の結構により恰好よきを擇ぶべし、色によりて室内廣くも又明るくも且品にも見ゆるものなり、

▲疊　には床、表、緣等を用ゆるなり疊表は備前の國より産するを備前表又は太表と稱へて上品となす、すべて座敷には備後表を用ひ又琉球表と云ひて九州地方産するは下品なれども其代り久しく保つを以て茶の間納戸などに宜しく、普通は緣をつけるものな

れど小座敷などはつけざるもあり、床即ち疊の心は上等品價貴けれど保存上下等品より却て經濟なり、すべて疊を新に敷きたる時或は表がへしたる時は乾きたる布巾にて能く拭ふべし然せざれば白き粉むら〳〵にはげ、且つ衣服を汚すものなり、又疊を敷く前に牀板の隙間を反古紙にて目貼し置けば蚤などの上ると少なし又疊の床は時々時に空氣に曝すべし小虫を生ずるを防ぐものなり。(完)

裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子述

前號にカケハギの事に就て御話しを致しましたが、また其一種として、エグリ繼ぎといふのがございます、之は鍵裂き、焼け穴などをつくろひます仕方でありまして、其部分を切りぬき、そこに同じ切を入れてカケハキの通りに、縞目、模樣、織目などよく注意して合せ、其周圍を繼き合せます、(此エグリ繼きいたします所の切りぬき方は丸なり四角なり隨意にしまして之に繼き入れます切は穴の大さより大きく切まして其穴に當てまして、縫込みのイセの出ます所は鋏を入れ置きます、)之に用ゐます糸と針とはカケハギと同樣でございます。

次は

▲綴ぎもの

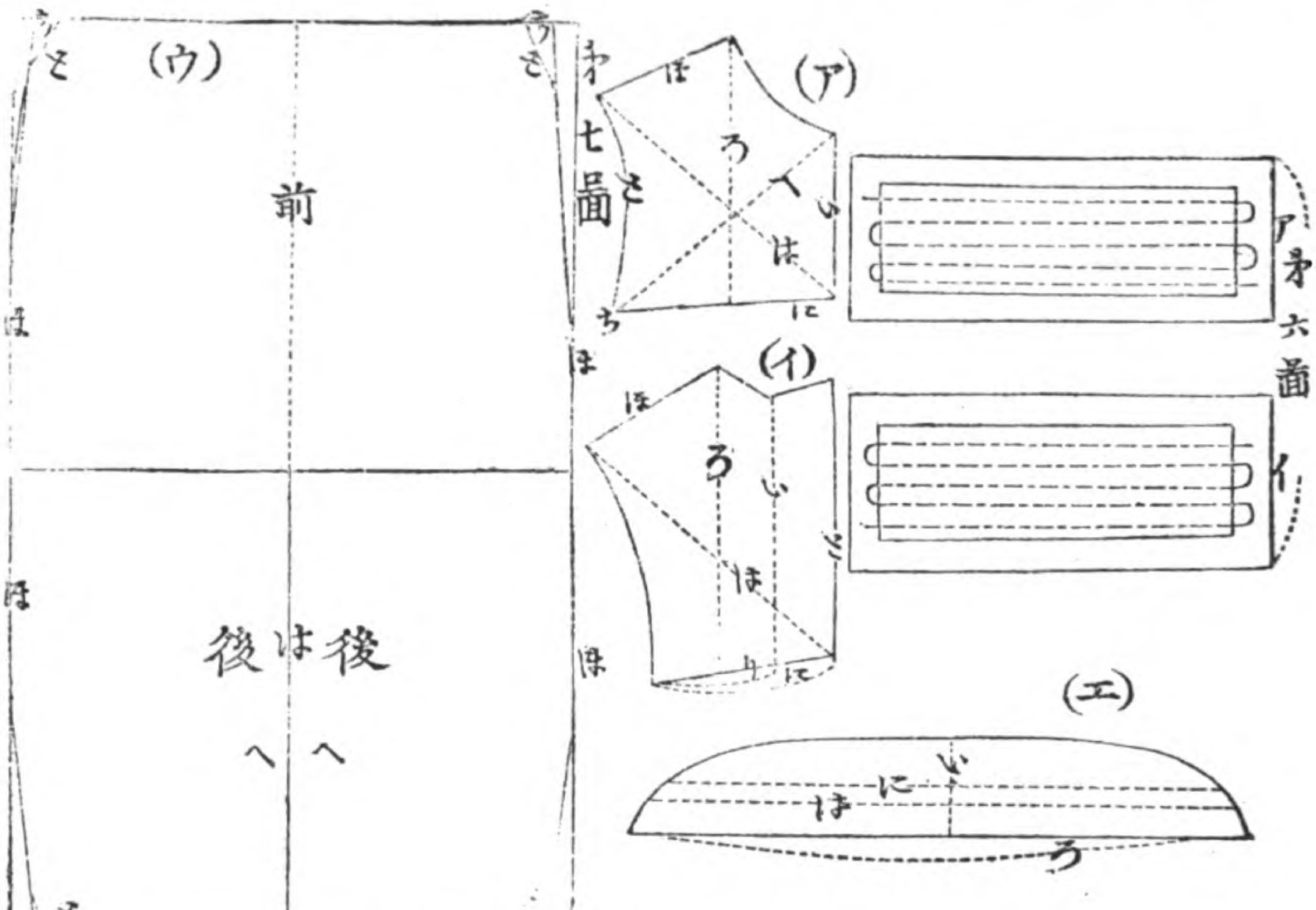
實際裁方に關係して、最も必要のものは綴ぎものでございます、これは地が薄くなりました所または破損ました所に切を當てゝ綴りつけるのでございます、其法は破損所又は地薄になりました所より少々大めの切(この切は、其綴ぐべき表の切と同樣のものさなくば、又はよく似よりました切)をあてまして、第六圖の通りに、絹物なれば表に小針三つ出しましては、裏に大針一つと出します丁度(ア)の樣にいたし、木綿物なれば、表に小針二つ出しまして裏に大針を一つといふ工合に(イ)の樣にして、綴てまゐります、此大針に出します針目の大さは絹なれば三分位、木綿物なれば五分位といたします、もし破損の場所が大きくなりましたら、其部分丈は

小針斗にて表とつぎの切とよくつきます樣にさしてまゐります、針は無論ツギ針を用ゐ糸は、なるべく其表のきれとよく似かよひましたものを用ゐるのをよろしと致します、此綴き切をあてますときには、よく注意して切に袋のいらぬ樣またツレぬ樣にせねばなりませんがこれも御話しばかりては、大分たやすい樣でありますけれども、實地に當りますと六ケ敷もので最も熟練を要するものでございます。

▲西洋形小兒前掛

前卷に御話し致しました分は、極簡單の ものでありましたから、こゝでは 少々手のこみましたものを二三申上ませう、其裁ち方は、第七圖の通りでございます、此圖中(ア)より申上ませう、之は前の胸の所になる切で、(い)の所の輪になりて續てをりますからこれを裁ちますには、切を二つに折りまして此形を切ります、其寸法は(い)二寸五分、胸の眞中になる所でございます、(ろ)四寸、(は)四寸五分、(に)二寸八分、(ほ)二寸(へ)四寸と いたします、此(ア)の切を表裏二枚裁ち切ります、(此表の切が更紗等の如き模樣のあるものなれば、裏は、白の切にて裁ちましてもよろしうございます、)次に(イ)の切を裁ちます、これも裏表二枚分ッ、張りはすが矢張模樣のあるものなれば、裏は白にてもよろしい、これは後の背の所に當る切で之も切を二つに折りて裁ちますが、いづれの邊も皆切りまして、都合こゝに用ゐる切が四枚裏表てとれるわけてす、其寸法は、(い)三寸(ろ)四寸五分、(は)四寸五分、(に)三寸二分(ほ)二寸でございます、次は、(ウ)の切を裁ちます、これは 前と後の切を二枚重ねて置て裁ちますので、(い)の所に一寸の斜の切を切りとります、(丁度(ろ)及び(は)の丈の三分の二位即チ(ほ)部分をのこして置きます。)又次に(ち)七分、(と)一寸七分位に圖の如く切ります、しかし小兒の着てをります袖の長短(筒袖か長き袖か)により(ち)及び(と)の寸法を斟酌いたしますがこゝの裁ち方は、また種々ありますので先づ格好のよいのはこの分の裁ち方をよしといたします、(ろ)と(は)とは同樣に一尺三寸、(に)一尺二寸五分と致します、此(ろ)(は)の丈は多くアチ(つまりアチが飾となるのであります、)をつけま

すには、今少し長くしてもよろしい この切を裁ち終りましたら(に)の所を切離します、次には(は)の所をも切ります次は(ヱ)の切でこれも切を二つに折りまして、(い)の所二寸三分位の巾にいたし(この巾は今少々廣くとも人々の好にまかせます)(ろ)は一尺四寸として切りますこれで入用のものは、殘らず裁ち終りました、扨縫ひますには初に(ヱ)の切をとりまして、周圍をなるへく細く三ッ折にしてマツります次に(ろ)より二三分の所は(は)の點線の通りに、極小針に縫ひます、次には(は)より一分位



はなして、(に)の線を小針に縫ふ(此(け)及び(に)の縫ひ目の糸の結び目は裏に出す樣に致します、こゝばかりではなくいづれもこの樣な塲合には糸の結び目は、裏に出します、)猶一枚の(ヱ)もこの通りに、周圍をマツり(は)及び(に)の二本の線を小針に縫ひ置きます、次に(ウ)の切を取りまして、(へ)を初めに一分位に裏に折り、次を五分位に同じ方に折りまして(つまり裙がけのときの樣に切を折ります)こゝをマツります、次に(へ)の折りかへした所をのぞきてそこより(ち)の切りめ一寸五分程前

までの間を（ぬ）の切りめにそひて、極小針に（エ）の切の（は）（に）を縫ひたる通りに一度縫ひまして、又そこより一分程離して、前の縫ひめにならびて猶一度小針に縫ひます、左右とも縫ひ終りたらば、又（ウ）の切の前を取まして、中央に標をつけ（ち）より一寸五分位離れた所より片方の（ち）の矢張一寸五分はなれた所まで後の（ぬ）のそばを二側小針に縫ひました通りに小針に二側縫ひます、次に（と）の所に見かへしを付けます、次に（ウ）の前の切をとりまして、其中央と（ア）の切の（ロ）の中央とを合せて待ち針をうちまして（ア）の切は（に）の兩端に縫ひ込み丈殘して（ウ）の（り）の所（前に二側小針に縫ひました所）の糸を引て（ア）の切の（に）の縫ひ込みをのこした丈にちぢめてこゝを縫ひ合せます、後も（イ）の切の（に）と（ウ）の切の（ぬ）とを合せて左は（ウ）の切の（ち）と（イ）のきれの（り）の所を縫ひ込みをのこして（ぬ）の所をちゞめて前の通りに縫ひつけます、右の（イ）の切の兩端に縫ひ込みを殘しそれ丈に後の切の（ぬ）と縮めて二つを合せます、此後の切が右の通りに縫ひ上げますと左にあたる切がせまく、右にあたる切が廣く出來上りますが、之は男兒用ので、女兒のになりますと右がせばく左が廣くなります、つまり男兒のは着たときは背の合せめか並の着物の樣になり、女兒のは反になるのでありります、

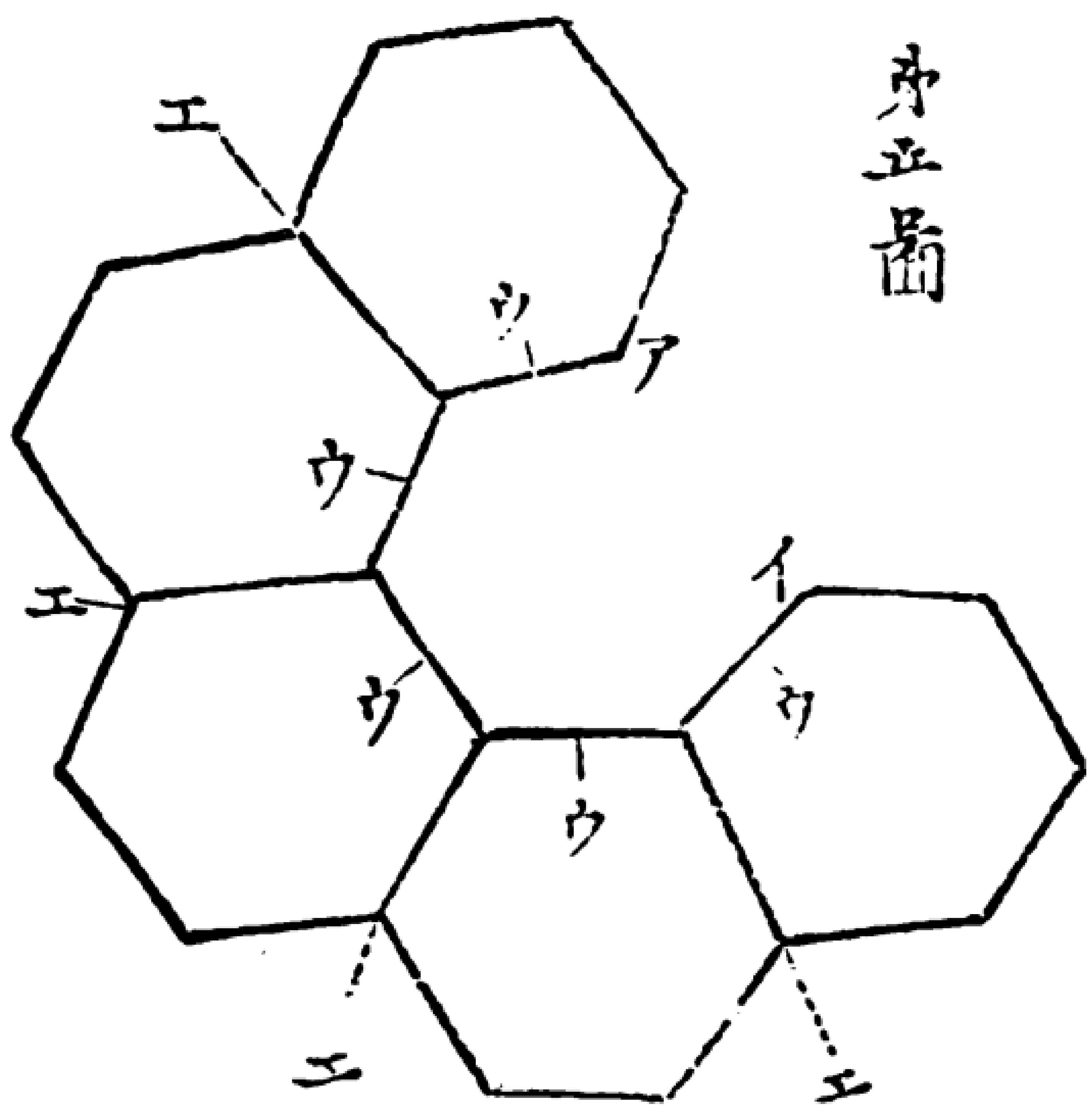
編物實習

女子職業學校教員　豊原繁尾子述

▲よだれかけ

涎掛けの編み方は、種々樣々でありますがこゝでは六角形の涎かけの編み方を申上ませう、これは二色の毛糸を用ひます、編み棒は御承知のヘーケルで、彼い象牙樣の棒の先が鉤になツて居ます初めに鎖五つを編み、其次を初めの目にヘーケルを入れて糸を引出し、丸く輪の樣にします、次に鎖を三つ編み、其輪の内より糸を引き出して長編（長編はこれを編みつけて行く元が最早出來てをるか、さなくば、鎖編をつくり編みつける元をこしらへます、いつれにしても此長編みを初めるには、

鎖三つを編みてそれより左の手にて繰て居る糸を左の下からヽヽヽヘーケルを入れて、之に糸をかけ、そのまゝ次の目にヽヽヽヘーケルを入れて糸を引き出すと、初めに三つ編みました目の終と、只引かけて置いた糸と、今引出した糸と都合三本ヽヽヽヘーケルにかゝりて居るから、其鈎の先によッて居ります糸二本を一度にぬき、又其次を一度に糸を抜きます、これが長編の仕方であります)二十四個を編み、初めの三つ鎖編みを致した次の目に、ヽヽヽヘーケルを入れ、糸を引出します、それより長編みの上を(鎖編の樣な目になりて居る所)二本ともすくひまして、帽子編(帽子編みは矢張りこれを編みつけるもとが鎖なり何なり出來て居れば其目に直にヽヽヽヘーケルを入れて糸を引出すとヽヽヽヘーケルにかゝりて居る糸が二つあるから次は糸を引て此二つを一度に引き抜いてまゐる。)三個を致しますと



第五圖

四つめになッたらこゝには三つの帽子編みを一つ所につくります、(此一所にて三度帽子編みを致してまゐるのが六角形の角になります、)が樣にして一回編まして、終の目は帽子編みを編み終らぬうちに他の色の糸をとりまして、引出します、)こゝで糸をかへるのでござります、)次に次の目を又引出しまして又鎖編みを三つ編み長編に移ります、此段の長編みを編みますには、前に帽子編みが一所に三個できてをる所がありましたがそこへまゐりましたら帽子編みの三つの中央の目に長編み三つを入れ(つまり六角の角毎にか樣致します)只の所は並に一つつゝ編でまゐり一回いたします、又次の段は帽子編みでゐたしますが、矢張り角の所の長編みが三つ一つ所に出來て居る所にまゐりましたら、其中央の長編みの目に帽子編みを三個編みます、此段が一回致しましたら其次は此糸をやめて

前の糸をとり糸をかへまして、三つ鎖り編みとして長編みを編み、角の帽子編三つ出來てあります所は、其中央に長編みを三つ入れて一回致しこれにて糸を一寸位殘しまして切ります、只今まで編てまゐりましたので形が自然に六角になるのでござります、以上申上ました通りにしてこの六角形のもの五個をつくります、次に此六角形のもの二つをとりまして裏を中にして二つを合せ(角々のよく合ふ樣にして)角の長編みの三つ一所に出來て居る其中央の目より帽子編みにてつけ始め一邊丈を繼き合せます、(この帽子編みにて二つを合せますときは、前の目の向ふ側と、向になつてをる目の手前側の糸とをすくひて附ます、)五つともつけ終ると丁度第五圖の樣な形ができます、即ちアゴの下になる方は一邊をあけ、外になる方は三邊をあけてつけます、又繼き合せますときには糸の合せ目がアゴの下になる樣注意していたゞきたい、圖に就て申せば(ウ)の所が糸の合せめに當るので先つこれ丈て涎掛けのあらましが出來ましたから次は飾をつけます、飾は表を手前の方に向けて持ちまして圖中(ア)の所よりつけはしめます、初め帽子編にて一つ編つけまして、七つ鎖をあみ此内五つ丈を丸く球の樣に編み(此球は初めの鎖より三つ目の所にヘークルを入れて糸を引出すと五つの鎖編み丈が丸くなッて球の樣な形になる、)次に鎖編を二つ編下のすくひ目を三つ飛して四つ目へヘークルを入れて帽子編を一つ編ます、か樣にして(イ)の所までまゐります、(六角形と六角形との繼き合せ目もすくひ目に數へ入れて編むのでこゝを合せ目として飛ばすとをかしなものができますから御注意申して置きます、)又次は同じ樣の飾を今一度致します、此度は前の飾の時に下のすくひ目が三つ飛してあッた其殘りの目の中央より(前の飾り初めの直そばより致します、)前の飾の向ふ、即ち後側にて帽子編を一つ致して七つ鎖を編其五つを球に(前にくわしく申上ました通りに)致し二つ鎖を編て前の飾のときに三つ飛してある下のすくひ目の中央の目に(此度は前の飾の手前即ち前のかわに帽子編て編つける、か樣の順次で前の飾の内と外といふ工合にた

がひちがひに圖中の(イ)の所までまいつて糸と切ります次に毛糸針(前に説明したる)に糸のつぎめ、切りめ等の糸を通して、同じ色の編めの所に入れてとめます、次は紐てございます、紐は二色の毛糸を一所にして三十五ばかりゆるく鎖を編まして、直其糸にて圖中の(イ)の所(表を手前にして持ちまして、)の角よりつけまゐります、初めは帽子編二つを編つけまして次の目を一つ飛ばし又帽子編を二つ編ましては次の目一つをとばします、この様にして(ア)の角まで編つけましたら又此糸にてゆるく三十五位鎖編を致して糸をきります、此三十五の目數の鎖編が左右の紐て後にしめるものになります、次にこの紐の先きを一寸結ひまして房をつけます、房ば紐と同様の二色の毛糸をとり四本の指に二十五回むかり巻きまして、其一方と切り(此長さが二つ折りになりて房の全長になります、)よく糸をムラなく並べ其糸の長さの中央を紐の先の結び目の極そばにつけて、木綿糸かカタン糸にてかるく結びまして、この糸のさきをきりそれよりきれいに房の糸をよく揃へまして房のもとから一分か二分の所を房に用ゐました同し糸にてつよく結び、其先は房と同様の長さに切りますこれで涎掛けは出來上りました。

生花速成

古流家元　梶野智水

◉松竹梅の變躰

圖に示す如く松にて禮の枝あれども、短少にして姿を調ふることが出來ませぬ故、これを義と見做して枯れ留りし義を補ひ、智の梅枝を振り出して禮の姿を備へるといふ變体てあります。

水仙にて智信の二躰を集けて七躰を具足せしめす、此時は水仙の花色が黄白でありますから、是に對して梅は紅梅を撰むがよろしい、

水仙の葉組の次第は、後に有りますから對照を願ひます。

以上は變躰の大要を示したので御座います、千變萬化の生方を詳細に述ぶる時は、中々一朝一夕に盡きることては有ませぬ、併しながら大躰は前に擧げたるものと、大同小異でありますから、前顯の圖解を能く會得して置て、而して後ち實物について研究すれば自ら領解が出來るであらふと思ひますから、此位の所で止めて置きます。

◉水揚げ法

松梅水仙の三種は走の養ひにてよろしい、竹の長きものは水揚法中秘傳の部に屬して容易に傳授せざるものでありますけれども、今此處に數种

の揷け方を述べますから能く實驗をして見るがよい。
（第一）　胡麻の油に石灰を入れて、是れを竹の切口に塗りて能く燒き、冷水に三時間餘り浸し置
（第二）　太き竹なれば、下の節のみ殘して餘は悉く打拔き丁子（藥種なり）を煎じ熱き内にツギ込みて、冷水に漬け置てよし、
（第三）　切口に鹽を塗付け鹽水に付けて置てもよし
（第四）　切口を茶筌のやうに割りて燒明礬をスリ込て生けてよし、
（第五）　一節づゝ小さき穴を明けて燒明礬或は川芎の煎じ汁を入れ置てもよし此外に竹を傷めず藥品を用ひず伐り取たそのまゝにて、能く水の揚がる法あれども、これは技藝に屬して秘書に演べ悄いことでありますから、此法を望む人は小生の宿所或は出張稽古所へ竹枝一本携へて御出てなさい、何時にても無報酬にて快よく御敎授申します。

◉水仙の生方

水仙の出生は陽にて姿は陰であります、其譯は、野に生するが故に、水生のものに對し出生に於て陽である、又生葉であるから、葉數の多くは一株にて常に二四六等と成て居るもので、それから花瓣の數が六枚有て花の色が普通黄白を呈して居るから、數に於ても色に於ても陰に屬す。依之出生は陽、姿は陰といふ所以てあります。

右の通りに詳細に觀來れば、陰陽の道理は自ら明白になりますから、他の草木についても、前號に掲げた姿を熟覽の上よく〳〵研究あらんことを望む。

備て水仙は、花道に於ては葉物に屬して流儀に依て許物と稱し、チョット葉の組み方を教授せざるものである、けれども望 〻その葉組の次第を委敷演べましやう。



まづ葉を組むには白根の所を柔かにもみて、袴を脫し（袴といふは地下莖に附着する葉片の變形である）葉と花莖とを分離して、花と葉の長短を見斗らひて、姿を直して再たび袴を嵌めるのでございます。

水仙を生け上げた所は言ふに難く、又圖にも顯し悄ひもので有ます、其故は圖に畫くときは一株にても善く見らるゝものであるけれども、實物に當れば間が拔て淋しくて、到底見らるゝ物では無い。

これは水仙斗りでない、杜若でも萬年靑でも、すべて葉組のものは皆同じとてある、ソコで五株て株の所を强て繪圖にかけば、葉組が目茶々々に成て了解することが出來難い。葉を組むに先がちて、左の條を能く記憶して置ればならぬ。

（第一）　花莖を遣ふ株は必ず葉を四枚使ふこと
（第二）　內葉は外葉より必す低くすること
（第三）　花莖を遣はぬ葉株は葉數を三枚か五枚にすること
（第四）　葉は必ず相對さすること
（第五）　なるべく葉の開かざる樣に細く組むこと
（第六）　袴の鋏先は必ず親葉の下に向けること
（第七）　袴は五株でも七株でも一文字に丈をそろへて花器の上端より位出して居ること
初花は五分盛花は四分殘花は三分
（第八）　一瓶の內に必ず葉株と花株と兩樣遣ふこと
（第九）　外葉より內葉は必ず若き葉を用ふること
（第十）　初花（十、十一の二ケ月間）は花を低く遣ひ、盛花は（十二、一の二ケ月間）少し高く花を揚ゆる、殘花（二月）は親葉より少し降る位の高きに花を揚ること
（第十一）　三枚五枚等花を用ひぬ株のときは最後の子葉を最初の親葉と重れること

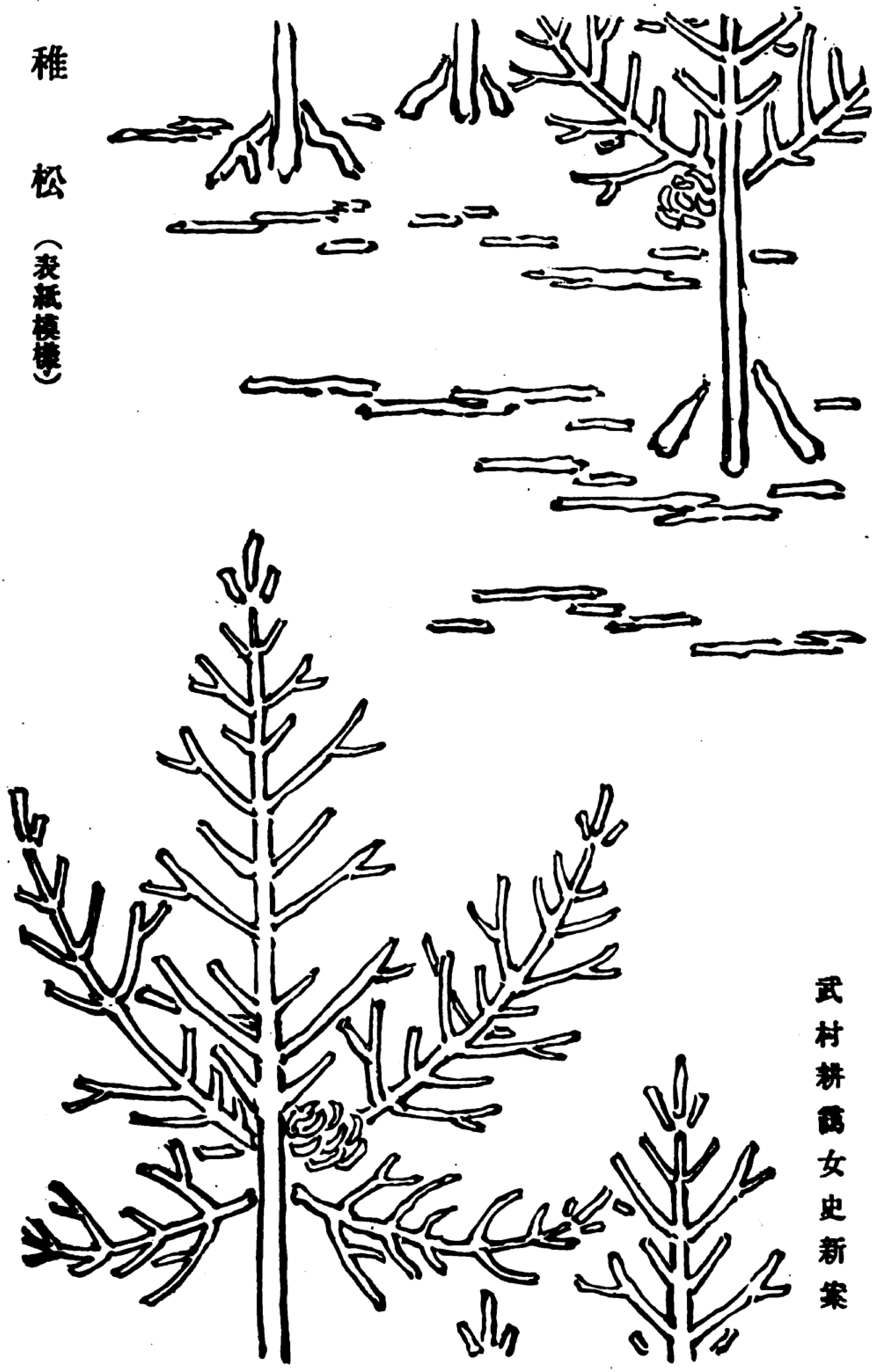
書道心得

小野鵞堂

年の始めに、初がき、書きぞめ、試筆、など稱へ書なり畫なりを書きて壁間に懸け．人にも見せ自らも樂しむ事あり、これは古くより行はれ、其の道の師家にては唯一の奬勵法として今日でも隨分行はれて居ります、此事は初學者の爲に、殊に時間の乏しい今日では、非常の効力がある能い習慣だと存じますから、私は大に奬勵したいと考へます、願くは家庭のみでなく、何かの法方を設けて、全國小中學校にもやらせたいと思ふのです、（私は書に附て申します）時は一年一度でしかも休暇中即ち十二月の中頃若くは末つ方より習ひはじめて、一月の初めに書くのであるから、誰でも出來る事です、學校などの廣き所にかけ連ねて、相互に見合ひ、父兄にも他人にも示すやうにしたならば、いよ／＼妙でしやう、能く書かねば恥だといふ事が、目前に迫つて來ては、いかに平生無神經の者も、多少奮發心が出る此奮發心も長くては段々弛らぎますが、僅かに十日か十五日間の事ですから、これを利用して習はせたならば、非常に効力がある事と信じます、世に試驗學問とか申して、急の間に合せの勉强は役に立たぬといひますが、此習字といふものは、筆數が懸ればかゝる程、運筆が熟します、其運筆が熟するのは、つま



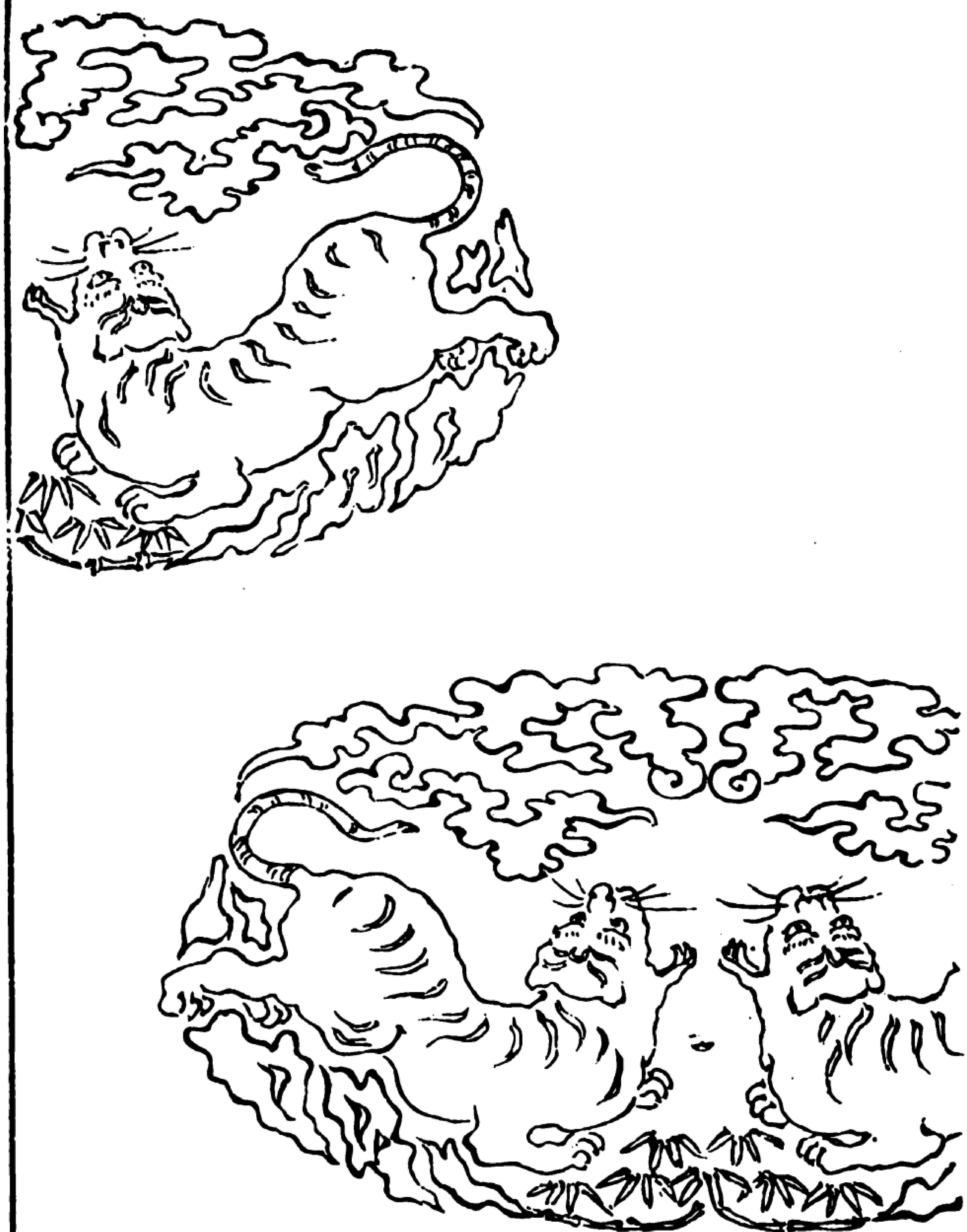
稚松（表紙模樣）



武村耕靄女史新案

雙虎

(織物模樣)

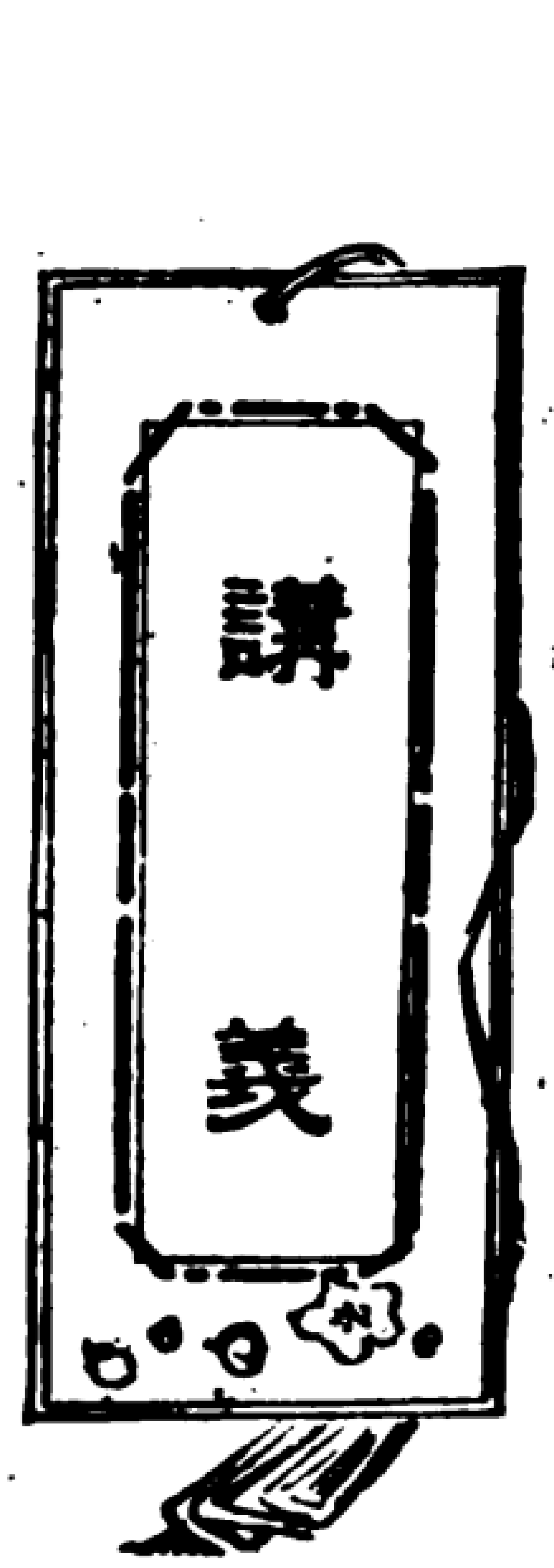


武村耕靄女史新案

り手腕が熟するので、他の學科のやうに忘れて仕舞ふ事がないから、是等の奬勵法は極めて有益だと思ひます、これは問題外ですがたま〳〵年始に際し、試筆といふ事が浮びましたから一言したのです

扨習字の法方は、其師家の流儀によりて種々相違がある、けれども形を主として敎ふるもの、點畫をやかましくいふもの、筆勢を先にして導くもの、點畫といはず、形といはず、筆勢といはず、自然の習熟を待つもの、此四つの外に出ないやうです、形を主とすると申しても、點畫を集めて形をなすのであるから、つまり點畫をも習ふ事になる、點畫を八かましくいふのも、點畫ばかり習つて居る譯でないから、つまり形をも習ふ事になる、筆勢を先にすると申した處が、つまり點畫も形も習ふ事になる、自然の習熟といふのも、つまりは總てを同時に習ふ事になる、畢竟其流義により導く所の方法が違ふので、其目的はうるはしき文字が出來れば宜いのです、師に就いて考ふ人はいふに及びませぬが、獨習する人々は此邊の考へが入用です、そこで私は普通習字の捷徑は形をさきにするがよいと信じて居ります、其譯は點畫がたしかに出來ても、筆勢が充分わつても、形が惡くては文字として見られませぬが、形が調のつて居れば點畫が拙くても、筆勢が乏しくても文字として見られます、これを人体にたとへていへば、點畫は骨組で筆勢は居動の活潑なる事に當り、形は即ち姿といふ事になりましやう、居動の活潑なのも骨組のたくましきも、素より望む所でありますが、姿が調はなければ不具者です、不具者よりはむしろ少し病身でも完全なる姿を備へた方が宜しからうと思ふのであります。





國文學講義

翁まろ（下）

文學士 尾上柴舟

それぞ、といひ、あらず、といひ、口々に申せば、「右近ぞ見知りたる、呼べ」、とて、しもなるを、まづとみの事とてめせば、まゐりたり。

それぞ、といひ、あらず、といひ。それは、翁丸を指す、あらず、は、翁丸にあらず、といふなり。或女房は、この犬は、翁まろなり、といひ、また、他の女房は、翁丸にあらず、別の犬なり、といふなり。○「右近ぞ見知りたる、呼べ、」は、中宮の御詞なり。此中宮は、關白藤原道隆の女、定子の御事なり前に云へり。右近は女房の名、榮花物語浦々の巻に、此中宮御産の時、御湯殿にまゐりたり。とある右近内侍と、同人なるべし。此後には、右近内侍と、明記しあり。見知りたるは、翁丸を、よく見知りたるなり。其眞僞を見分けしめむが爲め、呼べ、とは宣ふなり。○しもなるは、下局にゐるをいふなり。御前にあらで、局にさがりて居たる程なりしなり。○とみの事、は、頓の事にて、にはかの事火急の事の意。

女房ども、「かの犬は翁丸なり」「いな、翁丸にあらず。他の犬なり、」など、各々口々にいへは、中宮定子は、此等の詞を聞召して、宣まふやう、「翁丸は右近がよく見知りたれは、それに見せて、眞僞を正さん、只今呼びよせよ、」とて、局に下り居たるを人して急の御用なり早く參れとて召させたまへば、右近、やがて御前に參りたり。

これは、翁まろか、と見せさせたまふに、「似て侍れども、これは、ゆゝしげにこそ侍る

めれ。又、おきなまろ、と呼べば、喜びて、まうで來るものを、呼べど、より來ず、あらぬなめり、それは、打ち殺して、棄て侍りぬ、とこそ申しつれ。さるものども、二人して、打たむには、生きなむや、と申せば、心憂がらせたまふ。くらうなりて、物食はせたれど、食はねば、あらぬものに、いひなして止みぬる。

これは、は、この犬はなり。〇似て侍れども、は、犬の容貌、翁丸に似たれども、なり。〇ゆゝしげ、は、忌々しげにて、いま〳〵しげなるをいふ。犬の顔かたち、腫れわたり、淺間しげなれば、云ふなり。〇まうで來るは、まゐり來るにて、たゞ來るといふにおなじ。〇それは、は、翁丸を指す。〇さるものどもは、然るべきものどもなり。藏人忠隆、實房などの人々をいふ。〇心憂がらせ、は、前の心憂の事や、とあるとおなじ心なり。中宮の、心苦しく思召すなり。〇あらぬものに、云ひなす、は、翁まろにはあらぬ犬、と云ひ定むるなり。いひなす、は、それ、といひ極むるなり。

中宮は、右近に向ひて、「この犬は、翁まろか、いかに、」と、見せさせたまふに、右近、答へまつりていふ、「此犬は翁丸に似ては侍れども、其顔容腫れわたりて、いま〳〵しげに侍れば、翁丸の樣とは異なれり。また、翁まろは、翁丸と呼べば、喜びて、此方に來れども、此犬は、呼べども知らざる振して、寄りても來ず、されば、此犬は、翁丸にはあらぬなるべし。その翁丸は、忠隆實房などの、打ち殺して棄てたり、とは申し侍りけり。然るべき者どもの、兩人がゝりにて打たば、犬は決して、生きむことはあるまじ、必ず、死に果て侍りなむ、」と申し上ぐれば、中宮は、心憂く思召したまひけり。夕方暗くなりて、この犬に、食物をくはせたれど、更に食はねば、かく馴々しからぬ犬は、翁丸にはあらで、他の犬なり、と云ひ定め果てぬ。これにて、また一節。ひるつかた云々より、こゝまでにて、一段なり。翁丸の歸來を敍して、要を得たり。始め、犬の再た

び、罰せらるゝを云ひ、次に、犬の鞭撻を受けて、面がはりしたるより、中宮を始め、女房どもの、定めまどふさまを說く、簡なるが如くにして繁、粗なるが如くにして精、而して雅致と、流麗と幷せ得たり。得易からざるの文といふべし。

つとめて、御けづりぐしに參りて、御手水まゐりて、御鏡をもたせて、御覽ずれば、さふらふに、犬の柱のもとに、ついゐたるを「あはれ、昨日、翁まろを、いみじう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にか、此度はなりぬらむ。いかに、わびしき心地やしけむ」とうちいふほどに、此寢たる犬、ふるひ、わなゝきて、淚をたゞ落しに落す、いとあさまし。

つとめて、は、翌早朝なり。○御けづりぐし、は、中宮の御髮を梳るをいふ。ぐしは、髮の事今もいふ。○御手水、中宮の御手など、洗はせたまふ水なり。○さふらふに、は、淸少納言の中宮の御傍に侍るなり。○ついゐたる、は、膝をつきて、居たるをいふ。○何の身にか、此度はなりぬらむ、は、翁丸は昨日打ち殺されたるが、此度は、何となりて、再たび世に出るならむ、と推し量り疑ふなり。これ、平安朝時代には、殊に、佛敎の輪廻の說行はれ、生物は、皆諸種の生物に、轉々して、生れ來るものなり、との迷想深く、人心に浸潤したれば、かゝる語も出て來りたるなり。○たゞ落しに落す、は頻りに、淚を落すこと。落す、を重ねたるは、强く、云はむが爲めなり。○このねたる犬、居たる、とある本もありとか。されば、前のついゐたるによく照應す。

その翌早朝淸少納言、中宮の御髮けづりに、御前にまゐりたるに、中宮は、御手水をつかはせたまひて、淸少納言に、御鏡を持たせて、御髮かたちなど、御覽じたまへば、少納言は、御傍に侍りたり。さるに、宮の柱の下に、昨日の犬膝を突きて、かゞみ居たりければ、

少納言に、これを見て、「わゝ、昨日、藏人等の翁丸を甚しく打ちたりしかな。翁丸は、それが爲め、遂に死に果てし、といふこそ限りなく、悲しきことなれ。この度生れ變りなば、何の身となるならむ、再たび犬とならむか、はた、尊き身となりなむか。げに、打ち殺さるゝ時、いかばかり、悲しき心地したりしならむ、」と云ひ出づれば、此の寢たる（或は居たる）犬、痛く感動したるが如く、ふるひ〳〵て、涙を頬りに流すさま、いとあさましきこゝちす。

さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは、かくれしのびてあるなりけり、とあはれにて、をかしきこと限りなし。御鏡をもうち置きて、「さは翁丸」、といふに、ひれふして、いみじく泣く。御前にも笑はせはたまふ。

さはこれ、は、さては、これは、の意、後にある、さは、もこの、さは、におなじ。○よべはかくれしのびて、よべは、昨夜なり。かくれ忍びて、は、人の呼べども來らず。食を與ふれども、食はず、すべて、人にかくれ忍びたるを云ふ。○ひれふす、は平たく伏すを云ふ。○御前は、中宮を指し奉りていふなり。○清少納言、犬の樣子を見て、「さては、この犬こそ翁丸なれ。昨夜呼べども來らず、食物をも食はで居たるは、人に怖ぢて、隱れ忍びたりけるなり、」と思へば、犬の心、いと〳〵憐れにて、おもしろきこと限りなし。御鏡をも傍にうち置きて、「さては、翁丸よ、」といへば、犬は、平伏して、甚しく泣く。中宮も、この犬の樣を見て、打ち笑はせたまひたり。○以上、また一節。犬の情、女子の情、反覆寫しいでたる筆力、頗る非凡なり。殊に犬の今朝の啼泣、昨夜の伏匿に對して、尤もよく、反影して自から精彩あり。全篇中このあたり、殊に見るべし。

人々まゐりあつまりて、右近内侍召して、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞しめして、わたらせおはしま

して、あさましう、犬なども、かゝる心あるものなりけり、と笑はせたまふ。

まゐり集る、は、宮の御あたりにまゐりつどひて、犬を見るなり。○右近内侍召して、は、さきに翁丸にあらず、といひ切りたれば、召して、翁丸なるよし、仰せられむ、とてなり。○あさましうは、こゝにては惘れ、驚く意なり。思ひの外なる事にあひたるにいふなり。○かゝる心あるものなりけり、は、犬の、初めは、人に恐れゐたりしが、後に、人の慈愛ある語を聞きて、啼泣するなど、人と同じき深情あるものなり、と天皇の思召したるなり。

さて、人々、犬のこのよしを聞きて、中宮の御あたりに參り集ひて、先きに、翁丸ならじ、と云ひ定めたる右近内侍をめして、かやう〳〵にて、翁丸なるよし、顯はれたりなど、中宮の仰せらるれば、右近等、笑ひ騒ぎたるを、一條天皇も、聞しめしたまひ、中宮の御方に、渡御せさせたまひて、のたまふやう、「思ひの外に、犬なども、かゝるしをらしき情を持てるものなりしよ」とて、うち笑はせたまひたり。

うへの女房だちなども、來り、まゐり、集りて、呼ぶに、今ぞたち動く、なほ顔など腫れためり、「ものてうぜさせばや」、といへば、「遂に、いひ顯はしつる」など笑はせたまふに、忠隆聞きて、臺盤所の方より、「まことにや侍らむ、かれ見侍らむ」といひたれば、「あなゆゝしさる者なし」といはすれば、「さりとも遂に見つくる折も侍らむ、さのみもえ隱させたまはじ」といふなり。

うへの女房だち、禁中の女房共をいふなり。○ものてうぜさせばや、は、清少納言の語にて、ものは、犬の腫れたる顔に、つくべき藥などをいふ。調ぜさせ、は、藥を調合させむ、と云ふなり。これを食物をとゝのへさせむ、なり、といふ人あれども、當らざるが如し。○遂に云ひあらはしつる、は中宮の御詞にて、「少納言が、

遂にあさましき犬の翁丸たることを云ひあらはしつるよ」とのたまふなり。○忠隆、前に犬をうちたる藏人なり。○臺盤所　臺盤は食物の臺なり。これを置く處、やがて、臺盤所なり。乃ち、女房達の禁中のさふらひ所の名なり。○かれ見侍らむ、のかれは、犬を指していふ。○あなゆゝし、は、あゝ忌々しにて、今いふいやな事なり。○さりとも遂に見つくる、さりとも、は、今は左樣にいひ隱したまふとも、なり。つひに見つくる、は、いつか遂には其犬を見つけ出すなり。○さのみは、え隱させたまはじ。さのみ、は、さやうにのみは、にて、何時迄も、今の樣にのみ、なり、え隱させたまはじ、は、隱しおほせたまふ事はなるまじ、といふなり。

禁中の女房たちなんども、犬の事を聞き知りて、中宮の御方に、來り集りて、犬を呼ぶに、犬は今は立ち歩みて、人にも近づきたり。猶、顔などは、昨日の笞の名殘りにて、腫れわたりたるやうなり。清少納言、「あはれなる樣なり。藥調せさせばや　そを塗らせたらば、早く癒えむ」といへば、「中宮は、少納言こそ、この犬の翁丸なるよし云ひ顯はしたりけれ」（これを清少納言が、犬を依怙したるこゝろを、今云ひ現はしたり、といふ人あれど、いかゞあらむ）など、のたまひて、打ち笑ませたまひけり。このことを、藏人忠隆聞きつけて、臺盤所の方よりいふやう、「翁丸の、生きて、御あたりに參りたり、といふは、實事にや候ふらむ、若し、實事ならば、その犬見申し候はむ」といへば、清少納言「あゝ、忌々しき事かな。さる翁丸などいふ、生きて還りしもの此方には居らず」と、人して、答へさするに、忠隆、また折りかへして、「今は、左樣に、云ひかくしたまふとも、遂には、見あらはす時も候はむ、いつ迄も、隱しおほせたまふ事はあるまじ」といひたり。○以上、一節なり。右近内侍も前段に反映し、藏人忠隆も照應して、自つから、趣をなせり。而して、其反照の故意的ならざる處、後の作者に、好摸範を示せるもの、といふべし。○つとめて云々より、此處までにて一段なり。翁丸の慈仁に感じて、つひに、その恐怖

を去れる、天皇中宮よりはじめて、女房達の、犬を見て興趣を感ずる、藏人のもとの勅命を重んじて、穿鑿する等、細叙して、頗る妙なり、而して、天皇をはじめ、右近内侍、藏人等を、こゝに終結して、結尾の地をなせるは、尤も見るべし。

さて後、かしこまりかうじ許されて、もとのやうになりにき。なほ、あはれかられて、ふるひなき出でたりしほどこそ世に知らず、をかしくあはれなりしか。人々にも、いはれてなきなどす。

かしこまりかうじ、は、畏勘事なり。猫を威したるよりの恐れと、犬島へ流せ、と仰せられし御勘當なり。○もとのやうに、は、一度犬島に流されんとしたるが、御許しありたれば、又宮中に、あるべくなりしをいふなり。○人々にもいはれてなきなどす、は、清少納言が、犬を哀れなりしことを、人々にも云ひ出でられては、感極まりて、泣きなどす、といふなり。これを、犬が泣くことゝする説あれど、あまりに、作り過ぎたるやうなれば從はず。

さて、その後、翁丸は、天皇より御勘當を許されたれば、以前の如く、宮中に在ることゝなれり。なほ、この犬の人に憐れがられて、身を慄はして、泣き出したりし時こそげに、世に又なく、おもしろく、憐れなりけれ、この事を、人々に云ひ出でられては、感極まりて、清少納言も泣きなどしたり。○これ、結尾の語なり。輕々叙し去て、鋒を擱するところ、良將の兵を收むるが如し。一段には、翁丸懲罰の原因を説き、二段には、其歸來して、再たび、所罰せらるゝの狀を叙し、三段には、更に、歸參して、記者の厚情に感泣するを述べ之を結ぶに其黜罰を許され、又舊態にかへるを得たるを以てす。記事序あり、躰裁宜しきを得たり。枕草子中、殊に、取るべきの文なり。而して、尤も見るべきは、第三段にして、犬の慈愛の語を聞きて其態度を一變する邊にあり。讀む者留意せずんばあるべからず。

漢文評釋

文學士　久保天隨

◉二女斃狼（安井息軒）

(作者小傳)安井衡、字は仲平といつて、息軒は其號である。日向飫肥の人で、近古稀に見るところの大學者であつた。その著した左傳輯釋、論語集說、管子纂詁などいふ諸書は、支那にまで傳はつて、彼土の學者間に珍重されて居る。○息軒の文は小細工を爲ない代りに、何處となく鷹揚なる大家の風があつて、却つて世の常の文人よりも立派である。歿したのは明治九年で、年は七十八であつたそうな。

信地僻於山。多猛獸。松代封内農家之女年十七。拂曉芻於山足。老狼嘷於林。女見愕然。嘗聞父老之言。狼性走則噬。止則去。乃右手持鎌。凝立向之。狼徐進。間可三步。怒躍噬胸。女捽其兩耳。壓之地。欲鎌斷其喉。恐奮起拏噬。然勢不可止。稍鬆左手。狼果奮起相搏。躍噬其頭。不中。女捉兩耳而側之。膝據狼前脚。而奮相搏。巳失鎌。不可如何。乃長號救我。

信の地は山に僻して猛獸多し、松代の封内に農家に女あり年十七、拂曉山足に芻る、老狼林に嘷す、女見て愕然たり。嘗ちて父老の言を聞けり、狼の性走れば即ち噬み、止まれは則ち去ると、乃ち右手に鎌を持ち、凝立して之に向へり、狼徐かに進む其間三步ばかり、怒躍して胸を噬む、女其兩耳を捽みて之を地に壓す、鎌を以て其喉を斷らんと欲す、奮起拏噬を恣まゝにす、然して勢止むべからず、稍くにして左手を鬆む、狼果して奮起して相搏つ、躍つて其の頭を噬まんと欲するも、中らず、女兩耳を促らへて而して之を側す、膝を狼の前脚に據せて而して奮つて相搏つ、巳にして鎌を失す、如何ともす可からず、乃ち長號して我を救へと。

(字解)信地は信濃の地の略○僻於山、山がある爲に田舍びて居ること○拂曉は早朝○芻は草刈○山足は山の麓○嘷は吼ゆること○愕然、驚の甚しきをいふ○可、ばかり○噬は嚙み付くこと○凝立、一の處に

立つたぎりて身を動かさざる貌○捽は引き攫むことと○壓押し付ける○拏噬狂ひ寄りて噛み付くことと○緩は緩めることと○側之、横に倒したることと○長號、長く叫ぶ。

●(文義)これは前とは稍や異つて、勇しい田舍の女の事を書いたものである。信濃の地は、山が多い爲め、至て邊鄙で、猛獸など多く住んで居る。松代眞田侯の領內、なる農家の娘、年は其頃十七であつたが、朝早く家を出て、山の麓へ草を刈りに行つた。ところが、年老いた猛々しい狼が、林の中で呻り出した者だから、膽つぶるゝばかりに驚いた。しかし、前々狼といふ奴は、人が駈け出すといふと噛み付き、ぢつとして居ると何もせずに立ち去るといふことを、父兄から聞いて居たものだから、今さら逃げ出しもせず、右の手に鎌を持つて立つた儘に、狼の方を見向いた。すると、此狼は一通りの者では無かつたと見えて、そろ〳〵と進んで來て、やがて其間は三歩、即ち一間半ばかりになると、いきなり躍り上つて、娘の胸の邊へ噛み付かうとした。かの時遲く、この時早く、娘は狼の耳を引きつかみ、地面に壓し付けて、鎌で其喉を切り離そうとしたが、動すればはね返つて噛ひつきそうであるから、どうしたら善からうかと考へたが、今更仕方もなく、そこで一寸左の手を緩めた所が、案の如く狼は飛び離れて、狂ひ寄り、躍り上つて娘の頭を噛まうとしたが、幸にも中らなかつた。娘は、又もや狼の兩耳をつかみ、橫倒にして、我が膝で狼の前脚にのしかゝり、兎も角も組み布いて終つた。先づこれで安心と思つたものゝ、先の程組み合つたとき、鎌を何處かへ見えなくしたものだから、何樣する事も出來ず、あてどもなく救けて吳れ〳〵と叫び出した。

●(評論)この一段は、狼を組み伏せたまでの經過で、中ほどから後、人獸相鬪ふさまなどは最も細かに書かれ居る。その一度地面に押へ付け、又飛び離れ、最後に漸く取り押へた處、善く味ふと、眼前に見える樣て、文字が皆生きて居る。讀者は定めて手に汗を握り、且つ腥い風が吹き寄せる樣な氣がするであろう。

有一女走來。遙謂之曰。姐非某氏乎。曰是也。精力盡矣。幸來救曰救哉。緊捉勿鬆。遂走進。抽鎌於腰。亂斫狼脰。且突且抉。狼勢大衰。乃捨走歸。具告父兄。

一女あり、走り來ッて遙かに之に謂ッて曰く、姐は某氏に非ざる乎、曰く是なり、精力盡く、幸に來つて救へよと。曰く救はん哉、緊捉して鬆むるなかれ、遂に走つて進む、鎌を腰より抽いて狼の脰を亂斫し且つ突き、且つ抉ぐる、狼の勢大に衰ふ、乃ち捨て走り歸ッて具さに父兄に告ぐ

●(字解)姐は姉樣といふこと○某氏、誰さん○是也、そうです○是也の下には、女曰の二字が略された者と見るが宜しい。○精力は氣力○幸、願くは○緊捉、堅く捉らへ離さないこと○抽は抜き出す○脰は頸○突つき刺す○抉、えぐる○具はつぶさにと訓すべし。

●(文義)その時、折よく一人の女が走つて來たから、聲をかけて姉樣は誰さんでは無いかと云つたら、そうですくと答へた。そこで更に語を繼ぎ、この通の始末で、力も盡きたからどうぞ早く來て救て下さいと言つた。それならば救いましよう、が、しつかり捕らへ居て、決して離しては成りませぬと言ひつゝ、腰に差して居た鎌を抜き取り、狼の首を目がけて滅多無性に突き刺し、えぐり廻はし、さしもの狼、大に弱り果てたのを見て、やれ安心と思ひ、一先づ捨てゝ置いた儘、あはたゞしく馳せ歸つて、事の次第を父兄に知らした。

●(評論)この一段は、二人の女が遂に狼を仕留めるまでの事を叙したものであつて、幸來救といひ、救哉といひ、問答を寫すところ、急遽の樣を見る樣である。すべて文を作るには、正面から敘述することの出來る者でないから、かくの如き側面の配置の上に意を注いて、情景の一致といふ事に重きを置くのが第一である。

年少八九人。聞之走往。老狼果伏於莽。惴不敢近。拾礫投之。不動。乃往觀之。狼帶十餘傷。喘動未死。遂擊殺。舁以至家。一村盡驚。救者其從姉也。長女一歲。松代侯賜錢六千賞之。女五千錢。實嘉永戊申秋九月之事也。

年少なる者八九人之を聞いて走つて往く、老狼果して莽に伏す、懼れて敢て近つかず、礫を拾ふて之を投つも動かす、乃ち往いて之を觀る、狼十餘傷を帶び、蠕動して未た死せず、遂に撃殺す、舁いて以て家に至る一村盡く驚く、救者は其の從姉なり、女に長ずる事一歳松代侯錢六千を賜ふて之を賞す、女は五千錢、實に嘉永戊申の秋九月の事なり。

●(字解)年少、村の若い者○莽は草叢○礫は小石○蠕動、少しく息ありて動くさま○舁、かつぐ○從姉、いとこ○錢六千は六貫文○嘉永戊申は、同じく元年。

●(文義)そこで、此事を聞きつけた若者ども、八九人打そろひ、馳せてその場所へ行つて見ると、聞きしに違はず、年を經た狼が一疋、草むらの中に横に成つて居るが、何やら恐ろしくて、直には寄り付くことが出來ず、有り合ふ小石を拾つてたゝき付けて見たが、動かない。さては、愈よ死んだ者であるかと、少しく氣を安んじ、どや／＼と傍まで行つて、能く／＼調べて見ると、なる程十餘個處の傷を受け、大方弱り果てたものゝ、まだ息が殘つて居る者と見えて、ぴく／＼動いて居る。そこで、とう／＼敲き殺して、かついで還つて來たが、何にしろ、かよわき娘が狼を仕留めたといふので、村中の人驚かないものは無かつた。娘二人の中、後から來て救けたのは前の娘の從姉であつて、年は一つ上、十八であつた。それで其事が聞こえると、松代侯は甚だ奇特の事に思はれ、錢六貫文を賜ひ、本人の娘には五貫文を賜はつた。これは、嘉永元年秋九月に起つた事であつた。

●(評論)この一段は、つまり文の收束である。年少八九人、狼を見屆けに行つて、小石を投げ、その動かないを見て、初めて近ついたといふのは、つまらない些事の樣ではあるが、一は老狼の猛々しい樣を暗寫したものであつて、無用の入れ事で無いのは今更言はず、これが爲に山中の物寂しい景色も從て聯想される。大家の筆は、期せずして常に此の如き妙がある。その上それが故意とこしらへた物で無いから、一層に面白い。本人の娘が五貫文の褒美を受けて、一貫だけ他

より少いのを不思議に考へる人もあろうが、仕留めたのは從姉の方で、且つ長幼の差があるからの事で、別に怪しむにも及ばない。（完）

歷代和歌評釋（二）（古今集の部）

文學士　鹽井雨江

みよし野の山か白雪ふみわけて
　入りにし人の音づれもせぬ。

これは、冬の卷にあり。壬生忠岑の詠ぜしなり。

○みよし野。大和のよし野山なり。○みは美稱に冠らせたるなり。○入りにし人。よし野の山の奥に入りたる人なり。○音づれもせぬ。おとづれもせぬ事よと、末に感動をこめて見るべし。便りなきをいへるなり。

○一首の意は、あのよし野山の白雪をふみわけて、その山奥に入りたる人が、其の後絶えてよりもせぬ事よ。あはれいかにしつらむ、余を全く忘れはてたるものなるか。或はいかにか成りはてたるものなるか、誠に心もとなく且つ戀ひしくなつかしやといへる意なり。

○ぼんやりしたる歌なれど、其の人の身を氣づかひ、また、戀ひしくなつかしく思ふ心情は、慥に其の餘韻にひゞきたり。「おとづれもせぬ事よ」とのみ語りて、其の人の上の心もとなく且つ戀ひしき心は餘韻にこめたる所、大に詩趣を得たり。面白し。これも、深き心情のこもりてあはれに聞えたる歌なり。彼の靜御前が、八幡の社殿にて、「よし野山峯の白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ戀ひしき」と歌ひて、義經を慕ひたるは、やがて、此の歌を、やゝひきなほしたるなり。

昨日といひ今日と暮らしてあすか川
　流れてははやき月日なりけり。

これも冬の卷にあり。春道列樹が年のはてに詠ぜしものなり。

○あすか川。大和の飛鳥川なり。そのあすを、明日にいひかけ、昨日といひ今日といひ明日というてといふ意をきかせたるなり。且つ、一方にては飛鳥川の水の流るゝが如く早く流るゝ月日といひつゞけたるなり。

○一首の意は、昨日といひ、今日といひ明日といふて暮らして來て、はや今日は歳の暮れとなりたり。誠に飛鳥川の水の流るゝが如く、早くすぎゆく月日であるワイといふ事にて、歳月の流水の如く早きを感じてよめるなり。

○昨日といひ今日といひ明日といふて暮らすといふ事を、「昨日といひ、今日と暮らして」といひて、いひと暮らすとを、昨日と今日との上に分けて用ひたる所、大に面白し。あすか川といひかけて、明日といひて暮らすことをもきかせたる所も、面白し。且つ「あすか川流れて早き」といひつゞけたる工みも、眞淵翁の言へる如く、うるはしく言ひ流されて、いとよし。すべて作者の非凡なる手腕見えたり。其のいふ所、よく自然に、よく眞に、自から大やかに切にして、歳月早き歳暮の感情、誠にげにと聞えたり。彼の徒らに意匠をこらし詞をねりて、而して、その感は乏しき後世の歌人の口の、到底言ひ得べき所にあらず。我が古今の歌に於いて、歳月の早きをうたひたる吟詠は、我れはこれを以て秀逸とす。

天の原ふりさけ見れば、春日なる
　三笠の山に出てし月かも。

○これは、羇旅の巻にあり。安部の仲麿が留學生となりて唐土に在りける時、月を見てよめるなり。

○天の原。天の事なり。此の句、萬葉集には青海原とあり。土佐日記廿日の條に、此の歌のことを言ひたる所にも、やはり「青海原」とあり。青海原といへば、大海といふ事なり。青(あを)は、かゝる時には、大といふ意なり。古今集の撰者は、「ふりさけ見れば」といふ詞によりて、「天の原」と言ひかへたるものならむが、やはり「青海原」といふ方、一首の情の上に面白しとおほゆ。渺々たる大海を隔てたる故郷の方を、遙に慕ひながむる情の上に、「青海原」とある方、おもしろきなり。○ふりさけ見れば。遙に見わたせばといふ意なり。此の句の次に、「あはれ海上に月がのぼりたり」といふ如き詞を足して見るへし。○春日なる三笠の山。春日の里にある三笠の山といふ事なり。春日の里も、三笠の山も、大和の國にて、此の頃の帝都たる奈良の近傍なり。○三笠の山

に出てし月かも。三笠の山より出てたる月かマアーといふ意なり。かもはかなに同じく、感動の詞なり。

○一首の意は、渺々たる蒼海遠く見わたせば、をりから一輪の月の、海上にのほりたり。あはれ、彼の月こそは、我が昔故郷の國にありける時は、幾度か春日なる三笠の山より出づるを見たる月かなマアーといふ上にて、嗚呼、なつかしき故郷よと慕ひたる心をこめたり。

○一言のなつかしとも悲しとも言はずして、萬里の雲波を隔てたる他國に、故郷を慕ふ孤客の情、限りなく深くこもりて聞えたる。かゝるをや、誠に歌の粹を得たるものといふべき。我が古來の歌の中にての名吟ともいふべきものならむか。歌は斯くの如く詠みたきものにこそ。歌學ばん人たちは、能く心をひそめて學び習ふべき歌の姿なりや。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと、
　人にはつげよ、海士のつり舟。

○これも、羈旅の巻にあり。參議小野篁が、隱岐の國に流されける時に、舟にのりて出で立つとて、京なる人の許につかはしける歌なり。遣唐使の時に、舟を爭ひて罪を得て流されしなり。

○わたの原。海上の事なり。○八十島。澤山の島々なり。「八十島かけて」とは、これより行くさきは、澤山の島々あらむを、皆それを通りすぎて行くなれば、かく言へるなり。○漕ぎ出でぬ。出船したといふ事なり。○人にはつげよ。人とは、我が別れ來たれる都の戀ひしき人をさしたるにて、戀ひしき都の人につげてくれよとたのみたるなり。○海士のつり舟。其の舟出する海邊に、折りから釣りして居る海士の舟を見とめて呼びかけたるなり。而して、都の人に告げてよとたのみたるなり。

○一首の意は、いよ／＼此の岸をも離れ、今や行末數知らぬ島々をかけて、海上遠く舟出したりと、我が戀ひしき都の人につげてくれろよ、あはれ、此處らに見ゆる海士の釣舟よとたのみたるなり。

○勅勘を被ぶりて、隱岐の遠島に流さるゝ事となりたる篁朝臣が、行末遠く、おぼつかなき遠流の舟出に、今はとて、故郷の空のをしさ、悲しさ、いふばかりなく、

せんすべなき悲みの餘りに、心も空になり、氣も亂れ、絕望の舟の上より、遠ざかり行く岸べを見かへりて、其處らに浮びたるはかなき釣舟をよびかけて、そゞろに賴みたる歌なり。この海士の釣舟は、京へ言傳をたのみたる使の人を、海邊なれば、釣舟にたとへて言をるなりと說かれたる人もあれど、我れは、此の釣舟は、さる細工はあらずして、どこまでも、實際に其處らあたりに見えたる海士の釣舟をよびかけたるものとす。賴みなく悲しき悲哀の情の極かゝる知らぬ海士の釣舟をよびかけたるなり。實際の海士の釣舟にしてこそ、切情の知られて、限りなく面白きなり。

おぼつかなしとも、心細しとも、たのみなしとも、悲しとも、一言をいはずして、「わたの原八十島かけて」といへる詞より、海士の釣舟をよびかけたるあたりに、そのせまれる哀情限りなくひゞきて、誠にしみ〴〵と身にしむものあり。これも、また歌よむ人の手本として學ぶべき名吟といふべし。

北へ行く雁ぞ鳴くなる。つれて來し
數は足らでぞ歸へるべらなる。

○この歌も同じ卷にあり。讀みたる人はわからず。ある女の、その良人と共に、他國へ行きたるが、其の國にて、やがて、其の良人は死にたれば、その女の唯だ一人にて、泣く〳〵京へ歸へり來る途にて、よめる歌なりといふ。

○北へ行く雁。北の方へ歸へり行く雁なり。雁は北より來たり、北へ歸へる。即ち、故鄕の空へ歸へり行く雁なり。○鳴くなる。雁が悲しげに鳴いて行くといへるなり。○つれて來し伴れ立ちて來たれるといふ事なり。○數。故鄕より伴れ立ちて來たれる友の數なり。○足らで。友の數が足らなくなりて即ち少くなりてといふ事なり。○歸へるべらなる。歸へり行くやうであるといふ事なり。

○一首の意は、北の方へ歸へり行く雁が、悲しげに鳴いて行くワイ。彼れ等も、初め故鄕より伴れ立ちて來たれる友の數の足らずなりて、歸へり行くやうである。さても、彼れ等も、其の伴れ立ちたる友を失ひて歸へり行

くか。それてかくは悲しげになきて行くかといふ事にて、他鄕の空にて、最愛の良人を亡ひ、獨りさびしく心細く泣きながら歸へる旅路にて、歸雁のさびしく悲しげになきて行くを見て、をりから我が身の上の悲境に連想して、鳴き行く雁を思ひやり、またわが身の悲しき情をうたひたるなり。

○一讀、悲哀の情景、たゞならぬものなり。再讀、悲哀の感情、更に身にしみて堪へがたきものあり。三讀、悲哀の眞情、更らに〳〵切に、はら〳〵と涙のこぼれてとゞめがたきものあり。眞に其の眞情よりいでて、をりからの感、いよ〳〵讀みて、いよ〳〵あはれに、いよ〳〵味ひて、いよ〳〵美なり。新古今集に「故鄕へ歸へる雁がねを夜更けて雲路に迷ふ聲きこゆなり」といふ歸雁の歌あり。歸雁に關しての歌、我れは此の二首を以て、古來の絶唱とす。

月夜よし、夜よしと、人につげやらば、
　こてふに似たり。待たずしもあれ。

これは、戀歌の卷にあり。讀人はわからず。

○月夜よし。今宵の月のけしきが誠によしとなり。○夜よし。月夜よしといふべきを略して夜よしといへるなり。月夜よし月夜よしといふべきを、かく言へるなり。○こてふに似たり。來よといふに同じやうなりといふなり。此の次に、「さればつげやらむ」といふ詞を入れて見るべし。○待たずしもあらず。我れもまた其の人を、心の中には待たざるにもあらずといふ事なり。○じは强める助詞。もは感動詞なり。

○一首の意は、今宵は月のけしきが誠によいと、人の許へ知らせてやつたら、まるで、其の人に來てくれよといふに同じやうなり。我れも、心の中には、其の人の來たらんことを待ち願はざるにもあらず。されば、月のけしきが、今宵は誠によいと、其の人につげやらんといふ事なり。是非に來よといひやらんは、餘りあからさまにて憚りなきにあらず。されど、其の人の待たれざるにもあらず。されば、月のけしきがよいと報らせてやらば、來よといふに同じやふなれば、かくいひやらむとなり。

○やゝ理窟がましき所はあれども、其の調も、其のいふ所も、何んとなう風流雅致あり。來てふに似たりといひて、待たずしもあらずと添へたるいひざまも、面白し。



をさな兒の最期

（原作者白耳義のシエクスピヤ）
・マーテルリンク 作
大塚楠緒子 譯

二の幕

城内の一室にアグロバール並にイグレーン居る其處へベランジエール入り來る

ベランジエール　タンタジルは何處に居ります、

イグレーン　　此處にゐるはいな、余り高い聲では話をしやんな、直隣の室に寢入つてゐる、ちつとばかり青ざめて又弱つてゐるやうじや旅中の長い船路に疲れた故であらう、それでなくば御城の樣子にあの小さい胸が驚かされたのか理由もないに泣き出した故私の膝の上で寢かしつけて遣りました、まあ來て見て遣りや……私の寢床に眠つてゐる……片手を頬の上に乘せた儘それは端正として、ほんに小さい物思をしてゐる王樣のやうに眠つてゐるはいな……

ベランジエール　（は不意に泪をほろ〳〵とこぼして）姉樣、姉樣、お痛はしい姉樣、

イグレーン　　まあ、何としたのじや、

ベランジエール　言つては惡いのかも知れませぬが……そして確にそれとは申されませぬが……私は滅多に聽かれぬ事を聽きましたはいな、

イグレーン　　どの樣な事を聽いたのじや、

ベランジエール　私が塔の廊下の直側を通つて居りましたところ……

イグレーン　　うむ、

ベランジエール　戸が一つ開きかゝつて居りました故何心なくそつと開けて……そして中へ入つて見ました……

イグレーン　　してそれは何れの室へ、

ベランジエール　決して未だ見た事のない場所で御座いま

した、そして其奧には燈の輝いてゐる長い廊下が見えまして、その向には出口のない長部屋が……私は此處はなんでも往つては惡い秘密な場所であらうと感じました故戰慄として後へ戻りかけました時、何處やらにやつと聽きとれるばかりの話聲がきこえました、

イグレーン　それは、必定女王の侍女らの聲であらう、彼奴らは塔の底に住んで居るのぢや……

ベランジエール　それは何者であつたか、確とは解りませなんだれど……聲と私との間には猶いくつもの戶の隔てがあつたかして其聲はまるで咽を壓へつけられてゐる者の口から出る樣に聽えましたはいな……私はなるたけ身を近く寄せました……判然とは聽きとれませなんだが、なんでも今日來た幼兒のことと金の冠の事とを話してゐるやうに思はれました……そして笑ふてゐる樣子で御座んした……

イグレーン　なに笑ふていたと……

ベランジエール　はい、どうも笑ふてゐると思はれました……それでなくば泣いて居たのか、それでなくば私には解らぬ何事かを爲て居つたので御座りますやつと聽き取れたので御座りましたもの、そして好い聲で……丸天井の下に反響して大勢でもゐるかのやうに聽えました、女王がその幼兒を御覽になるのだといふて居りました……それ故大かた彼奴らは今宵塔の下から出て來るのでは御座りますまいか……

イグレーン　なんといやる……今夜……

ベランジエール　はい……はい……私はどうも其樣に思ひます……

イグレーン　其幼兒の名はいはなむだか、

ベランジエール　たゞ幼兒とばかりいふて居りました、ずつと小さいたゞ幼兒とばかり……

イグレーン　幼兒といへば他にはない……

ベランジエール　まだ早過ぎると一人がいひました時少し皆の者の聲が高まつで聽えました、

イグレーン　其理はわかつてゐる、塔から彼奴らが出るといふも今が始めてといふてはない……それで何

故女王が彼の子を呼び寄せたかといふ理由もよく解りました……けれどもその樣に急がうとは思はなんだ、よし、それならば其積て……私等は三人じやそして未だ間もあること……

ペランロエール　どうなさる思召で御坐ります、

イグレーン　　とはいふものゝどうしてよいやら實は途方にくれるのじや、けれども私は女王を驚かしてやりませう……

そなたはまあ、その樣に慄へてゐるを知つてか……とまれかくまれ何として……

ペランロエール　なんてござります、

イグレーン　　容易く彼の兒を女王に渡すものかいなあ……

ペランロエール　けれども心細いイグレーン姉樣、私等は私等ぎりで御坐りますぞえ……

イグレーン　　ほんにそれに違ひない私等は私らぎりじや、しかしたつた一つ救はるゝ方法があるはいな、其手段ていつも是迄は免かれてゐる……それらの時のやうに私等はひとつ跪いて憐みを請はうではないか、そしたら彼の女王も可憐と思はぬとも限らぬ……泪には脆う我を折ることもあるのじや故……まあどうでもいふ儘になつて憐みを請ふて見やう、存外ほゝゑむかも知れはせぬ女王も跪いて來るものは許さうと思ふてゐるのじや……女王は數年あの塔に住ふてゐて私共の親しむでゐたものを悉皆滅し盡したけれど誰も手對ひするものはなかつた……まるで私らの心の上に石塔のやうに重く權力を乘せてゐるので手出しをする事は出來なんだ……屈彊の男共の居つた時とて皆怖れて縮みあがつてをつたもの……けれども今度は女の順番じや……よし、よし、今度は私らの立ち上る時じや……ほんに女王の勢力は何に因つてあの樣に强いかわからぬ、兎に角私はもう女王の塔の下になつては活きて居まいと決心したはいな……さ、さ、其方ら二人もし怖ろしう思ふならば私をひとり殘して彼方へゆくがよい……私は此處に女王からの手出しを待つてゐる……

ベランヂエール　姉樣私はどうしてよいやらわかりませぬけれどどこまでも御一同に此處に居ります、

アグロバール　私もとゞまりますイグレーン樣、長い間まことに私の胸は休まりませぬ……貴方樣には決心じて覺悟をなされました御樣子……　私共も幾度其決心を實行うと致しかけましたか……

イグレーン　其方もまた決心した事があるといやるか……

アグロバール　彼等は皆決心して反抗を試みたので御坐ります……しかし終には何時も力をうしなふてしまひました……御覽なされませ今に貴方樣もそうて御坐りませう……もしも女王が私を今宵召しますから一言もなく手を束ねてよろめいた足で心靜かに斷念て階段を昇つてゆかねばなりますまい、そしてたしかに開いた眼をして降りて來ることは再び出來ますまい、私には最早女王に對ふ勇氣はござりませぬ、我々の手は迚も魔者を對ふては無効で何程の力も及ぼすことは出來ませぬ……役立たずの無益な手でござります、けれども思召通りにお助け申してはみませう程に………先づ戸をお閉めなされませ、そしてタンタジル樣をお起し申して貴方の御手でしつかりと纒ふて膝の上にお抱きなされませ……外には防ぐ術も御坐りますまい……

三の幕

前幕と同じくイグレーンアグロバール對ひゐる

イグレーン　私は戸を調べて見たが其處に三つある、其中の一番大きいのを守らうはいな、他の二つは厚うて低く決して開かれはせぬそして鍵も以前から失はれ鐵の門が壁にまでしつかりと嵌つてゐる故に……ちよつと手を貸してもらひませう、して此の大きい戸を先づ斯うして閉めて置かう、町の門のよりも重い戸じや……そして又堅固で雷じやとてうち壞してはいることは出來まい……其方はなにかの用意は出來てゐるかや、

アグロバール　(入口に坐りながら)私は膝に劍を乘せて

入口の階段にかうして居ります……思へはかうして守衛を此處にしたも此處に待ち設けたも今が始めてといふては御坐りませぬ、よく人には記臆には殘つて居れどとんと其事の理の解らぬ事があるもので御坐りますが……私に何時ぞやもちやうど斯ういふ事を致しました、けれども劍を拔く事は出來ませなんだ……今日も此通りに劍は眼の前に御坐ります、腕には最早力もござりませぬけれど……けれどもまあ遣つつけて見ませう……なにが何やら不思議でわかりませぬけれど今は兎に角我々の身を防がねばならぬ時で御坐りませう、

（ペランジエール此時タンタジルを抱きて隣の室より入り來る）

ペランジエール　眼を醒まして居りました、

イグレーン　まあ此兒は青い顏をして……どうしたのじや、

ペランジエール　どうしたのやら知りませぬ……ひとり啜り泣きをして居りましたはいな……

イグレーン　これ、タンタジルよ、

ペランジエール　あれ他所を見てをるはいな、

イグレーン　私が此處に居るのが見えぬのじや……タンタジルよ其方は何處に居ると思ふ、姉樣がそなたに物をいふてゐるはいな、何處をながめて居るのじや……此方を向きや……さあ、さあ、一同に遊ばうてはないか……

タンタジル　いやじや……いやじや、

イグレーン　其方は遊ぶのは厭か……

タンタジル　私はもう歩けませぬ御姉樣、

イグレーン　歩けぬといやるか……さ、さ、何故その樣に弱つてゐる……何處か痛みでもするのてはないか、

タンタジル　あい……

イグレーン　何處が痛むのじや、姉樣にいふて見やタンタジルすぐ治して遣らうはいな……

タンタジル　此處と指してはいはれませぬ、諸處が痛みますもの御姉樣……

イグレーン　此處へおじやタンタジル……私の腕の心地の好いのは知つてゝやらう、此處へ來るものは直なほる、此方へ渡しやベランジエール……私の膝の上に坐つたならば痛みもなにもさつぱりと去つてしまはう……さあ、具合が好いであらうがな……其方の姉様たちは此處にゐて其方を取り回んでゐるのじや……かうして護つてゐるものを、なんと魔物がとり附からうぞいな……

メンメウル　けれどもイグレーン姉樣……何故此處には明火が御座りませぬイグレーン姉樣、

イグレーン　在るではないかこれ……あの丸天井から垂れ下つてゐる明火が其方には見えぬのか、

メンメウル　あい、あい、けれども大きうは御座りませぬ、もう他にはござりませぬか、

イグレーン　もう他には無うてもよいではないか、見たいと思ふ程のものはよく見えるではないか、

メンメウル　それでも……

イグレーン　あゝ其方の眼は窪んでゐる、

メンメウル　御姉樣の眼も……

イグレーン　今朝は氣が附かなんだ……なんとなく不吉な前兆が胸に浮んだやうでもあるけれど……心に直接に感じた事でも理屈ではいはれぬことのあるものじや……

メンメウル　私は心といふものはどのやうなものやら見たことは御座りませぬ御姉樣……アグロバールは何故あの樣に入口に居りまする、

イグレーン　すこし休むで居るのじや……寢に行かぬ前にそなたに接吻せうと……そなたの眼の醒めるを待つてをつたのじや、

メンメウル　膝の上に乘せてゐるは何でござります、

イグレーン　なんといやる膝の上に……膝には何も無いではないか……

メンメウル　いゝえ、なにやら乘つて居ります……

：

アグロバール　おゝ、これは別になんでも御座りませぬ若君樣、私は自分の古い劍を眺めて居つたので御座り

ます、それは見覺えもなくなる程になつてをります‥‥此劍は數年來私の身の爲めに勤めてくれたので御座りますけれど此頃では悉皆これに信用を失ふてしまひました。もう直に壞はれてしまふでござりませう‥‥これ柄には汚點がござります‥‥鋼も漸々鈍つてまゐります‥‥私は自分で望んだことも何であつたか忘れてしまひました、今日はまことに氣が引き立ちませぬ‥‥どうしたらそれが治されませうか‥‥的にならぬ事を的にして活きて居るので‥‥‥働いては見るもの丶世の事には確信とては持たれませぬ、活きてゐるも張合のない命もいらぬやうに思ひます事も折々ござります‥‥‥誰れてもそう思ふてござりませう‥‥‥もう遲うござります私は勞れてをります‥‥！

メンメロル　彼れは疵を受けて居りますイグレーン姉様、

イグレーン　何處に‥‥‥

メンダシル　あれ額と手に‥‥‥

アグロバール　これは最早苦にもなりませぬ古疵でござります、今夜はこれに光がさしたので御坐いませう‥‥今まで御心附はなかつたので御坐りますか、

メンダシル　イグレーン姉様どうやら彼れは悲しそうに見えます、

イグレーン　いや、いや、そのやうな事はない、只甚く疲れて居るのぢや、

メンダシル　そう仰しやる御姉様もお悲しそうにお見上げ申します、

イグレーン　まあ、まあ、そなたは何をいやる、これ此樣に私は笑ふてゐるはいな‥‥‥

メンメロル　そしてあのベランヂエールル姉様もまた‥‥‥

イグレーン　まあ、この兒は‥‥‥あの御姉様もまた笑ふてゐられるではないか‥‥‥

メンダシル　いゑ、あれは笑ふてゐられるのでは御坐りませぬ‥‥‥私はよう知つて居ります‥‥‥

ダベレーン　まあ接吻してたもそして他の事を考へた

がよいはいな、

（とタンダヂルに接吻す）

メンダヲル　他のことゝはどの樣な事を御姉樣……

そして御姉樣は接吻をなさる時に何故私の氣をお痛めなされます、

イグレーン　そなたの氣を痛めるとは……

メンダヲル　わい……何故御姉樣の胸に動悸がうつのかわかりませぬ故に……

イグレーン　其方にそれが聽えてか、

メンダヲル　それは、それは、うちますとも……あれ彼の樣に……

イグレーン　どのやうに、

メンダヲル　いはれませぬ御姉樣……

イグレーン　理もないに驚いてはならぬぞや、そして譯のやうなことをいやんな……われまあ……そなたの眼は濡れてゐる何故その樣に氣遣ひをしやる、私もまた其方の胸の動悸を聽くぞや……そなたは何時も接吻する時には聽くであらう……舌のいはれぬ事を語るのじや……

メンダヲル　けれどもたつた今は聽きませなんだ……

…

イグレーン　それは斯ういふ故じや……おゝそなたの胸の動悸は……まあその樣に何故臆してじや……

メンダヲル　…あれ張り裂けるやうな……

（泣き出し）

イグレーン姉樣……御姉樣……

イグレーン　どうしたのじや……

メンダヲル　あれ聽えます……彼奴らが……彼奴らが來るのでございます、

イグレーン　彼奴らとは誰れの事じや……まあなんとしたのじや、

メンダヲル　戸の側に……戸の側に……彼奴らが其處へまゐりました……

（とタンダジルイグレーンの膝に倒れる）

イグレーン　まあ、なんとせう……此兒は氣をうしなふた……

ペランジエール　介抱してやらねば……介抱してやらねば……此兒は死んでしまふはいな、

アグロパール　(劍を握り俄に立ち上る)私にも聽えます……誰れやら廊下を歩いて居ります、

イグレーン　おゝ……(一同默して耳をすます)

アグロパール　あれ……彼奴らの仲間がまゐります……
……

イグレーン　仲間とは……どのやうな、

アグロパール　それは存じませぬ……貴方樣にはあの足音がお聽えなさるやうでやつぱりお聽えなされますまい……
彼奴らは尋常のものゝやうには歩きませぬ……けれども確に此方へまゐります……戸に觸つて居ります、

イグレーン　(腕にタンタジルを抱き緊め)タンタジル……タンタジル

ペランジエール　(其時彼れに接吻して)私も……私も……タンタジル

アグロパール　彼奴め戸を搖がしてゐる……お聽きなされませ……そつと、そつと……なにやら呼やいてゐる……

(戸の穴に鍵を嵌める音す)

イグレーン　彼奴らは鍵を持つてゐるそうな……

アグロパール　はい……はい……どうもそう思はれます……お待ちなされませ……
(と階段の最後の段に歩みより劍をかざして踏み止め二人に對ひ)
此處へ御出でなさりませ……御出でなさりませ……
：
(寂寞、暫時して戸の少し開くにアグロパールは其隙間に刀尖をさし附けつゝコンパスの針の如くに震はせて戸の開きかゝれる隙を切つて劍を出せば、劍は開き戸の不思議なる壓迫の爲めに響をなして碎かれ階段に音たてゝ其破片轉ぶ、イグレーンは失心せるタンダヂ

ルを抱きしまゝ飛び上り、ベランジエールアジロバールと諸共に力を合せ、人の氣はひもなく物音もせぬに怪しく靜かに猶開かれんとする戸を閉め返さんと徒らに力を盡くす、冷たき靜かなる光は室內に入り來る、此時タンタジルは俄に立ち上りて正氣附き救の叫びを擧げて姉に接吻す、それと共に戸は押すまゝに容易く礑と閉さる、）

イグレーン　おゝタンタジル……

（驚きつゝ互に顏を見合す）

アグロバール　（戸の側にゆきて聽きすまし）

もう物音は聽えませぬ、

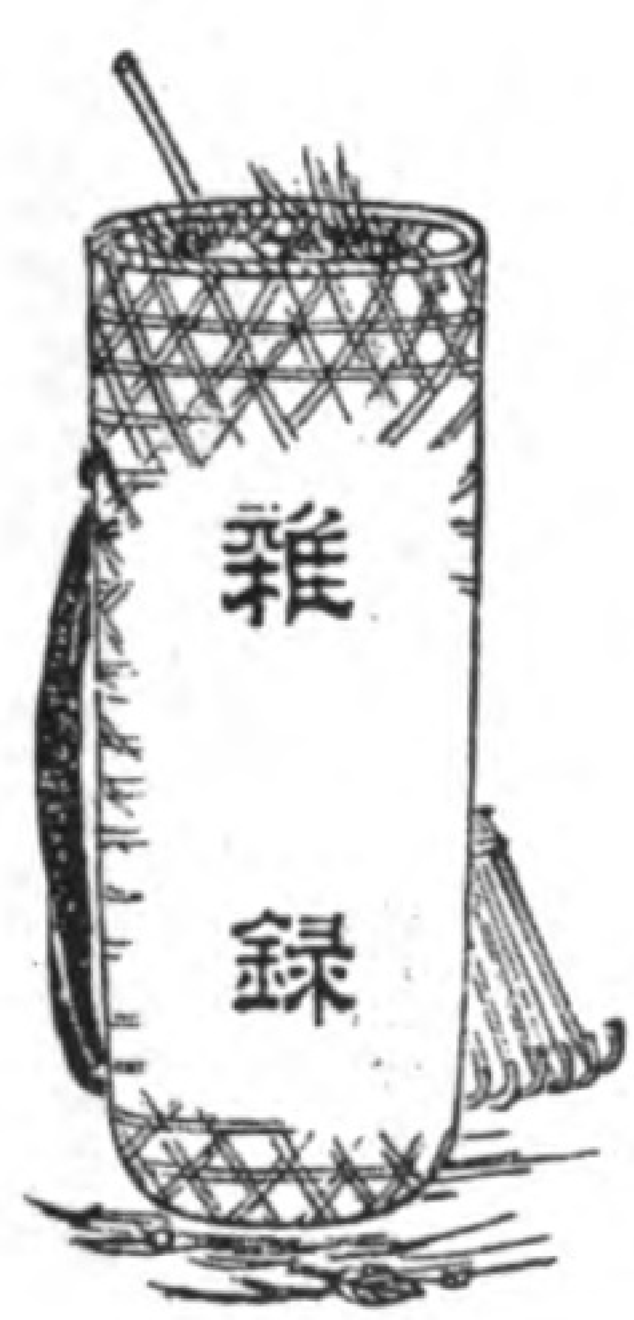
イグレーン　（喜に激して）

タンタジル、タンタジル、あれ、あれ、助かつた……眼を見や……青く見える……なにやら物を言はうとしてゐる……

彼奴らは私共が守つてゐたのを知つたと見える……それで强ひて手を下さなんだのぢや……さ、さ、タンタジル接吻してたも……接吻して……胸の底に浸み透るやうに……

（四人は涙にかきくれて抱き合ふ）　大尾

小說「春潮」は作者病氣の爲今一回休揭
但し次號完結



女子の人物鑑識

下田歌子

女子は感情の奴隷なりと、此語甚だ酷なるが如しと雖ども、亦强ちに不當なりとして退くること能はざるに似たり。何となれば女子の人に對するや。其賢と愚と、義と非義とを問はず。やゝもすれば先づ、其己れが感情に一致すると否とによりて、或は他の事を容れ、或は

他の事を退くるが如き無妄の弊を免かれず。爰に於てか女子の賢なるも男子の愚なるに若かず、とさへに酷許せらるゝに至れり。是れ女子は其觀察の往々、感情の間に誤らるゝと共に遂に人を鑑識するの明を瞑まさるゝによるが故なので。さらば人を鑑識するの術を學ぶは男子に在りても、亦決して無用の事ならざるべしと雖ども、女子に在りては殊に最も其然るを覺ゆ。

元來、人は社交的動物なるが故に、其社交を爲す上に就きて、其己れに對する人のいかなる人物なるかを知らんと欲するものは、則ち自然の道理なりかし。是を以て、洋の東西を問はず。孰れの國に於いても、多少人を觀るの術を講ぜざる無し。我が東洋に在りても、早くより相學と稱して、一種の人物觀識法、これ在りしと雖ども、其說くところ科學に基づけるにあらずして、往々杜撰孟浪に走



れり。且つ觀相の事たる相者即ち專門家の事として顧ず。無識無學なる賣卜者流が糊口の一材料として之を結ぶに至りしより、識者は、之を口にするをだも耻づるに至り、遂に其發達を遂げずして止みにき。然れども相學は決して斯くの如き價値無きものにはあらず。正確なる一の科學的眞理なるが故に、能く其理を解し得たらんには、有形の骨相をとらへて、無形の精神を鑑察するに、屈竟の利器なりとす。近來泰西に於いても科學の進步とゝもに、外觀を視て人の性質を知るの學頓に大いに發達せり。そはまだ完全なる科學として、公論せらるゝまでには至らずと雖ども、之を犯罪の搜索に應用し、之を敎育の一助となし、又、社交の上に引用する等、其効頗る多きを加へぬ。故に人物を觀察するには必ず先づ、其外觀の如何を熟視し、然る後に其內容の如何を認めんとするの風、益ゝ廣く

行はるゝに似たり。

蓋し、人と相ひ對するの時、先づ其容貌を觀、次に其擧動を觀、而して、其精神のあるところを察する、是れ則ち注意の周到なる、社交術の進歩せる、文明の國民智者の行爲として決して蒙昧無智の徒の爲すを得べき事にはあらざるなり。

然るに女子は男子に比して、其天質周到緻密なるがゆゑに、從て人を鑑識するに適し、且つ人を觀察せんと勉らることの、切なるにも係らず。往々、其觀察の明、却りて男子に劣れるものあるは何ぞや。是れ則ち其感情に支配せらるゝこと、男子に比して强きと、其見聞智識の男子に比して狹きが爲に、人を觀識するの智識乏しきによれるなるべし。要するに人物の觀識は、他の容貌、擧動、言語の上に就きて、其性質及び思想を、つぶさに觀察し、幾多其腦裡に集蒐し來たれる材料と對照比較して、始めて其斷定を下だすべきものなれば、猥りに感情の爲心の明鏡を曇らしめざるべき、冷靜公平なる頭腦と、該博にして周到なる智識とを兼有し、始めて鑑識其當を得るものなるが故に、假令女子として男子と同樣なる眼識ありとするも、其感情に制せらるゝことの、男子よりも甚しきが爲に、鑑識能く其中正を得るは、蓋し至難のことなるべし。況んや其智力見聞の男子に劣れること、數等なる女子に在りては、やゝもすれば、他に欺かれて、其明を失ふこと容易にして、遂に女子は組し易き者。とさへ輕んぜらる、亦已むことを得ざるなり。是に於てか人を觀識するの法を學ぶは、男子に取りても欠く可らざる事たるに相違無しと雖ども、女子に在りては最も緊要の事なりと信ず。殊に、女子の運命は大低他動的にして、一生の幸不幸も、大率男子の運命によりて、支配せらるゝが常なれば、其己れに對する人の意思性情を觀識するの術を學ぶは、必要實に欠く可らざる事たること宜なり。

知るべし那の泰西諸國に於ける女子が、人を鑑識するの明に富みたる、我が東洋女子の比にあらざる事を。彼れらは言へり。某氏は爾々の容貌を備へたり。必ず志想斯く〳〵の人なるべし。某女は爾々の性質を有せ

りと、惟ふに其容貌は斯くぞあるらめなど語り合ふなり。又彼れらが他の傳記に作り、他の人物を品評するに當りては、必ず先づ其容貌を論ず。是れ則ち彼れらが社會に於いては、いかに人を觀識するの方法は、其面貌によることの多きかを知るに足るものならん。

されば、彼れ、年少なれ、世故に通ぜざる女子が、自ら婚を撰ぶを許さるゝも、後に至りて咬臍の悔少きは蓋し之が爲なるべし。我東洋婦人も、やゝ昔日の蟄居的風習を脱して、漸次社交の一要素たらんとするの氣運にむかひつゝある折柄、女子の人物觀識を學ぶは益々其必要の迫れるを覺ゆ。



余が不敏なる往々にして、其欺くに道を以てせし者の爲に過らるゝの失あることを自ら省み、人を觀識するの術を學はんと欲して、猶未だ能はずと雖ども、多少研究の効あるを覺えし心地せらるゝまゝに、今また後進諸子が人を觀識するの法を學びて、之を家庭の裡に、之を社交の上に、將た夫を助くる爲に、或ひは子を教ふる爲に、參考裨補あらしめまく欲すよりて、聊か自らが研究し得たる所を質すに、泰西博士が女子の爲にとものされたる觀相の相談中、最も趣味ありと覺ゆる者を摘譯し、併せ記して、逐次掲載することゝせんとす。然れども、事少しく異樣の感あるをもて我が同胞姉妹の單に一笑に附し、以て塵塚に埋沒し去るべきや否や。

伊太利女皇の學校時代

池田再來

◎學問の上に於ては殊更に國王の爲にとて設けし道が無いと云ふ、古い諺に言はれたとてあるが、古い昔に此の諺が唱へられてから、今に至ッても尚其趣は變らず

矢張り其眞實であることは近代一人の王女に就ての敎育談に徴して明である。

◯現伊太利女皇の受られた敎育は、即ち年若い王族方に今日敎育上の要求を示す好い適例である。

◯女皇の父君にてましますモンテチグロのニコライ親王は、其三人の姫君を露國に遣はし給ひて、貴族の姫方の間に交へて、充分な修學をなさせやうと露帝の許に客分となし給はッた。

◯それに就て撰定した學校はスモオルチーの或る學校で、これは貴顯の子弟を敎育する學校の一つで其の校長は王女のリイベンといふのである。

◯此學校は本國語の外に、二三の外國語の讀み書きが出來なければ、入學を許さぬ規定であッて、其校長の居る限りは、佛語、獨逸語、數學、歷史、文學、育兒法、理學、圖畫、音樂、其他種々の課業を受けねばならぬのである。

◯モンテチグロ國の王女方は規則に遵つて、其本國語なるセルヴイア語の上に、露語、佛語、獨語で流暢に話が出來るやうに學ばれたのである。

◎現伊太利女皇におはす、ヘレン姫は非常に外國語に巧であるとの評判であッた、然し又非常に内氣におはすので、知らぬ人の前で話したことは稀であつたとのとである、此點は其長姉にておはす、現公爵夫人ミリザ姫とは違ふて居られた、

◎姉君は二人の妹君よりも、暫く前に勉學を畢られたが、妹方が卒業の間際迄、其學校の特別なる待遇の下に同寓者となつて殘つて居られた、而して本國から附き添ふて來た、瑞西の女敎師であつた侍從の管理の下に、毎週一日の宅日を設けて其友を會するとを許されてあつた、

◯未來の女王ヘレン姫は、毎も此茶會に出席をなされたが、然し何時も沈着にして控え目に見受られた、

◯姉君のミリザ姫は其反對であつて、常に此席に侍するがを特許されて居た、或人の語るところによると、「出來事の所有題目に就て能く話すとが出來、而して其問題の上に、自分の見解を有つて居られたかを表はす

やうな樣に何時も話され、又相當な理由を示さずには此等の見解を抛棄することはなかつた、姫は行爲を勵行すべき必要のある意見を懷かるゝ場合には、其意見を相適ふて、自己を堅く制して變ることがなく實行された、又能く書を讀み書籍より敎へられた數多の理想を懷いて居られた、此世の經驗といふものは一も有せず隨て、何者かを得んとてあせるとはなかつた、凡て觀物を好まず、舞蹈會で是迄躍つたとも有るか無しである、身躰は强く骨格は逞ましく健全で、而してモンテネグロ國の處女達の如く、矢張り有の儘で質朴である、姫は來る人民の顏を直視して、而して靜かに明かに其思想を話された、其言葉の裏には常の會話に於てよりも尙つと數多の理想が見られてあつたつまり言外に多くの意味が含まれてゐた、是は善い目的に向つて眞面目に勉强なされたからである」とのことである、

◎ヘレン女皇は當時ラテン語を學ばなかつたとぞ、今更深く悔んで居らるゝといふとである、伊太利の皇族に緣つき給ひてから併し是まで學ばれた所では伊太利語の上に未だ流暢と華美とを欠くので、伊太利女皇として之を用ゐて遺憾無き迄に至らぬからである、そこて女皇は學校時代の如く銳意其良人の國語の上に、深い智識を增さうと日夜勉强して居らるゝといふとである。



家庭の新空氣

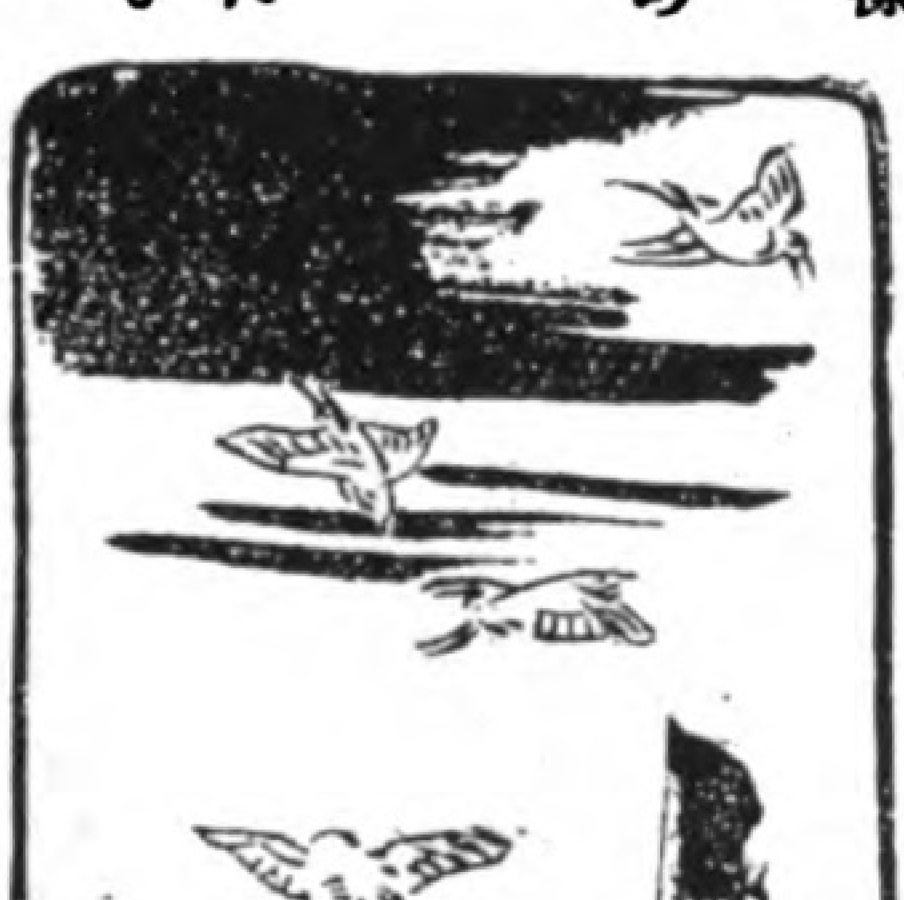
和田鞆子

世の文明を計るも國の富强を作るにも男子のみでは到底充分な働きは出來ません。然るに古來日本の習慣では女子は生涯下女の働きのみをなし、偶まには芝居でも見て愚圖〳〵と引込んで居れば天職を盡くした樣に思うて家の會計も知らず子供の敎育も知らず、况して己れの天職などに就ては一考するものさへなかつた。然し女子は家庭の半面を司つて居る通

り、又社會の半面をも形成して居るから、世界は男子のみの世界と考ふるは大なる誤りてある。如何に才學高き男子も妻の內助なくしては充分驥足をのばすとが出來ない、如何に天才の兒女も母の教育なくしては立派な人となるとは出來ません。婦人の任務は斯の如く重い、即ち天職に於て男女とも其輕重はない。日本か何時迄も未開であつたのは僅かに日本の女子が其天職を悟らずして只下女の生活に滿足して居つたからである。之に反して歐米の諸國が著敷開化したのは、女子教育が早くから開けて女子が各其天職を盡くす樣になつて居ったからである。そこで女子が天職を悟り、職務を盡くす樣になるには、學問の力に因り、教育のお蔭に因るより仕方はありません。

◉男女の交際

秘密の物だと云へば强いて見たい、內密話しと云へば何處迄も聞きたい、是れか人情てある、水が低きに流れ、烟が高きに昇ると同じ事てある。人に男女の兩性あり、電氣に陰陽の兩極あるは亦實に天理である、電氣の兩極が互に引くが如く男女の兩性が互に相近づき相愛せんとするも亦實に人情てある。然るに古來支那的道德の注入に因つて男女七才にして席を同じうせずとか、男女は手づから物を授受してはならぬとか云ふを至極の美德として、何處迄も男女の間を隔離し、男は男、女は女て全く別の社會を形づくらせる樣にした、之れが抑もの誤りてはあるまいか。男も女も等數社會の一員てしかも其長所と特性に於て各差異がある、その男女が清き交際をするのは、互に剛柔相和し相助くる點に於て大なる利益あるのみてはない、又實に社會をして平和に長閑に人生をして愉快に幸福に暮さしむる基てある。然し私の所謂交際とは實に彼雪の如く白く水の如く清き交際を意味するのであつて、決して彼下宿屋樓上に靑年男女か痴話情談に夜をふかす如きを云ふのではない、然るに今の世には婦人、令孃が俳優に戯れ紳士、書生が花柳の巷に出入するかごとき必竟はあまり純潔なる男女の交際を抑制した反動てある。今の世の如く男女の貞操が腐敗し、社會の道德が弛廢したのも、此反動の結果であらう。夫れ故男女の交際を解放したらば、却て社會の進運を促がし、社會の不德を少なからしめ、男女の不貞操を絶つに於て大に利益がならうと思ひます。



◉結婚

結婚者の數に比し離婚者の數の多いとは實になげかわしい併しその源因を以て單に舅姑（養父母）の性質に關すると思ふは抑ゝ末である、日本古來の習慣によれば、嫁を迎へるも、養子に行くも皆相互の父母とか、兄姉とかの間の相談に因つて成り立ち、肝心の本人は只夫れを承知するの權利を持つて居る許りてある、若しも肝心の本人が何か少しく小言がましき事を云へば「若い內は色々考違ひも多いから、經驗ある親の云ふ通りに從つて置くがよい、」と親や兄がよいと思へば夫れを本人に何處迄も强いたものである、然るに親と靑年男女とは時代が違ひ、性質がちがつたものてあるから、從て意見が異り、理想が異るは當然である、親や兄の方では財産家から

嫁を迎へようとか權勢家から養子を貰ふとかと思うて居つても青年男女の意見は學問ある嫁がほしいとか婿が迎へたいとかと思ぶ樣な事もあらふ夫れて本人が不本意なものを親や兄が强いて結婚させたとすれば其新家庭は勢ひ常に憂鬱てある悲酸てある夫れて其新夫婦は何時迄も家庭の幸福、家庭の快樂を受けるとか出來ぬ或は夫婦各自の放蕩となり或は家庭の紊亂となり二人をして一生不幸に泣かしめ、やけに終らしむる事となる尙ほ一歩進めば彼結婚の强制者たる親や兄がなくなつた曉には直ちに離婚となるとも珍敷ない現象である此場合の離婚は畢竟親や兄が結婚を强いたからである此責めは實は親や兄が引き受くべきてある然しかく迄に親や兄の强制がないとしても今尤も普通に行はれて居る結婚法即ち親や兄乃至は媒介人の周旋により男女互に見合ひをすまして成立する結婚、是れは島渡考へて見ると前とはちがつて各自本人の納得上から成立したものであるから不都合はない樣である然り此島渡の見合と云ふ事のみを以て結婚するのが抑も離婚の一大源因だろうと思はれる互に見合をして言葉をかはして納得して結婚する實に間然する所はない樣である然し能く考へて見ると其誤りな事が直ぐ判かる兩本人が互に只一瞥して數語をかはしたのみて、どうして互の品性、教育、性質等を知り合ふ事が出來よう一瞬時の見合ひは實に何の利益もないのてある實に何の知り合ふとも出來ぬのてある夫れ故結婚後數個月を經、一年をすぎて見ると初めて互の性質もわかり互の教育程度もわかり是れては永久の配偶て



はないと心付き遂に離婚沙汰となるのが中流社會に於ける離婚の現狀だと思はれる夫れてあるから私は前節に於て說いた男女の交際と云ふ事が愈必要だと思ふ常に交際し常に往來して居つたならは既に能く其人物も判かつて居る斯くの如く能く人物が判かつて居つて心の內には彼れと吾れならばと定め斯くして后ち又互ひに實際納得した配偶てあるならば（其上勿論民法の規定に從て親の承諾を得たのてあるならば）决して離婚沙汰の出來る筈はない然るに堺枯川君の書かれた家庭の新風味に於てこう云ふ事が言はれてある「自由に交際すると云つても日本國中の青年男女が皆互に往來すると云ふ譯には行かず矢張極々少數の知人の間で選びをするのであるから一番適當な人を選ぶと云ふ譯には行かぬ」と青年男女が交際する人物か少數なりと云はゞ親や兄が交際する人物も同數少數であつて志かも青年の者と全く思想のちがつた者同志てあるから尙ほ更ら本人に適當の配偶を選ぶ譯には行かぬ結婚は實に男女一生の一大典てあるから輕卒に人の勸めや一時の迷ひに因て定めるべきてない。

◎血　統

日本の國民は世界に誇るべき萬世一系の　皇室を頂いて居る而して恐れ多い事てはあるが、皇室と國民とは恰度父子の如くて自ら萬國とはちがつて居るのてある所謂大和魂とか忠君愛國とかと云ふ精神は實に此尊嚴なる皇室を頂いて居るからである歐米諸國や支那の樣に皇室が時代〱

に因つて變化して昨日迄仲間であつた者が一朝風雲に會すれば忽ち皇帝の位に即くと云ふ風では忠君愛國の精神が起らぬも尤もである日本が東洋に頭角を現はして來たのは全く我が國民に此精神があるからである、皇帝が萬世一系である國民も自ら血統を重んじて祖先の祭りが絕えぬ樣一軒の内が百代も二百代もと續くことを欲するは當然である祖先の祭りを絕さぬ即ち祖先を崇拜すると云ふのが日本國の立國の基である日本人から此精神を奪ひ去つて祖先は祖先、親は親各一代をなして行く者であるから吾れも亦別に一戸を構へて一代で終ればよいと云ふ樣になつては全く歐米も同樣である日本人は血統を重んじ祖先を重んじ上に萬世一系の　皇帝を頂いて居ると云ふことは寸時も忘れてはならぬ若し夫れを忘れた時には日本人は大和魂を失つた時である即ち日本の存立が危い時である然るに枯川君は日本人としてあるまじき言を云ふて居る「血統を絕やしてはならぬと云ふ說は今後の社會にはもう必要がない事である」と云ふて居る彼れ枯川君は漫りにかゝる奇言を弄して世を害し人を惑はして得たりとして居らるゝが枯川君は日本が自ら他國と異なる所のあるをを知らぬに相違ない日本人は何處迄も血統を重んじて祖先の祭祀を絕やさぬ樣にして行かればならぬ然し男子が夫れを口實にして妾を置いたり姦淫を恣にすることは實に罪惡である眞に血統を絕やさぬと云ふ精神ならば决して、そんな罪惡を冒さずして充分祖先の祭祀を續けて行くことが出來る然し萬一子供もなく親戚もないと云ふ樣な例外の塲合であつたならは夫れは致し方がない血統を絕やすは宜敷ないが然し罪惡を冒してゞも血統を續けて行くと云ふ必要は毫もない、そう云ふ塲合には潔よく血統を絕やすがよい夫れが却て祖先に對する道である。



◉父　母

福澤先生は「子が新家庭を作つた塲合には親は別居するがよい」と云ふて居られるが成程其方がよいかも知れぬ、よいかも知れんが親が子と別居すると云ふのが日本の家庭に於ける常則とは云へぬ子は新家庭を作つたとしても何處迄も親と同居して親に孝養を盡くすが當然である然るに枯川君は倚ほ極端な事を云ふて居られる「父母は元來家族とは云はれぬ子の家に父母のある筈はない、然し若しも父母が子の家に同居して居つたならば親權と云ふものはもう消えてしまつて凡て家長と主婦との指圖を受けて家政を助けるべきである」とあるが日本は前に云ふた通り　皇室も臣下も同じ祖先から出たもので皇室に忠を盡くすが即ち祖先を崇拜するのである日本では忠臣即ち孝子である孝子即ち忠臣である。親は別居すると主張しても子たる者は親の側を離れぬ樣にして何處迄も孝養をせねばならぬ枯川君の說の如きは全く基督敎主義から割り出した說で吾れの尊ぶべきは只天帝である天帝の外には親も君も兄もないと云ふ說であつて我國立國の主義と反對である若しも日本の青年男女が枯川君の「血統可絕」「父母非家族」の說などを輕々に信ずる樣な事になりては日本國は凡て滅茶〳〵である恐るゝ事は改良する事が

當然であるが一から十迄凡て西洋に習ふには及ばぬ日本では祖先を崇拜し父母に孝養を盡くすは契約として寧ろ世界に誇るべきである。

世間百事

●婦人の瘠我慢

近來新聞紙上に後家の醜事少からず、其事實を記すれば之が爲めに其記事風俗壞亂に亘るとて罰金に處せらるゝことあり、既に其表題が後家の亂行に關する記事なれば之を廣く解釋して風俗壞亂とすれば頭から風俗壞亂なれど、之を壞亂したるは新聞社に非ず即ち當人の後家にあるものといふ可し、吾輩は些々たる一記事の議論を爲すに非ずして廣く天下を見渡すに寡婦の獨棲を守り能はざるために醜聞を世間に流し實際に社會の風俗を壞亂し子孫を毒するもの甚だ多し、殊に近來佛教の僧侶墮落して自ら戒を保たざる爲め、婦人に清淨を勸むる能はず、淫祠流行して男女堂内に戲るゝが如きは皆之れ風俗壞亂の基なる可しと雖も、吾輩は之に就て最も重なる原因が婦人の瘠我慢に歸せざるを得す、一夫一婦相合して室を同うするは人倫の源なれども、老少不定は人生の常にして相生の松も時としてその一方枯れざるを得す、然るに枯れたる方女性なれば殘る男性は再度の妻を迎ふるも、枯れたる方が男性なれば殘る女性は一生後家を立通して榮華の社會に孤棲せざる可からずとは之れ何者が作爲せる德教か、或は幼弱の子供を殘され、遺產の管理はその人なしなど細かく聽けば入組みたる事情もある可く、中には夫婦の情合細かにして連理と契りしその片枝が俄かに折れたりとて唯悲しみの餘り一時の感情に刺擊せられて親族の意見も聽入れず一生後家を立通すなどいふものもあらんか、なれども之等は之れ人生を大觀せざる狹隘の考より出でし德教の誤りにして、一婦兩夫に見えずといふ古語の誤解より來りしものといふべし。



一婦兩夫に見えずとは一人の妻には一人の夫より外にはなし、即ち同時に複重れば徒事にて、亂行なりといふ事なれども、一方死して一方殘れば、更に再婚したればとて何の恥入ることもなく、何の道德に悖りもなし、詰り人生は同行二人、誘惑多き世の中に一人旅は危險なれば男子も妻を失ふ時は更に後妻を迎ふる如く、女子も再婚して第二の夫を持つに若かず、或は夫の遺產の始末、若くは子供の愛情の爲めに、寡居する方を便と爲すの考へも起る可し、又は夫の菩提を一生涯弔ふなどの間違ひなる貞操心もある可けれど、その貞操が滿足に行はるゝは困難にして、遂には新聞の種と爲り、社會の風俗を壞亂し財產の管理も子供の教育も不可行と爲り、中には貞操は立て通したれども財產は他人に橫領せられ、折角の子供は後家の片愛にて盡なしの放蕩者に付上りしなどの失策もなきに非ず、男女均

しく之れ人にして男子が老境に及んでゝ孤棲は頗る難義なると同じく、女子も同じき有情の人間なれば無理に孤棲は勸む可からず否な寧ろ親族はじめ緣者の人々などは事情の許す限り、不幸にして寡婦と爲りし婦人には再婚を勸告して、人生に死の運は制し難しと諦めて、出來可からざる瘠我慢を爲さしめず、心深情悔の苦しみを避けしめん事希望に堪へざるなり。（大阪毎日新聞）

●葬式の虚禮

我國今日の風俗には虚禮虚式の厭ふ可きもの少なからざる中にも葬式の如きは特に甚だしきものなる可し元來葬式は餘事と異にしてあらゆる儀式の中にても取分け謹愼靜肅を旨として死者に對する哀悼の眞情を表す可きものなれば苟めにも矯飾の行爲を容さゞる筈なるに今日の實際には滔々たる世俗一般に虚禮虚式の末に馳せて人間一生の最後を見送る可き大切の趣意を空うするの風あるは誠に淺ましき限りと云ふ可し試に其事實を云はんに彼の死亡の廣告報知の如き最近親者の名を以てすることの體を得たるものなるに親戚友人の名前を仰々しく列記し然かも其名前は成る可く有爵有位又は知名のものを選むの風あるは如何なる次第なるやと云ふに親戚交友の中には斯る立派なる人物ありとて世間に誇るの意味もあると共に其名前を利用して會葬者の數を多からしめ葬式の景象を附けんとするの趣向なりとは恰も家族の死亡を好機會とし葬式を一種の廣告機關に供するものと云ふも可なり驚入たる次第なり又葬式の體裁を見れば會葬者より寄贈したる生花造花放鳥の類を柩の前後に並列し會葬者は馬車人力車に乘るものあれば又は歩行するものあり或は車上に烟草を喫し或は三々五々談笑して練り行くなど日本の風俗に慣れざる外國人に見せしめたらば恰も祭禮に非ざるかと疑ふことならん殊に奇怪なるは死亡の廣告報知には多くは生花造花等の贈物を謝絶し中には丁寧にも死者の遺言に依りて堅く斷る旨を明記しながら葬式の行列には矢張り是種の寄贈品を見ること每度の沙汰なり或は遺族に於ては辭退する積りなりしかども強ひての寄贈を無下に斷り兼ね止むを得ず受領したる次第なりと云はんか斯くの如きは贈るものも受くるものも共に死者の遺言を無視し其意に反するの所行を敢てするものにして之を評して何と云ふ可きや言語道斷誠に忍びざる次第なれども其實を云へば遺族の輩が死者の遺言など稱するは決して眞實の遺言に非ざる其一方に寄送者に於ても心の底より死者に對するの誠意を盡くさんとするに非ず其實際には果して誠意に出づるものならんには寄贈の志を遂すれば夫れにて滿足す可き筈なるに其寄贈品には殊更らに姓名を大書して葬式に列せしむるが如き實際に自家の姓名を廣告するの手段に過ぎざるを見る可し斯くの如く双方共に互に相詐り相欺き虚禮に重ぬるに虚禮を以てして毫も誠意の見る可らざる其有樣は彼の支那朝鮮などの葬式に泣男なるものを行列に加はらしめ賃錢を與へて號叫の聲を放たしむるものと殆んど五十



歩百歩の相違に過ぎず驚入たる次第なりと云ふ可し如何に虚飾を貴ぶの世の中なりとは云へ人生の禮式中最も眞實の情を表す可き葬式に斯る始末とは何事ぞや我輩は敢て質素一偏の極端說を唱ふるものに非ず銘々の身分地位に應じて相當の儀式を具ふるは固より差支なしと雖も其間にも自から謹愼靜肅の本意を全うするの心掛肝要なる可しとして聊か一言するのみ（時事新報）

●主婦の述懐

女は處世上の心配も無く善惡共に良人の儘まに浮沈するのでありますから男から見ると餘程割がよいやうな事を男の方が時々申されますがそんな事を仰しやるのは畢竟女房といふものゝ役目を御存知無いからの事で御座います一日でも殿方に此氣苦勞をおさせ申したらは乾度人生れて婦人の身となる勿れなど仰しやるて御座いませう良人が順境に居りまして衣食に不自由が無いといふ私達の身の上ですらさうで御座います若し良人が逆境に立つて家政も不如意勝で御座いましたならはどんなで御座いませうか女は我儘な者とか女子と小人とは養ひ難しとか隨分冷酷な詞も御座いますが夫れは女の惡い側面のみを指摘しました詞で御座います斯う申すと夫れが我儘だと申さるゝかは知れませぬが今少し男子方が女子に同情を寄せるやうにして戴きたい勿論男尊女卑は御國の國躰とも申してよい位で御座いますから私達も美風であると信じて居らぬでは御座いませんが此節のやうに世の中の風紀とやらが亂れてまゐりますも原因はといふと男女の關係にあるやうに思はれますから婦人方も少しシッカリして戴かねばなりません（麴町芙蓉女史）

●京都婦人の顏付

僕の友人が先き頃京都に遊んだ時其觀察したところを僕に話したが、東山其他京都の景色に富んでゐることを褒めて、しかし京都全躰は假山的だと評したのは必ずしも新しい觀察だとも思はなかつたが、景色の假山的なると共に婦人の顏付が又人形的だと云たのはなか〳〵面白い評と思つた。尤も其男とて人形的なるとだけは認めたが、何故に人形的なるかの理由は發見し得なかつたから、其後僕は京都に遊ぶ度毎に婦人の顏付

記意を留めて如何いふ點に特色が現はれてゐるかの根底を仔細に搜して見たが、僕は第一に其特色を額の脫上つたところが、確に其顏付の一部分を拵へてゐるといふ事を發見した。

勿論悉く京都婦人は額が脫上つてゐるとはいはれぬが十に六七まで額の脫上りが多いので、豊頰の顏は少なく、額が開いて頤が尖り上より下にすぼけたる顏がマア京都婦人の模型のやうに思はれる。何故に京都婦人は他に比して額の開いてゐるものが多いか、是等緻密の研究は素より專門家の任にあれど、僕がよい加減に判斷したる所によれば、近頃までの髮の結やうに原因するやうだ、誰も知る如く、今日では婦人の髷形より櫛笄其他に至るまで東京風を模してゐるのであるが、此東京風を模する以前は、所謂上方風、即ち髮や前髮のひどく張つた髮の結やうが特色であつたので、此鬢を張らせたりするには彼の凝い油を多く用ひて髮の毛を吊上げたのが久しき間の習慣となつて、自然と生際が脫上るやうになつたらしい。勿論かゝるとが遺傳に現れる筈もないが、今二十歲以上の人は、一度は此髮の結方に服したものであるから、なほ今日でも額の脫上つた婦人が多く、額が脫上つてをれば、自然上が開き、上が格外に開くところから、おのづから頤がすぼむやうに見え、一種の風をなしてゐるのである。それと名物の鴨川の水、鴨川の水の音に聞しよりは不潔なるとは此程誰かの小言にも見えたが、要するに京都は水が清潔であると空氣が非常に清冽である爲に、人間の皮膚が奇麗になる所から、自然京美人を産する故であらうが、前の髮の毛の脫上りと色の白いのが一種の特色となりたるに、京都の人は一般に氣力に乏しいところから、顏に少しも活氣が現はれてをらぬ。是等が合一して人形然たる顏を拵へたのではないかと思はれるが如何なものであろう。（田舍翁）

●鳩山夫人の土産話

昨年秋の頃其の良人と手を携へて米國に向ひたる鳩山夫人春子の君は其後歐洲を經廻りて去月十一日歸朝し

たるが、流石に交際社會の明星たる同夫人が女權の本場の米國や交際界の花の場所たる倫敦巴里の觀光談は如何あらん〻着京匆々待ち構へたる人々訪問引きも切らぬ有様なりしが夫人は一々是等訪問客に對して大氣焔のよしなりしが今其土産話の一節を抄録して看客の一粲に供せん。

◎私夫婦は亞米利加へ着いて後大統領に面會を求めましたが、大統領は直ぐに承諾された上、晩餐會に來て呉れとのお招きを受けました、全体普通の人が大統領に面會するには只握手するばかりか、但しは少し位談話する位てあるに、夜食に招くといふのは異數てあると言つて高平公使なども驚かれ且つ大層喜ばれました、然るに當日になつて大統領に何か差し支へが出來たものと見え、夜食といつたが午餐に來てくれとの申し越しがありました、すると生憎私の方ては夜食の積りて御座いましたから、日中は公使館の小松緑さんに案内されて議事堂や書籍館などを見物して居て不在中でしたから、ツイ大統領からの申し送りを見る事が出來ず爲めに午餐、晩餐共に臨む事が出來ませんで惜い事を致しましたが、翌日大統領にお目に掛つたら大統領も夫人も大層殘念に思はれて日があらば重ねてお招きするが夫れも出來んで惜い事を致したとの挨拶があり、夫人からは寫眞などを送られました、それで私夫婦も非常の名譽の事と存じて居りましたが、承れば我國のある新聞ては私が大統領晩餐會の招待を忘れて大失態をしたやうに書いてあつたとの事ですが、實際は今申上げた通りで、亞米利加の新聞も皆一樣に其の通り出て居りました、尤も某新聞では私が米國人に歡迎されて大統領の宴會にも出る事が出來なかつたといふやうな事が書いてあつたやうです

◎亞米利加には日本人贔屓の人が澤山あつてそれは〳〵方々からのお招きで忙しい位てした、例へば芝居に呼ばれるとか、お茶に呼ばれるとかの類ですが、私も日本でお茶に七八十人の人を招いた事がありますが、なか〳〵準備に手數がかゝり、人數に合せて椅子も揃へれば食器も揃へなければなりませぬが、亞米利加の方は誠にお手輕なもので、食事杯は餘りしない風で專らお話に重きを置きますから、食事の時は大概人數を見計らつて十五六人も一所に食堂に送り其處てコーヒーやアイスクリームを饗します、其のアイスクリームも僅か四匙か五匙のものがまだ殘る位に喰べまして、跡に人が支へて居ると見ればさつさと食事を了へ、再び談話室へ參ります、左れば椅子も少しで足り食器も數多く入らぬ譯て是なら會も度々催されるだらうと思つて感心致しました

◎最う一年も外國に居りましたら、私も立派な人種になりましたらうが何分子供はあり、さう何時までも外國に居る譯にも行きませんから歸つて參りましたが、外國の子供は能く親を大切にします、イヤ實際〳〵、其の愛情はまた格別なものてすから、親の言ふ事を能く守つて、若し惡戯をして居る時に他人が喧ましく言つても止さぬものが、親の目顔と言葉には直ぐ服從して惡戯を止すといふ風で、感心に仕込んてあります

◎英國へは往きと復りとに二度立寄りましたが、英國は御存じの通り霧三分に煤烟七分といふ風で、空もどんよりした處で、季候も餘り宜くはありませぬが、流石に繁華な處で私共二人はアクランドと云ふ辯護士の宅に滯在して居りました、併し生活の度は高し從て物價も非常に高いやふてして一度食事をしても十圓掛るといふ風てすが、能く御馳走をして方々からお招に預りました

◎一寸した事にも英國は貴族風て、例へば下女の如きも大勢使つて居り

まして、私共の滯留しましたアグラッド方でも下女五人に男を三人も使つて居て、それでまだ奥さんは、大層人少なで自身に働くとの御自慢でしたが、私は米國のラッド博士夫人の事を話して亞米利加ではもつと平民的で、また私なども日本では殆んど自分一人で家內の用事を致しますと話したら、奥さんは、英國では決してソンナ事は出來ぬ、現にプラザーの家では下女を十一人も使つて居るとの實例をお話しになりました

◎英國の芝居へは私は二度ばかり招かれて、參りました、一はミフ、■ヲラといふので、或る强慾な金持がオールマイチーダラで世の中の事は何でも金でなければならぬといふので人民から金を絞り上げ買占めなどをして金持になりましたが、其の娘が惡者に勾引されて行方知れずとなつて果ては、娘が着るものも無くなつて今や寒さの爲めに死ぬばかりになつて始めて父の處に其の居所が分り、金に掛けて看護しやうとすれば、其の娘は貧乏人に介抱させなければ直らぬとの醫師の診斷で、流石强慾非道の金持もオールマイチーダラでは世の中を通す事が出來ぬといふことを悟るに至るといふ狂言でした、それに今一つは或る美人が男を瞞して金を取り遊びに王樣に見染められて、其の男に賭博をさせ男を牢へ入れ其間に王樣の許へ行た處を、男が姉の惠みに依つて出獄し忽ちこの惡性女を懲すといふ仕組みで、實に能く出來てゐました、さうして彼方の芝居は駱駝を始め競馬に使ふ馬や、鐵道馬車も當眞物を用ゐてソレハソレハ大仕掛でムいます

◎獨逸に參りますと風俗はまたズット英米と異ふやうな感じが致します、勿論獨逸では言葉も違ひますし餘り交際も致しませんでしたが、諸方を見物致しましても、私共の爲めに道を讓つて開けて呉れました中を、無禮にも先へ拔ける者などがありました

◎この度の旅行は幸ひに至る處歡迎を受けまして公使館や領事館から馬車の出迎を受けて馬車に乘つて諸所を見物致しましたのは大なる仕合せで、一向に疲れも致しませずに珍しい處を見て參りました、其の中にも佛國の宮殿などは格別立派なもので目を驚かすばかりでムいました

◎各國で夫々立派な西洋式の會を催されて隨分甘しい物も喰べましたが、香港へ來てから三井の方のお招きで日本料理を御馳走になりました、これが日本料理中で一番結構だと思ひました

●鵞口瘡の流行

◎病系　乳牛食用牛にして一度此鵞口瘡病に罹りしものは永久其病系を遺傳し終に全く癈物に均しきものとなる由なれば同業者は目下一大恐慌を起しつゝあるが今回同病が流行せし原因を取調ぶるに其發源地は神戸にありて昨年十二月中東京府下豐多摩郡大久保村の乳牛商西村九左衛門が神戸產の食用牛を買ひ之れを同村の鈴木市太郎方に賣りしに其牛が同月三十一日に至り俄然鵞口瘡病に罹りしが始めにて是より同村內に傳播したり

◎發病の徴候と牛乳との關係　最初該病に罹りしものは口內及び口の周圍に水泡を生じ二三日の後ちに破壞して爛斑を呈し臭氣を發す是れと同時に蹄冠部及び蹄叉部腐爛すれど之れのみにて斃死するものは稀れにして大抵二週間程にて快復するなり左れど乳牛の如きは快復後尙ほ二週間位は搾取を停止し漸々搾取すれど乳量は以前の半分位に減じ永久元の如くに復せず其內懷胎する事あれば流產又は分娩の際に子宮脫に罹り斃死するものにて一度鵞口瘡病に罹りしものは十中の九迄是等の事にて斃るゝを通常とす又食用牛に至りては快復後と雖も肉量七十斤以上を減ずるものなりと

◎人に感染す　鵞口瘡は只だ牛のみに止まらず乳、肉より人體に感染するものにて發病の始めは著しく體溫上昇し口內及び口の周圍に水泡を生ずれば此際には早速醫師の診斷を乞ふに若かずと尤も乳牛、食用牛共に檢疫官の檢査を受けて販賣するものなれば危險の憂無きが如きも牛乳は一度沸騰せし上飮用し、牛肉は能く煮て食するやう注意を要す

流行のしをり

東京婦人風俗一斑

◉手廻り物

蝙蝠傘は早く慶應三年の初め、既に傳はり來りしが專ら武士の用たりしに、次第に衆庶を通じて盛に用ひられ、竟に日傘を壓倒せり、當初は八間骨の平張にして劣れるは天竺木綿、優れたるは甲斐絹を以て張りしが、その後愈々華美を追ひて、今にては男持には甲斐絹、綾甲斐絹、綾毛繻子、瓦斯、紋毛繻子等を用ひ、盛夏には白の絢緞張最も行はる、婦人持は、參四年來、令孃形（一に美人傘）と稱して、深張を好むで用ひその奢りなるは琥珀、緞子、絖を以て張れり、何れも共に洋彈機のはじきを附く、柄もくさ〳〵の好尙ありて、男持の自然木、女持の鐵棒、最も多きが如く、女の象牙擬ひの護謨張、蕨形の握、また行はる、小供持は、男兒には帽子に止めて、炎天にも可及的傘を持たせざれば、多く娘子供の用にして、下は更紗深張に毛絲附きより、上は綾甲斐絹、本緞子張れいすに至る



右に述ぶるの外に指環、腕環、或は紙入、懷中時計、さては眼鏡、杖に至るまで、時々の好尙を異にし、歲を追ふて華奢に趨るのみ、指環も十年前までは、二分金を曲げたるを人皆奢れりといひしに、今は金の高彫寶石入り、さては白金の金象眼も人の眼を惹かず指環に事足らずして腕環を塡むるに至る、實に今の世の流行は、金に風通、光琳模樣、殿樣風に腰元風なり、金時計に金

鎖、金緣眼鏡に金煙管、金の入齒、金簪に金の襟留、紙入、煙草入、帯留の金物まで金なれば、衣物も帯も紙入も下駄の鼻緒も風通織、漆器はもとより衣裳も袱紗も光琳模様、少しのお金が溜れば五所紋附の黒羽織に白打紐ノ殿様風、お母さんはせッせと内職仕事しても、娘は文金高髷に平打の銀簪、或は兒髷にやの字結びといふさまなれば、何時しか「はゝせゝ」さへ流行し出だしぬ、さて袱呂敷代に折鞄を抱へあるくこと行はれ始めしより、婦女には女持の提鞄とて小形の美しきものも出來、遂に信玄袋、千代田袋、敷島袋、三保袋などいふものさへ女持として行はるゝに至れり、

●流行の靴

◎目下靴又は鞄等に使用する製革の原料は佛國を以て第一とし恰好は米國を推す由なるが靴として足あたり好く且光澤あるカンガル、佛蘭西紫革、魯西亞茶革、ひかり革、護謨引革等なり今流行のもの一二を記せば從來の深護謨やゝ廢れて編上のもの流行の兆あり是は冬季に際し深護謨よりも跳革の編上なれば雨の日雪の日に長靴の代用を爲すと一つは洋行歸りのハイカラ連が多く好んで此の編上を穿ちゐる處より勢力を有するに至りたるものなりといへり

◎扨又流行の恰好は尖の稍ひらつたく且少しく上に向きたるを喜ぶ氣味あり往年の如き極端に指頭の尖りたるを好みし時代は既に過去りたり價は編上一足三圓より十一圓まで、中靴は普通の油革にて二圓三十錢以上七圓九十錢又雪用として穿つ半長は從來の鉤掛提灯胴の著しき嫌あるもの廢れ氣味にて胴は提灯形の小なるものに踵の上に少しく膨あるもの受好く價は四圓以上十圓まで又荒目と稱し外見の鮫革に似たるものを喜ぶ向もあり價は十三四圓までなり次は

◎狩獵用の靴これは一種製造法を異にす即ちズックの編上にして踵は鐵鋲にて固め足掌に當るところには厚き丈夫なる革を拍子木形に切り下駄の齒の如く三個所へ横に打つけ周圍にはペース(木釘)を打ち表面の指頭及び踵等には實用的に魯西亞革を用ひる者多し價は三圓五十錢以上六圓止りなるが外見は無論立派にあらず單に山野跋渉の際嶮路する等のことなきやうにと及び堅牢を旨としたれば狩獵者には必要の具なるべし其次は

◎自轉車靴なり是は踵ふかく底革には軟かなる性質の革を薄くして用ひ恰も靴下同樣の感あるものを好む所は足の運轉を樂にする爲なり殊にレース用として最近の注文の中には踵を淺くして後部外面に紐止めある編上物あり價は二圓七十錢以上六圓までなり(以上男子用)

◎猶婦人靴即ち學校通ひの令孃達には別に流行の種類なく唯中靴を穿つ者の極めて少なきのみなり因に記す上履には踵の有るものと無きものと二種あり價は四五十錢より四圓まで位なるが婦人用は二圓以上七圓までありといふ

流行の春着

不忍の池隅田の畔風柔かに霞閑けき春景色小蝶の舞に

つれられし其折には如何なる衣服を身に纏はんかと千こに心をくだかるゝ深閨夢裡の令孃方は外に心配を召さるゝに及ばず左の刺繡模樣と小紋模樣の內にて模樣と色合は流行と其嗜好とに任せて置て此二ッのものを撰び給はば引けは取らずと知りたまへ

梅鼠地雪小紋に光琳の梅淡彩の江戶褄摸樣其地質は縮緬として全躰の小紋染に色糸を以て摸樣を繡ひ出し梅の幹は紫鼠に花は白糸蘂は茶糸に濃淡の繡ひ別け宛然染め出したるにはあらざるかと思はるゝ紋は同じく刺繡にて白糸を極めて薄き紫鼠に染めたる、きはく〱しからずして何處となく奥ゆかし、元來刺繡の衣服と云つば天明以前は兎も角其以來は縫、繡摸樣、高蒔摸樣か但しは染摸樣のあしらひにあらざれば刺繡を施したものはないと云ふても宜しからう左るを今度三井吳服店は其昔を忍ばれて裾摸樣に刺繡を應用したるに縞物にても小紋にても但しは無地物にても自由自在に思ひの儘てあるから彼の染摸樣よりも材料の範圍が廣ひから一寸人の嗜好に投したものと見へて昨年の暮より注文するもの少からず左れど是れに摸樣を繡ひ出すには濃厚とした摸樣は面白からず成るべく淡泊にして意氣なものに限ります其上摸樣物は地質を無地物にすれば儀式の節も使用することが出來るし又は觀遊會夜會などには極めて妙てす、殊に夜會には燈光の輝りを受けて、それから糸自身の光澤を發輝するから晝間の眼では斯くまてとは思はなかつたものも燈火に照せば一層の見ばへがします又小紋御召、芳野御召とか或は縞物でも白糸を以て淡泊に繡たならば所謂意氣で高等て人柄とても評することが出來ましよう

今一ッは小紋に摸樣を染め出すので先つ地質を縮緬として年齡と其人柄にもよりますが妙齡なれば菫花色とか紫根とか紫とかであらうそれより上になりましては藍鼠、梅鼠、栗梅、素鼠などて摸樣は江戶褄として、柳に梅、卯の花に杜鵑、芦に水禽、などを白上にするか但しは白上と淡彩とを取り交ぜたら隨分品好くして意氣なものが出來ましよう摸樣物のて斬新なる流行の衣服と云へば先づ此邊で　（三井吳服店東州若翁）

玩具のはなし

清水清風

普く日本全國各地の玩具、木偶、人形を蒐集撰擇して古考的に研究せらるゝ特志者清水清風氏の玩具談は教育上有益の事項に付茲に其一部を紹介せん

今日雛といふと、內裏樣、奥樣とか、束帶を着けて居る風俗の人形を申します雛といふことは、小さいといふ意味、雛形の意味で、小い人形の完全したのを雛といふて差支ない。

そこで人形即ち大い人形の一番古い所を申すと、例の埴輪人形は實に古いもので、之は所謂玩弄といふ方でなく例の殉死といふ方から參つたものである、それで、此人形といふものは、大人小人に拘はらず、一般に

行れたので、元祿少し前邊りで、此時は、人形を製造する人にも、有名な人がありまする。(中略)

古い人形は重に衣裳の人形で、衣裳が着せてあります、錦の帛を着せまして、努めて其時代の風俗にして、髮の結方、或は着物の工合、又は着物の着せかた、袖の案排に至るまで、總て其當時の風俗を其儘に造りましたので、今日偶、其人形が歷史に適つて居りますから、隨分人形の一つでも今日より昔に遡つて、元祿時代の風俗を見るに足るものである。(中略)

此當時人形の種類が種々ありまして、衣裳人形といふものが最も結構なものである、この衣裳人形と申まするものは、前にも申しましたやうに、錦や、錦襴の帛て、着物を拵へまして、之れを人形の體に着せまして、其時の風俗を摸倣ました、それから、それに續いて。

置上人形といふものが出來てまゐりました、其材料は繪の材料に糊粉を塗つて、以上に着色を充分に置き上げて、參つたといふことで所謂置上人形である。

それから、浮世人形といふものになるのである、それが、其當時に出來ました、其最も行はれましたのは、寛永から、元祿の間なんてす、此範圍が所謂人形時代といふ時である。

それから、既に其時分に、江戶併に京都、大阪では、皆其人形を盛に愛翫するやうになつたのが變轉して遂に何れの土地ても人形の行はれるやうになつて、自然と地方に及ぼして參りました。

何れの土地、何れの邊鄙の所でも、人形の無い所はないといふやうになつた、唯、都會は都會、邊鄙は邊鄙、大名と町家と、各其富に應じて、其人形の製造が異つてゐた、邊土の所は、邊土の所のやうに、極質朴にして、從て、其價も低いものを拵へた、さういふ時に出來た人形は詰り今日まで、其地方に殘つて居ります。

兎に角、土器、或は木の端片より拵へ、又或は紙て製するとか其土地、其土地の風土に依りまして、又何處の國に行つても人形の無い所はない。

それて、其人形といふものは、種類を分るといふと、種々のものがあります、先づ京都に參りますると、先づ雛


奥州八戸馬

眼人形、鴨川人形、それから、御土産人形といふものが今日迄殘つて居ります。

大阪の方は豐麥人形、或は相撲人形、生魂人形抔といふものが、殘つて居ります、それから中國の邊に參ゐると張子で拵へたものがある、所謂風俗人形抔いふものが存在して居る、熊本の方に參ゐるといふと、「ペンタ」人形抔といふものがあります、それから諸方に首人形といふものがあります、其首が婦人の首であります、鹿兒島に參ると、謙倉時代の風俗が今日迄變更しないものが、存續して居ります。

それから又一般に俗に、首肯頸といふものがあります、是は何れの國にもございます、是は頸ばかり人形です、前に申しました俗に首人形と申しますのでございます、衣紋人形と申しても宜しいのでございます、この首肯頸といふことは、首丈で諾といふことで、此名が命いております、縱令ば着物は何れの着物を着せましても、差支ない何れの着物でも、人形の方では承知する、人形が承知する所から、首肯頸といふ名を命けたのであります。

此首肯頸を有つて居りますものが、阿波の德島、京都、大阪、それから、奧州の仙臺、出羽の庄内、それから南部、奧州の石ノ卷佐渡の相川、それから、福山、松前、又參州それらの種類を私も有つて居ります。

それで、此首肯頸は製し方に依て、其年號や、其時代が何の時代であるといふことが解る、どういふ髮の結ひ方であれば、あれは何の時代であるとか、今日に出來て居る人形は自然に帽子抔を冠つて居り、或は女は束髮抔をやつて居る、それから古い方になりまするといふと、どんな風になつて居るかといふと、或は、其髷が鬮尻になつて居る、ツンと出て居るやうに、製作の出來方に依て、其風俗の仕方に依つて解かる、人形といふものは、誠に一定のものでございますから、唯其製作のものゝ一に依ると、其當時の風俗といふものは能く解るのです。

それから、茲に一つ面白きことがあります、先達越後の新潟から、ドベ人形といふものを貰ひました、何てドベ

人形であるか、解りませぬでした、然るに私共の近所に越後から來て居つた下女が居りまして、或日のこと往來に立つて居りましたが、極不標致の人が通り掛りますると、其下女が彼の人は大層ドベの人と謂ひましたそこで私は一つの考へが浮びまして、不標致の人形のことをドベ人形といふことであるといふことが解りました。

人形に「ベンタ」「ドベ」などといふ名を命けてあるから之を研究して見ましたならば其人形の上に於て方言が解かるであらうと思ふ。

それから、奥州の一ノ關にコケシ這子といふものがあります、御其地方の、御這子といふことでございます、是等は詰まり古への御伽這子抔から轉々して、かういふことを作つたものであらう、兎に角、其形を見ると、全然異様な形をして居ります、唯々人の形狀を存して居ります、餘程不思議なものでございます。(中略)

それから敎育のことに關して私の考へまする ことは此玩具といふものは、古いものを調べまして新規のものを拵へて、子供に與へたならば、餘程敎育上裨益することが多からうと思ひます、譬て見るといふと、日清戰爭の有つた、其結果と致しまして、或は子供の玩具には、喇叭とか、洋刀とか、鐵砲抔持つことが行れて參つた、其時、其時に依つて、玩具といふものは、其時々に新規々々のものが出來て、後世の紀念物となるのである。

玩具を製しまするには、多少敎育上の考へを以て、製造致しまするど、餘程宜からうと思ひます、此敎育と玩具といふことに就きましては、まだ〱種々の考へがございます、それ故、他日私の考へを申述べたいと思います。

補述、御土産人形といふものは、大内人形といふことて、昔し、諸侯が京都に行きまする時に公卿衆に進物すると其の進物の多少によりて、公卿よりうつりに呉れまする所から此名が命いております、此人形は殘らず、裸體でございまするが、御進物の多少を其領地の多少に依りまして、御土産人形に大小の差があ

ります昔しは、御屋敷者は澤山之を持つて居つたので、中には惡いのもあつた。

嵯峨人形は、結構な、精巧な人形である、これは俗に嵯峨ではなからう、京都の立派の所で出來たものである、唐人物、唐子、七福神なぞであるとか極、高尚の人間許りである、又鴨川の人形といふものである、是は柳の木で作る、鴨川の近邊で作るものであります。(中畧)

それから東京に是迄ございまする玩具、これに就て、最も東京否江戸に一つの名物がございますのは、淺草雷門の所謂、名物で飛んだり、跳ねたり、變つたり、といつて、御維新前まで一つの名物でありまして、其後は絶ゑてございませぬが、是はもう文化文政の頃と考へまするが、淺草仲町の龜屋忠兵衛といふ人がございます、此人が此人形を拵へました、其當時は此人形を、龜山の御妖怪と申しました、是はどういふ譯で、かといふと、所謂張紙の人形を、竹に添へたので、跳ねかへしてそれが變りますので、既に喜遊大覧抔を見まするといふと、是は其頃の見せ物抔で、怪しいものといふものは、龜山から生擒りました云々といひ、或は變はるといふことを、四國を廻た猿といふことが書いてあります。

それは扨置き、此龜山の御妖怪は、後に飛んだり、跳ねたり變つたりといふ名が附きまして、淺草に行けば必ず之を土産に買つて來る、實に江戸の名物になりましたのでございます、このことに就ては、丁度徳川の大御所樣時分に、雷門内に一間四方地面を拜領したといふことであります、隨分有名の玩具でございます、此圖といふものは、其當時から今日に至る迄、繪畫抔、或は摺物抔に澤山ござりまするが、其當時の元物を見ますると、豫想外に麁相なものであります、其元物は三通りです、一は助六が傘を冠て居ります、一は、雷獸が、大皷を着けて居ります、所が一は、狐が河童子僧に轉じる、此三が即ち元であります、それから後に樣々の工夫を致しまして色々のものが出來ましたが、元は此飛んだり、跳ねたり、が起りから、此三種のものが成り立つて參りました。(東京市教育時報)

才媛詞藻

和歌

文學士　大町桂月先生選評

（天）　をりにふれて　　新潟縣北魚沼郡小出町　吉田梅子

去年やけしわがやのあとに少女子の
　　今日もきてへむ春の若草

評、無量の感慨、一讀人を動かす。

（地）　ちる梅　　河内國北河内郡交野村　大矢たね子

たくはつの尼まだ若しゆふ風に
　　梅の花ちるしばがきのそと

評　若き尼、散る花、對映切にして儁也

（人）　春の歌の中に　　府下北多摩郡小平村小川　飯田涙子

濡れ鳩の翼やすむる山門に
　　雨脚細く櫻花ちる

評、閑適の趣、掬すべし。

（人）　春の歌　　長野縣南佐久郡海瀨村字四ッ谷　井田かずの

ひじりひとり經よみゐます奥の院
　　梅ちる蔀に雨しづかなり

評、幽寂の趣、踏るが如し。

秀逸

春季雜題　　近江　辻とみ子

しがのうらまつのこずゑをふく風の
　　おとものどかに春はきにけり

下野　しら露

小羊のひとむれ小屋にいそく見えて
　　さくらちるなり牧場のゆうべ

赤坂　兒島みね子

緋桃さく小島のかげの苫舟に
　　音もせで降る春の村雨

千葉　平川ゆき子

梅しろき籬に立ちて物案す
　　老僧ゆかし物かはりせむ

本郷　岡うめ子

蛙とぶ小川の水の音ふけて

おぼろにうつる春の夜の月
岩城　小泉時子

いづかたに蝶は行きけむ我ばかり
すみれ花さく野邊にのこして
愛知　栗田絹子

きて見ればさくらなりけりよし野やま
ゆきと見しゝもくもと見しゝも
高知　殿岡しん

ぬかるみに足跡つけて餌をあさる
鷄の脊にはな二つ三つ散る
東京　ひて子

菜の花に見えつかくれつ眞帆一つ
野中の川をさかのぼり行く
埼玉　青木康子

有明の月は霞にきえそめて
花の雪散る春のあけぼの
下ノ關　熊谷三代子

望もちてせなに眠れる稚子の
ほゝゑむ顔をほゝ笑みて見る
東京　白菊女史

亡き母の愛でにし梅を折りしかど
送か届けん道知らずして
伊勢　河西さい子

かきくらす此の春雨にとはゞやな
柳一もと打ちけぶる門
岐阜　ゆかり

朝づとめいましはてたる尼寺の
のぎの梅にうぐひすの鳴く
備前　重松竹子

吹くとしもしられぬ風に靑柳の
ゆらくや春のすがたなるらむ
大阪　吉田ゑへ子

そよ〳〵とふく春かぜにぬししらぬ
かきねゆかしきうめがゝぞする
河内　河崎ひさへ

鶴たつ島の羽風にさそはれて

あかつき寒くちる櫻かな

信州　小林よし子

梅一ひら二ひらちりておぼろ夜の
月に思ひの長き夜半かな

高知　殿岡しん

春雨の名殘りの雲は雲ならで
はなになりゆくあけぼのゝ山

岐阜　天野榮子

さら／＼と枝に落花の音もして
朧に匂ふ春の夜の月

大阪　岡あき子

おぼろ／＼月はかすみて大寺の
枝垂れ櫻の風なきにちる

三重　松田榮子

入り殘る月も霞みて宮川の
流れに響くあけぼのゝ鐘

岩手　金田一菊子

菜の花の畑の中いほ一つ見えて

鷄なきて明くる村里

埼玉　石井ふみ子

はなにぬる小蝶の夢もしめるらむ
春雨けぶる小山田のさと

下野　佐藤いち子

雛のおち米あさる井のほとり
あさひ匂ひて梅の花ちる

栃木　横山よし子

そよ／＼と吹くや河邊の春東風に
なびくと見せてかへる糸柳

常陸　葉末露子

籠り居る母に見せばや一度は
墨田の堤花の盛りを

伊勢　細野幸子

太郎作が畔打直す菜の畑
雲雀は落ちぬ蝶は舞ひ出ぬ

米澤　佐藤仲子

さし出づる春のはつ日のお光に

ほころびそめし御園生の梅
米澤　佐藤はる子

新たまのとしたちかへる大御代に
まづさきそめぬ御園生のうめ
東京　外河花子

麥畠に一本さける菜の花を
つかひの蝶のすぎがてにゆく
新潟　吉田梅子

ひとりすむ庵おどろかす人やたれ
梅が香にほふおぼろ月夜に
駿河　佐野つき女

大御代の千歲ことほく門松に
一枝そふる梅の初花
越後　竹林かほ子

八重霞立らむれども鶯の
なけるや梅のあたりなるらむ

佳　調

◎春季雜題　埼玉　武井ゑ子

朝なく〳〵來なく鶯みとりにもごゑまれぶまで里なれにけり

◎仝　東京　あけぼの

春雨をあきてぞれぶる鶯は梅のはな笠いづら忘れし

◎仝　橫濱　神谷いさを

新玉の年の始めの君が代に香るもうれし我が庭の梅

◎仝　千葉　寺田りん子

牛飼が草刈る唄の聲やみて夕野靜かに春の雨ふる

◎仝　赤坂　兒島みれ子

ほの〴〵とうする丶夜のとばり越し朝の光を白梅に見る

◎仝　愛知　萬梅たけ

ほの〴〵とたつやかすみのたもとよりこぼれてにほふ鶯のこゑ

◎仝　石見　みさを

おぼろ夜に散りしく櫻ふみゆけば月に思ひのなかき夜半かな

◎仝　埼玉　飯塚そう子

初午ののぼりたてたる野社の赤き鳥居に梅の花散る

◎仝　仙臺　菅野琴子

乙女子のまゝごと遊ぶ門の邊に日かげ長閑けき春はきにけり

◎仝　東京　保谷いれ子

ともすれば又さえかいる大空の月かげ寒く梅香るなり

◎仝　橫濱　戸倉信子

新しき年の立枝に魁てかなり氣高き梅の初花

◎仝　東京　小池靜枝

竹やぶの色いや赤き南天に朝日まばゆくひよどりのなく

◎仝　橫濱　吉川千か

朧夜のそゝろありきに面白し花咲き宿る謠曲の聲

◉仝　信濃　下村すう子

なには潟なごりのゆきの雲晴れて霞める方や淡路島山

◉仝　河内　河崎ひさ子

雲のころ比えのねおろし音さえてはるなほさむしかもの風づら

◉仝　米沢　本間きく子

ふりつもる雪かきわけて君が代のつきぬためしにひく小松かな

◉仝　埼玉　倉林孝子

うぐゐすのこゑをしるべに分け来れば梅が香うづむしばがきのいほ

◉仝　大阪　春子

丸窓を掠すむる風に送られて梅の薫のするぞうれしき

◉仝　静岡　宮崎はる子

契りてし友は影だに見せもせずむなしく薫る白梅のはな

◉仝　埼玉　内田勝三

鶯のなく音ながらに手折りたきかほりゆかしき若梅の花

◉仝　相模　屋惢女

春も猶雪けにくもる月かげをかすむとばかり思ひ計るなれ

◉仝　山梨　神奈なみ

南むきの孤屋の軒に梅さきて窓の竹籔うくひすのなく

◉仝　大阪　保田いてふ

やり羽子の追風かをるこのあさげ笑まひそめけり我宿の梅

◉仝　鳥取　井口千代野

うちたえてたよりを聞かぬ故郷を春の夜すから夢に忍びつ

◉仝　甲斐　小川初野

貝ひらふおとめのすがたわかぬまで和歌のうらべはかすみこめたる

◉仝　紀伊　宮田ひて子

垣そひの道に立ちつゝ君まてば何處とも知らずばら香ふなり

◉仝　浅草　武内はま子

霞たつ牧場の駒のいなゝきて吹く春風に梅の花散る

◉仝　滋賀　島中臨エ

春立てば日頃なかめし常盤木もいろあたらしき心地こそすれ

◉仝　肥前　佐々木數

朧夜に花をたつねてさまよへばそこともわかずもの音ぞする

◉仝　但馬　河野さだ

牛ひきて歸る童も見ゆるなり柳のおくに里やあるらん

◉仝　下谷　白井須磨子

都べの梅のたよりを給はがきにつたへおこしゝ友なつかしき

◉仝　伊勢　齋藤貞子

鏡のおとも霞の間よりきこゆなり五十鈴川邊の春の曙

◉仝　京都　赤尾たか子

わか宿の若木の梅の花さきて昨日もけふも鶯のこゑ

◉仝　堺市　山家ひろ子

八重櫻ひとへざくらのいろ〳〵をかざして京の春を見るかな

◉仝　上総　伊東千代子

朧夜の花のこかげに彳みて春にわかるゝ雁を聞く哉

◉仝　大阪　武田ことみ子

打かすむ空の色にぞ知られぬる春は物とふこともなき世と

◉仝　紀伊　小山つぎ子

枯葉さそふ庭の木枯しらぬまに花の香送る風とはなりける

◉仝　陸奥　花散る里人

けぶり立つ野守が伏屋いつしかも霞の中に包まれにけり

◎仝　　東京　宮内千代子
とさしつる柴のまをり月けさあけてなびく柳に春をしるかな

◎仝　　埼玉　倉林そめ
麥青く梅白う咲く賤が屋のかすかに見えて春雨ぞ降る

◎仝　　大阪　節子
れんげつむ少女の影も分かぬまで霞こめたる春のあけぼの

◎仝　　伊勢　西井とら子
バイロンの詩集ひもどく南窓梅が香のして春靜か也

◎仝　　芝　よし水たか子
ちる花を惜みがほるもこゑたてゝ水田のおもに蛙なくなり

◎仝　　茨城　染末露子
月かげは身を切るばかり寒むけれど梅の林はたちうかりけり

◎仝　　信州　中田八千枝
出てたゝす御袖にいとゞあふるらむ御苑のうめの香りゆかしく

◎仝　　本所　宮内榮子
鶯をきみか垣根にきゝしより梅を植ゑかくおもひけるかな

◎仝　　神戸　水越秀子
まき上る袖簾るなり玉たれの小簾のと山の梅咲きぬらん

◎仝　　芝　服部松代
わか庭の梅のさ枝に宿しめて聲のどかにも鶯のなく

◎仝　　大阪　保田よし
あさひかげさすやかきれの梅か枝にけふもきこゆる鶯のこゑ

◎仝　　大阪　久保井たつ
なか垣の隣りの梅やさきぬらん近く聞ゆるうぐひすのこゑ

◎仝　　千葉　白井露映
俗ゆきて山伏行きて風もなきおどろ月夜にさくらちるなり

◎仝　　千葉　露崎とき子
月おぼろ梅の花ちるおばしまに琴をかなづる少女やさしも

◎仝　　武州　飯田珠子
姫桃の花ほろ〲と風にちりて猶夢さます南椽のもと

◎仝　　大阪　加藤きみ子
日はおちて黄雲いざよふ野の小路麥笛ふきてかへるうなゐ子

◎仝　　下総　三田はや子
姉妹が雪間もとめてあさり來ぬ此初若菜母よ召しませ

◎仝　　信州　瀧澤とめじ.
乙女等が袖つられつゝ若菜摘む小田の畔道ひばり舞ひ上る

◎仝　　磐城　宮崎はる子
母君とめでし昔の松島を春の夜毎の夢にみる哉

新躰詩

蟋蟀

名古屋　林千代子

胸に秘めたる琴の緒に、
奇しき響をつたふごと、
末葉は枯るゝ叢に、
夜もすがらなく蟋蟀。

纖く妙なる調には、
慰藉の音も籠れるに、
何をか恨むだえ〲に、
風に亂るゝ一ふしは。

低く哀なきうたの音の、
ほそき調を恨むとか、
さば眼をあげよ人の世も、
情は薄き人こゝろ。

強さに誇る罪の子が、かよわきものを救ふとて、
美しき名のかたらひに、世を欺くをみとめずや。
または花やぐうき人と、語るはつきぬ戀語り、
末の松山すえの世も、猶かはらじと誓ふとも。
さゝ波もなき朝凪の、そはさめやすき夢の彩、
見よ夕浪の溢れては、歸すにあえなき潮がしら。
さむればこその浮世なれ、世はみな夢の彩なるを、
誰かうつらふ人の世の、戀の運命をなげかんや。
雲心なし久方の、星の光に啓しあり、
淋しくつらき草の屋も、悟れば尙き靈の宮。
夜もすがら鳴く蟋蟀の、清き調を友として、
興ある宵のうたゝれに、人のゆくへは千々に占さん。

評、言ふ所は、未だしけれど、調何となくとゝのへり。（桂月）

花ちる寺

三重　河村君子

あした夕になりつくす　鐘の響に春はきて
今日もくれゆく西の空　澹くいろどる夕映に
無常のさとしあるものを　知らでや人は移り行く
花ちる寺のこの夕　いざとて昇る鐘つきが
鐘樓のもと幾千の　たはれ男ば昨日今日
醉ひにうかれて乙女子が　かざす櫻に眠るらん
あゝ鐘つきよ咲く花は　響きにさへも散るものを
胡蝶の夢のいつまでか　さめぬ時やはあるべきぞ
同じくさむる夢ならば　いざ破らじと愛着の
心にためらふ時ならじ　撞けよいざ撞け鐘つきよ
鐘のあはれを今更に　たはれ男に知らしめて』

評、『想も調も未だしけれども、あはれなる趣なしとせず。（桂月）

君の御影　（メイ子詩集より）

和歌山　藤田いさを

心にたへぬ思ひをば、今こそ君にと訪ひ來しを、
思ひありげの我が懐を、見ましやしけむあなあはれ、
かくれたまへり家の中。
語らむすべも今はたえ、みだれ／＼し心もて、
もと來し道をたどりつゝ、つきぬ思ひに見かへれば、
うれしやかどに君の御影。

評、可憐の趣を見るべし。

氷閉水緊

伊勢　加藤しげ子

落葉をうづむ、白露も、
川風さむけく、ふきそめて、
小川の水も、こほるらむ、
たえずきこえし、水音も、
一夜のほどに、こほりそめ、

音こそたゆれ、今朝よりは、
里の童べの、二三人、
あなたかなたに、はせまはり、
よろこび叫ぶ、聲ぞする、

新體詩

周防國山口町一、三二五　津濃案子

去年の祇祭の時の事を思ひいでゝ友によす、

月日ひまなくたち去りて　又も來れりこぞの今日
手とりかはして祭觀の　賑い見しも今ははや
あなた、こなたに別れいて　つれだちゆくもまゝならぬ
あはれ浮世はかく計り　つれなきものかと今更に。」

消息文

●初產をいはふ文

北信にて　すみ子

【甲】

初春とは申しながら、雪降る國の御寒、ところに慣れぬ事とて、炬燵にのみありてあたゝかき夢むさぼるお恥かしさ、これなば有害のやう論ぜし我がむかしおもひいだして、獨り心に恥ぢをり參らせ候、この淋しき〳〵里へ、おもひもかけぬたのしきおとつれよ、またもや降りくる白雪も、まこと花かとおもはれて、春に逢ひぬる心地いたし候、祖母樣と申上んも御似合はしからぬあなた樣の御齡にて、こたびはお孫樣まうけ給ひしよし、人は初產の手柄に男の子をことの外ほめたゝへ候へ共、一姫二太郎とやこの古き諺に洩れぬおん姫子樣の御安產、女君にて入らせられし御事まことに〳〵御目出度くいはひ上參らせ候母上に似ましての色白か、御髮はさだめし父樣のいと濃うおはしますになどこなた打寄り御うはさ申上をり候。

九重の雲深う、呱々の聲あげ給ふ、御さちには及ぶべくもあられど、何も〳〵足らぬがちの中に生れて、一生を涙のふちに送るもあり、あるは父をしらぬ子、母をしらぬ子、よしや錦のうぶぎにつゝまれても、これをや幸とたれいふべき、人のねたみもなく苦もなく、しかも樂しき双親の愛に迎へられ、祖父祖母君のあたゝかき御手に迎へられて、この世に生をうけ給ひし御子樣の御幸運、蝶花の譬も古るびたれど、これよりの御いつくしみ、はた何にたとへ參らせん。

御文によれば御產後の御經過よろしう、既に七夜のおいはひには祖母樣にいだかれてお座敷にお出遊し、つぼみのやうなる御口許に、お乳たづね給ひし由、御細々と御しるし下されまのあたり御目もうじの心地仕候、御名は聟君樣の御發言通り、玉子樣とや、うつくしき御名にて候よ、佳き御名にて候よ、女は何事も角々しからぬをよろしといたし、且つはなまなかの主義、却て其身を涙の瀨に落すものにて候、風に柳の風情、唯何も〳〵圓滿なるが幸福の基と存し、光輝くおたま樣、やがては其御名の如くいとまろやかに世をや經給ふらん、いはひ上參らせ候、御產婿樣には男の子君ならぬを、口惜しうおぼすとかや、さらばこの君ひとりの御子にてもおはさぬを、次々にと設けさせ給ふは、かしこき〳〵男の子君をといのり上候、私方の長男それは〳〵いたづらものにて、次なるは女の子に候まゝ、父の心は知らず、母は女を寶のやうにいたし居候、ましてこの頃の愛らしさ、千金にも替へがたくおもひ候、賢婦母たるものゝ愛變らずは、世に娘を賣るあさましの所業なく、またこれを弄ぶうかれをもなからんなと存候、黄八丈壹反御初着の料と又松魚節壹箱

御祝のまるし迄に進上仕候、初雛の御いはひはと、こなた主人今より鄕向こらしなり候、めざましきなば盛らせんものとてよし

評　いつもながらの才筆敬服〳〵（日東）

海外にある良人の許に

冬月女史

〔乙〕

きのふけふかと思ふほど、はやくも、御出立遊され候てより八ヶ月を過し候かと、今さらに打ち驚どろかれ候、去年萩寺へ御伴致し候事のそゞろに思ひ浮び候かも、やがて御歸朝あらばなど、未來の空想にのみ馳られ居り候先日御送りこしの御寫眞は母上が唯一の友にて、客人への御もてなしに、何時も實見なされしかの樣に説明遊し何よりの御樂に御座候、例の菊花の手入は殆近頃の日課にて、美事なる大輪數株出來幾助も大自慢致し居候、毎朝一わたり花壇を回りて、よりならでは食事も遊さぬ位、そのためかとみに御健康をまされし樣存じ候、幹子も此頃にては全くおこたりしやうに候へど、醫師の注意にて先食品はスープ牛乳麵麭小片位に御座候、然かし體量は此一週間程に凡八百目增加見え候、坂並べ環並べなど日々の遊びにて、戸外は乳母車にて大方は出候、母上と花壇を回ぐるが中々のたのしみにて、近頃は花卉さへ見れば菊と申もなかしく皆々を笑はせ候、性質は溫順の方かと思はれ候も、いやしくも理にあらずと思ふ事には伏さぬ氣性を有し候樣にて賴母しく教育はなか〳〵むつかしき者と存候、快氣祝は觀菊宴と兼ねて遊す御積に御申に御座候、すでに新聞にて御承知とは存じ候へ共、衣服の改良問題盛にて、種々雜多の改良案御座候が、母上も夜々の御たのしみに圖案など畫きて御示し遊し候幹子には弘田博士の指揮に從ひて改良衣着させ候所、能く似合候まゝ近々撮影して送り參すべく候、當年は茸狩りは御斷りにて此方へ御老人夫婦御出京の筈、植原の姉上も二三日前御上京被され、今日は歌舞伎へ御出掛け遊し候、明後日は、例の老人會のまわりにて、母上は小督、松竹梅など御さらへ遊し夫がため御手紙は次便にゆづり宜敷とのみ御申に御座候、祖母上の傍に少さき卦並べ何やら歌うたひ候なかしさ、誠に無邪氣なり小兒なのみ見て居り候時は齡も伸ぶる心知致し候、春のやよひ位はまわらぬ口に何やらうたひかけ候、木曜と金曜とが私の稽古日にて暇さへあれば勉強致し居候、何も右樣の次第にて埋りし事もなく御安慰被遊べく候、末ながら何卒時候違の粉ての越年充分御自愛遊はし切角御勉强祈り上參らせ候



評　報導の親切なる、在外の良人をして喜ばしむるに足らん、（日東）

●出産を祝ふ文

日本橋　生方ひて子

かれて今月と承り一同御案じ居候折から只今御使にて御文拜し奉れば今朝とく、いと安らかに玉の如き思子の君をあげさせ給ひし由、鶯の初音にもまさりて嬉しうなん覺えまゐらせ候、まこと、あらたまの年立ちかへりて、たかきいやしき、千代に八千代にと、君が代を祝ふ日の朝日の輝きと共に、ものせ給ひしは御運の程もいとかしこく、千代の榮の賴母しさも又一層と存ぜられ候て嬉しさ此胸にみち候を、まして御兩親樣の御喜びは如何ばかりに候はん、初孫の笑顔に氣も若やぎ給ふらんと被察候て、御館のうちの御賑ひ手に取る如くに御座候、早速參りて御祝詞申上げ和子樣の御姿をも伺ひはべるべくと存し候へどもとりあへず御祝ひの印として此眞砂染いと粗末の品には候へども、たゞ其名の目出度きをめで御目にかけまゐらせ候あら／＼かしく

評　祝意を述べ得て温雅（日東）

●かるた會に招く文

なみ子

長くもがなと思ふ休暇も、難波江の蘆のかりねのひとよ二夜とばかりになり申し候。始業式もすまば、ものむつかしくなり候へば、こよひかるたのまとゐ開かはやと存じ候。より集ふべき人々は、例の御馴染ある方々のみに御座候まゝ、秋風ならずとも、いかであしのまろやにおとづれ給はずや。山鳥の尾のしだり尾のなが／＼しうはとゞめ奉らじ。かさゝぎの渡せる橋に、おく霜の白うならぬ程に歸しまゐらすべく候へば、あはでこのよをすぐしてよなどつれなき御かへりごとはなくて、まつとし聞かばと、日くるゝほどよりいらせられ度、まづはそゝのかしきこえあげ候。かしこ。

●臺灣にゐる兄上の許に送る文

大阪　向井いし

あらたまのとしの始めの御壽祝納まゐらせ候御兄上樣には御すこやかにかはらぬ御いはひを營所にてかされさせられ御めでたう存上まゐらせ候うちにも母上樣をはじめ皆無事にとしを迎へ候まゝ御安心下されたく候み國のうちとなりて間のなき御地にすら日の丸のみ旗いとはなやかに万歲の聲たかゝりしとか首の葉にかけむも畏きことながら　大御代のみ惠げにこそとすゞろにこぼるゝ涙もせきがたう侍り候ありがたさには涙こぼるゝとはまたくにのことゝ思上まゐらせ候

母上樣には兄上樣よりの御手紙を箱に藏め日々くりひろぐることをこよなう御心やりにあそばされ居候私もかなふだけ御慰めまゐらせ侍りかつは弟を前に据えてあどけない話何もかもうち忘るゝばかりのこともおはしまし候まゝかへす／＼も御心つかひあそばさらぬやう願上まゐらせ候たまには弟は「父親のない子は兄樣を父さんとおもふて御仕へなさいと先生にをそはれました」とかやうなことを申し母上樣も私もたまりかぬることも侍り候「兄樣の御かへりの時には帽と靴とを御土産に」とて寢言にまでも申してゐまするほど喜び居り候別紙はこの間の弟の清書にて候「まるはいつた」といひて得意顏なるもいと可愛らしく侍り候春子樣にもまめ／＼しく御いそしみあそばされ來る四月には目出たく御卒業あそばさるべう存上まゐらせ候第二學期の試みにも優等にあらせられ私のはづかしさいはむすべもなう侍り候母上樣の御喜びも一方ならず候まことに来たのもしう存上まゐらせ候いつも共に通ひ共に遊び共にはげみ居り候

南の方とはいへひえ／＼しうおはしまし候へば御心したまひてようぢのことには御心置なくひたすら公務に御いそしみあそばされ御いさましい

御顔ヶ拜しまつらむ後の日を大樂に待上まゐらせ候かしこ

◉出產せし友の許に　筑後　飯田しげ子

昨日まではいとゞ空も曇り勝ちにて候ひしに、よべよりは銀河も深う澄み渡りて、星さへ光りを頓に添え、今朝あたりは別して、有明月も光りうせやらず、風すら和く徐ろに身にしむ心ばへ、いとゞ爽快を感じまゐらせ候。特に、朝日の御光りちら／＼とほのめく頃には、何處やら心ゆかしき思ひせられて、する事なす事一入身に染むものゝ如く、足のふみ手のまふ所を知らざる程なりしが、今かた、御姉様よりの御玉章、御うれしくひと亘り拜見いたし參らせ候ひしに、さても、樂しかりつる此あしたの むつ時、御許様にはやす／＼と御分娩あらせられ候ひしよし、特に御初產御男子との御事、御目出度さこれに越ゆるものは御座なく候。御老母様はじめ御兩親さまがた、兼てより男子ならばとの御望みに候ひしまゝ、さぞかし御本望の御事ならむと存じ參らせ候。まして、御兩方とも御無事御肥立遊ばされ候とか、御兩親はじめ皆々さま、嘸々御喜びの御事と存じまゐらせ、且は私共までいたく御よろこび申上參らせ候。まいてや御子様極めて御健かに渡らせられ、御聲高らかに御いさみ遊ばし、御器量も御身體も人なみ／＼に拔けさせ玉ふとは、小にしては、御家の御ため、御運の延びむためしにて、いやましに冴えゆくべき月の御玉とも譬ふべく、大にしては御國の御ため、あらぬ御手柄成されしにて、幾萬年の後までも、朝日の本榮ゆべのき兆候と御察し上參らせ候。げに古人の、白金も黄金もといひけむも宜にて、此和子の、おさやかなる笑顔を呈せられ、可はぬながらも片ゐざりせらるゝ程になり玉ひて、何かと手にせられ候はむには、いかに麗はしく愛でたからむか、とくとく人とならせ玉ひて、物書き物學びなどし玉はむには、いかに嬉しく賴母しからむかと、拙なき妾とても、今よりさして打ち笑み參らせ候。誠や、月日に關守なし。御許様と手をひきて、樂しく學びやにうちかよひ、折り節は、蕭れる花に歌を咏み冴えたる月にこし方ゆく前を忍びしに、君ははや、めでたき御夏人に嫁がれて、樂しき御出產に御國に一方ならず忠を盡させ玉へども、妾は變らず學びの洋に漂ひつゝ、著くべき方のなきまゝに、只々羨ましさに耐へかね候て、まゝならぬ世をかこち中し候。



十分に御用意の上とは存じ候へども、聊か御祝ひのしるしまでに、御產衣一襲進じ上參らせ候。如何にも御麁末の品に候へども、何卒御納め下され度、まづはあら／＼御祝ひまでめでたくかしこ

有明の月の光りもいやまして
　朝日さやかに國はさかえん

國のため盡すよすがの無きまゝに
　產衣たゝてこゝろなぐさむ

評　平易にして能く其意を徹す、聰々たる芳情、楮墨の間にあふるゝを見る　（日東）

◉雪のあした友の許に　濱松　孤葉女史

今朝の雪景色いかに、めづらしく御覽じ候はずや。冬になるよりいつしかとのみ、月毎にまち渡り候ひしに、昨日の夕べ、風いたく吹きあれ、

雲のたゝずまひも、いみじうさえ渡り候て、飛ぶ鳥のけしきまで、必らず降りぬべき空とは見え候ひしかど、いとかくまで深くとは思ひかけ候らはざりけるよ。明けくれ心へだて候はぬ友どちは、かゝる折りにさへ、何事につけ候ても、まづ第一に思ひ出でらるゝわざにて候を、まして、かくめづらかなる朝ぼらけを、ひとりのみ見候はんとの、いと興なく思はれ候よ。いかにもして、人の訪れ玉はり候はば、こよなうおかしさも勝り候はんものを、いかにとだにおとづれも給はぬは、いと思はにず恨めしくなん候。此のけしき、そこの君にも、たゞにやは見過しがたう思ほし候はんに。しろしめす樣、おのれの未だうひ〳〵しき口には、何事もいはれ候はず。筆のしりとるはかせゝ候はれば、とりつくろひはべらむやうも候はず候。おもひ候程の心も、たゞおしこめて、いと口惜しうこそ候ふになん。君にはいかに見どころある御心ふかき言の葉もおほく物し候ひしならんに、二つ三つたまはせ候ひてよ。さてなん、せばき庭の雪のひかりも、いとう加はり候て、友なき今朝のさびしさをもなぐさめられ候べきを。いてや、かくは聞え上げ候も、之よりあやしき鳥の跡の、かてゝ、けさはいみじう筆のさき、しみこほりて候へば、いと御覧じがたくもや候はんあなかしこ。

雜　文

さよ嵐

兵庫縣下城崎郡三椒村　大山婦美子

（甲）

嵐はいぎりすの沿岸にあらび狂ひぬ。人々は今ぞ穏らかき沖合の山なす浪上に木の葉と漂ひぬる大ぶれを救はんがため、救助船を漕ぎ出ださんとひしめきあふ、されど今一人の力を借るにあらでは漕ぎ出づべくもあらず。

年わかき漁夫にして心はた貞きかこにてありけるれつどぶらうんと云へるものありけり。自ら勇み立ちて、我れこそ其の救助船の中に乗り組まめ、とは思ひけるが、先づ母上の許しを受けなんとてその傍に立ちつる女の前にしとやかに小腰をかゞめ、如何に母上は我れを遣り給ひなんや。とぞ言ひいでける。

茲に哀れをとゞむるは此母子の上なりけり。母は六月ばかりこのかたやもめにて暮らせり。そが夫は漁夫なりしが、かつていぬる長閑けき春の頃、ある朝空合こよなくよろしく、浪路もいとゞ穏なりければ、あさりすとていさり小舟に棹して海原遠く漕ぎ出てぬゝさるになもひきや、恐しとも恐しきはやての矢庭に荒れ立ちゝ、すざましく唸りに唸りて船に吹き付けしやあはれ運命のきはみなる、あくる朝小舟はきれ〳〵に砕けて流れつきぬ。されど漁夫は歸らず。

さても母は今我が子が斯く請ひいでしを、決して許すまじうこそ思ひさだめしか、されどまたつく〴〵思ひまはせば、助けも頼みも荒波の逆立ち狂ふたゞ中に揉みに揉まるゝあの舟人等の、遙きかなたの故里に殘し置きけんうからやからどもが、親子はらからのなかをしも失はんには、そもや如何ばかり断腸の涙に咽ばんずらん、と思ひやるに、すゞろ我が身に引き比へられてぞしみ〴〵憐れさやるせなき。

かくて胸はとやかくとかきみだるゝを、つと押し鎮め、信とわが子を振り向き、しひて雄々しきさまをよそほひ、聲おごそかに言ひいでぬ。やよ行けかし我が子。大慈悲の天つ神は必ずいましをさきく護らせ給ふらん。

かくいひ捨てゝ母は急ぎて涙を立ち去り、闇雲くらき片路づたひに、蹈む足さへもたど〳〵しく心もそらに歸り行く。いつしか我が門にも着きぬれば、手早く明る柴の戸のあとを鎖しも敢へず馳せ上り、そのまゝ撲とうつぶして、昔の悲しみと今のおそろしさとを、とやかくと思ひ煩ふに、目もくれ心もけぬるばかり哀しして、千行の潸涙一度にわつとせぐり上げ、滂沱としてはふり落つるさまは、さながら瀧つ瀨の白糸をたぎつ如くなり、苫家の擔端にどう〳〵と押し寄する小夜嵐にも、今宵涙路の我が子の上を打ちしぬびては、汐馴れ衣の袖の露もいとゞしげくやおきまさるらし。

夜は明けたり。嵐は落ちたり。曉の波はやゝざわめけど、程なくしづかに海づらは凪ぎ渡りて、うすくれなゐの曙光を水烟模糊の間に現はすへからん。さしもいかめしかりし船も、みなそこ深く沈みゆきぬれど、救助船は目ざましき働きをなして、それに乘り組めりしすへての人を救ひ上つ。中にもれつどぶらうんは殊に勇ましくこゝを先途と働きて、救ひ上げたるうちの一人を我が家に伴ひ歸れり。そもその人は誰ぞ。

今しもれつどぶらうんは我が家の門へまで歸り來りしが、何ゆになやあらん、少したゆたひつゝ內にすゝみ入らんともせず。彼の傍には疲れなやめる丈高き人ぞ立てるなる、是やがてあはや溺れ沈まんとせる刹那をれつどぶらうんに救はれたるになん。其人のまなざしのいかに嬉しげなる色を湛へて、れつどぶらうんをしば〳〵振りかへりみるよ。多くの村人どもは此ふたりを取り卷いて、皆諸共に其事の樣を見つめあふ。



一人は感情に激せられたる涙聲をうるませて、誰かあの母なる人にありし事のよしを語り告ぐべきぞ。と言ひもあへぬ傍より、我れこそ。と言ひさまれつどぶらうんはつと家の內に進み入りて母の手を握りぬ。聽き給へ母上よ。母上よ聽き給へ。我れは御身の耳に入れまゐらすべき一つの物語をぞ持つなる。母上よ聽きだまへ。よべ救ひ上げたるうちのひとりは漁夫、げに漁夫にて候ひしぞ。そのひとは數月以前ふと海上にはやてに會ひてさん〴〵漂ひぬるを、或る外國船に助けられて候、されど此外國船は定められたる航路のあるからに、其人はほいなくも、故鄕を離れ我が家を離れ妻子を離れ朋友を離れて、思はぬ方に旅ごろも、思ひ立つにはあられども、立たねばならぬ梶まくら、いくその夜やかされけん。よひ〳〵毎の夢のわだ、魂は故鄕に漕ぎ行くを、知るや、知らずや、妻や子は、もはや此世になき數と諦めしにもいとせめて、郦ならぬ身のことわりにこそ。

舟の行く手や大波小波、八重の靑波うちこえて、こゝはいづくか白波の、よその湊に泊りにしが、軈てもとの船にてこのいぎりすに送り還されたり。

かくてよべは始めて故鄕のうしほに浮び、漸くわが家の見ふる處までも來りしに、何事ぞあらしは又もや陸に哮り海に荒れ、あはれ、其人はふたゝび死地に陷ゐり候ひぬ。嗚呼この時や、其人の心やいかばくやしかりけん、戀しとも懷かしき我が家を只目の前に見す見す、わたづみの底な深み、沈みゆかんともする心、そもいかにぞや。天なるかな、救助船

ば其處へぞ行し。母上よ、母上よ、此幸なるまことの事をゆめな悩と思はせたまひそよ。即ちその人を誰とか思ぼす、是わが父上にておはすと知りまさずや。

あはれ母上。あの時は母上は、只管あたぼしびとの上に懸れるまがごとを救はん、とのをゝしき御心にて我れを遣り給ひにしやおはすらん。さはいへど、よも其時は、其時はよも、露ばかりも思ひかけさせ給はてやおはしけん、我れらが日ごろ戀ひ焦るゝ父上の御命を助けまゐらせなんとは。(さなり、など思ひかけさせ給ひつべかりしや、あはれ。

話はこゝ途切れぬ。聲音は響きぬ。助けられし人は爐のあたりに現れぬ。あまりのうれしさに母は一聲やとけたゝましくさけびて、なつかしげにうつぶしざま、其人の腕にすがりつきぬ。

評　文章稚氣を脱されど、その談柄は面白く、且つ雄々しき所あり、其の他人の遭難を拯はんとして、先年死せりと思へる己が父の命を助けたる物語を叙する邊、何等の壯快ぞ(日東)

●たのしき一日

茨城　山口すみ子

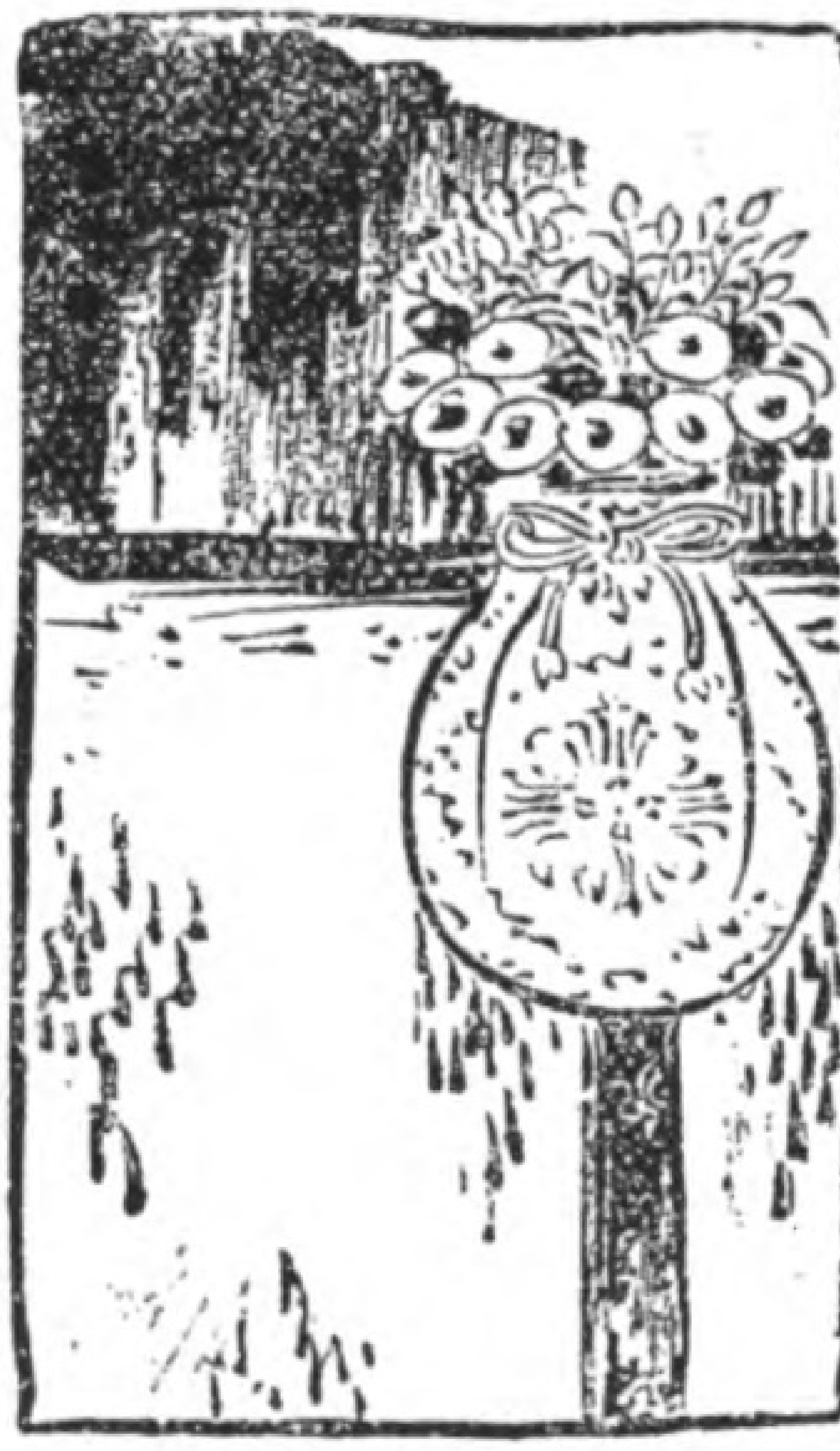
(乙)

宵べよりふりつゝく深雪に、いぶせき賤が伏屋も昨日に變る今日の眺めは、白布もて俺はれたらん様に一點の塵も見とめず、冬枯の木々の梢も枝ごとに、匂はぬ花の咲き出てしにはあらざるかとうたがはれ、道の邊の塵、後の竹藪も風情ある眺めとかわりぬ。野末遙かに見渡せば、森も田も畑も草も、一色に白妙の衣いたゞき、常は道わろく落葉もて埋もれたるだら／＼坂の小道も、犬の足跡一つだに見えず、朝日きら／＼とてりそふ様のうるはしさに、日頃浮世の塵にけがれし妾の身は何となふ清う覺へられぬ。庭の面にはいつの間にか、五ツ六ツ猫の足跡、梅の花の散亂見えたり、池の水際へ長く枝さしひろげたる松の梢には、早くも千代千代とさへづりかはす小雀の、あれよ、羽だたきすると見るまに、パサリと一塊の雪落つれば、池の面に大きなる波紋うづまきて、寢むれる魚や驚かせしならむ。折しも遙の彼方に、ヲツ／＼と朝寒の空にひゞく人の呼び聲は、それよ里の童等の雪合戰とやら初めしにはあらざるか、飼犬のクロンもあちこちところげつ飛びつ、何やらいと樂しげなり、弟と後の方に眼をめぐらせば、垣に添ひたる右手にふりつむ雪を事ともせず、早咲きの白梅六ツ七ツ、そよ吹く風のまに／＼かすかに香を送るゆかしさ

折から電報と郵便脚夫の聲玄關口にきこえぬ、同時に樂しく平和なりし胸のうち、鼓動痛たく高まりて我にとあらずばた／＼と飛せいでぬ。うれしき事かはた悲しき事かと、顫ふ手先、轟く胸をおししづめて讀みくだせば、思ひかけざるよ、二年前公用にて遠路の空へ旅立ませし兄上のいかなる好都合にてか、今夕滊車にて歸り給ふとの知らせなりき。妾は心もそゞろ、母様々々と奥の方さしてはせいれば、今し姉上さ共に置炬燵を中にはさみ、何やら縫ひかけゐ給へし母上は屹と此方ふりむきて、ちと靜かになし給ひ女子にはあるまじき事ぞと、眉に皺よせ眼鏡越しに見詰め給へしが、妾のさし出せる電報打見て、にはかによろこびの色あり／＼と、その眼その頬にあらはれ、今は中々妾のはしたなきふるまいも、うれしとやうに見へ給ふ、姉上はと見れば同じよろこびの色面に溢れ、もたけき頬には時ならぬ紅葉ちらし、うなだれしまゝ針もつ手のおのづと挽みがちに見ゆるにぞ、妾はわざとらしうその面のぞきこめば、あれ亞さんの人の悪るさよと、いよゝ俯向き給ふ。

思ひ出せば、姉上の我家へ嫁き來給へしより、まだ一年とはならざる秋の半ば頃よ、兄上には公の御用にて山川隔てし遠國に旅立給ふ事となりぬ。その時の心何とはなしに戀しくてはなれがたなき思ひぞしぬ、まして姉上には末の松山浪越じと契りましけん背の君の事にしあれば、いかに御心のうち悲しうおはせしならむ、夕べ／＼忍ぶにあまる胸の思ひの堪へ難くてや、おばしま近く立出てゝ彼方の空を戀ふる時、ゆたけき頰に人知れす落ち散るは露か淚か、つくるはしなき物思ひの果てむいつも吐息ぞ漏し給ひぬ。その哀れに結れはてたる御心、兄上ならでか誰ときえむ、胸にひろごれる浮雲兄上ならで誰か拂はむ、その戀しの兄上なつかしの兄上の歸り來給ふ今日この夕、いかてうれしからざる事のあるべき、まして一日を千代の思ひに待ちわびゐ給へし姉上のみこゝろのうちこそ、さぞな、

夕つかたより妾は叔父上姉上其他二三の人とつれ立て、兄上を迎へまつらむとて門を出ぬ。淸く積りたる白雪ざく／＼とふみゆけば、梅の花ならぬ下駄の足跡混じていとわたらしう思はれたり仰げは雲は少しくたゞよひ、むらぎへ殘る雪の上にきら／＼と夕榮の色てりそへば、軒端の上より幾線の零とよ竹を傳ふて落ちぬ。そよ吹く風も流石に寒からぬにはあられど、うれしき思ひに足も自と進み勝なり、畔道をめぐり桑畑を通り猶行きゆけば、櫻川の水淙々として流るゝ堤の上にと出ぬ、右手の方には石地藏のまだ消へ殘る雪に包まれ、獨り淋しげに立たせ給ふ、折柄手拭かぶれる老婆と、白き粉頸や面にまみらせたる田舍娘の、唯に見せんとや初々しげなる丸髷のその姿、折々頰に紅葉ちらして無音まし微の笑み行くは、戀しき人を思ふてならむ。



大空はいつか薄鼠色となり、颯と吹きくる川風水氣を含みて身いよゝ冷かさを覺へぬ、嚴しく襟元をかき合せ猶歩をつゞくれば、道四ツに別れたるところに出ぬ。此所なりき、兄上と遊びたはぶれ道取違へしは此所なりき、後の方に見ゆる西子岡は、それよ振りわけ髮のまだ物思ひなき幼な頃、兄上と共につゝいの袂つられて、白梅香ひ若葉しげり山時鳥のきなく春の日、彼方のほとりをさまよひつ、かだみに語りあひたる時のいかに樂しかりしよ、靑絹のしとれ敷きつめたらむが如き丘の上のこゝかしここに、咲きみちたる野の花を摘ひ行けば、ひばりは空高く聲ほがらかにさへづりかはし、胡蝶は花より花と群れとびつ、ゆるく吹く風に梅の花びら二片三片散りかゝりけるを、妾は輕くうけとめて唇に含みし時、兄上はいかにのたまへしぞ、罪なき事よとほゝゑみ給へき、あはれ今は花なく鳥歌はれど、今日のうれしき心のうちはいかて昔しの思ひに劣るべき。折柄弗と眼にとまりしは、觀世音の御前のかなあみに、いつの程にか房々したる黑髮捧げられしぞ見へぬ、さきの日まではあらざりけるを、いかなる人のいかなる故にてか、さても願のすじは何よ、我夫の病いへさせ給へとて、心やさしき妻の捧げしにはあらざるか、親はらからを思ひてなるか、さあらずはおゝそれよ、人知らぬ戀の暗路にふみ迷ひし乙女の思ふ思ひに堪へかれて、その綠の黑髮惜しげもなく切り捨しにはあらざるかと、はてなき事ども思ひ出してそめば、五六許り人々に後れぬ、妾は小走りにはしり出して姉上の御側にいたれば、うれしき思ひを袖に包めど、とかくあらはるゝそのそふり、流石に恥しく

てか、俯向勝にのみあゆみ給ふ

やがて我等は停車場につきぬ、折しもよし人々ののゝしりさわぐ聲は、今正に着車せしところならむ、叔父上はいち早くも見とめけむ、おゝそれ〳〵正雄が正雄がとさけび給ふに、と見ればあなうれし、兄上はいつの間にか鼻下にうつくしき八字髭さへ生ひ給ひ、にこやかにあゆみ來りぬ。漸く入口にあいさつすめば、姉上も恥しげに、歸り給へとばかりさと顏紅らめしが喜色面に溢れたり、されど聲は余りに小さかりき、ゆはじなその思ひ、妾が胸もうれしさにおどり狂はんばかりなりき、かくて我等は車飛はせて家路へつきぬ

見上ぐれば平和なる夜の神は靜かに地上を包み、灰色の雲の其所に心ありげの星二ッかゞやきそめたり。

評　叙事巧妙なれど少しく冗漫の嫌あり今一層の精錬を要す（日東）

◉死

三重　河村君子

本の露末の雫、後れ先きだつは何づれ常なる習ひなれば云はずもがな。さばれまゝならぬは人生の習ひとしはいへ、死期ほど定めありて定めなきものはあらじ。强きもの必ずしも命長しといふにあらず。弱きもの必ずしも命短しといふにあらず。老ゐたるもの必ずしもはやしといふにあらず。若きもの必ずしもおそしといふにあらず。若くて夭し老ゐて死す。昨日亡き友を歎げきし人、今日は塚中の人となりてかなしまれ今日悲しみし友、あすは地下の人となりてかなしき夢を見るやも計られず。むかしの人今の人を問はず、たかき人、いやしき人、うつくしき人、みにくき人、かしこき人、おろかなる人をわかたず、生れし人は必ず死す。げにかなしきは死なりけり。

死やまことに悲しかるべし然れども人世は憂き世なり。浮世にありて人誰かくろしみをまぬがるべき。一日のくろしみは夢を結びて華胥の國にたのしみ、一生のくろしみは假の宿をのがれて死の世にたのしむ。眠や死や、彼は一日のくろしめを休め、これは一生のくろしみを休む。げにたのしきは死なりけり。

死やまことにたのしかるべし。然れども人はこれを恐る。朝顏の露に於けるが如く朝に生れし人夕に死す。今日ありし人あすありとこそ思ふなかれ。何時死期の襲ひ來たるやも知れず。さく花は吹く風に散れどまたひらきぬべし。一日のくろしみをやすめし夢はまたさめなん時やあるべし。しかも逝きしものは再び歸へらず。げにおそろしきは死なりけり。

死やまことにおそろしかるべし。然れども生必ずしもうれしといふべからず、死必ずしもおそろしといふべからず。生あれば死あり。死あれば生あり。生と死はよどみにうかぶうたかたの如く消えつ結びつしばらくもとゞまらず。人到る處乳吞兒のあらざるなく、人住む地一片の標墓の見えざるなし。生るゝ人いづ方より來り死ぬる人何地さしてか去る。げに不思議なるは死なりけり。

死やまことに不思議なるべし。然れども人と生れたらんもの必ず死あり。生れて死せざる人いづれの代にかいづれの地にか求めうべき。むかしの人も死し、今の人も遂には死の世の人となりなん。また來ん人も同じかるべし。げに定めあるは死なりけり。

死やまことに定めあり。しかもなほ不思議なり。死やまことに悲しくおそろしかるべし。しかもなほたのしかるべし。

夕をまたぬ蜉蝣の命も一生なり。幾千代かわからぬ鶴の齢も一生なり。人生五十年これまた一生なり。

夕をまたぬ蜉蝣の命必ずしも短しといふべからず。幾千代かはらぬ鶴の

齡必ずしも長しといふべからず。人生五十年これまた短しといふにあらず。長しといふにあらず。迷ひたるものは短く、さとりたるものは長し。あはれ、迷ひし人は是れを戀しと云ひ、短しと云ひ、定めなしといひ、おそろしといひ、さとりし人はこれをたのしといひ、長しといひ、定めありといふ。死よ死よ、我れ汝の味をうましと云はんか、にがしと捨てんか。知らず、その何づれの味をとらんやを。

評　哲理的の題目を捉らへて、評論するはおもしろけれど、此の文の如きは、蕪雜の非難を免れず（日東）

◉夕の思ひ　いさを

一夕、消えゆく夕暮の雲をのぞみ、またゝく新星のかげを仰ぎてより、心にかぎりなき幽微の感境を印せられ、潮の音波のこゑ、何となうなつかしき思ひして、淸麗の風景片時もわが心を去らず忘れがたきに、今宵もいつしか、一路の白砂松原を辿りぬけて、この岩頭にたゝずみつゝ、幽醛の海底に向ひて、限りなき情想の白き翼を馳せ居るなり。

新月の淡き影を浴び、よふく風を袂にはらませて、はてしなき海原に向へば、あゝ忍び出づるたゞ一人の花の友垣ありし昔の忍ばるゝ。遠くかすかにむせびかへりて足下に碎くる波よ、げた千古の波よ、君をしりてやおはすらむ。汝はなつかしの友何處にともなひ行きし。

實にかなしかりき友の身は、金力に暴力にあらゆる手段を以て困められつ、彼女はえたへて人の妻となりて、よりつらくより辛き浮世の生活に入りき。まぼろしの影は暗き森のかなたより出てゝ、青き綠なる草葉の



つゆを害ひて、力なき人の子の眼にうつしぬ。是に於て彼女は始めて涙を知りき。されど、世の冷かなる人の狹き心の泉は、彼女の熱き涙を蔽ふるを許さゞりき。天の秘密はみ空の星に含まれ、人の秘密は其の黑き瞳にこもる。げに彼女の瞳に映じたる世は情なかりき。故に死を以てあらゆるサタンがくるしめを、免れんとは企てたるなり。

一片の弦月、中天にさゆる夜、何處より來りけむ彼女は、つとこの岩頭に佇みたり。悲慘なる哉、其の唇に色なく、其の頰は肉落ちぬ。瞳は涙にくもりて、白き齒は輝髮をかめり。瞑目やゝ久しく何をかさゝやきし、波の音其のこゑを碎きてきこえざりき。渺然として聲あり其の影は消えぬ。其の時よ實に靜なりき、風は鳴かず人はさけばず、月は走らず雲動かず、たゞ碎くる波、冥府のむせびを傳へてやまざりき。

彼女は斯の如くにして逝きぬ。實に世のまの靈と生れ、苔にそだちし古は、塵にあくたに埋れて、淸き谷間におり立てば、瀧とくだけて霧とふり、岩根にむせびて白銀の、花をさかすも束の間や、追はるゝまゝに流れながれて、今宵の彼れは海の波、卒きしほぢを最後にとりて死を迎へたる彼女の運命、かなしからずや。

あゝ、また今日もくれぬ。思へば今年もくれ行かむとす。春花に笑まず綠蔭に泣きしわれ、今や凋零の霜を得、搖落の嵐を得て、心神漸く爽かなるを覺えしも、甲斐なや今しばらくにして、又もやうたてき春に逢はんとす。春は來たるともわが目には花なく、鳥なく、かほりなき身ならずや、世の蛺巾まとへる僞善者は、花に笑ひ鳥に歌ふとも、われはひたすらに蕭條たる冬の風趣を慕ひて、朝は冷き霜によろこび、夕は檜の星の

寒き光を繼ふものぞ。されば云はん、靈魂の息める星は明く、骸の留る所は暗かりとこれ、こがらしすさぶ冬の夜毎、彼女なつかしの友と共に語りて、互にほゝゑみし言なりき。

汝そこにありて、世を悲觀に泣かむよりは、唇を閉ぢ目を瞑りて耳をふさげ、然して疲れたる眞白の胸、細き腕、やせたる足を正しく組みてわが傍に來たれ、憐れなる汝の爲めにわれ神の愛を願ふべしと、こひしき友の御魂は、なやましの夕の夢に幾度かさゝやけり。われはほゝゑめり、されど庭の寒風にさめての後、人の世のはだしを思ひて、われまた泣きぬ。

あはれ泣かむ、あつき涙のつくるまで。あはれ聞えむ、かよはき五躰のきゆるまで。それよ、人ゆゑまた世ゆゑ。

あゝ今宵、情想の泉のさてもつきざる今宵、こひしの友の髑髏なりとも、海のそこよりすべり出てずや。さらばわれ其を抱きて、思ひ思ひて狂かむ、さながらそれよ、骨はまたまに、血は氷とならんまで。

五日の月、あゝまた沈まむとするか、かすかなる光を海面におとして、そこよりわが足下まで金色にかゞやける太き橋を、夢のそれにも似通ひてかけぬ。波の音かぜのこゑ、幽闇の影をたゝへ、悲愁の色をのせて、身にせまり來る。

われは嘻々と笑みき。

こよひこそは、われ等の世なれ、神の友垣來らずや。共に笑はむ、共に歌はむ。

されど答へず。

あゝわれは忍ばるゝ、たゞ一人の神の友垣、ありし昔のしのばるゝ。

評　文おもしろし、只少しく精錬を欠ぐ

◉木枯日記

高知　高橋ゆき子

一日　日曜　晴

朝まだき草深き小路をたどりて竹内氏をとひたりさしたる用事あるにはあられど久しくおとづれざりし故なりその〻菊花は置く露霜にきほいて咲き出でたる樣美しとも美しえばらくありて辭して家にかへり八時頃朝飯ものして女學世界をひもとく母上は髮を結に祖父君はつれ〴〵をなぐさめむとて出て行き給ひ家には我一人にて何となく淋しく思ひ居りし折柄南のきみきたりたまひき文に歌にはた四方山の物語に時を費して十二時頃歸り給ひきやかて母上も祖父きみもかへりましかば三人樂しくひるげを終へ出高の用意整へたり二時頃宮内のきみに誘はれて次の日曜には是非歸り來よとのたまふ二方の御聲をあとにして家を出で野山の景色をながめつゝ長濱に至り舟にのりぬ南の君も共なりき其の他に中村に通ひ給へる濵田のきみ母校を同しうせる君三人商人躰の人數人同舟なりされば混雜いはん方なし海上波おだやかにして風靜にそよき最心地よしふねす山のほとりに來りし頃は日ははや西に入らんとしれぐらにかへる鳥の聲かまびすしともかまひすし六時過舟高橋の木に付しかばこゝにて下り車にものらで月影をふみて宿所迄かへりけるいかなればにやいたくつかれし故食事を終へて復習もせず直床につきたり

二月　日曜　半晴

朝早くゆめおどろかして床を出て雨戸とりあけ見渡せばよべ雨や降りけん水いとたまれりかほ洗ひ口すゝきて衣をあらため髮をくしけづりて文机に向ひすこしばかり書物の復習をなし朝飯を終へて登校したり市役所のほとりにくれば吹く朝風にひら〳〵と黄色せるいてふの葉の袖の上に散りかゝりたるもゆかし校に至れば昔前週の今日は樂しかりしよ今日の作文は爽やかの時の記にやあらんいかにしてかつゝらんといひのゝしる

もなかし我もかくいひ勧めかくいひ納めん彼所は日記の一部をとり出てんと心に思ひつゝ第四時の来るをまちいたり第二時今日はよもやと心ゆるせし國語の日課ありし思の外の事とていとおどろかれしされど其のたやすかりしはうれしきかぎりなり體操遊戯もとゞこほりなく終へて心まちしつゝありし作文の時となりぬ板木の音よりも早く教室に入り紙を出し高崎運動會とぞ記しける意外にもさなくて保元大亂の原てふ題なりきこは國文の中より取りし題なればとて一通書物を開く事をゆるされしかばいそぎ讀本を出して其の重なる事項をかきぬき思ひをこらして漸く木に竹つきたらん如き文を綴りいたしぬいざや清書せんとする時あやにくに十二時半を報ずる柏子木鳴り渡りぬされば師のきみの御ゆるしを得て一同と共に放課後校に止りて清書し師のきみの御手許へ差し出し置きて歸宅の道すがら姉のきみと校を出て中島町上の丁を通りて家にかへりぬ伯母上によべ雨降りしにやと尋れしにかのちいを知らずやとていいたく笑給ふ面なしやひるまはなにとなく心をちゐれば昨日持ちこしみかんなどとふべつゝ雑誌をひもとき燈をともして後教科書の復習をなして十時頃床につきたり

三日 火曜 晴

今日はいかなる故にか寝きたなくもいたういね過し起きて床を出で用意もそこ〳〵に家を出で登校したり校にてはさしたる事なし歸に髪あげん爲金子樣へゆきたり人多くいて日暮ころ漸く結ひ終りて家にかへりぬうすぎの事とてはださむし伯母きみだちははや夕飯すませし後なれば一人にて何となく心さひしく食も常の如くすゝまず夜書物の復習も終へて皆々と火桶をかこみ種々の物語に時の立つも知らざりし折から報ずる公園十時の鐘の音に驚されて室にかへり明朝はとく起き出でんと心にちかいて床につきたり

評 事を叙するの筆は親切なれど假名つかひなど今一きは注意せられたし(日東)

●四季の野

尾張 島山きみ子

いづこはあれど、野ばかり四時折々のながめ妙なるはあらじな。春は、消え殘りたる雪の、かなたこなたにまばらに見ゆる頃より、やう〳〵、若艸のもえそめて少女おどの、手に手に、小さき籠をもちて、霞のうちをたどりつゝ、つみありくひばりの芝生をはなるゝ聲高のまだしきほどの聲など聞きつけたる、いと心ゆくわざなりかし。夏になる程、草は、ますます生ひ茂りて、はては、道もせに、ゆきかふ人の姿さへ、見わきがたきばかりなるぞ、むくつけきものからをかしきや。葉末の露、やうやうしげく、宿る月影もさやかに、萩、桔梗、さては、芒の、穗に出てゝまれく夕暮、あはれをあつめし虫の聲、野もせに聞ゆるなど、秋のあはれは、野にこそこもりけれとぞ覺ゆる。時雨ふり、霜おきわたす頃より、草は、次第にかれゆき、虫の音もたえ〳〵になり、雪、一面にふりしきて、いづれをいづれとも見えわかぬばかりなりたるに、飢えたる小鳥の、なきさけぶ聲のをちこちに聞ゆるは、またなく、物悲しう覺ゆるや。

●古里

東京 工藤京子

四の山端に沈まんとする夕陽は、覺束なげに殘照をとゞめて、松吹く風は玉琴の糸にかよひ、穗に出でゝ招く尾花の床あれて、はや置き渡す萩の上葉の露もろく、物思ふとにはあられども、何となうながめらるゝ秋の夕暮、日々家にのみたれこめつゝある身なれば、あたりありくも又そゞろに心行く方もやと、折節月陰のあかきに任せて何處ともなくさすらへば、白露置き渡したる草むらにすだく虫の音すごく、唯一面にすみ渡

かゝる大空に、雁かれの三ツ四ツ二ツ何む勢ぶか聲たえ〴〵になき連れたる、誰が爲に誰が玉章をかけておとつく〴〵と打ちながむれば、寒風夜色いよ〴〵澄み渡り、吹きすさみたる松のかなでにおくれて、はら〴〵と檐にひゞく笛竹の音、聞ひそむるもなつかしく、如何なる人かこゝも亦假寐の宿の床寒むし、寐られぬまゝのすさびなるらん、聞けばなつかし、あな笛や、故郷の友や、

故郷の友は如何にしつらむなつかしき、古國の友は如何しつらむ、思ひ出づれば、故山の黉に袖を分ちしは、早三歳の秋の暮とはなりぬ、秋も幾度か重れ、月も幾度かめぐれども、かよわきものは人にこそ、心なき胸裏にとざされて、諸共に袖かたしきては、なしかはす夜中もなく、假寐の宿の余所にのみあけくれて、おとづれもいとゞ久しう絶え果てぬ、白雲流水何れとまらぬ世の中とは言ひながら、さてもうらめし事ぞかし、わきて此頃思ひ起さるゝは、習院校にありし時の花の友垣が身にて、われ初めて契を結びしは十四の春なりき、彼は高田我は山香の生なれば、互に見し事も聞きし事もあられども、今は同じ學びの庭の數へ事、日數の増せば増す程に、二人が中は濃くなりぬ、或夜さわぎあへりし皆人も、今や眠に就きぬらむ、折々もるゝれいきの響、二人は尚ほ行末の事ども契ぎりかはしうらなく語りあへば、何時の間に登りやそめけむ、月も心ありげに閨の板戸のひまもれて、二人が面わ照らすにぞ、二人はあなと驚き眠に就きし事も幾度なりけむ、又の年の春二人はさる學校の受驗の準備なりけるが、寄宿舍は物事さわがしければ、師の家に引き取り、夜は遲くいね、朝はとく起き、かたみに切磋勵みけり、我等二人は中よしよと睦まじよと我師にまでもほめられぬ、實に月日には關守なく、兎角する内試驗は來りて、二人は嬉しく受けぬ、彼は首尾よく合格し、我はあへなくも不合格、浮世あらむ限りはいと長がかれと、末の松山かけて、玉椿の幾末をこそ契きりかはししものを、天にも地にも一人と思へるものを、互に螢を集め雪を積み、人世のけはしき途を踏みもともなはれしものを、朝の露夕の烟何時までか頼むべき身にしあらぬとはいへど、如何なる惡神のしわざなるらむ、今や互に袖をしぼる事とはなりにけり、彼はあたゝかき涙をはら〴〵と流しながら、やよ君よ、斯くまでに契ぎりかはしたる事とも思ひまわせば、互に涙の種、今はな語りそ、永のわかれといふにもあらず、僅か一年の年月思ひに沈む、折り〴〵はおとづれを頼みにと言ふに、我も漸くに起きなほりて惜しき袖をぞ分ちける、やはらかき光をあみて、千草染めなす野邊山邊、蝴蝶はひれもす飾の羽衣あうらせつゝ、かしこの露こゝの女郎花とうかれ迷へど、我身には何事とも覺えず、何時しか蝴蝶も眠さまされて、鶯が軒端に匂ふ梅庭の櫻も散り果てゝ、垣根つゝきの卯の花咲きそむるかとすれば、霜もなく門邊にすだく、蟲の音すごく、鐘の里に時雨して尾上は雪も積りけり、かくて受驗の時は來りて受驗はしたりぬ、

我身程つれなきものはなかるぞや、我身程辛なきものはなかるぞや、此一年否四五年もそれと頼みに頼みたる宿望もあたなれや、我は遂に躰格檢査にはねられぬ、今は頼むべき方もなく、さかまく濤に浮き沈みして、岸のよるべもなくさすらひ來るこゝの岐、朝に夕に物する文も身にそはず、思ふ心もひせで打ち過したる、幾と年月戀しく床しく懷母しきは彼が身なるぞや、

胸ほも深くうかれ迷へば、笛の音何時しかたひはてゝ、露に打ちしめりたるくさむらに、すだく蟲の音いよ〴〵すごく、松吹く嵐は身にしみて、いさゝ川の調べ面白く月も尋れて宿らむ、

評　措辭に苦みたる痕あり〳〵と見え、文も、詞も整はざるが如し、

（日東）

懸賞文募集

才媛詞藻

「わか草」

春の卷

投書締切 二月廿日

文種

●小說(讀切名付) 短篇各種
(二十四字詰三百行限)

●國文 文題隨意
(二十四字詰五十行限)

●通俗文 文題隨意
(二十四字詰七十行限)

●書簡文 文題隨意
(二十四字詰三十行限)

●新體詩 詩題隨意
(七五調三十句まで)

●和歌 春季雜題
(短歌に限ること)

才媛文學の發達を計るべき目的を以て、四季に一回づゝ定期増刊を發行し來れる我が女學世界は、茲にまた年の改まると共に來る三月十五日を以て、其の春季増刊『わか草』を發行せむとす、此編に收むべき資料は、全篇二百八頁中その過半紙數を以て懸賞文に充て、剩餘の部分には當代名流の筆に成れる雄篇佳什並に趣味ある記事を以てし、其體裁と實質の上、舊歳の増刊よりも一層光彩を放たしめんことを期す、乞ふ江湖の才媛諸孃よ、長閑なる窓下に、其の思想を練り、旺んに美文佳作を投寄して以つて其文名を新春の才媛文壇に馳せられんことを(投稿手續は別欄規定の通)

三月十五日發行

賞品

特賞 金十圓 壹名

特賞 金五圓 壹名

(特賞は小說の優等者に限り與ふることとす)

甲賞(圖書切符) 金參圓 當選者 五名

乙賞(圖書切符) 金貳圓 當選者 六名

丙賞(圖書切符) 金壹圓 當選者 六名

秀逸(金五十錢相當の圖書を賞與す) 十二名

(注意)和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふること投書の封筒に『わか草』と必ず附記すべし

此募集廣告に特定あるものゝ外は例刊の投稿規程を準用することゝす

●懸賞和歌兼題

霰

曉雲　(三月分)〆切二月十五日

(天、地、人、の外秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す) 投稿は端書に限る

●懸賞文

日々のつとめ　三月分(〆切二月十五日)

學びの窓　四月分(〆切三月十五日)

(甲賞金參圓、乙賞貳圓丙賞壹圓圖書切符を呈す。二十四字詰五十行限)

題して「日々のつとめ」といふ、内は朝夕家庭の用向を敍するものよし、外は世間人々の身の上に起る出來事を記するもよし、いづれもその日〳〵に移行く事柄につき身親づから實見して感じたる節々を有の儘に書きて送られたし扨其の事柄は家事經濟の趣、新世帶の經驗、育兒の模樣、交友の樂、團欒、行樂吉事にまれ凶事にまれ、慶びかなしみ何にてもよろし主とする所ろは廣く實際生活上の有樣を描き出されん事を望む文躰は隨意なるもなるべく冗語を避け簡單にして明亮なるを採る。

●才媛詞藻募集

○國文◎普通文◎消息文◎新躰詩

(二十四字詰五十行限り)

秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す、

●家庭小說懸賞募集

新しき家庭の讀物に適する純潔清健なる小說を募集す

▲家庭小說の投稿者は男女を論せず普く募集に應する事を得。

▲原稿は二十四字詰四百行限(投稿〆切四月三十日迄) 投書の封筒に『家庭小說』と附記すべし

▲家庭小說は甲乙の二種を選び當選の作は女學世界小說欄へ掲載す賞金左の如し但し原稿は凡て返戻せず

甲賞金拾圓

乙賞金五圓

投稿規程投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折(和歌は端書に限る)の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙捻にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

雜報

●歌御會始

本年の歌御會始は去月十八日を以て行はせられぬ午前十時三十分　兩陛下鳳凰の間に出御、御式の次第恒の如くにして徳川慶喜公の讀師をつかふまつれる例にましてめでたかりき拜觀を許されたるは十二名是れも常より多し、さて御製御歌を始め詠進、撰歌左の如し

新年梅

御製

たちかへる年の朝日に梅のはな
　かをりそめたり雪間なからに

皇后宮御歌

大君の千代田の宮の梅のはな
　ゑみほころひぬ年のはしめに

東宮御歌

わたらしき年の始の梅のはな
　見るわれさへにほゝゑまれつゝ

東宮妃御歌

わたらしき年のはきこといひかわす
　袖にもかをる梅のはつ花

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王

さかへさく御代のしるしかあらたまの
　年立つ庭に梅の花さく

海軍中將大勳位功二級威仁親王

あらたまの年立つやかてさく梅に
　いよ〳〵にほふ君が御代哉

侍從長從一位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上　徳大寺

霜ふかき野畑の梅もあらたまのとしの初日ににほひそめつゝ

宮内大臣議定官陸軍少將從二位勳一等子爵臣藤原朝臣光顯上　田中

大君の千代をふゝめる梅の花さくべくなりぬとしのはしめに

選者點者樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上　高崎

さきいてしのきはの梅よかそきめの我か宮の葉に匂かさなむ

讀師　從一位臣源朝臣慶喜上　徳川

年の立つあしたうれしと窓のとをあくれは匂ふのきの梅か香

講頌　正三位伯爵臣源朝臣重朝上　大原

あらたまの年の立枝の梅のはな君にさゝげよ千代のかをりを

發聲　御歌所參候雅樂部長正三位勳五等子爵臣源朝臣有良上　綾小路

のとかなる春をむかへし心地して年の立枝のうめかをるなり

講師　御歌所參候正三位子爵臣菅原朝臣利鬯上　前田

年あけてむかふまなびの窓のとにまつひともときぬ梅のはつ花

講　頌　正四子爵臣藤原朝臣以季上　大宮

あらたまの年を加へ迎へてうれけに老木の梅もさきそめにけり

講　頌御歌所參候正四位子爵臣源朝臣忠敬上　水野

おふきみの雲居の庭にかをるなり年の立枝のうめのはつはな

奉　行　御歌所參候從三位臣平朝臣信威上　長谷

なまたてのとかなる世はあらたまの年の始にうめもさきけり

講　頌　正五位男爵臣源朝臣親雄上　本堂

あらたまの年の始におくしこおいれたる梅もはなさきにけり

奉　行　御歌所參候正八位勳八等臣源朝臣有經上　植松

よろつよとはやすつゝみの聲きゝて垣根の梅もほゝゑみれ覽

△撰　歌　權掌侍正六位藤原道子上　小池

梅の花ほゝゑむみれは草も木も
うれしき年のはじめなるらむ

△撰　歌　宮内屬臣中臣鹿兒島連風總　上東

さきいでし軒端の梅をまつほめて
年のほきことといひおくれ鬼

△撰　歌　皇后宮職屬穗積小舟上　鈴木

大君のみうたはじめにうたはれて
梅もうれしき年やしるらむ

△撰　歌　東京府平民水野鎮三母重子上

梅原の園もしつかに年たちて
ばるめくいそにうめかをるなり

△撰　歌　愛知縣平民貝谷鉦二郎上

あらたまのとし立つ座にさく梅は
たゝ一花もうれしかりけり

△撰　歌　秋田縣平民石川老之助上

うれしくも年の始に梅さきぬ
かめにやさゝむかさしにやせむ

●詠進歌數　歌御會始の詠進總數一萬四千十八枚にして昨年の詠進總數一萬二千三百五十七枚に比すれば多き事一千六百六十一枚の由之れを別てば左の如し

△皇族御詠進

懷紙	一〇
計	一〇

△臣民詠進懷紙

御前披講	一八	神宮職員	一九
高等官	一一	華族女學校職員生徒	一四
華族	四〇	京都向陽會會員	二七
女官	一五	跡見女學校生徒	四七
御歌所	一三	計	二〇四

△臣民詠進竪詠草

高等官	一八八	女子高等師範學校生徒	七四		
華族	三八	大日本女學會會員	二三三		
華族女學校生徒	七九	跡見女學校生徒	八四		
東京府	七〇五	京都府	六六三	大阪府	四四七
神奈川縣	一四〇	兵庫縣	二七五	長崎縣	二一八
新潟縣	三三九	埼玉縣	一七四	群馬縣	一六九
千葉縣	二八二	茨城縣	二四三	栃木縣	一七四

奈良縣	一〇五	三重縣	四〇六	愛知縣	一一六七
靜岡縣	二九〇	山梨縣	二二五	滋賀縣	二三七
岐阜縣	三〇四	長野縣	六三〇	宮城縣	二七五
福島縣	二六四	岩手縣	一三九	青森縣	一八九
山形縣	三八三	秋田縣	三二一	福井縣	九九
石川縣	一一二	富山縣	一二四	鳥取縣	五四
島根縣	二七〇	岡山縣	二三六	廣島縣	二七〇
山口縣	三四八	和歌山縣	六五	徳島縣	一三二
香川縣	九七	愛媛縣	一五二	高知縣	七三
福岡縣	二二二	大分縣	一三六	佐賀縣	一一七
熊本縣	四五四	宮崎縣	八〇	鹿兒島縣	二五七
沖縄縣	三八	北海道	一五九	臺灣	三五
海外	一三	計			一二九、九三

外に遠式　四一八　期日後到着三九三

總計　一四、〇一八

●歌道の光榮　右の撰歌と爲り御前披講の光榮を得たる左の六氏に對し直に其趣き通牒したる由

東京市麹町區宮城内　茨城縣士族　小池　道子
東京市牛込區市ヶ谷本村町十七番地　茨城縣士族　東　胤德
東京市麹町區上二町十六番地　三重縣平民　鈴木　小舟
東京市小石川區茗荷谷町八十九番地　東京府平民　水野　重子
愛知縣熱田町　平民　貝谷鉦二郎
秋田縣南秋田郡豐川村　平民　石川老之助

小池道子は永く宮廷に奉仕し斯道熱心の聞え高き人東胤德氏は宮内省内事務に奉職し其家世々國文篤學の譽れある人なるが就中水野重子は道氏の未亡人にして當年四十五歳貞淑の性にして姑に事へて男鐵三氏（法科大學生二十六歳）の成業を待ちつゝあり道氏と均しく名古屋の生れにて兄を金森龍といひ先代より漢籍詩文に名あり龍氏も現に漢學の教師たり重子が道歌に心掛けたるは僅かに四年前よりなるに早くも預撰の榮を得たるは稀なる譽といひべし師は御歌所の植松氏なりと

●新渡來の珍獸（動物園の獅子）

上野公園の動物園にては、久しく呼び物となりし虎を失ひて以來園内の景氣、何んとなく淋しくために觀覽者も著しく減少したりとて、當局者の心配も一方ならざりしが、此上は虎に優りたる動物を探がし出し、多くの觀客をよびて智識上の助けとなさんとて、海の外四方の國々ね尋むし末、獨逸にて雌雄の獅子を買求め、汐路恙なう動物園へ持來りて、いよ〳〵正月三日より公衆の觀覽に供ふるに至りぬ、此の珍獸の渡來の一たび世に知れ渡るや、物見高きは東京人のならひ、我先きに此珍獸を一見して、話しの種にもせばやとて觀覽する者夥多しく、其料金は小兒二錢大人四錢と直上げせしにも拘はらず、園内僅かに春めき渡りて日々の觀覽者の數は、平均千人以上五千人に及び、巡査は日毎園の内外に出張して雜沓を取締り居れりとは、實にも

上なき獅子王の勢ひ靡かぬ草木もなき御代の春には、いともめで度き見ものにこそありけれ、いま同園掛員が此の獅子に付いて語る所によれば、

此獅子の產地は亞弗利加のヘルバーといへる所には雄は今年四才にて丈四尺長さ五尺余頭毛長く領に垂れ雌は三才六ヶ月にて雄よりは少しく瘦せ頭毛は左のみ長からず孰れも獨逸ハンブルグの動物園主ハーゲンベツキ氏が二年間獨逸の氣候に感化せしめながら飼養したるものにて同國は我邦の氣候に比ぶれば一層寒氣强き地なれば彼等は我邦に來りしを却つて幸福に思ふなるべし檻は未だ彼等を容るべき適當のものを設けずさし詰園內西南隅の日當りよき建物のうちに雌雄相隔てゝ飼養しあり若し同じ檻の中に容れ置かば目下交尾の季節に向ひ居るをもて雌は必らず懷胎するに至るべし而して檻內の溫度は掛り員に於て深く注意する所あり彼等は昨年十一月獨逸を發し我邦に着するまで或は赤道直下を過りて炎熱に遭ひ或はジブラルタルの海峽にて暴風雨に會ひ荒波を浴るなんど種々の境界に接したるものなれば晝夜の溫度を加減し平均五十度となし置けり又食物は一日の內午後二時に牛馬肉及び其軟骨を十一斤宛即はち廿二斤貫換れば一貫目の骨肉六十錢のものを二頭にて二貫七百目づゝ與へ居れり外に微溫湯三回づゝ與へ若し病氣の氣味ある時は羊肉を與ふる事もあり其態度は案外に優しく雄は常に落付き雌は虎の如く步き廻りて落付かず夜間園丁又は獸醫の見廻る時は等しく御馴して閉ぢたる眼を開き又は口を開き拆して安慰の狀を告るが如き樣子あり其の食物を與ふる時は手を鐵格子の外に出し意を迎へんとて爪を伸す事あるを以て其爪に掻れぬ樣注意する必要あり顏色よりは寧ろ手を注意せよとはハーゲンベツキ氏の飼なりし又吼る聲は虎に數倍せし大きさにて午前の內は屢々吼ゆれども午後又は夜に入ては吼ゆる事少なく其聲は彼等に取りては欠をなすに過ぎざるべし左れば若し彼等が激し怒る事ありて雷迅の勢ひを現はす時は其吼ゆる聲山谷に響きて百獸震慄すといふも實にとぞ思はる而して彼等の生命は平均三十年を定命とし少なくも廿五六年は生存する習なりと聞けば此雌雄も今後廿餘年の生命を保つを得べく其間は恙なう養ひ續け度く思はるゝなり若し中途病に斃るゝ事あらば飼養法の不備にはあらずやなど外國人より譏らるゝ事なしとせずこは掛り員が今より苦心する所なり云々

●柳澤明子刀自の薨去

畏くも皇后陛下の御姉君にわたらせらるゝ柳澤明子刀自には、故保申伯の夫人にして、今の保惠伯の御養母にわたり、御性質、よろづの藝能に秀でられ、賢明の聞え世に高き人なりしが、去年の四月頃より、病の床につかせられ、爾來殆んど一年の間遺憾なき治療を加へられしも其効なく、遂に去月八日御年五十八歳を以つて長逝せられぬ、げに悼ましきかぎりにこそ、いま刀自の御人物及び御嗜好等につき洩れ聞きたる一つ二つを記さんに、

◎謠曲　は刀自が第一の御嗜好にして、その流義は寶生流に屬して好こそ物の上手なれといへる俗諺の、わけて刀自が伎に適切なるのみか、

天の成せる妙なる聲は、天人の喉より出づるかと怪しまるゝばかり、斯の伎に衣食する名人大家も舌を卷いて心の底より窃に嘆賞しまゐらせしとかや、殊に柳澤家にては代々寶生の謡を愛づるの主君あり、故保申の伯にもまた斯流の謡に堪能なりしかば、尚世にいまそかりし折は風に香ある花の晨、露に色そふ月の夕、屢唱へ賡和して彌が上に室家の和樂をませし事、今尚ほ名門右族が艶羨の話ぐ艸に殘り居れりとなむ、されば從がつて能樂を好ませ玉ひ、屢々駕を芝公園なる能樂堂に枉げられし事あり、されど他の俗樂の類をば近づけ玉はず、

◎和歌 の御嗜は申す迄もなく、やんごとなき御家に成人られし事とて、固より御幼少の砌より有しならんと察せらる、御近詠を得たれば其の一つ二つを抄さんに

寄民祝

民の戸のいづくもおなじゆたけさや
世々に治まる天の下とて

學校の開きを

人みなの學びの道を日にそひて
ひらけ行く世ぞ嬉しかりける

尚を晩年も暇あることには常に古今の歌書等に御目を曝されしと申す、又

◎御茶の湯 は石州流にあらせられ、時に御里方さては御分家の甲乙など集へ、御茶の會を催されし事なきにあらねど、固より風雅の御心より出でし御娯みに外ならず、御道具の如き總て在來のものにて御間を合はさるゝ等、萬質素を旨とされ、露いさゝかも華美に走る等の事あらず、骨董商の足、曾て柳澤家の閾を跨ぎし事無と云へり

◎刀自の信仰 は如何にといふに、第一は佛教にて、又深く淘宮術を信じさせ給ひ、此術に名ある吉川尹哲翁、及故諏訪子爵等との御交も淺からざりしと、又刀自と恐れ多くも其の御妹君にあたらせ玉ふ

◎皇后陛下 との御間柄は、申すも畏けれど御友愛の深き、喩へんにものなし、年始寒暑に於ける御往復の御消息扨は御贈答品の、久しき昔より絶えしもなきは勿論、近く例しまゐらせんに、刀自の病にかゝらせらるゝや、陛下には深く御心を惱ませられ、特に典侍命婦等の女官を刀自の邸にさしつかはされ、病床に就きて親しく其容體を見舞はしめ給ひし事、前後十數回の多きに上ぼり、其都度々々、眞心を籠め玉ひたる種々の御見舞品あり、其病重しと聞しめさるゝや、新に錦纏を命じ玉ひ絹布の御夜具を差遣はされしと承はる、思ふに刀自は、御妹君にわたらせらるゝ　陛下が厚き御心をこめられし此の御下賜の御夜具の中に感泣して、安らけき樂しき大往生を遂げさせ玉ひしならめ、今に始めぬ事ながら皇后陛下が御友愛の無量なる、誰かは是に感奮興起せざるものあるべき、又刀自の病の蓐につかれし一ヶ月後、即ち去年の五月の下旬　陛下には刀自の病のはかばかしからざるを御心痛遊ばさるゝの餘り、香川皇后太夫に御下命あり、岡侍醫局長仰せを畏こみ、直に車を田町なる柳澤邸に走らせ、刀自が病床につき親しく診察しまゐらせ、兼ての主治醫たる松山棟庵翁と談合の上處方を申上げ、爾來御臨終の日に至るまで日々乃至隔日には必ず參邸して、御容體を伺ひまゐらせしと申す、是れ申すまでもなく　陛下の大御心より出でし御友愛心に外ならず、刀自の御命、所詮此の夏はと去年の七八月頃より御一門の人々も御案じ申し、主治の醫師共も首傾げしに似ませず、秋と過ぎ冬と暮れて、病床ながらに新玉の春を迎へられし事、平生御養生の宜しきによるとは申せ、是併しながら　陛下が御友愛に厚き御赤心をば天も感應ましましけむ、申し上ぐるも惶こしや、斯て其

徒

◎御臨終の報　陛下の御臨に逢するや、程もあらせず皇后宮職より葬儀の日まで日々三十人前づゝの御料理を賜はる旨の命あり是も亦た陛下の大御心を承りしものと察せらる、又陛下より

◎御靈前への御供物　に付ては、伯爵家にて其品目を洩らすとの畏と畏れ多しとて、深く之を秘めらるゝをもて、之を窺ひ知るを得ざれど、何れも御心を籠られし最と鄭重なる御品々なりと洩うけたまはる

其葬儀は、去る十五日午後一時芝田町八丁目の柳澤邸を出棺し、佛式を以て品川東海寺の新塋に營れたるが、會葬者には貴紳の人々多く、甚だ盛んなる葬儀なりき。

●口繪說明

●松前子爵夫人　夫人は舊飯山藩主本多實方子の令妹にして松前子爵(修廣)の令夫人たり。夙に跡見女學校に學び、出藍の譽あり。明治二十年九月松前家に嫁せられてより家庭整理の傍ら種々の慈善事業等に盡力せられ現に日本婦人衛生會日本婦人教育會女子美術學校愛國婦人會婦人共立育兒會等に評議員として幹事として參畫せらるゝ所多し

●佐藤夫人靜子　夫人は故大博士佑中先生の令嬢にして順天堂院主醫學博士佐藤進君の令夫人たり、夙に慈善救濟等の各事業に熱心にして婦女社會の爲めに貢献せらるゝ處多く昨年創立せし女子美術學校の如きは實に夫人の盡力に成りたるもの現に女子美術協會の會長たり

●長谷川喜多子　女史は千葉縣出身夙に女子學院に學び卒業の後高田女學校金澤女學校等に英語科敎師として女子敎育に從事せられ、後香蘭女學校に轉じ英國敎師へ日本語を敎授しつゝ傍ら英文の飜譯に從事せらるゝ事多年蓋し本邦婦人中英語に熟達せらるゝ者夙に津田梅子女史あり、加藤錦子女史あり而して、後進にして嶄然頭角を顯はすもの長谷川女史あり、女史は現に東京女學館に英語科の講師たり

●山脇夫人房子　貴族院議員山脇玄君の令夫人にして夙に女界の爲めに獻身的事業に從事せらるゝの一人なり夫人は現に大日本婦人敎育會の幹事にして毛利公爵母堂を助けて內外の事務に鞅掌せらる、夫人は又女服改良に卒先し、婦人會館の設立を發起し、又婦人衛生會等の事業に奔走する等多年女界の爲めに盡されし功勞少からず巾幗社會の名流たり。

●女子講習會の開設

專ら教育事業のために盡力し來たれる帝國教育會にては、中等教育に從事せんとする女子、及び小學校女教員にして更らに其學力を高めんとする者、並びに一般女子にして其智識を博めんとする者の爲めに、今回新たに女子講習會を開設せられしが、愈々今月二日(第一日曜)午前九時より、爾後毎日曜日同時刻帝國教育會講堂(神田一ッ橋)に於いて開會し、其の講習としては、「教育科」女子高等師範教授篠田利英「國語科」文學士岡田正美「數學科」女子高等師範教授森岩太郎等にして、時々教育大家の科外講演をも行ひ、以つて女子教育の爲めに資する所あらんことを期すと云ふ、入會料五十錢、講習料毎月六十錢なり、尙ほ入會者は至急申込の手續をなすべしと、

◉室町典侍の薨去

永らく宮中に奉仕せられたる室町典侍清子刀自は中風病にて去月八日遂に薨去せられたり今刀自が性行の一斑を聞くまゝ記さんに典侍は歳十三四の頃上臈の格にて宮中に出仕し今上陛下猶御幼少の折御傍に仕へたるが、性質極めて温順日夜孜々として勤務を怠らざれば陛下の御覺え殊に芽出度今日に及びしと云ふ扨又宮中の改革に付き所謂表向奥向と稱し來れる女官制の積弊を矯めしは明治の初世に當りて最も奮發に出でたるものにて最も功を奏したる一大英斷なりしと聞く、此改革に依りて後宮は　皇后陛下の統督させ給ふ所となりて女官たるものは一切後宮に屬する制度とはなりしなりされば典侍も　皇后陛下の御許に仕ふるに至りたれど、前記の如く典侍は　今上陛下御幼少よりの御懷かしき御緣故の故を以て、高倉典侍は重に　皇后陛下に仕へ、室町典侍は重に　今上陛下の御用を承はり居りしなりと典侍は實に斯る功勞ある方とて、此度の御病氣の事御聞に達するや、畏こき邊にては殊の外御痛心遊ばされ侍醫局に出來得る限り厚く手當てを與へよとの有難き御下命ありたりと承はる

◉世界雜俎　(婦人界の消息)

▲教壇上より妻を求む　美以美教會雜誌の記するところに依れば米國にて有名なる牧師某は此程教壇上に突立ちたる儘集りに向ひ列席者の中に余の妻ならんと欲する者ありや、あらば起立せよと聲高らかに叫びたるに二人の婦人聲に應じて立ちたり、牧師先生は鵜の目鷹の目兩人を見比べたる上、最初に起立せし婦人を妻とすべしと定め、それより會衆に向ひ喜びの讃美歌を歌ふべく命じたりと

▲ナイチンダール孃の大患　赤十字事業の發頭者で、慈善界無冠の女王

たるナイチンゲール孃は今年八十二歳であるが、近報によれば、病氣頗る危篤なりとの事だ、一昨年既に其死去の報を傳へられたが、ソレは全く誤傳であつたのだ、因に云ふ同孃は故英國皇女と同年輩であるのだ

▲世界第一の美人國　世界第一の美人を産する地方は愛蘭土のキミリツクで、此地の女子はみな沈魚落雁閉月羞花の美ありとの事である

▲女は半人前　瑞典に於ける古風の旅人宿及び料理屋にては女は男より少なく食ふとの理由にて總て女客に對しては男客よりも低廉なる代價を請求する慣例あり、尙は當世風のホテルにても夫婦の旅客にて一室を滿たすときには、二人前の宿泊料を請求せずに、一人半前の宿泊料を請求する慣例あり、其鐵道會社にても右と同じく夫婦者の旅行者に對しては一人半前の汽車賃を請求して滿足する慣例ありと云ふ

▲象と少女　お伽噺かとも思はれるのだがこれは正直正銘の實話てある のだ、而もツイ此程の事てあつた、印度のベンゴールに近き村方て、去る三日に緬甸から連れて來た年の若い象があつて、飼主が兎角虐待するので、象は大に之を恨み、之に反して飼主の娘て今年僅に十四歳になるものが毎日時を定めて、自分が買つた菓子を分けて與れるので大に之を戀としてゐた、然るに或日其象は遂に飼主の虐待に耐え兼れて、鎖を切つて逃げ出し、二日間其形を見せなかつたが、三日間の夕刻にノツリと村の共同井の傍に現はれ、折柄水を汲んでゐた飼主の娘を靜に鼻で卷き抱へ、うれしさうに吠えながら、村から二哩ばかり離れた森林中に往つて初めて娘を地に下し、象は此處を我住處としてこの娘と共に棲はんとを計つたのだが、娘は大きに恐れて早速村へ逃げ歸つたけれど、象は一向に抵抗しなかつたといふ事だ

▲新大統領官舍　米國大統領の官舍即ち白堊館なるものは往年の建築にかゝりたるものにして政務や交際の頻繁なる今日其狹隘なるを告げ、新大統領ルーズヴエルト氏はこれを増築して宏大無双以て大國の首領の居邸たるに適せしめんと欲し、前上院議員ヘンダーソンの妻ヘンダーソン夫人が主任となりて設計した圖面によりて議會に提出して協贊を經ると の事てある、この官舍は政務の爲貴賓招待等に宛つる筈てあつて從來の白堊館は歷史的のものであるから其儘に保存して、專ら大統領家族の住處に宛つるとの事

▲石油王女子大學へ寄付す　石油王ロツクフエラー氏は今回米國第一流の女子大學ブリンモアカレーヂが他の方面から二十五萬弗の寄附金を募集するならば自から直に二十三萬弗を寄附することを約束した

▲ルーズヴエルチナ孃　大統領ルーズヴエルトの令孃にあらず、此頃ボストンにて生れたる一女に附せられたる名なり、大統領の名に因みて命名せるなり

▲英國の獨身者　英國にては男子一千人に付三十五人の獨身者あり、女子一千人に付七十八人の寡婦あり

◉甲州葡萄酒　「コウエス」印甲州葡萄酒は葡萄の本場、甲州産を原料として釀造したるものにして、純赤純白の二品あり、味頗る口に適へ、滋養分の豐富比類稀なりといふ、家庭及び客用として適當の飲料なるべし、

▲故英女皇の歲入　故英國女皇の公に定められたる歲入は三百八十五萬圓なりし由にて獨國皇帝の歲入より少なきこと五百萬圓獨逸皇帝の歲入の半に過ぎずといふ

▲和蘭女王の配偶者と其權利　和蘭女王ウイルヘルミナが獨逸メツクレンブルヒ大公と結婚せられたることは既報の如くなるが右に就き和蘭の新聞は同國に於ける大公の權利を說明して曰く女王の夫は總ての義務と特權とに於て和蘭の王族と同一の地位を有するなり但し離婚となりたる場合は其地位を失ふ若し又女王崩御の場合には再婚の時まで其地位に移

罰を生ぜず尙又女王の夫は別に俸祿を受くることなきも女王崩御の後は再婚の時まで每年十二萬五千圓を得べき答なりと云ふ

▲珍らしき婚禮の取消　此程巴里に於て不思議なる事由に依り結婚の取消を願ひ出でたるものあり此者は佛國人なるが今より三十一年前倫敦に在りて土耳古の一女子と結婚したり然るに間もなく其妻は精神病に罹りたるを以て瀰漫病院に在りて昨年遂に逝去したり其病院に在りたる際同じ病院に在りたる一人の男患者は常に其女を自分の女房なりと叫び止まざりしが發狂者の言とて敢て意とせざりき然るに今より二三ヶ月前偶然一冊の小說を購讀したるに何ぞ圖らん著者は亡妻の母にして書中の事は嫁の實歷を記したるものゝ如く其嫁は千八百六十八年倫敦に於て土耳古の一地方官吏に結婚したる事をも記せるより大に驚き母及び土耳古人も死亡したれども種々の穿鑿の結果結婚は事實なることを確め得たれば曩に其女と結婚したるの不正なる事を知り備こそ結婚の取消を願出でたるなれ奇と云ふべし妙と云ふべし

▲女のツオルゴスツ　米國大統領マツキンレイが友誼の爲に差出したる手を捕へて其人を殺したるツオルゴスツのウユーダス的なる暗殺の方法に似たるものなり只ツオルゴスツは男子にしてナポレオンを暗殺せんとしたるものは女子なりしのみ而して彼は握手を求め此に接吻を求めんとしたり時は千八百四年の七月にして奈破翁は數名の護衛を隨へ騎馬してアツペヴトーユを通行し居たるに年若き美貌の寡婦其通路を遮り目には涙を浮べ寶石を以て飾られたる白き手を差延べて奈破翁に接吻を求めたり之を認めたる大英雄は直ちに其願を遂へんとしたるにナポレオンに隨ひたるドユロツク將軍は其女を捕へて「匕首を見よ」と叫びたり此女は毒を塗りたる匕首を袂に隱し持ちたるなり後死刑に處せられたるが其名を語らざりしため何人なるや之を知りたるものなかりしと云ふ

新刊紹介

◉新家庭（第一號）　東京　團欒社

こは新年と共に生れたるものゝ一なるが、編輯は柴田流星氏其體裁は當今流行の大判形、世間の家庭に新趣味を吹き込まんとの目的は健氣なり但實質上の價値に乏しきを遺憾とす、

◉婦人の生活　東京　松邑三松堂

これは衞生に熱心なる山根警察醫長の著なり、此種の書物の常とて、別に面白き趣味あるにあられど、唯一般の人々に、衞生上の智識を與ふるに足らんか、

◉紅薔薇　東京　東洋社

此書は家庭小說の第一編として出でたるもの、作者は鈴木さむしろ女史、文は流暢佳麗にして、其構想は俗に流がれず、醜に近からず、要するに品よき小說にして、家庭における子女などの讀物として適當ならん乎

◉女子文章軌範　東京　國文社

國朝古來の名媛が書き殘したる文中より文章の軌範となるべき個所を拔萃蒐集したるものにて論贊、序跋、紀行、日記、隨筆數十種あり、國文を學ぶ女生徒の爲めには必要のものなるべし著者は指原乙子女史

◉烈女お藤　博文館發行

少年讀本第四十五篇として出づ忠孝にして貞良義烈なる信州飯田の藩の女小姓お藤の事歷を叙したるものなり一少女の身を以て君侯の倶に天を戴かざるの仇を刺し以て二世の恨を絕ちたるお藤が壯烈は世に傳へて本朝烈女傳の白眉とす文章凄婉慍女子の氣悅を莽ふに足るべき好個の讀本なり　定價金拾二錢

女學世界第三號記事要目

不許複製

明治卅五年二月五日發行　第貳卷第貳號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

注文略規

● 本館發行の雜誌は都て前金の外送本せず。
● 御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
● 郵券代用は一割増にて五厘一錢の分に限る。
● 總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

博文館諸雜誌
二月發行表

太陽 第二號 五日發行
文藝倶樂部 第三號 一日發行
少年世界 第三號 一日發行
女學世界 第二號 五日發行
中學世界 第二號 十日發行
圖書世界 第二號 廿日發行
太平洋（第五號……三日發行 第六號……十日發行 第七號……十七日發行 第八號……廿四日發行）

偉大の効驗（女學世界の廣告）

女學世界は昨年發刊以來發行高の多き殆んど海内に比類無之隨而廣告の効驗も偉大なるべく而して其廣告料は比較上非常に低廉に有之候間江湖各位御試みに御掲載の上其効力御實驗あらんことを奉希望候追而女學世界廣告に依り廣告主と御取引之際は其廣告に依りたる旨御附記の程願上候

博文館廣告部

誌名	一冊定價	一冊郵税	廣告料一行一回	一行字詰
太陽	三十錢	三錢	四十五錢	五號活字十八字詰
少年世界	十錢	一錢五厘	四十錢	五號活字廿四字詰
中學世界	二十錢	二錢	三十錢	五號活字廿四字詰
女學世界	二十錢	二錢	四十錢	五號活字廿四字詰
文藝倶樂部	二十五錢	二錢五厘	三十錢	五號活字廿四字詰
圖書世界	三錢	五厘	十五錢	五號活字廿二字詰
太平洋	六錢	五厘	四十錢	五號活字廿二字詰

博文館諸雜誌 廣告取次

東京神田千代田町 博報堂
東京銀座尾張町 弘報堂
東京日本橋區上槇町 萬年社
大阪東區北久太郎町 三星社
大阪東區備後町 盛文館

（卷付の二）

社交贈進用

●當用日記 大中小判の三種
- 大判特製 金六十五錢 郵税十四錢
- 同 上製 金五十錢 郵税十四錢
- 中判特製 金五十錢 郵税十錢
- 同 上製 金三十五錢 郵税十錢
- 小判上製 金三十錢 郵税八錢

●三十五年懷中日記 特製並製の二種
- 特製總クロース 金十八錢 郵税四錢
- 並製堅牢摸皮製 金十二錢 郵税四錢

中江兆民先生著 **一年有半** 正價三十五錢 郵税八錢
續一年有半 正價三拾八錢 郵税八錢

- ●況翁閑話 金貳拾五錢 郵税八錢
- ●名士の平生 金貳拾五錢 郵四錢
- ●名士の嗜好 金貳拾五錢 郵四錢
- ●名流談海 金參拾錢 郵四錢
- ●成功要錄 金貳拾八錢 郵四錢
- ●學生訓 金貳拾錢 郵四錢
- ●出世の栞 金貳拾五錢 郵四錢
- ●世界十偉人 金五拾錢 郵八錢
- ●東西廿四傑 金參拾五錢 郵六錢
- ●中山大納言 金貳拾五錢 郵四錢
- ●近江聖人 金拾貳錢 郵四錢
- ●十五少年 金參拾五錢 郵八錢
- ●平相國 金拾五錢 郵四錢
- ●家庭軍事談 金參拾錢 郵四錢
- ●花の白雲 金拾八錢 郵四錢
- ●新撰日本小歷史 金拾五錢 郵四錢
- ●明治才媛美譚 金五拾錢 郵八錢
- ●日本女禮式大全 金七十五錢 郵六錢

●日用百科全書 全部完成
●全部五拾冊●一冊廿五錢郵税六錢
第一編和洋禮式より茶の湯と生花と○實用料理法○家政案内○裁縫と編物○育兒と衛生○俳諧獨學○園碁と將棋○秘術傳法○內外遊戲法○陸軍一班○海軍一班○相撲と芝居○謠と能○諸藝指南外三十五種

家庭文庫 下田歌子先生編著 全部完成
●全十二冊●一冊卅五錢郵税八錢
○第一編女子書翰文より女子普通禮式○詠歌の栞○婦女家庭訓○母親の心得○女子手藝要訣

少女文庫 下田歌子先生編著 全部六冊
●四編迄發行●一冊卅五錢郵税八錢
第一編お伽噺○第二編庭訓お伽噺○第三編內國少女鑑以下每月刊行

少年讀本 全部五十冊 一冊金十三錢 郵税四錢
高島秋帆 桐野利秋 西鄉隆盛
坂本龍馬 中江藤樹 平野國臣
等日本偉人 第四十六編 林子平迄

世界歷史譚 全部三十六冊 一冊十三錢 郵税四錢
釋迦 ビスマーク ネルソン
孔明 ナポレオン 歷山大王

東京日本橋區本町三丁目 博

(後付の二)

好適品廣告

○蒔絵函入 新選小學女禮式 金壹圓は方四百匁

益軒十訓 金壹圓 金二十五錢郵六錢

人事百話 金貮拾錢郵拾六錢

明治節用大全 金壹圓六拾錢郵四錢

明治書翰文大全 壹圓六拾錢六百匁

歌まなび 金九十錢郵八錢

百人一首講義 一圓五十錢郵十六錢

明治俳句 金二十錢郵六錢

謡曲文粋 金三十五錢郵六錢

俳諧自任 金三十五錢郵六錢

義太夫百番 金一圓郵十二錢

俗曲大全 金一圓郵十六錢

都々逸の栞 金六十錢郵十六錢

落語全集 金二十錢郵四錢

新撰落語福 金六十錢郵十六錢

福引集 金三十錢郵四錢

數學遊戯 金十二錢郵四錢

魔術 金二十五錢郵四錢

家庭唱歌 十二冊一册金三十錢郵八錢

健康要訣 金六錢郵二錢

芳哉義士の譽 金三十錢郵四錢

花鳥集 金三十錢郵四錢

歐山米水 金一圓郵十八錢

歐米小觀 一圓五十錢郵八錢

千山萬水 金四十錢郵四錢

續千山萬水 金五十錢郵十錢

圍碁錦嚢 金五十錢郵十錢

金五十錢郵四錢

以の圖書は何れも社交應答の贈進品として適切の良書にして受贈者全家族の趣味實益鮮少ならず更に紀念保存せらるゝの便あれば食品玩具の比にあらざるべし續々御注文希上候

世界お伽噺

ゴルドン將軍グランド將軍等世界偉人第卅三編シーザー迄出來

全部一百册 一册金七錢 郵税二錢 完

日本お伽噺

世界の始 無人島大王 魔法博士 狐の裁判 鐵の王子等第三十四編 岩の舟迄發行頗面白き幼年讀物

全部廿四册 一册金六錢 郵税金二錢

日本歴史譚

八咫烏 田村將軍 八幡太郎 櫻井驛 草薙劍 宇治川外十册

全部廿四册 一册金八錢 郵税四錢

日本昔噺

日本開闢 三韓征伐 九郎判官 豐太閤 彰義隊 城山外十八册

全部完成 一册五錢 郵税貮錢

幼年讀本

桃太郎 猿蟹合戰 花咲爺 大江山 金太郎 浦島太郎 牛若丸外十七册

歴史地理立志談を日本と世界に分つ

全部六册完成 一册拾五錢 郵税四錢

理科十二ヶ月

正價一册拾錢郵税四錢少年好讀物

全部十二册完成

文館

賣捌全國書林新聞雜誌店

洋裝菊判美本

少年讀本

全部五拾册 ● 毎月壹回發行

一册百頁餘

第四十六編

林子平

松居松葉君著（全一册）

島崎柳塢君畫

正價十三錢 郵稅四錢

文恬武熙上下治に安し外冠のとは誰も耳を傾くるなく桃源夢正に濃かなる幕府の末造にあり口に筆に開國論を唱導して時忌に觸れ縲絏の裡に六無を長嘯したる先豪の識見家林子平の眞面目は本書に由て巨細紹介せられて餘蘊なし卷中宛然其人の躍動を視る

既刊目次

第壹編 高島秋帆 福地櫻痴著
第貳編 白河樂翁公 中村秋香著
第三編 河井繼之助 戸河殘花著
第四編 三條實美公 依田學海著
第五編 曲亭馬琴 饗庭篁村著
第六編 井伊掃部頭 巖谷小波著
第七編 山田長政 遲塚麗水著
第八編 錢屋五兵衛 桐生悠々著
第九編 春日局 岸上質軒著
第十編 水戸烈公 野口珂北著
第十一編 桐野利秋 春山[illegible]著
第十二編 藤田東湖 大和田建樹著
第十三編 伊能忠敬 幸田露伴著
第十四編 新井白石 武島羽衣著
第十五編 水野越州 中村桂軒著
第十六編 池大雅 田山花袋著
第十七編 木內宗吾 松原廿三階堂
第十八編 西郷隆盛 川崎紫山著
第十九編 阪本龍馬 坂崎紫瀾著
第二十編 横井小楠 大野酒竹著
第廿一編 貝原益軒 石原笠堂著
第廿二編 渡邊華山 渡邊霞亭著
第廿三編 中濱萬次郎 石井研堂著

第廿四編 近衛忠熙公 勢多章之著
第廿五編 間宮倫宗 笹川臨風著
第廿六編 周布政之助 堺枯川著
第廿七編 荻生徂徠 内田魯庵著
第廿八編 松平伊豆守 株山吐虹著
第廿九編 中江藤樹 國府犀東著
第三十編 島津齊彬公 眷山鷄峰著
第卅一編 高野長英 干河岸櫻所著
第卅二編 橋本左内 桐生悠々著
第卅三編 釋月性 干河岸櫻所著
第卅四編 平野國臣 白河鯉洋著
第卅五編 熊澤蕃山 幸田成友著
第卅六編 雲井龍雄 玉木椿園著
第卅七編 野中兼山 北村香陽著
第卅八編 大鹽平八郎 堀紫山著
第卅九編 佐久間象山 [illegible]原澁柿著
第四十編 小栗上野介 勢多章之著
第四十一編 阿部伊勢守 熊田葦城著
第四十二編 松尾芭蕉 國府犀東著
第四十三編 石川文山 田岡嶺雲著
第四十四編 徳川吉宗 [illegible]野正義著
第四十五編 烈女阿[illegible] 藤本藤陰著
第四十六編 塙檢校 長谷川天溪著

定價 ●壹册三十錢 ●六册前金七十錢 ●二十册金壹圓三十五錢郵稅壹册に付金四錢

（後付の四）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

世界歷史譚

著名學士大家執筆

洋裝菊判美本●壹冊紙數百三十餘頁
全部三十六冊●毎編讀切毎月一回發行

新刊

文學士 柿山淸君著

第卅參編 シーザー

梶田半古君畫

正價拾三錢 郵税四錢

全壹冊

古羅馬の盛なる英雄豪傑踵を接して起れり然れども其規模の絶大懷抱の雄偉なるに至りては誰かシーザーに及ぶものあらん其の群雄を駕御し四隣を征服したるの略實に前に古人なく後に來者なしといふべく一讀懦夫をして起たしむるに足れり

既刊目次

正價壹冊拾三錢●六冊七拾錢●廿四冊貳圓五拾錢 全部三圓五拾錢●郵税壹冊四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(後付の五)

巖谷漣山人著　有名畫伯插繪

世界お伽噺

菊版洋裝美本

毎月壹回發行　全部壹百冊

既刊目次

第卅五編

武内桂舟君畫

洪牙利

鐵の王子

一名雷神丸

全壹冊

正價金七錢　郵稅貳錢

洪牙利の口碑を漣山人か例の快筆を以て叙したるもの日本にしては素盞雄尊に似て居る雷神丸といふ一王子が自分の料から兄弟五人地の底に潜り入り龍王の捕虜となり樵夫婆さんの助けによつて八頭十二頭の龍王を芽出度退治するといふ武勇譚其間には又鍛冶屋の挺に打たれたり鍚のやうに割かれた活殺自在の大魔力縱横無盡の雛づかひ寅の年の眞見に龍を退じたるお譚は芽出度くもまた可笑からずや

發兌元　正價　前金壹冊七錢●六冊四拾錢●拾貳冊七拾八錢郵稅壹冊貳錢宛　博文館

（後付の六）

續帝國文庫

每月一回發行全五十冊洋裝上製

總クロース背皮金文字入美本紙數一冊千頁

博文館編輯局校訂

續京傳三馬傑作集

（近刊）

江戸作家中の巨擘として輕妙の筆婉麗の文加ふに嶄新特絶の想を以てし一世を傾倒せる者一を京傳といひ一を三馬といふ本書は二家の傑編佳作を集めたるもの獨り小説として其巧妙の推すべきのみならず當時風俗の寫眞として觀るに足るべき草双紙洒落本人情本の各編或は泣くべく或は喜ぶべく或は噴飯絶倒すべし

全一冊洋裝
上製金文字入
正價六拾錢
郵税拾六錢

水谷不倒君校訂

脚本傑作集

（近刊）

（下卷）

江戸時代諸名家の脚本中最も巧妙にして興味多く古來劇に演じて尤も行はれたる者を蒐む我邦劇詩の妙を味はんと欲するものは此書を措て他に求むべからず劇を好む人文字を嗜む人共に一書を供へざるべからざるの珍書なり

全一冊洋裝
上製金文字入
正價六拾錢
郵程拾六錢

續刊

● 釋迦八相倭文庫 上卷 博文館編輯局校訂
● 釋迦八相倭文庫 下卷 全 上
● 種彦讀切傑作集 全一冊 幸堂得知君校訂

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

恐るべき脳充血も健脳丸にて根治す

◎神經をしづめ數年難治の脳病を全治す

◎健脳丸は逆上◎脳充血◎頭痛◎神經症に尤も適當の良劑なるは既に實際患者の熟知する所にして滿天下の脳病、神經病者を救濟し雷名を轟かしたる良劑にして有觸れたる雜藥の類に非らず

實業家の如き常に百般の事に就て脳髓を過度に費し脳病を患ふる人も

神經家僅かな事を案じ過ぎ神經過敏にて泣き又は悲み畜搦等を起す人

大酒家又便祕の人は常に服用せば中風又は卒中等を未發に防ぐ

投機家又は官吏學生の如き常に脳の使ひ過ぎ頭痛或は眩暉する人

農商務省登錄商標



僞物あり此商標に注意

◎健脳丸は婦人の子宮血の道にて逆上し耳鳴り目かすみ◎夜分不眠症等總て脳病神經病に最良の藥劑にして殊に中風卒中を未發に防ぎ身体强壯となるは健脳丸特有の効力なり◎脳病神經病にて數年不治の難病も一ヶ月にて全治し頭痛逆上抔には一日分にて速効あり

◎本劑の販路盛大なるを羨み類似藥を販賣するものあり御購求の節は上部の商標に御注意を乞ふ

◎賣捌所は全國到る處の藥舖に取次販賣せり

◎發行所へ御注文郵券一割増

●藥價表

	藥價	劑稅
一ヶ月分	金壹圓	十錢
十三日分	金五十錢	六錢
七日分	金三十錢	四錢
二日分	金十五錢	四錢

發行所

賣藥 御賣

大阪市心齋橋八幡筋南入

丹平商會本店

電話東九百〇一番

妹姉を持てる兄弟は繰り返し〱此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを……

親の持てる娘、夫の持てる妻、子の持てる母、女と云ふ女は見よ

中將湯の名譽

産科婦人科專門諸大醫の稱賛を得たるのみならず 長くも 上宮樣方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽にして同病患者の幸福と云ふべし

醫學博士慈惠病院長 高木兼寛先生(東京)
産科婦人科專門醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生(東京)
産科婦人科專門ドクトル 木村順吉先生(東京)
婦人科專門獨逸ドクトル 朝山義六先生(横濱)
産科婦人科ドクトル 佐伯理一郎先生(西京)
大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル 緒方正清先生(大阪)
産科婦人科專門ドクトル 小林山卿先生(大阪)
愛知病院婦人科醫長醫學士ドクトル 柴田耕一先生 名古屋
ドクトル婦人科專門グラヲエト、ヘアマシー 大月文先生(福井)

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱賛を忝ふしたれども略す

●十年のちの道三週間に全治す●

子宮病血の道産前産後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先へ差込或は正氣を失ひ●息切し動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●浮腫



中將湯

定價	郵送料
一日分七錢五厘	二錢
三日分廿錢	二錢
一週分四十五錢	四錢
二週分八十五錢	六錢
三週一圓廿五錢	十錢

●月經不順

年頃になりて月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事を苦にし氣分惡く常にふさぎ勝の人特に子宮出血白血長血帶下にて久しく患ひ身躰衰弱せる病にても全治すること請合なり・・(論より證據早々試よ)

●中將湯各藥店にあり無ば本舖へ申込あれ●東京市中は配達し●遠國は郵送す

●本舖へ御注文の御方は病人の容體を詳しく申込あれ

本舖 東京市日本橋區通四丁目七番地(電話本局千九十七番長距離接續) 津村順天堂本店

本舖 大阪堺筋鹽町北入(電話東二百七十八番長距離接續) 津村順天堂支店

東京秀英舎印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい) 明治期復刻版⑨
明治35年1月(第2巻第1号)、2月(第2巻第2号)

2006年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2955-3 C3321